古代學研究所研究報告 第3輯

大分県
丹生遺跡群の研究

鈴木忠司 編

平成4年

財團法人 古代學協會

序

この度，大分県の丹生遺跡群の研究書に序文を草する機会に至ったのは，洵に欣快に堪えぬことである。発掘調査に着手以来，殆ど30年を閲した後なのである。

㈶古代学協会が，わが学界の石器時代関係の主要な研究者を総動員して丹生遺跡群の発掘調査を遂行したのは，昭和37～42年のことであった。発掘者の当然の責任として毎年『調査概報』を刊行し，成果を公表すると共に学界に批判と教示を乞うて来た。

調査の終結後も当協会は，同遺跡群発見の遺物の研究に重大な関心を抱き，43年に平安博物館を設立すると同時に，研究部に考古学第1研究室をおき，専門家を研究員に充て，丹生遺跡群を中心とする岩宿文化の研究に当たらせた。また昭和63年，平安博物館を改組し，替わって古代学研究所を設立した時には，そこに第2研究室を置き，前記の研究を継承させ，引き続いて丹生遺跡群の証示する岩宿文化の研究に従事せしめた。その間，類似の石器を追跡して福岡県の清水山遺跡等を発掘したり，研究員をタンザニア，ケニア，シベリア方面に派遣したりするなど，恒にこの分野での研究を怠らないで来た。

にも拘わらず丹生遺跡群に示現された岩宿文化の研究は遅々として進捗しなかった。その要因は，①日本の旧石器文化(岩宿文化)の研究は発足したばかりで，全国的にその様相が明確に把握出来ていなかったこと，②丹生遺跡群を特色づけている石器に類似する石器(所謂『祖型握槌』)を出土する遺跡が殆ど知られていないことであった。専任研究員の力量不足もさることながら，これら二つの要因は研究を至難となしたのである。

しかしここ二十数年の間に，岩宿文化の研究は格段の展開を遂げ，研究は微細に亘って進められるに至った。その意味では①の要因はほぼ解消したと言えるが，しかし②の要因は依然として研究の行手を阻み続けている。当協会は嘗て幾多の研究者を6箇年に亘って動員し，また文部省より多額な研究助成金を受けて大規模な調査を遂行した。こうした諸事情に鑑みて当協会は，いつまでも研究成果の再整理を遅延させることは許されなくなった。

ここに至って当協会は，第2研究室の鈴木忠司助教授を中心に全国的に岩宿文化の研究者を選り，衆智を聚めて丹生遺跡群出土の遺物の再検討に乗り出したのである。遷延も甚だしい報告・研究ではあるけれども，それはあながち当協会の怠慢にのみ帰されるものではなかろう。

感謝に堪えないのは，現在，岩宿文化研究の第一線に立って活躍されている，織笠昭，木村英明，佐川正敏，竹岡俊樹，橘昌信の諸氏が当協会の懇請を容れ，共同研究者として研究に参画され，それぞれの勤務地と京都との間を幾度となく往復し，遺物の検討や討論に加わられたことである。さらに中国の中国科学院古脊椎動物・古人類研究所の黄慰文氏が共同研究をお引受けいただいたのは，光栄とするところである。

本書のうち第一部は，第2研究室員の手になる。それは鈴木忠司が中心となって執筆したもので，

謂わば最終報告に該当する。第二部は各研究員がそれぞれ丹生遺跡群の存在と出土物を念頭において各地の初期旧石器文化を検討された論考からなっている。丹生遺跡群に関する諸問題が本書によってすべて解明されたとは言えない。そうした結論を導出するためには，この遺跡群の様相は余りにも複雑である。しかし本書の刊行によってその解明に向けて新たに一歩が踏み出されたことは疑いがなかろう。

丹生遺跡群の調査には，豫備調査，第１～６次調査を通じて実に多数の研究者が参加された。考古学を中心とし，地質学を含めた調査団の構成は，本書の３～５頁に掲げた通りである。当協会は，これら多数の方々の厚意ある労に感謝の意を表する。

ただ整理，研究が長期に亘ったため，協力者の中には，本書の印行を見ずに他界された方も少なくない。いま期間中に黄泉に帰した方々の芳名と歿年を列記すると，以下の通りである。

石附喜三男（昭和61年３月27日）	磯崎正彦（昭和55年７月22日）	小江慶雄（昭和63年11月７日）
小林知生（昭和64年１月６日）	酒詰仲男（昭和40年５月31日）	中村俊一（平成３年11月10日）
長谷部学（平成元年）	藤原光輝（昭和40年10月20日）	三上貞二（昭和54年８月９日）
三森定男（昭和52年11月７日）	望月信成（平成２年５月28日）	

研究調査に熱意をもって当たられた以上の協力者には更めて哀悼の意を表すると共に御生前に本報告書を呈示出来なかったことを深くお詫びしたいと思う。就中，丹生遺跡群の最初の発見者である中村俊一氏は，報告書の未公刊について終生焦慮を覚えておられたであろう。ここに更めて同氏の冥福をお祈りする次第である。

本書の内容に関しては，研究の段階では最善を尽くした。しかし丹生文化の研究は，本報告によって最初の橋頭堡が築かれたに過ぎない。当協会は，丹生遺跡群に対しては強い関心をもち続け，向後もこれを中心とする岩宿文化の究明に微力を捧げたいと念じている。

なお６箇年に及んだ調査の期間中，現地においては，太田亘，清原宣雄，賀川光夫，富来隆，野村秋子の諸氏，並びに大分県教育委員会社会教育課の厚意に浴することが多大であった。ここにその芳情を銘記し，謹んで御礼の辞を申し述べておきたい。

平成４年麦秋

財団法人 古代学協会
理事長　角　田　文　衛

INTRODUCTION

It is my pleasure to have an opportunity to write an introduction for the study of Nyū sites, Ōita Prefecture, after passing almost 30 years since the excavation began.

The Paleological Association of Japan, Inc. has executed the excavation of the Nyū sites from 1962 to 1967 with the cooperations of eminent scholars in Japan, and preliminary reports were published every year. Since then the study of the finds always had been our main concern, and researchers of the Institute of Paleological Studies (former Heian Museum of Ancient History) continued the study on the Iwajuku (paleolithic) culture of Japan. Nevertheless, the study on the Nyū sites did not see much progress. The reasons for it were : 1) Study on the paleolithic culture of Japan was still in its early stage and country-wide figure was obscure, 2) other sites that yield similar artifacts (so-called proto-handaxe) were not found.

During recent 20 years, the study on the Iwajuku culture has seen remarkable progress and the first problem has been already resolved, but the second problem is still an obstruction. However, having been aided a vast amount of funds by the Ministry of Education and accomplishing large scale excavations with the participation of so many researchers, we could no longer delay the publications of the researches.

We decided to publish a re-examination of the finds by selected researchers with assistant professor CHŪJI SUZUKI as leader. We would like to express our deep gratitude for those able researchers of Iwajuku culture who kindly participated in our project, gathered and made discussions at Kyōto for several times. Those are ; AKIRA ORIKASA, HIDEAKI KIMURA, MASATOSHI SAGAWA, TOSHIKI TAKEOKA, and MASANOBU TACHIBANA. Also we feel honoured to have HUANG WEIWEN (黄慰文) of the Institute of Vertebrate Paleontolgy and Paleoanthropology of Academia Sinica of China as a co-researcher.

The first part is, so to say, the final report of the excavations, written by the members of the second section of the Institute. In the second part, seven researchers contribute studies on early paleolithic cultures of each district in the world with the finds of the Nyū sites on mind. As the problems of the Nyū sites are so complicated that we cannot say this publication would be the solution, but it is surely a new step towards the elucidation of the problems. We shall keep our interest on these finds, and intend to contribute for the study of Iwajuku culture.

We would like to thank for all who participated in the research, and to express our regret over those who died during past thirty years. Especially we feel sorry not being able to show

this publication to Mr. SHUN-ICHI NAKAMURA, the first finder of the sites. During the six years of excavation, we were met by courtesy of WATARU ÔTA, NOBUO KIYOHARA, MASAO KAGAWA, TAKASHI TOMIKU, AKIKO NOMURA and by the educational board of Ôita Prefecture. Their contributions are gratefully appreciated.

BUN-EI TSUNODA
general director of the Paleological Association of Japan, Inc.

例　言

1)　本書は大分県大分市丹生遺跡群の正式報告書である。構成は第１部発掘報告篇，第２部共同研究篇から成る。

2)　発掘報告は，原則として地区地点順とするが，第１地区Ｂ地点があらゆる点で重要な位置を占めるので，これを第一番目に報告した。

3)　本書は６次にわたる調査の成果報告であるので，下記の４冊の概報のまとめの意味も含んでいる。従って，本書の記載中“発掘の経過”“位置・地形・トレンチ”“土層”“出土状況”に関しては，既刊概報の整理・再録であり，記載事実と判断は発掘当時における報告者のものであることをお断りしておきたい。

4)　註は原則として各節の末尾にまとめる。なお，丹生遺跡の４冊の概報（Ｐ．５参照）は，引用が頻繁であるので，以下のような略式表記を行う。

『丹生１・２次概報』(昭和39年)。

『丹生３次概報』(昭和40年)。

『丹生４次概報』(昭和41年)。

『丹生綜括編』(昭和43年)。

5)　石器実測図の縮尺は，原則として斧状石器・打器・石核などの大型石器を1/2，その他を2/3とする。但し，表採品の太田コレクションを1/3(第214図～第223図)，未検討資料の再録部分（第224図～第231図）は紙幅の関係で一括1/4とした。

6)　本文・図・表中で一部に以下のように略号を用いることがある。

1)　石器類別

Ａ：トゥール類，Ｂ：剝片類，Ｃ：砕片類，Ｄ：石核・母岩類

Kn：ナイフ形石器，Sc：削器，Gr：彫器，PS：ピエース・エスキーユ

RF：加工痕ある剝片，UF：使用痕ある剝片，CRF：打面再生剝片，

2)　石材

安：安山岩，珪：チャート，頁：頁岩，玄：玄武岩，黒：黒耀石，砂：砂岩，泥：泥岩，メ：メノー，流：流紋岩。

3)　実測図中の表現のうち，網点部は破損・剝落を，細かい線条は研磨痕を示す。但し，線条の方向は研磨痕の方向を意味するものではない。なお，手書きのドットは自然(礫)面を，交叉する細線にドットが加えられたものは節(層)理面をそれぞれ示す。

7)　斧状石器の断面作成については，A)報告書作成にかかわっての作図と，B)共同研究篇における竹岡氏の分析目的にそった作図との二つの要請を１枚の図面に表現してあることに留意されたい。

A)はごく一般的な作図法であり，横断面は中心部あたりの適当な位置で任意に作成している。これに対しB)の場合は，実測図中の正面観図に，分析者によって指定された縦断面用の中心軸を示し，この垂線に直交するかたちで横断面は作成される。さらに横断面は全長の1/2，1/4，1/8の位置で作成され，上から順にａ・ｂ・ｃ・ｄと記号を付することにする。

このように二つの要請を同一図に表示したために，竹岡氏の分析用に設定された中心軸と横断面軸は，実測図中では傾いて表示される結果を生むことがしばしばある。上記の点を斟酌の上諒解されたい。

8) 第１部発掘報告篇までの石器実測図は通し番号とする。同一資料に対しては，実測図・写真の別にかかわらず同一で固有の単一番号をあたえるものとする(第238～240図を除く)。１—Ｂ地点北区の挿図中，Ｓの文字は表採品，OSは太田亘氏採集品(太田コレクション)を意味する。

9) 石器における使用・加工痕表示は，破線と実線を添えてその範囲を示す。破線は断続的な，実線は連続的な使用・加工痕を示す。

10) 石質は旭地研・岩田修一氏による代表サンプルに対する肉眼鑑定にならって，鈴木が判断した。

11) 執筆分担は以下の通りである。詳細は各担当部分の文末に示した。

序	角田文衛	
はじめに	鈴木忠司	
Ⅰ章	鈴木忠司	
Ⅱ章	安部慎一・黒坪一樹・後藤和風・鈴木忠司・竹内義治・髙田里美・田鶴谷京・宮内智加・宮本康治・山口晴子・湯村功	
Ⅲ章	第１・３・４節　鈴木忠司	
	第２節　木村元浩	
Ⅳ章	Ａ）共同研究の主旨	鈴木忠司
	Ｂ）シベリアの旧石器と「礫器伝統」について	木村英明
	Ｃ）中国旧石器時代の礫器	佐川正敏
	Ｄ）中国華南地方の初期人類の残した礫器文化	黄　慰文
	Ｅ）朝鮮半島の旧石器文化と丹生石器群	鈴木忠司
	Ｆ）九州における旧石器時代・縄文時代早期の礫器と斧状石器	橘　昌信
	Ｇ）日本列島における片刃礫器と丹生１－Ｂ地点北区第２群石器の位置付け	織笠　昭
	Ｈ）石器研究の目的と方法	竹岡俊樹
おわりに	鈴木忠司	

目　次

序…… i
例　言…… v
はじめに…… 1

第1部　発掘報告篇

Ⅰ章　調査の経過と本書の目的 …… 3
第1節　丹生遺跡群の発見とその後の調査経過 …… 3
1．発　見 …… 3
2．調査の経過 …… 3
3．従来の研究経過と本書の位置…… 6
4．本書の目的と方法…… 6
第2節　丹生遺跡群の調査と丹生論争－経過と現在－…… 8
第3節　“礫器”という用語について …… 12
Ⅱ章　丹生遺跡群の石器群 …… 15
第1節　丹生遺跡群の概観と検討対象 …… 15
1．遺跡群の位置 …… 15
2．報告対象の限定 …… 17
第2節　第1地区B地点の細分 …… 19
1．発掘の経過…… 19
2．位置・地区・トレンチ…… 19
3．B地点の細分 …… 20
第3節　第1地区B地点北区 …… 22
1．土　層 …… 22
2．遺物の出土状況 …… 23
3．石器群の構成と分類 …… 23
1）石　質…… 23
2）石器の分類…… 26
4．斧状石器の類型間関係 …… 34
1）類型間の異同 …… 34
2）石質から見た類型間比較 ……102
3）素材の形態から見た類型間比較 …102
4）研磨痕および刃部背面の使用痕から見た類型間比較 ……102
5．石器の分布…… …104
6．1－B地点北区の性格 ……105
7．斧状石器の特徴とその位置付け …105
8．石器群の共伴関係 ……117
9．小　結 ……120
第4節　第1地区B地点東南区 ……122
第5節　第1地区B地点西区 ……128
第6節　第1地区A地点 ……130
第7節　第1地区D地点 ……134
第8節　第2地区E地点 ……137
第9節　第2地区F地点 ……140
第10節　第2地区H地点 ……147
第11節　第2地区I地点 ……151
第12節　第3地区B地点 ……153
第13節　第4地区A地点 ……155
第14節　第4地区B地点 ……160
第15節　第4地区D地点 ……164
第16節　第7地区A地点 ……167
第17節　第7地区D地点 ……179

第18節　第８地区Ａ地点　…　…　…　…202
第19節　第８地区Ｂ地点　…　…　…　…221
第20節　第９地区Ｂ地点　…　…　…　…243
第21節　第９地区Ｃ地点　…　…　…　…245
第22節　第10地区Ａ地点　…　…　…　…249
第23節　第11地区Ｂ地点　…　…　…　…250
第24節　第12地区Ａ地点　…　…　…　…253
第25節　第13地区Ａ地点　…　…　…　…259
第26節　第14地区Ａ地点　…　…　…　…262
第27節　第14地区Ｃ地点　…　…　…　…264
第28節　その他の資料　…　…　…　…　…284

Ⅲ章　丹生遺跡群と岩宿文化－綜括に代えて－　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…307
第１節　斧状石器の位置付けをめぐって…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…307
１．九州地方における比較　…　…　…307
２．本州以東との対比…　…　…　…　…308
第２節　斧状石器の製作技法と類型の性格　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…313
１．はじめに　…　…　…　…　…　…　…313
２．用語について　…　…　…　…　…　…313
３．対象資料　…　…　…　…　…　…　…313
４．斧状石器の分類　…　…　…　…　…313
５．斧状石器の製作技法　…　…　…　…321
６．各類型における属性　…　…　…　…322
７．類型の性格　…　…　…　…　…　…324
第３節　原位置出土資料の再検討　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…326
第４節　丹生遺跡群と岩宿文化　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…327
英文要旨　…333

第２部　共同研究篇

Ⅳ章　共同研究　東北アジアの始原文化と丹生石器群　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…　…341
－いわゆる礫器をめぐって－
Ａ）共同研究の主旨　付　英文要旨　…　…　…341
Ｂ）シベリアの旧石器と「礫器伝統」について　付　英文要旨　…　…　…345
Ｃ）中国旧石器時代の礫器　付　英文要旨　…　…　…389
Ｄ）中国華南地方の初期人類の残した礫器文化　付　英文要旨　…　…　…407
Ｅ）朝鮮半島の旧石器文化と丹生石器群　付　英文要旨　…　…　…417
Ｆ）九州における旧石器時代・縄文時代早期の礫器と斧状石器　付　英文要旨　…　…　…433
Ｇ）日本列島における片刃礫器と
丹生１－Ｂ地点北区第２群石器の位置付け　付　英文要旨　…　…　…461
Ｈ）石器研究の目的と方法
―丹生遺跡群１－Ｂ地点の斧状石器の分析を例として―　付　仏文要旨　…　…　…525
おわりに…　…559
図　版

挿 図 目 次

第１図　丹生遺跡群位置図 …… 16
第２図　丹生遺跡群内地区・地点位置図 1) …… 17
第３図　丹生遺跡群内地区・地点位置図 2) …… 18
第４図　１－Ｂ地点（北区，東南区，西区）地形・トレンチ配置図 …… 21
第５図　１－Ｂ地点北区Ｇトレンチ東壁土層断面図 …… 22
第６図　１－Ｂ地点北区石器平面・垂直分布図 …… 24
第７図　１－Ｂ地点北区石器実測図　1) …… 35
第８図　１－Ｂ地点北区石器実測図　2) …… 36
第９図　１－Ｂ地点北区石器実測図　3) …… 37
第10図　１－Ｂ地点北区石器実測図　4) …… 38
第11図　１－Ｂ地点北区石器実測図　5) …… 39
第12図　１－Ｂ地点北区石器実測図　6) …… 40
第13図　１－Ｂ地点北区石器実測図　7) …… 41
第14図　１－Ｂ地点北区石器実測図　8) …… 42
第15図　１－Ｂ地点北区石器実測図　9) …… 43
第16図　１－Ｂ地点北区石器実測図 10) …… 44
第17図　１－Ｂ地点北区石器実測図 11) …… 45
第18図　１－Ｂ地点北区石器実測図 12) …… 46
第19図　１－Ｂ地点北区石器実測図 13) …… 47
第20図　１－Ｂ地点北区石器実測図 14) …… 48
第21図　１－Ｂ地点北区石器実測図 15) …… 49
第22図　１－Ｂ地点北区石器実測図 16) …… 50
第23図　１－Ｂ地点北区石器実測図 17) …… 51
第24図　１－Ｂ地点北区石器実測図 18) …… 52
第25図　１－Ｂ地点北区石器実測図 19) …… 53
第26図　１－Ｂ地点北区石器実測図 20) …… 54
第27図　１－Ｂ地点北区石器実測図 21) …… 55
第28図　１－Ｂ地点北区石器実測図 22) …… 56
第29図　１－Ｂ地点北区石器実測図 23) …… 57
第30図　１－Ｂ地点北区石器実測図 24) …… 58
第31図　１－Ｂ地点北区石器実測図 25) …… 59
第32図　１－Ｂ地点北区石器実測図 26) …… 60

第33図　1－B地点北区石器実測図 27）… 61
第34図　1－B地点北区石器実測図 28）… 62
第35図　1－B地点北区石器実測図 29）… 63
第36図　1－B地点北区石器実測図 30）… 64
第37図　1－B地点北区石器実測図 31）… 65
第38図　1－B地点北区石器実測図 32）… 66
第39図　1－B地点北区石器実測図 33）… 67
第40図　1－B地点北区石器実測図 34）… 68
第41図　1－B地点北区石器実測図 35）… 69
第42図　1－B地点北区石器実測図 36）… 70
第43図　1－B地点北区石器実測図 37）… 71
第44図　1－B地点北区石器実測図 38）… 72
第45図　1－B地点北区石器実測図 39）… 73
第46図　1－B地点北区石器実測図 40）… 74
第47図　1－B地点北区石器実測図 41）… 75
第48図　1－B地点北区石器実測図 42）… 76
第49図　1－B地点北区石器実測図 43）… 77
第50図　1－B地点北区石器実測図 44）… 78
第51図　1－B地点北区石器実測図 45）… 79
第52図　1－B地点北区石器実測図 46）… 80
第53図　1－B地点北区石器実測図 47）… 81
第54図　1－B地点北区石器実測図 48）… 82
第55図　1－B地点北区石器実測図 49）… 83
第56図　1－B地点北区石器実測図 50）… 84
第57図　1－B地点北区石器実測図 51）… 85
第58図　1－B地点北区石器実測図 52）… 86
第59図　1－B地点北区石器実測図 53）… 87
第60図　1－B地点北区石器実測図 54）… 88
第61図　1－B地点北区石器実測図 55）… 89
第62図　1－B地点北区石器実測図 56）… 90
第63図　1－B地点北区石器実測図 57）… 91
第64図　1－B地点北区石器実測図 58）… 92
第65図　1－B地点北区石器実測図 59）… 93
第66図　1－B地点北区石器実測図 60）… 94
第67図　1－B地点北区石器実測図 61）… 95

第68図　1－B地点北区石器実測図 62）… 96
第69図　1－B地点北区石器実測図 63）… 97
第70図　1－B地点北区石器実測図 64）… 98
第71図　1－B地点北区石器実測図 65）… 99
第72図　1－B地点北区石器実測図 66）… …100
第73図　出土地点不明石器実測図 …101
第74図　1－B地点北区斧状石器分類区分図 … … … … … … … … … … … … … … … … … …103
第75図　1－B地点北区第1群石器平面分布図 … … … … … … … … … … … … … … … … …106
第76図　1－B地点北区第2群石器平面分布図 … … … … … … … … … … … … … … … … …108
第77図　1－B地点北区第3群石器平面分布図 … … … … … … … … … … … … … … … … …110
第78図　1－B地点北区第4群石器平面分布図 … … … … … … … … … … … … … … … … …112
第79図　1－B地点北区第5群石器平面分布図 … … … … … … … … … … … … … … … … …114
第80図　1－B地点北区斧状石器長/幅比(上)•長さ/重量比分布グラフ(下)〔欠損品を含む〕…118
第81図　1－B地点東南区A_4～C_4トレンチ北壁土層断面図(上),
STトレンチ東壁土層断面図(下) … … … … … … … … … …123
第82図　1－B地点東南区Aトレンチ深掘状況 … … … … … … … … … … … … … … … … …123
第83図　1－B地点東南区斧状石器出土位置図 … … … … … … … … … … … … … … … … …124
第84図　1－B地点東南区石器実測図 1）… … … … … … … … … … … … … … … … … … …125
第85図　1－B地点東南区石器実測図 2）… … … … … … … … … … … … … … … … … … …126
第86図　1－B地点東南区石器実測図 3）… … … … … … … … … … … … … … … … … … …127
第87図　1－B地点西区Aトレンチ北壁土層断面図 … … … … … … … … … … … … … … …128
第88図　1－B地点西区石器実測図 …129
第89図　1－A地点地形・トレンチ配置図 … … … … … … … … … … … … … … … … … …130
第90図　1－A地点第1トレンチ東壁土層断面図 … … … … … … … … … … … … … … …130
第91図　1－A地点石器実測図　1）… … … … … … … … … … … … … … … … … … … …132
第92図　1－A地点石器実測図　2）… … … … … … … … … … … … … … … … … … … …133
第93図　1－D地点地形・トレンチ配置図 … … … … … … … … … … … … … … … … … …135
第94図　1－D地点トレンチ北壁土層断面図 … … … … … … … … … … … … … … … … …135
第95図　1－D地点石器実測図 …136
第96図　2－E地点地形・トレンチ配置図 … … … … … … … … … … … … … … … … … …137
第97図　2－E地点Aトレンチ北壁土層断面図 … … … … … … … … … … … … … … … …137
第98図　2－E地点石器実測図　1）… … … … … … … … … … … … … … … … … … … …138
第99図　2－E地点石器実測図　2）… … … … … … … … … … … … … … … … … … … …139
第100図　2－F地点石器実測図　1）… … … … … … … … … … … … … … … … … … … …141
第101図　2－F地点石器実測図　2）… … … … … … … … … … … … … … … … … … … …142

第102図　2－F地点石器実測図　3）……143
第103図　2－F地点石器実測図　4）……144
第104図　2－F地点石器実測図　5）……145
第105図　2－H地点地形・トレンチ配置図……148
第106図　2－H地点第1トレンチ東北壁土層断面図……148
第107図　2－H地点石器実測図　1）……150
第108図　2－H地点石器実測図　2）……151
第109図　2－I地点地形・トレンチ配置図……151
第110図　2－I地点第1トレンチ西南壁土層断面図……152
第111図　2－I地点石器実測図……152
第112図　3－B地点Cトレンチ土層断面図……154
第113図　3－B地点石器実測図……154
第114図　4－A地点地形・トレンチ配置図……155
第115図　4－A地点第1トレンチ北壁土層断面図……156
第116図　4－A地点石器実測図　1）……158
第117図　4－A地点石器実測図　2）……159
第118図　4－B地点地形・トレンチ配置図……161
第119図　4－B地点Bトレンチ土層断面図……161
第120図　4－B地点石器実測図……162
第121図　4－D地点地形・トレンチ配置図……164
第122図　4－D地点第1・2・3トレンチ土層断面図……165
第123図　4－D地点石器平面分布図……165
第124図　4－D地点石器実測図……166
第125図　7－A地点1～4区西南壁土層断面図……168
第126図　7－A地点石器平面分布図……168
第127図　7－A地点石器実測図　1）……171
第128図　7－A地点石器実測図　2）……172
第129図　7－A地点石器実測図　3）……173
第130図　7－A地点石器実測図　4）……174
第131図　7－D地点地形・トレンチ配置図……180
第132図　7－D地点第12トレンチ北壁土層断面図……182
第133図　7－D地点石器実測図　1）……189
第134図　7－D地点石器実測図　2）……190
第135図　7－D地点石器実測図　3）……191
第136図　7－D地点石器実測図　4）……192

第137図　7－D地点石器実測図　5）……193
第138図　7－D地点石器実測図　6）……194
第139図　7－D地点石器実測図　7）……195
第140図　7－D地点石器実測図　8）……196
第141図　7－D地点石器実測図　9）……197
第142図　7－D地点石器実測図 10）……198
第143図　7－D地点石器実測図 11）……199
第144図　7－D地点石器実測図 12）……200
第145図　8－A地点石器実測図　1）……207
第146図　8－A地点石器実測図　2）……208
第147図　8－A地点石器実測図　3）……209
第148図　8－A地点石器実測図　4）……210
第149図　8－A地点石器実測図　5）……211
第150図　8－A地点石器実測図　6）……212
第151図　8－A地点石器実測図　7）……213
第152図　8－A地点石器実測図　8）……214
第153図　8－A地点石器実測図　9）……215
第154図　8－A地点石器実測図 10）……216
第155図　8－A地点石器実測図 11）……217
第156図　8－A地点石器実測図 12）……218
第157図　8－B地点，10－A地点付近地形図……221
第158図　8－B地点トレンチ配置図……222
第159図　8－B地点Aトレンチ南壁土層断面図……222
第160図　8－B地点石器平面分布概念図……223
第161図　8－B地点個体別資料分布概念図……223
第162図　8－B地点接合資料分布概念図……223
第163図　8－B地点石器実測図　1）……226
第164図　8－B地点石器実測図　2）……227
第165図　8－B地点石器実測図　3）……228
第166図　8－B地点石器実測図　4）……229
第167図　8－B地点石器実測図　5）……230
第168図　8－B地点石器実測図　6）……231
第169図　8－B地点石器実測図　7）……232
第170図　8－B地点石器実測図　8）……233
第171図　8－B地点石器実測図　9）……234

第172図　8－B地点石器実測図 10）……235
第173図　8－B地点石器実測図 11）……236
第174図　8－B地点石器実測図 12）……237
第175図　8－B地点石器実測図 13）……238
第176図　8－B地点石器実測図 14）……239
第177図　8－B地点石器実測図 15）……240
第178図　9－B地点地形・トレンチ配置図……243
第179図　9－B地点Ｉトレンチ西壁土層断面図……243
第180図　9－B地点石器実測図……244
第181図　9－C地点地形・トレンチ配置図……246
第182図　9－C地点Ａトレンチ西壁土層断面図……246
第183図　9－C地点石器実測図……247
第184図　10－A地点地形・トレンチ配置図……249
第185図　10－A地点打器採集崖面実測図……250
第186図　11－B地点石器実測図……252
第187図　12－A地点地形・トレンチ配置図……253
第188図　12－A地点第１トレンチ１区試掘溝柱状模式図……254
第189図　12－A地点石器平面分布概念図……254
第190図　12－A地点石器実測図　1）……257
第191図　12－A地点石器実測図　2）……258
第192図　12－A地点石器実測図　3）……259
第193図　13－A地点地形・トレンチ配置図……260
第194図　13－A地点第１トレンチ土層断面図……260
第195図　13－A地点石器実測図……262
第196図　14－A地点地形・トレンチ配置図……263
第197図　14－A地点石器実測図……263
第198図　14－C地点地形・トレンチ配置図（上）および区画名区分図（下）……265
第199図　14－C地点Ｃトレンチ（上），第６次調査トレンチ土層断面図（下）……265
第200図　14－C地点石器実測図　1）……269
第201図　14－C地点石器実測図　2）……270
第202図　14－C地点石器実測図　3）……271
第203図　14－C地点石器実測図　4）……272
第204図　14－C地点石器実測図　5）……273
第205図　14－C地点石器実測図　6）……274
第206図　14－C地点石器実測図　7）……275

第207図　14－C地点石器実測図　8）……276
第208図　14－C地点石器実測図　9）……277
第209図　14－C地点石器実測図 10）……278
第210図　14－C地点石器実測図 11）……279
第211図　14－C地点石器実測図 12）……280
第212図　14－C地点石器実測図 13）……281
第213図　1－E，1－J，2－A，4－C，10－B地点石器実測図……286
第214図　表採資料実測図(太田コレクション)　1）……287
第215図　表採資料実測図(太田コレクション)　2）……288
第216図　表採資料実測図(太田コレクション)　3）……289
第217図　表採資料実測図(太田コレクション)　4）……290
第218図　表採資料実測図(太田コレクション)　5）……291
第219図　表採資料実測図(太田コレクション)　6）……292
第220図　表採資料実測図(太田コレクション)　7）……293
第221図　表採資料実測図(太田コレクション)　8）……294
第222図　表採資料実測図(太田コレクション)　9）……295
第223図　表採資料実測図(太田コレクション) 10）……296
第224図　表採資料実測図 1）……297
第225図　表採資料実測図 2）……298
第226図　表採資料実測図 3）……299
第227図　表採資料実測図 4）……300
第228図　表採資料実測図 5）……301
第229図　表採資料実測図 6）……302
第230図　表採資料実測図 7）……303
第231図　表採資料実測図 8）……304
第232図　九州出土石斧実測図(後期岩宿・縄文時代) 1）……309
第233図　九州出土石斧実測図(後期岩宿・縄文時代) 2）……310
第234図　本州出土石斧実測図(前期岩宿時代)……311
第235図　素材形態分類図……314
第236図　加工形態分類図……315
第237図　斧状石器類型区分図……316
第238図　斧状石器類型別集成図 1）……318
第239図　斧状石器類型別集成図 2）……319
第240図　斧状石器類型別集成図 3）……320
第241図　斧状石器類型別集成図 4）……321

第242図　刃部形態分類図 …324
第243図　シベリアの「ハンドアックス」
（1・モホヴォⅡ，2・ボゴロツコェ，3・トガルィクⅠ）…347
第244図　ゴルノアルタイ・ジェニソワ洞穴出土の石器 …349
第245図　ゴルノアルタイ・カラボム遺跡出土の石器 …351
第246図　コロリェヴォⅠ遺跡2b層の「ルヴァロワ尖頭器技法」と同Ⅱ遺跡2層の石刃技法 …352
第247図　マカロヴォル遺跡出土の石器群 …354
第248図　マリタ遺跡及びウスチ・コヴァー遺跡出土の石器 …356
第249図　ジュクタイ洞穴出土の石器群と地層断面図 …358
第250図　ヴェルホレンスク山遺跡出土の石器と骨角器 …359
第251図　シベリアの楔形細石刃核 …359
第252図　オシュルコヴォ遺跡出土の石器と骨角器 …360
第253図　シベリアの「前期旧石器」…366
第254図　ディリング・ユリャフ遺跡の地形図と発掘区，地層断面図及び第14遺物集中地点出土状況 …368
第255図　ディリング・ユリャフ遺跡出土のチョッパーとピック様礫器 …371
第256図　ディリング・ユリャフ遺跡出土のチョッパー，スクレブロ，使用痕ある剝片及びノッチ …372
第257図　第14遺物集中地点出土のチョッパーと剝片，ツルハシ様石器及びハンマー …373
第258図　第14遺物集中地点出土の接合資料 …374
第259図　シベリア中期旧石器時代のスクレブロ，ルヴァロワ石核，ムステリアン尖頭器，ピック様礫器 …378
第260図　地理学協会洞穴出土の剝片類 …379
第261図　シベリア後期旧石器時代のチョッパーとスクレブロ …380
第262図　中国旧石器時代の礫器の分類 …391
第263図　前期旧石器時代の礫器出土遺跡分布図 …392
第264図　前期旧石器時代の礫器 1) …393
第265図　前期旧石器時代の礫器 2) …395
第266図　中期旧石器時代の礫器出土遺跡分布図 …396
第267図　中期旧石器時代の礫器 …397
第268図　後期旧石器時代・前期旧石器時代の礫器等出土遺跡分布図 …398
第269図　華北地方の後期旧石器時代の礫器を含む石器群 …399
第270図　華南地方の後期旧石器時代の礫器を含む石器群 …401
第271図　華南地方の新石器時代の礫器 …402
第272図　中国陝西省梁山遺跡の礫器 …409

第273図　中国広西チワン族自治区百色遺跡群の礫器 …410
第274図　朝鮮半島主要遺跡分布図 …418
第275図　全谷里遺跡出土の石器 …420
第276図　全谷里一帯における堆積断面の模式図と年代測定層準 …421
第277図　全谷里ＥＯＳＩ区における遺物の平面分布と層位的位置復原図 …422
第278図　イムジン盆地の考古学地点分布図 …423
第279図　クムグル出土の石器 …423
第280図　九州出土の斧状石器および大型石器 …444
第281図　九州出土の大型石器 …445
第282図　九州出土の大型石器 …446
第283図　早水台遺跡出土の大型石器 …447
第284図　標高別片刃礫器出土文化層数 …466
第285図　片刃礫器の大きさ …469
第286図　片刃礫器の重量 …469
第287図　片刃礫器の刃角 …471
第288図　日本列島における片刃礫器集成図　1) …482
第289図　日本列島における片刃礫器集成図　2) …483
第290図　日本列島における片刃礫器集成図　3) …484
第291図　日本列島における片刃礫器集成図　4) …485
第292図　日本列島における片刃礫器集成図　5) …486
第293図　日本列島における片刃礫器集成図　6) …487
第294図　日本列島における片刃礫器集成図　7) …488
第295図　日本列島における片刃礫器集成図　8) …489
第296図　日本列島における片刃礫器集成図　9) …490
第297図　日本列島における片刃礫器集成図 10) …491
第298図　日本列島における片刃礫器集成図 11) …492
第299図　日本列島における片刃礫器集成図 12) …493
第300図　日本列島における片刃礫器集成図 13) …494
第301図　日本列島における片刃礫器集成図 14) …495
第302図　日本列島における片刃礫器集成図 15) …496
第303図　日本列島における片刃礫器集成図 16) …497
第304図　日本列島における片刃礫器集成図 17) …498
第305図　日本列島における片刃礫器集成図 18) …499
第306図　日本列島における片刃礫器集成図 19) …500
第307図　日本列島における片刃礫器集成図 20) …501

第308図　日本列島における片刃礫器集成図 21）……502
第309図　日本列島における片刃礫器集成図 22）……503
第310図　日本列島における片刃礫器集成図 23）……504
第311図　日本列島における片刃礫器集成図 24）……505
第312図　日本列島における片刃礫器集成図 25）……506
第313図　日本列島における片刃礫器集成図 26）……507
第314図　日本列島における片刃礫器集成図 27）……508
第315図　日本列島における片刃礫器集成図 28）……509
第316図　日本列島における片刃礫器集成図 29）……510
第317図　日本列島における片刃礫器集成図 30）……511
第318図　日本列島における片刃礫器集成図 31）……512
第319図　日本列島における片刃礫器集成図 32）……513
第320図　日本列島における片刃礫器集成図 33）……514
第321図　日本列島における片刃礫器集成図 34）……515
第322図　日本列島における片刃礫器集成図 35）……516
第323図　石器の置き方 ……527
第324図　斧状石器の基本的な構成 ……527
第325図　丹生１－Ｂ地点北区の斧状石器 1）……529
第326図　丹生１－Ｂ地点北区の斧状石器 2）……530
第327図　丹生１－Ｂ地点北区の斧状石器 3）……531
第328図　丹生１－Ｂ地点北区の斧状石器 4）……532
第329図　丹生１－Ｂ地点北区の斧状石器 5）……533
第330図　丹生１－Ｂ地点北区の斧状石器 6）……534
第331図　丹生１－Ｂ地点北区の斧状石器 7）……535
第332図　丹生１－Ｂ地点北区の斧状石器・その他 ……536
第333図　丹生１－Ｂ地点北区の石器 ……537
第334図　斧状石器の部分名称と測定ヵ所 ……538
第335図　斧状石器の素材とされた礫の模式図 ……540
第336図　斧状石器の先端部形成の方法 ……541

表　目　次

第１表　発掘地点と調査次・担当班一覧表 … 4
第２表　丹生台地の第４系の対比表 … 15
第３表　第１地区Ｂ地点各区黒耀石・チャート占有比率表 … … … … … … … … … … … … … 22
第４表　第２地区Ｈ地点出土石器一覧表 … … … … … … … … … … … … … … … … … … …149
第５表　第４地区Ａ地点出土石器一覧表 … … … … … … … … … … … … … … … … … … …157
第６表　第７地区Ａ地点出土石器一覧表 … … … … … … … … … … … … … … … … … … …169
第７表　第８地区Ａ地点出土石器一覧表 … … … … … … … … … … … … … … … … … … …204
第８表　第８地区Ｂ地点出土石器一覧表 … … … … … … … … … … … … … … … … … … …224
第９表　第８地区Ｂ地点接合・個体別資料一覧表 … … … … … … … … … … … … … … … …241
第10表　第12地区Ａ地点出土石器一覧表 … … … … … … … … … … … … … … … … … … …255
第11表　第14地区Ｃ地点出土石器一覧表 … … … … … … … … … … … … … … … … … … …266
第12表　素材類型区分表 …316
第13表　類型別・研磨痕表 …323
第14表　類型別・ダメージ痕表 …323
第15表　類型別・刃部形態分類表 …323
第16表　類型別・石質分類表 …324
第17表　九州における岩宿(旧石器)時代の編年(橘昌信氏作成) … … … … … … … … … …328
第18表　丹生遺跡群の時期別構成 …330
第19表　シベリアにおける旧石器文化の変遷 … … … … … … … … … … … … … … … … …346
第20表　シベリアの主な遺跡から発見された動物の化石 … … … … … … … … … … … …355
第21表　中部アジアの石器時代遺跡に関する編年試案 … … … … … … … … … … … … …364
第22表　ディリング・ユリャフ旧石器時代遺跡出土遺物 … … … … … … … … … … … …369
第23表　朝鮮半島第４紀の自然環境と旧石器文化 … … … … … … … … … … … … … …423
第24表　片刃礫器地域別出土数 …465
第25表　片刃礫器時期別文化層数 …465
第26表　片刃礫器時期別出土数 …465
第27表　片刃礫器時期別平均値 …469
第28表　日本列島における片刃礫器集成一覧 … … … … … … … … … … … … … … … …517
第29表　斧状石器の先端部・側辺の剥離角の比較 … … … … … … … … … … … … … … …528
第30表　斧状石器の先端から２cmでの厚さ … … … … … … … … … … … … … … … … …538
第31表　剥離角の比較 …538
第32表　先端から２cmでの厚さの比較 … … … … … … … … … … … … … … … … … … …538

第33表　長さ／幅の比率の比較 …538
第34表　斧状石器Ａ群の胴部の加工 1) …540
第35表　斧状石器Ａ群の胴部の加工 2) …540
第36表　斧状石器Ａ群の先端部の加工方法 …541
第37表　先端部の輪郭と素材との関係 …541
第38表　先端部の輪郭と胴部の加工との関係 1) …542
第39表　先端部の輪郭と胴部の加工との関係 2) …542
第40表　斧状石器Ｂ・Ｃ群の先端部の加工 …542
第41表　先端部の輪郭と先端部の剝離角・先端角との関係 …542
第42表　先端部の輪郭と厚さとの関係 1) …543
第43表　先端部の輪郭と長さとの関係 2) …543
第44表　先端部の輪郭と幅との関係 …543
第45表　先端部の輪郭と長さ／幅比率との関係 …543
第46表　先端部の輪郭と厚さとの関係 …543
第47表　先端部の輪郭と重さとの関係 …543
第48表　斧状石器Ａ群の素材別厚さ …543
第49表　斧状石器Ｃ群の素材別厚さ …543
第50表　斧状石器の基部の幅 …544
第51表　斧状石器の基部の厚さ …545
第52表　宮添遺跡の打製石斧の重さ …546
第53表　宮添遺跡の打製石斧の長さ …546
第54表　斧状石器Ａ群の素材別重さ …546
第55表　斧状石器Ａ群の素材別長さ …546
第56表　斧状石器Ａ群の素材別幅 …546

図　版　目　次

図版第１　鍬入式・紀念写真

上段：第１次調査鍬入式

下段：第３次調査紀念　昭和39年10月９日　調査団本部前にて

図版第２　調査風景

上段左：第１地区Ｂ地点における試掘

上段右：第７地区Ａ地点における発掘

下段：第10地区Ａ地点打器出土崖面

図版第３　遺跡遠景

上段：丹生台地の眺瞰

下段：第１地区Ｂ地点北区

図版第４　遺跡遠景

上段：第７地区Ｄ地点

下段：第８地区Ａ・Ｂ地点および第10地区Ａ地点

図版第５　石器

第１地区Ｂ地点北区出土の斧状石器　1)

図版第６　石器

第１地区Ｂ地点北区出土の斧状石器　2)

図版第７　石器

第１地区Ｂ地点北区および東南区出土の斧状石器

図版第８　石器

第１地区Ａ地点出土の斧状石器，第１地区Ｂ地点北区出土の打・割器／石核および第10地区Ａ地点出土の打器

はじめに

本書は，大分市坂ノ市所在の“丹生台地”上に点在する丹生遺跡群の正式報告書という性格と，丹生遺跡群の今日的評価に係わる研究論文集という二面の性格を兼ね具えた研究報告書である。このために，第1部発掘報告篇と第2部共同研究篇の2部構成とした。遺跡が発見され，最初に発掘調査のメスが加えられてから今日までに，一人の人間の半生に近い30年という気の遠くなるような年月が経過した。この間に概報4冊が刊行され，論文誌上で“丹生論争”が戦わされたが，この論争も未決着のまま人々の記憶からも薄れかけようとしている。

こうした時に，いままた何故に再報告・正式報告かという点と丹生論争の経過についてはⅠ章第1・2節で詳しく触れたとおりである。ここで意図したところが十分に果たしえたかどうかと自問自答してみると，はなはだ心もとないところがある。とりわけ，丹生論争で一番問題となった地質学的な裏付けに関して再検討をなしえなかったこと，共同研究篇において東南アジア部門の研究を組み込むことができなかったことである。それぞれ止むを得ない事情があったにしろ，心残りな点である。

とは言え，丹生遺跡の発掘以降に経過した歳月は，日本の前期岩宿(旧石器)文化の研究に大きな進展を齎し，こうした研究の進展の恩恵に浴しながら，とりあえず丹生遺跡群の再評価を果たすことができたことは幸いであった。30年の時間の推移が無駄ではなかったことを改めて実感している。発掘報告篇に盛られた事実報告は，当時の目的意識・発掘規模・精度からして，今日的には一定の限界が存するのは止むを得ないとしても，共同研究の成果を併せて掲げることができたということは，これに勝る成果と言うことができると思う。

共同研究は，古代学研究所の共同研究計画の一環として，平成2・3年度の2ヶ年に亘って実施された。研究員の合同討議に十分な時間を割きえなかったという憾みはあるにせよ，この2年間に亘る共通の目的意識の延長線上に成立している。各論者の主張するところは，丹生遺跡群の発掘者の従来の主張に対して，また，本書の見解に対して否定的であったり，直接的な回答を含んでいなかったりして，共同研究員間に意見の一致を見ない部分もある。いずれにしろ，丹生遺跡群がはじめて，日本の前期岩宿文化に対する新しい認識と東北アジア的なパースペクティブの中で光が当てられたという点にこそ意義があると考えている。また，石器分析の方法論上の課題が，実際の資料を用いながら現実の諸議論と対比される中で実現したことも，中国側から黄慰文氏の寄稿を得られたことも大きな収穫であった。

“丹生論争”の存在ゆえに，それに拘泥し，発掘後30年目にして最終報告が成ろうとしている。この際，丹生論争の真の解決は，我々にとっては，丹生論争を越えたところで計られる必要があった。そのために，まず第1部に示した現状で可能な限りの資料提示があり，第2部での共同研究が設けられた。このような新たな資料提示，広い視野からの検討，石器分析法の方法論的検討の三要素がないまぜになって，今後の岩宿時代研究に一筋の光明を投げかけてくれることを心から願うものである。

（鈴　木）

第１部　発掘報告篇

Ⅰ章　調査の経過と本書の目的

第1節　丹生遺跡群の発見とその後の調査経過

1．発　　見

昭和37年2月，当時大分大学助教授富木隆氏と共同通信社大分支局の(故)中村俊一氏が，日暮しの池の東側に連なる丘陵頂部付近で何点かの礫器を採集されたのが，その後の調査の発端であった。この地は，地籍上大分市大字丹生字辻に属し，調査団によって第1地区A地点と命名された。

2．調査の経過

この発見の重要性を痛感した㈶古代学協会は，すぐさま(昭和37年3月)調査団(団長角田文衞)を派遣し，発見の意義を再確認したうえで，本格的継続調査の体制作りに着手した。その結果，同年5月には《日本旧石器文化研究委員会》が組織され，この委員会のもとに5ヶ年の調査計画がたてられた。次下に調査年次と調査団の編成を列記しておく(第1表，図版Ⅰ・Ⅱ)。

予備調査

期　　間　昭和37年6月5日～8日

調 査 団　角田文衞・富木　隆・藤原光輝・大西郁夫・太田　亘・中村俊一・三上貞二・藤田純子

調査概要　大字丹生字長迫(第1地区B地点)に小規模なトレンチ調査を実施。地質調査の実施。

第1次発掘調査

期　　間　昭和37年10月5日～31日

調 査 団　本　　部　望月信成・角田文衞・西井芳子・藤田純子・長　照代・鮎沢　寿・加藤不二男・太田　亘・中村俊一・八坂直義

考古学班　酒詰仲男・堅田　直・富木　隆・藤原光輝・小林知生・三上貞二

地質学班　首藤次男・大西郁夫・日高　稔・酒井潤一・野田雅之

第2次発掘調査

期　　間　昭和38年10月8日～21日

調 査 団　本　　部　望月信成・角田文衞・西井芳子・藤田純子・鮎沢　寿・山副洋治・太田　亘・中村俊一・秦　数雄

考古学班　小林知生・藤原光輝・小江慶雄・早川正一・三上貞二

地質学班　首藤次男・大西郁夫・大塚裕之

補 助 員　長谷部　学・矢部真美・池田一郎・同志社大学・大阪市立大学・南山大学・大分大学学生

第3次発掘調査

期　　間　昭和39年10月4日～22日

第1表　発掘地点と調査次・担当班一覧表

地区名	地点名	第一次調査	第二次調査	第三次調査	第四次調査	第五次調査	第六次調査
第1地区	A地点					試掘班	
	B地点	藤原班			三上班	小野班	
	D地点	酒詰班				試掘班	
	E地点	富木班	三上班			鎌木班	
	F地点		早川班			三上班	
	G地点			三上班			
	H地点				小林班		
	I地点						三上班
	J地点						三上班
第2地区	B地点	安井班					
	E地点	堅田班					
	F地点	安井班	小江班				
	G地点				早川班		
	H地点				早川班		
	I地点				安井班		
第3地区	A地点	藤原班					
	B地点	藤原班	藤原班				
	C地点					三上班	
第4地区	A地点			藤原班			
	B地点			酒詰班			
	C地点			酒詰班			
	D地点				江坂班		
第6地区	A地点		地質班				
	B地点	藤原班					
	C地点					三上班	
第7地区	A地点	小林班					
	B地点	小林班					
	C地点		小林班				
	D地点			三上班	三上班		
	E地点				小林班		
第8地区	A地点		早川班				
	B地点			小林班			
	C地点				小江班		
	D地点				小江班		
第9地区	B地点				三上班	江坂班	
	C地点				小林班	小林班	
	D地点				小林班		
第10地区	A地点			早川班	早川班		
	B地点				小林班		
第11地区	A地点				小林班		
	B地点			藤原班	小林班		
	C地点				小林班		
第12地区	A地点				藤原班		
第13地区	A地点				堅田班		
第14地区	A地点					富木班	三上班
	B地点					三森班	三上班
	C地点					三森班	
	D地点					早川班	

調査団　本　　部　望月信成・角田文衛・西井芳子・藤田純子・鮎沢　寿・石田明子・
太田　亘・中村俊一・秦　数雄
考古学班　酒詰仲男・小林知生・藤原光輝・三上貞二
地質学班　首藤次男・大西郁夫・日高　稔
補助員　石附喜三男・長谷部　学・長　照代・江谷　寛・池田一郎・岡村広法・
吉居政雄・南山大学・大阪市立大学・同志社大学・京都学芸大学・
大分大学学生

第4次発掘調査

期　　間　昭和40年10月13日～11月2日
調査団　本　　部　望月信成・角田文衛・西井芳子・鮎沢　寿・藤田純子・石田明子・
長　照代・太田　亘・中村俊一・秦　数雄
考古学班　小林知生・小江慶雄・江坂輝弥・堅田　直・藤原光輝・安井良三・
三上貞二・早川正一・川村喜一
地質学班　首藤次男・井関弘太郎・大西郁夫・日高　稔
補助員　長谷部　学・杉浦昭夫・池田一郎・奈良トシコ・片岡　肇・江谷　寛・
岡村広法・市野哲哉・矢部真美・早稲田大学・南山大学・
京都学芸大学・同志社大学・大阪市立大学・帝塚山大学・大分大学学生
および大分県立東高等学校生徒

第5次発掘調査

期　　間　昭和41年9月27日～10月12日
調査団　本　　部　望月信成・角田文衛・西井芳子・鮎沢　寿・藤田純子・石田明子・
小西瑛子・太田　亘・中村俊一・秦　数雄
考古学班　小林知生・杉浦昭夫・三森定男・藤本英夫・佐藤忠雄・石附喜三男・
江坂輝弥・渡辺　誠・富木　隆・杉崎重臣・内藤喜六・小野忠熙・
佐藤　暁・鎌木義昌・藤井　修・早川正一・片岡　肇・三上貞二・
大山正風・江谷　寛・岡村広法・中谷雅治・長　照代
地質学班　首藤次男・日高　稔

第6次発掘調査

期　　間　昭和42年8月19日～31日
調査団　本　　部　鮎沢　寿・中村俊一
考古学班　三上貞二・早川正一・磯崎正彦・渡辺　誠・日高　稔・片岡　肇・
中谷雅治

これらの発掘調査の成果は以下に示す4冊の概報集にまとめられている。ただし，第6次調査については，その性格が独立した調査というよりも前年度までの調査の補足調査ということもあって報告は未刊である。

1)　(財)古代学協会『大分県丹生遺跡第1，第2次発掘調査概報』(大阪・京都，昭和39年)。

2)　(財)古代学協会・日本旧石器文化研究委員会『大分県丹生遺跡第3次発掘調査概報』(大阪・京都，昭和40年)。

3)　(財)古代学協会・日本旧石器文化研究委員会『大分県丹生遺跡第4次発掘調査概報』(大阪・京都，昭和41年)。

4)　(財)古代学協会・日本旧石器文化研究委員会『丹生　大分県丹生遺跡発掘調査概報　綜括篇』(京都，昭和43年)。

3．従来の研究経過と本書の位置

先に示したように，丹生遺跡群の研究は，発掘調査と平行するかたちで着実に進められた。しかし，昭和43年11月の『綜括編』の刊行以後，第6次調査の報告書および全体の正式報告書の刊行が未だ実現していないことも含めて，その後の研究は停滞しがちであった。それは，一にかかって，当初，検出を目指した石器群を決定的なかたちで，予想した年代を示す地層中に原位置で確認できなかったという事情によっていると推測される。そして，その後は永い“丹生論争”の未決着の状態が続く。

このように，本書に課せられた最初の課題は，第1～5次調査の報告が概報集であることに関連して，この正式報告を作成することである。

丹生遺跡調査地点は第1地区～第14地区に含まれる48地点である。しかし，資料的な現実からみて，既刊分の概報に加えて詳報を要すると思われるものは，第1地区A地点以下第14地区C地点までの計25地点である(P.19参照)。その他の地点については，再報告の必要が認められる資料群を一括掲示した。さらに，これまでの論議がいわゆる“礫器”(打・割器，祖型握斧類)などの大型石器に集中していた経過をふまえて，上記報告地点以外出土の表採類例資料も集成した。この際，地元在住の郷土史家・太田亘氏の採集品(太田コレクション)を中心とする未発表資料，発掘概報集以外のレポートに掲載された丹生遺跡群発見の関連資料の集成にも心懸けた。これによって，大森(縄文)時代以降の発掘品を除いて，丹生遺跡群出土の主要な資料の報告が完成したことになり，最終報告とは言えないまでも正式報告としての実質を保ちえたのではないかと考えている。

課題の第2は“丹生論争”に今日的な解決を与えることである。これは第2部共同研究篇の役割である。共同研究篇の冒頭に示した目的意識と執筆陣容をもってこれにあたった。

4．本書の目的と方法

丹生遺跡群の発掘成果は，3冊の概報と概報綜括篇1冊として既に公にされている。しかしながら，上記4冊の報告書は，綜括篇を含むとはいえ，あくまで概報集に留まっており，したがって，発掘報告書の基本的使命としての“事実報告”という点で欠けるところが多かった。とりわけ丹生問題に関する論議の基礎となる1－B地点を主とする石器群の資料提示が不十分であり，論議を不毛なものとしていた。これはもっぱら報告者側に責任があり，まずこの点を第三者的な検討に耐えうるものとする必要があった。本書刊行の目的の第1はこの欠を補うことにある。本書の第1部がこれに当てられる。

丹生遺跡群が注目され，《日本旧石器文化研究委員会》が組織され，台地上の遺跡群に発掘調査のメスが加えられたその最大の理由は，各地点から多数発見された“打・割器，祖型握斧類”が，日本列島最古の居住者がもたらした，前期旧石器文化の存在の証拠になるのではないかといった期待感にあった。1949年(昭和24年)の岩宿遺跡における発見は，大森(縄文)文化以前の日本列島に，洪積(更新)世人類の広汎な居住のあったことを明らかにし，日本各地における岩宿文化の実態の解明も着々と進んだ。そして，新人の残したこれらの文化に先行して，旧人・原人段階から既に人類の活動があったのではなかったかという問題意識が現実味を増しはじめていた。このような学界内部の研究意識の芽生えに呼応するかのように登場したのが，丹生遺跡群であった。

こうした背景のために，調査は，いきおい，打・割器などの包含層の確認と所属年代を追究することに主眼がおかれることになった。台地上に点在する14地区，48地点にわたる小規模で多数のトレンチの設定は，このような調査目的に由来している。また，調査の概報も，打・割器などの大型の石器に重点が置かれ，検出資料全てに均等な配慮がなされ，十分の記載が行われなかった憾みがある。検出資料の所属する年代が，当初期待した所と比較していささか新しいものであったとしても，そして，今日の考古学的状況が確実な地層から広範囲に検出される資料群を多数擁しているのに対し，ここに示す資料群は今日的価値という点で多少物足りないものであったとしても，全資料を検討紹介し当初の目的意識にかかわらず丹生遺跡群の全容を明らかにすることが求められている。

ところで，丹生遺跡群調査の眼目が，前期旧石器文化あるいは旧・原人段階の日本列島最古の文化の存在の確実な証拠を得るためであったことは先に記したとおりであるが，発掘調査を契機に，発掘者側からこの目的意識に対する肯定的な評価と第三者の否定的な論評とが交叉し，いわゆる“丹生論争”を生んだ。この論争は未だ決着せざる状況にあるとはいえ，“否”の方に大きく傾いて現在に至っていると言える。

論争の未決着の要因の多くは，問題の石器の原位置でのまとまった検出例が少ないうえに，遺跡の土層の堆積環境の悪さによって，石器包含層の確定，換言すれば所属年代が確定していないところにあった。しかし，問題はそればかりではなかった。概報集の資料提示が第三者的検討という観点からは，必ずしも十分な客観性を有していたとは言い難かった。また，礫器の紹介に主眼がおかれたために，各地点における石器群のインダストリーレベルでの十分な内容解明が果たされなかったことも大きな要因であったとしなければならない。丹生遺跡群の全容を示すにあたっては，多数の発掘地点のうち，第１地区Ｂ地点を最初に行う。多数の大型石器と問題の資料を含む１－Ｂ地点の石器群こそ，丹生問題の帰趨を決する資料だからである。

１－Ｂ地点他から多数発掘・採集された礫素材の大型石器は，発掘所見からは所属年代が明確でなかったが，これらの帰属が発掘者の初期の目的意識どおり，日本列島最古の石器群である可能性を主張する道は，発掘当時にあっては，大陸側諸文化との型式学的比較に頼らざるをえなかった。このことは丹生問題自体が，当初から列島内の問題というより，少なくとも東北アジア的な視野の中で検討されねばならないことを意味していた。また，丹生論争以降の学界の大きな状況変化として，座散乱木遺跡の発見によって，前期岩宿(旧石器)時代存否論争に決着がついたということがあ

る。すなわち，日本における前期岩宿(旧石器)文化の真の姿が明らかになり，国内資料との現実的な対比が可能になった訳である。丹生遺跡はその所属年代を示す地層中において，原位置での石器の十分な検出に到らなかったという決定的な弱点があるにしても，こうした1980年代以降の学界の蓄積の中から再検討をすることが今日初めて可能になったという新しい現実が生じた訳である。

このような，日本における過去30年以上の研究史の中で起こった大きな変化は，ひとり国内の問題にとどまっているとは考えられない。たとえば，モービウスの“チョッパー・チョッピングトゥール文化”というとらえ方も，再考を要するところが多分にある。こうした観点からの検討が第2の目的である。このために第2部共同研究篇に示されるような地域区分とそれぞれの地域での専門家の参加をえて，共同研究の形で問題に接近を試みた。共同研究の目的や方法・研究の枠組み，執筆陣容等については第2部を参照されたい。

（鈴　木）

第2節　丹生遺跡群の調査と丹生論争

—経過と現在—

丹生遺跡群の調査とその後の論争の発端は昭和37年(1962) 2月のことであった。当時，大分在住の富木隆(大分大学助教授)・中村俊一(共同通信社大分支局)の両氏は，大分県坂ノ市町大字丹生字辻，後に第1地区A地点と命名されたいわゆる丹生台地上でかねてから採集されていた特異な石器の重要性に気付き，学界各方面に通報した。[1)]

発見の報に対する学界の反応は早かった。山内清男氏の要請をうけて，佐藤達夫・小林達雄氏らは，3月に現地調査を実施し，いち早く予報[2)]を公けにした。また，㈶古代学協会では，3月現地に予備調査団を派遣し，課題に対処しようとしていた。同年4月に開催された第28回日本考古学協会総会では，金関丈夫・山内清男・佐藤達夫3氏連名の発表[3)]とともに角田文衞氏による研究発表[4)]がなされる一方，現地発掘のための特別委員会の設置案が，山内清男氏によって提案されたりもした。

㈶古代学協会では，いちはやく《日本旧石器文化研究委員会》を組織し，昭和37年秋～昭和42年夏(1962～1967)にかけて，計6次にわたる調査を開始した。[5)]

こうして，丹生遺跡は発見の当初から先陣争いの様相を呈し，波乱含みの状況の中で動き出していた。

丹生遺跡の重要性が各方面から唱えられ，地元研究者も中央の研究者も丹生台地での石器群の発見の報に一喜一憂していた昭和30年代後半のこの時期は，学史的にもそれなりの背景があった。岩宿の発見から10数年が経過し，日本全土に岩宿(旧石器)文化の存在が確認され，構成の大要があらかた捉えられつつあった頃で，これまでの研究の推進役を果たしてきたパイオニア・ワーカー達は次なる目標を意識し，それに挑みかかろうとしていた。

岩宿発見の石器群を典型とする後期岩宿(旧石器)時代以前の文化，すなわちいわゆる前期旧石器文化の存在を予測する考え方は，丹生遺跡発見以前から現れていたし，その後の前期岩宿(旧石器)研究を主導された芹沢長介氏は，丹生遺跡の調査期間に併行して早水台遺跡の調査に着手し，これ

についで星野遺跡の調査に手をそめ始めていた。このように，この後長く続く“前期旧石器存否論争”という，当時の学界の焦眉の課題に対する凄絶な議論がこの時既に始まっていた。そして，丹生問題もその先覚的学界意識の一端に連なっていた。

日本考古学協会総会以降，丹生問題に関する論議はしばらくの間華々しかった[6]。しかし，それは永くは続かなかった。そして，昭和46年刊行の「第４紀研究」誌上における論議が，論争らしい論争の最後の頁を飾るものとなったのではないかと判断される[7]。学界で，論文の中で，あるいは研究者の口の端にのぼる噂話の中で，丹生問題が様々に語られる度毎に，その真の姿，その本来の年代的帰属，検証の方法の如何などよりも，それに係わったメインキャスト達の強烈な個性が織りなす人間ドラマに一層の興味が注がれ，揺れ動いていたかのようであった。

今日から見れば，つわものどもが夢のあとのような丹生論争の経過であった。当時，手入れの行き届いた耕地であった丹生台地が，今日，ただ開発の波を待って茫々の草叢の中に埋もれているごとくである。

丹生論争あるいは芹沢長介氏を中心に長く激しい応酬の交わされた，“前期旧石器存否論争”の経過は，加藤稔[8]・岡村道雄[9]両氏の論文等に詳しく適切な解説が加えられている。ここでは，丹生遺跡群の発見から論争に至るまでのやり取りを具体的に辿るのではなく，正式報告書に課せられた課題の主要部分を記し，発掘後30年を経過した今日，いままた何故“再報告”，“正式報告”なのかを明らかにしておきたい。

丹生文化（丹生遺跡群から発見される石器群中，特に前期岩宿〔旧石器〕時代に属するものではないかと考えられた一群を指標とする）については，早水台・星野遺跡例とは相違して，それが人工品であるか否かはさして問題とならなかった。問題の焦点は，丹生文化の石器群を構成する石器群を原位置で確認し，確かな出土層準を確認することができたかどうかという点であった。

しかし，調査者側は第10地区Ａ地点の石器の検出例などを挙げて次のように主張する[10]。以下に少し長い引用をしておく。

1）ここに掲げた礫を礫器として認められるのかどうか。

2）この礫が丹生遺跡第10地区Ａ地点（大分市坂ノ市字丹川小字惣本2561番ノ５）の崖面の砂礫層に固く包含されていた事実を認められるのかどうか。この礫を抜き取った跡の穴の写真は，丹生遺跡の第３次報告書の図版第10に掲げられているし，またこれをそのまま保存し，見学に来られた研究者達に実地に見ていただいた。

3）上の崖面を構成する砂礫層を第１次堆積と認められるかどうか。もし認められるとすれば，その根拠をお示し願いたい。

4）もしそれが第１次堆積であると認められた場合，それを志村砂礫層と認められるかどうか。認められぬとすれば，それをいかなる砂礫層と認められるか。

丹生遺跡群の調査は，開拓者的意義をもつものであり，もとより評者は，それらから得た結論を固執しようとは意図していない。しかし発掘調査によって得られた僅かではあるが，若干の動かし難い確実な事実は，あくまで尊重さるべきであって，何人と雖もこれを無視し

についで星野遺跡の調査に手をそめ始めていた。このように，この後長く続く“前期旧石器存否論争”という，当時の学界の焦眉の課題に対する凄絶な議論がこの時既に始まっていた。そして，丹生問題もその先覚的学界意識の一端に連なっていた。

日本考古学協会総会以降，丹生問題に関する論議はしばらくの間華々しかった[6]。しかし，それは永くは続かなかった。そして，昭和46年刊行の「第４紀研究」誌上における論議が，論争らしい論争の最後の頁を飾るものとなったのではないかと判断される[7]。学界で，論文の中で，あるいは研究者の口の端にのぼる噂話の中で，丹生問題が様々に語られる度毎に，その真の姿，その本来の年代的帰属，検証の方法の如何などよりも，それに係わったメインキャスト達の強烈な個性が織りなす人間ドラマに一層の興味が注がれ，揺れ動いていたかのようであった。

今日から見れば，つわものどもが夢のあとのような丹生論争の経過であった。当時，手入れの行き届いた耕地であった丹生台地が，今日，ただ開発の波を待って茫々の草叢の中に埋もれているごとくである。

丹生論争あるいは芹沢長介氏を中心に長く激しい応酬の交わされた，“前期旧石器存否論争”の経過は，加藤稔[8]・岡村道雄[9]両氏の論文等に詳しく適切な解説が加えられている。ここでは，丹生遺跡群の発見から論争に至るまでのやり取りを具体的に辿るのではなく，正式報告書に課せられた課題の主要部分を記し，発掘後30年を経過した今日，いままた何故“再報告”，“正式報告”なのかを明らかにしておきたい。

丹生文化（丹生遺跡群から発見される石器群中，特に前期岩宿〔旧石器〕時代に属するものではないかと考えられた一群を指標とする）については，早水台・星野遺跡例とは相違して，それが人工品であるか否かはさして問題とならなかった。問題の焦点は，丹生文化の石器群を構成する石器群を原位置で確認し，確かな出土層準を確認することができたかどうかという点であった。

しかし，調査者側は第10地区Ａ地点の石器の検出例などを挙げて次のように主張する[10]。以下に少し長い引用をしておく。

1）ここに掲げた礫を礫器として認められるのかどうか。

2）この礫が丹生遺跡第10地区Ａ地点（大分市坂ノ市字丹川小字惣本2561番ノ５）の崖面の砂礫層に固く包含されていた事実を認められるのかどうか。この礫を抜き取った跡の穴の写真は，丹生遺跡の第３次報告書の図版第10に掲げられているし，またこれをそのまま保存し，見学に来られた研究者達に実地に見ていただいた。

3）上の崖面を構成する砂礫層を第１次堆積と認められるかどうか。もし認められるとすれば，その根拠をお示し願いたい。

4）もしそれが第１次堆積であると認められた場合，それを志村砂礫層と認められるかどうか。認められぬとすれば，それをいかなる砂礫層と認められるか。

丹生遺跡群の調査は，開拓者的意義をもつものであり，もとより評者は，それらから得た結論を固執しようとは意図していない。しかし発掘調査によって得られた僅かではあるが，若干の動かし難い確実な事実は，あくまで尊重さるべきであって，何人と雖もこれを無視し

ではならない。学問に忠実であるならば，丹生遺跡の調査報告書類に記載されている僅かではあっても動かし難い事実を，無視するわけには行かないであろう。もしそれを認めぬならば，認め難い理由を明示すべきである。他の遺跡にみられた不確実な所見によってではなく，あくまで第10地区A地点の礫器それ自体，地層それ自体の観察を論拠として批判すべきである。こうした適切な批判に対して評者は白紙をもって臨み，以前に出した結論にいささかも膠泥しようとは思っていない。

丹生遺跡に関しては，第3地区B地点で得られた事実なども，今後は真剣に検討さるべきである。

上記の引用文中の地点の他に同様の主張が，第1地区B地点，第9地区B地点等の出土事例についてもなされている。そこにおける原報告者側の主張が理に叶ったものであるにせよ，第10地区A地点の発掘調査では，事実の追認に失敗していること，第1地区B地点の検出例がまことにわずかであるうえに，報告書にも記されている通りの未攪乱土層であっても，その包含層が1次堆積であるかどうか，上部からの食い込みではありえないかどうかといった疑念には十分にこたえられていない。論理上の可能性の問題としてではなく，万人を納得させるに足る資料の確保に至らなかったとしなければなるまい。このことが，丹生文化の帰属を縄文早期との関連で考えようとする例にみられるような，根強い反対意見となってくる最大の要因であろう。

ところで，上に引いた報告者側の主張への再反論は実は不可能に近い。むしろ，これは調査者側がなすべき問題であって，第三者に投げつける問題ではないと見ることもできる。すなわち，再報告者に課せられた課題の第1はこの点の解決である。しかし，考古学的にも，その後現地調査を実施していない以上，本書でもこの点に正面から答えることができない。ここでなしうるのは，わずかといえども原位置で出土したといわれる石器資料の再検討である。石器と言われるものは果たして人工品かどうか，そうであれば今日からみてどのような性格を有するものと判断されるべきかである。この点はⅢ章第3節において再説する。

問題点の第2は資料提示の方法である。先にも記したように，丹生論争はその当初の華々しさに比較して，そして早水台・星野等を介して激しい応酬のあった“前期旧石器存否論争”と較べても意外に短く，主張と反論の1回性の交替にすぎず，実りある実質的な議論に乏しかった。それは資料提示にいま一つ不十分なところがあり，出土層位・検出状況に問題があるとするならば，その次の段階すなわち石器群構成全体にかかわる組成・分布・製作方法等様々な観点からの，インダストリーレベルでの第三者的検討ができないことによると筆者には判断される。前期岩宿文化の追求という丹生問題の学史的性格に起因すると思われるが，調査者達の注意はいきおい大形のいわゆる礫器に集中し，出土の全資料を出土状態のままに客観的に呈示するという点に大いに欠けるところがあったと，再報告者としては反省しなければならないと考えている。あたり前のことがあたりまえに報告されていれば，論争はもう少し実りあるものとなりえたであろう。本研究報告の前半部によってこの点に応えたい。

第3点は，問題の捉え方・視点の問題である。丹生論争の中では，丹生との対比という場合，カ

フ・オルドヴァイ・パジータン・ソーアンと，当時としては止むを得なかったとしても，礫器に注目するあまり，彼我の間に横たわる地理空間を意に介さない対比がしばしば行われた。これは岡村道雄氏が正しく指摘するとおり[11]，日本最古の石器群は“チョッパー・チョッピングトゥール”の文化であるはずだという，モービウス的あるいは1940年代的観念が大きく影を落としていた。

昭和55年(1980)の座散乱木遺跡の発見以来，前期岩宿文化の存在は，議論の余地のないものとなったが，今のところその上限年代とされる2～30万年このかた，打・割器あるいは大型両面加工石器を典型とする，いわゆる礫器あるいは大型石核石器主体の文化は見られないのであり，終始小型剝片石器が主体を占めている。

こうした新しい認識に基づいて，観点の転換を求められており，日本のみならず隣接地域の当該期の文化も再考してみる必要がある。これが本研究報告の後半部分，共同研究“東北アジアの始原文化と丹生石器群－いわゆる礫器をめぐって－”の研究である。

以上が，発掘後30年の今，ここでなしうること，なすべきことの最低限の要件だと考えている。これによって，丹生石器群の帰属があらためて第三者的な検討の対象となり，いささかなりとも岩宿時代研究に寄与するところとなれば望外の幸せである。

（鈴　木）

註

1) 富木隆・中村俊一「旧石器前期の文化――付，丹生台地の文化」(「大分市の文化財」第3集所収，大分，昭和37年)。
2) 佐藤達夫・小林達雄・坂口豊「大分県丹生出土の前期旧石器(予報)」(「考古学雑誌」第47巻第4号所収，昭和37年)。
3) 金関丈夫・山内清男・佐藤達夫「大分県丹生遺跡の旧石器(「日本考古学協会第28回総会研究発表要旨」所収，東京，昭和37年)」。
4) 角田文衛「大分県丹生台地発見の石器類」(同前)。
5) a)角田文衛「大分県丹生遺跡－予察概報－」(「古代文化」第8巻第4号所収，京都，昭和37年)；b)大西郁夫「大分県丹生台地に於ける旧石器の出土層について」(同前)；c)『丹生1・2次概報』(昭和39年)；d)『丹生3次概報』(昭和40年)；e)『丹生4次概報』(昭和41年)；f)『丹生　綜括篇』(昭和43年)。
6) a)芹沢長介「1966年の考古学会の動向(1)旧石器時代」(「考古学ジャーナル」第7号所収，東京，昭和42年)；b)角田文衛・三上貞二「いわゆる“丹生批判”の問題点」(「考古学ジャーナル」第11号所収，東京，昭和42年)；c)杉原荘介「“SUGIHARA'S HYPOTHESIS”を破ってほしい」(「考古学ジャーナル」第8号所収，東京，昭和42年)；d)斎藤忠「日本考古学現下の課題」(「歴史教育」第11巻第3号所収，東京，昭和38年)；e)渡辺直経他「日本旧石器研究の課題」(『シンポジュウム日本旧石器時代の考古学』所収，東京，学生社，昭和52年)。
7) a)賀川光夫「西日本における礫器の問題」(「第4紀研究」第10巻第4号所収，東京，昭和46年)；b)角田文衛「賀川論文に対する論評」(同前)。
8) 加藤稔「日本旧石器文化存否論」(『学説論争日本の考古学』第2巻所収，東京，昭和63年)。
9) 岡村道雄「日本の前期旧石器存否論争について」(『考古学論叢』Ⅱ所収，仙台，平成元年)。
10) 註7)に同じ。

第3節　“礫器”という用語について

丹生遺跡群や前期岩宿(旧石器)時代の石器群を取り扱う場合，しばしばこの“礫器”という言葉につき当たる。ヨーロッパの概説書中とりわけ人類最古の石器の説明に散見される pebble-tool からの翻訳借用であろう[1)]。ごく一般的なイメージは，河原石を用いたチョッパーのような大形の利器ということで通用する便利な言葉である。一般的語義という点からすれば，礫素材の石器全般を指しうるから，槌石(ハンマー・ストーン)も敲石も含みうるはずであるが，慣用的にはこれを含まないのが通例である。また，剝片石器・石核石器というような相対区分における石核石器という言葉は，礫器の意味も含んでいる。それでは，礫器の中核を成すものと暗黙のうちに諒解されているチョッパー・チョッピングトゥールの内に，分割礫や大型厚手剝片を素材とするものを含まないかというと，そうは言い切れない。また一方で，近年，チョッパーか石核かという議論も盛んである[2)]。

このように，これが考古学上の用語として適当でないことは角田文衛氏による指摘のあることでもあり[3)]，また，具体的な石器群の記述にあって整理の必要性が痛感された。したがってまず，本書で用いる基本的な用語を検討しておきたい。

丹生遺跡1－B地点の石器群を例にとって考えてみると，これまで一般的に礫器と呼びならわされたものの中には，打器(チョッパー，斜刃割器)，割器(チョッピングトゥール，山形刃割器)，斧状石器が含まれる一方，打・割器類とされたものの中に相当量の石核を含むことも明らかになってきた。礫器すなわち，打・割器というかたちでは，石器群の記載そのものをなしえない。このため第1部発掘報告篇では，礫器の用語は用いないことにする。この辺を，1－B地点の石器群に対して実際に行った分類を考慮しながら，以下のように整理し直してみた。

- A)石器
  - 大型石器
    - 斧状石器
    - 打・割器／石核
    - 槌　　石
  - 小型石器
    - ナイフ形石器
    - (彫器)
    - 削器・加工痕ある剝片・使用痕ある剝片
    - 石鏃
- B)石核
- C)剝片
- D)原石

石器群を大型・小型石器の2群に対比的に分つことを基本とする。heavy duty tool と light duty tool[4)] の援用であって，大型重厚石器・小型軽量石器とでも呼べば，一層語感的には実態に近いも

のがあろうか。大型石器の原則的性格には，大きくて重いことが重要である。同様に小型石器は小さくて軽いものが相当する。しかし，大型の剝片石器が，小型の礫核利用の石器より大きくて重いことはしばしばある。このように石器の素材が剝片であるか否かは，この区分にとって必ずしも重要ではない。また大型・小型の区分基準をどこに置くかに問題はあるが，両者それぞれが含む器種はよいまとまりを示していると見ることができる。しかし，一般論としては大型・小型の両範疇に同じ器種名を含むこともありうる。削器などは現実にこうしたことが起きやすいのではなかろうか。

区分はあくまで技術・形態型式学的な性格によって設けられる，考古学的な器種レベルの区分である。素材の問題ではなく，2次加工を経て，道具製作過程の終着地点でのあり方を問題とする。

念の為に申し添えておくと，1－B地点の大型石器のうち，打・割器／石核とあるのは，両者の区分の厳密な基準を見出しえない暫定的な処理である。打・割器と石核の区分法が成立するまでの暫定的処置として，この両者の石器を含み込む併称法として用いておく。打・割器であるのか石核であるのか，その判別法次第では丹生石器群に対する評価が全く別物となってしまうからである。

なお，チョッパー・チョッピングトゥールは，片刃・両刃チョッパーという呼び方もあるが，両者がしばしば不即不離の関係にあることと，日本語の用語を選択するという意味で，チョッパーを打器，チョッピングトゥールを割器，チョッパー・チョッピングトゥールと併列表記する場合は，打・割器と表現するものとしておく。

なお，第2部共同研究篇では，上記の用語上の問題も含め，一切の統一を行っていないことをお断りしておく。自由な議論をしていただくためである。

（鈴　木）

註

1) a)Oakley, K. P., *Man The Tool-Maker* (London, 1949); b)*Frameworks for Dating Fossil Man* (London, 1964).

2) 鈴木忠司「石器の起源」(「季刊考古学」第35号所収，東京，平成3年)。

3) 角田文衛「賀川論文に対する論評」(「第4紀研究」第10巻第4号所収，東京，昭和46年)，225頁。
「いかに器面に原礫の表皮を遺しているとは言え，石器の名称は，用途，得むを得なければ形態によるべきものと考える。礫，もしくは半截の礫を原材に用い，多分に原礫面を遺したと言った技法上の特色は，いかにも重視さるべきであるにせよ，それは用途に基づく命名法の優位に立つものとは思わない。石器は，用途に基づいて，細かく分類する時は形態をも考慮して命名されると言う Terminologie は尊重さるべきであり，礫器についてのみ例外を認める必要も理由も存しないと考えている。まして『礫器文化』の名称に至っては，考慮のほかである。」

4) Leakey, M. D., *Olduvai Gorge*, Vol. 3 (Cambridge, 1971).

Ⅱ章　丹生遺跡群の石器群

第１節　丹生遺跡群の概観と検討対象

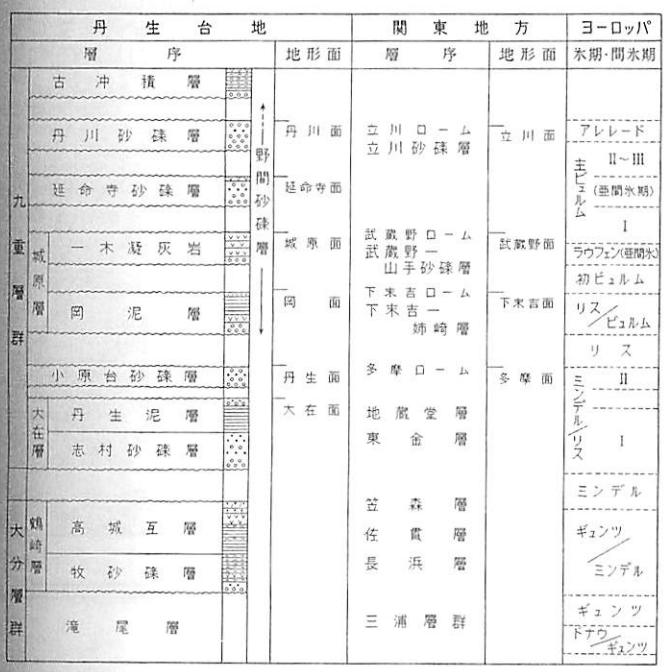
１．遺跡群の位置

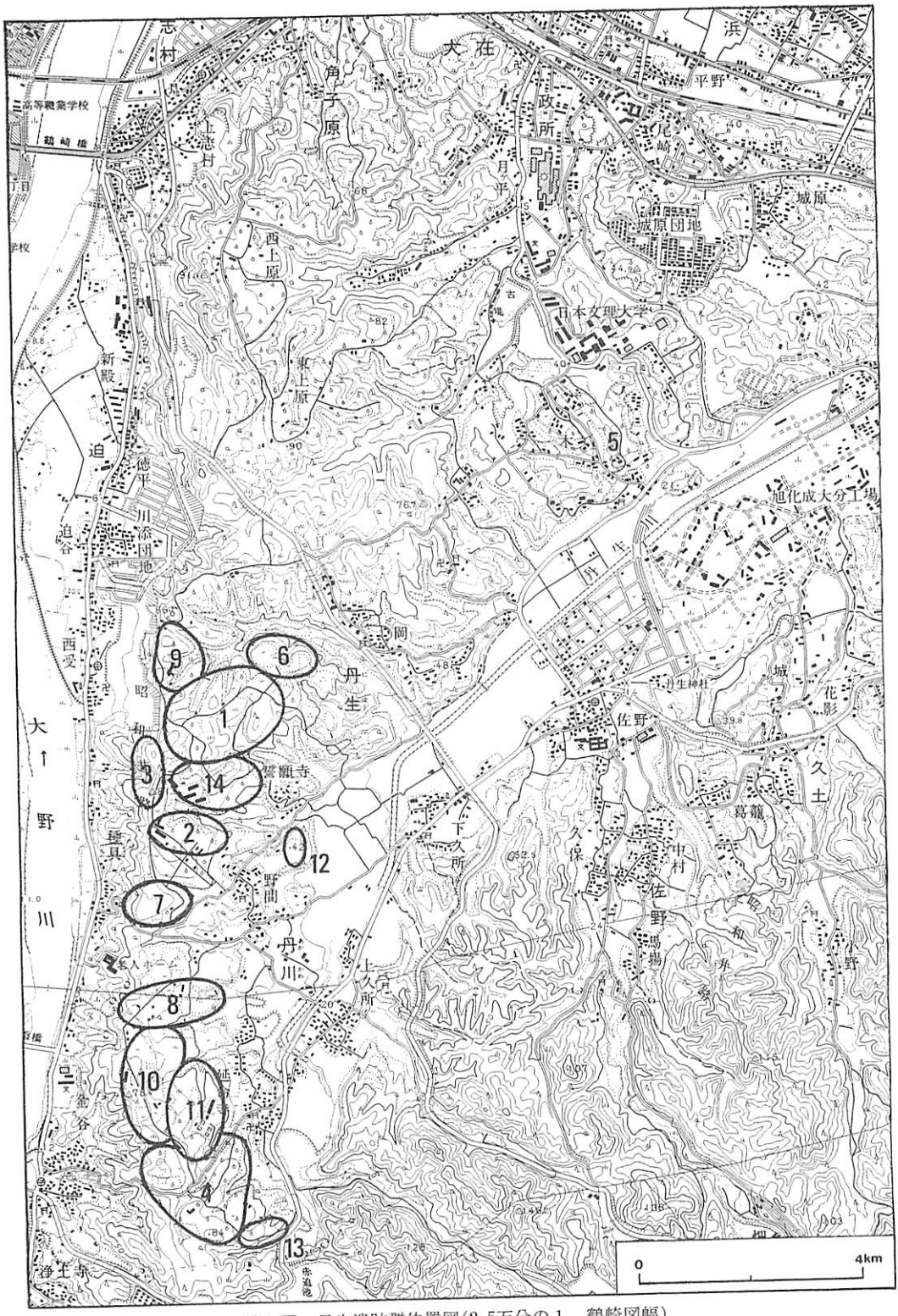
丹生遺跡群は大分市東方約８㎞に所在する，丹生台地上に主として分布する遺跡群を指す。丹生台地は大野川下流の東岸にひろがる台地で，西を大野川沿いの急崖に，南東を丹生川の沖積平野に，北を別府湾沿いの海岸平野によって画された，西辺約５㎞，北辺約４㎞の長さを有する直角三角形状に拡がる丘陵性の台地である(第１図，図版Ⅲ上段)。

丹生台地は，かつて地籍上，その北部が北海部郡大在村に，西縁が鶴崎市種具に，そして主要部が北海部郡坂ノ市町大字丹生と丹川に，また丹川台地は西縁部のみが鶴崎市種具に，その他は全て坂ノ市町大字丹川にそれぞれ所属していたが，昭和38年３月に市町村合併が行われ，現在はことごとく大分市に編入されている。

丹生台地上には岩宿時代の遺跡の他，古墳や弥生時代の遺跡など多数の重要な遺跡が知られている。本来ならばこれら全てを丹生遺跡群と呼ぶべきであるが，ここでは，いわゆる丹生論争に係わって，(財)古代学協会によって調査された遺跡地点を指すこととする。調査は，台地全体にわたって実施されたものではなく，踏査の結果，表採資料が多く得られた台地の南半を主とした対象地としている。ここには，北端の第５地区から南端の第13地区まで合計14の遺跡地区設定がなされている。このうち，第５地区は採集品による地区設定がなされただけで，発掘調査に至っていないので，実質的には，南北３㎞の間に第13地区48地点がここで言う丹生遺跡群を構成していることになる。また台地の東北端，王ノ瀬からは，関連資料の採集が報ぜられているが[1]，とりあえず，これはこの丹生遺跡群の中に含めないでおく。

第２表　丹生台地の第４系の対比表
柱状断面図は標準層序を模式化したもの



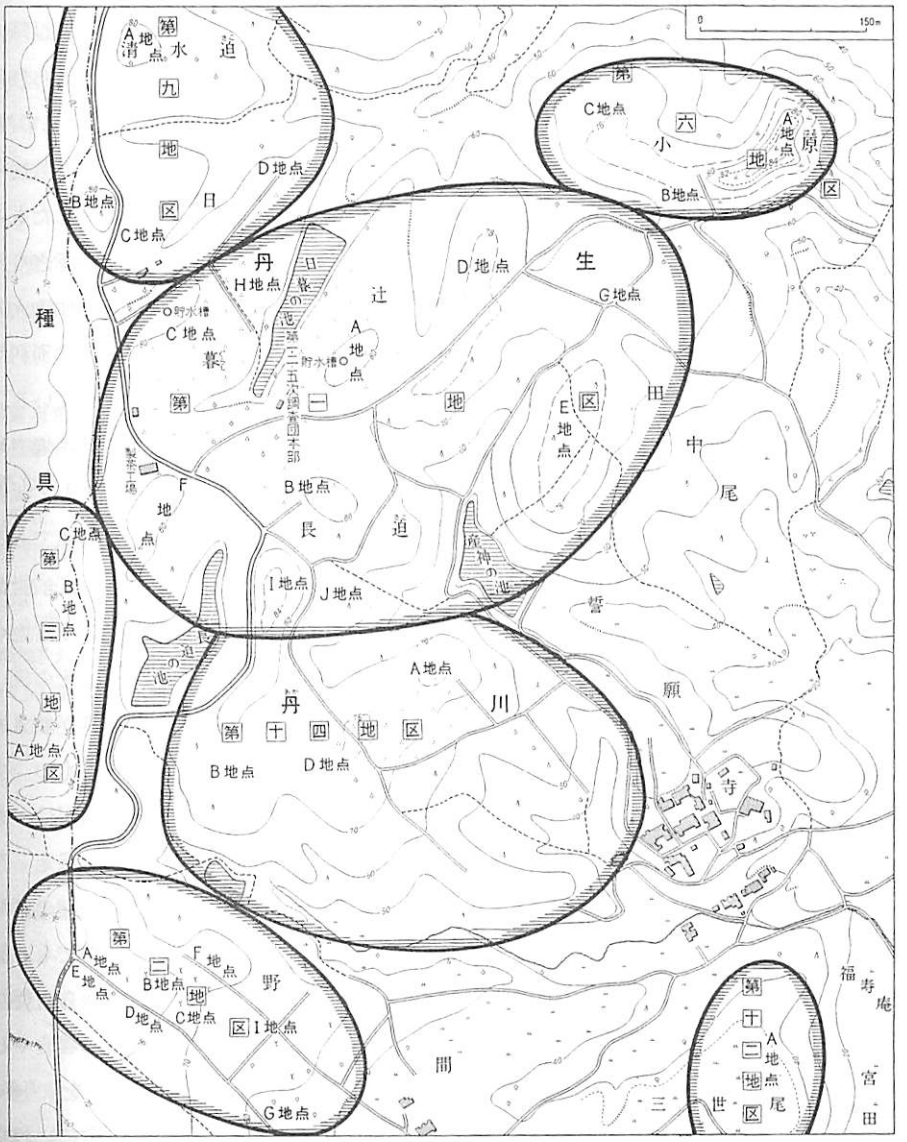


第1図　丹生遺跡群位置図(2.5万分の1　鶴崎図幅)
1～14は地区名

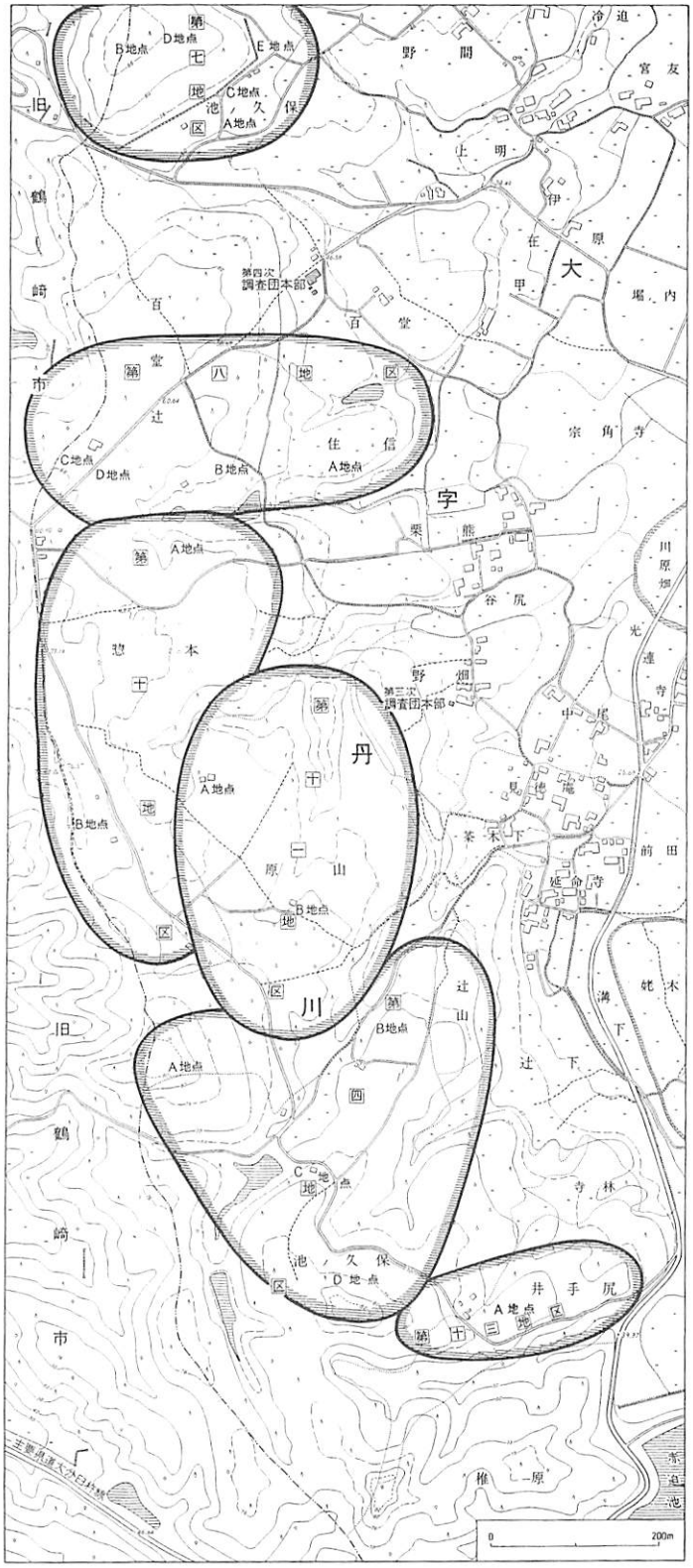
2．報告対象の限定

なお，丹生台地は地質学的にもきわめて重要な地域であり，考古学的調査と併行して綿密な地質学的調査が実施されている。ここでは丹生台地の第4系の対比表(第2表)だけを掲げておくが，詳しくは『綜括篇』を参照されたい。[2)]

さて，丹生遺跡群では48ケ所の地点で，規模の大小は別にして，発掘が行われた訳であるが，本書では特定の地点に限って再報告をする。丹生遺跡群は問題の前期岩宿(旧石器)時代と想定される段階から平安時代にまたがる遺物が検出されている。しかし，調査の主旨自体が，岩宿時代[3)]に主眼が置かれていたわけであるから，ここでもこの主旨を踏まえて，縄文時代以降の遺物を基本的に対



第2図　丹生遺跡群内地区・地点位置図 1)
第1・2・3・6・9・12・14地区，原図は調査時のものを使用。


第七地区
B地点
D地点
E地点
C地点
A地点
池ノ久保
野間
冷迫
宮友
上明
伊在
原
大
字
丹
川
第四次調査団本部
第三次調査団本部
第八地区
第十地区
第十一地区
第十二地区
第十三地区
第十四地区
第十五地区
第十六地区
第十七地区
第十八地区
第十九地区
第二十地区
第二十一地区
第二十二地区
第二十三地区
第二十四地区
第二十五地区
第二十六地区
第二十七地区
第二十八地区
第二十九地区
第三十地区
第三十一地区
第三十二地区
第三十三地区
第三十四地区
第三十五地区
第三十六地区
第三十七地区
第三十八地区
第三十九地区
第四十地区
第四十一地区
第四十二地区
第四十三地区
第四十四地区
第四十五地区
第四十六地区
第四十七地区
第四十八地区
第四十九地区
第五十地区
第五十一地区
第五十二地区
第五十三地区
第五十四地区
第五十五地区
第五十六地区
第五十七地区
第五十八地区
第五十九地区
第六十地区
第六十一地区
第六十二地区
第六十三地区
第六十四地区
第六十五地区
第六十六地区
第六十七地区
第六十八地区
第六十九地区
第七十地区
第七十一地区
第七十二地区
第七十三地区
第七十四地区
第七十五地区
第七十六地区
第七十七地区
第七十八地区
第七十九地区
第八十地区
第八十一地区
第八十二地区
第八十三地区
第八十四地区
第八十五地区
第八十六地区
第八十七地区
第八十八地区
第八十九地区
第九十地区
第九十一地区
第九十二地区
第九十三地区
第九十四地区
第九十五地区
第九十六地区
第九十七地区
第九十八地区
第九十九地区
第一百地区
第一百一地区
第一百二地区
第一百三地区
第一百四地区
第一百五地区
第一百六地区
第一百七地区
第一百八地区
第一百九地区
第一百十地区
第一百十一地区
第一百十二地区
第一百十三地区
第一百十四地区
第一百十五地区
第一百十六地区
第一百十七地区
第一百十八地区
第一百十九地区
第一百二十地区
第一百二十一地区
第一百二十二地区
第一百二十三地区
第一百二十四地区
第一百二十五地区
第一百二十六地区
第一百二十七地区
第一百二十八地区
第一百二十九地区
第一百三十地区
第一百三十一地区
第一百三十二地区
第一百三十三地区
第一百三十四地区
第一百三十五地区
第一百三十六地区
第一百三十七地区
第一百三十八地区
第一百三十九地区
第一百四十地区
第一百四十一地区
第一百四十二地区
第一百四十三地区
第一百四十四地区
第一百四十五地区
第一百四十六地区
第一百四十七地区
第一百四十八地区
第一百四十九地区
第一百五十地区
第一百五十一地区
第一百五十二地区
第一百五十三地区
第一百五十四地区
第一百五十五地区
第一百五十六地区
第一百五十七地区
第一百五十八地区
第一百五十九地区
第一百六十地区
第一百六十一地区
第一百六十二地区
第一百六十三地区
第一百六十四地区
第一百六十五地区
第一百六十六地区
第一百六十七地区
第一百六十八地区
第一百六十九地区
第一百七十地区
第一百七十一地区
第一百七十二地区
第一百七十三地区
第一百七十四地区
第一百七十五地区
第一百七十六地区
第一百七十七地区
第一百七十八地区
第一百七十九地区
第一百八十地区
第一百八十一地区
第一百八十二地区
第一百八十三地区
第一百八十四地区
第一百八十五地区
第一百八十六地区
第一百八十七地区
第一百八十八地区
第一百八十九地区
第一百九十地区
第一百九十一地区
第一百九十二地区
第一百九十三地区
第一百九十四地区
第一百九十五地区
第一百九十六地区
第一百九十七地区
第一百九十八地区
第一百九十九地区
第二百地区
第二百一地区
第二百二地区
第二百三地区
第二百四地区
第二百五地区
第二百六地区
第二百七地区
第二百八地区
第二百九地区
第二百十地区
第二百十一地区
第二百十二地区
第二百十三地区
第二百十四地区
第二百十五地区
第二百十六地区
第二百十七地区
第二百十八地区
第二百十九地区
第二百二十地区
第二百二十一地区
第二百二十二地区
第二百二十三地区
第二百二十四地区
第二百二十五地区
第二百二十六地区
第二百二十七地区
第二百二十八地区
第二百二十九地区
第二百三十地区
第二百三十一地区
第二百三十二地区
第二百三十三地区
第二百三十四地区
第二百三十五地区
第二百三十六地区
第二百三十七地区
第二百三十八地区
第二百三十九地区
第二百四十地区
第二百四十一地区
第二百四十二地区
第二百四十三地区
第二百四十四地区
第二百四十五地区
第二百四十六地区
第二百四十七地区
第二百四十八地区
第二百四十九地区
第二百五十地区
第二百五十一地区
第二百五十二地区
第二百五十三地区
第二百五十四地区
第二百五十五地区
第二百五十六地区
第二百五十七地区
第二百五十八地区
第二百五十九地区
第二百六十地区
第二百六十一地区
第二百六十二地区
第二百六十三地区
第二百六十四地区
第二百六十五地区
第二百六十六地区
第二百六十七地区
第二百六十八地区
第二百六十九地区
第二百七十地区
第二百七十一地区
第二百七十二地区
第二百七十三地区
第二百七十四地区
第二百七十五地区
第二百七十六地区
第二百七十七地区
第二百七十八地区
第二百七十九地区
第二百八十地区
第二百八十一地区
第二百八十二地区
第二百八十三地区
第二百八十四地区
第二百八十五地区
第二百八十六地区
第二百八十七地区
第二百八十八地区
第二百八十九地区
第二百九十地区
第二百九十一地区
第二百九十二地区
第二百九十三地区
第二百九十四地区
第二百九十五地区
第二百九十六地区
第二百九十七地区
第二百九十八地区
第二百九十九地区
第三百地区
第三百一地区
第三百二地区
第三百三地区
第三百四地区
第三百五地区
第三百六地区
第三百七地区
第三百八地区
第三百九地区
第三百十地区
第三百十一地区
第三百十二地区
第三百十三地区
第三百十四地区
第三百十五地区
第三百十六地区
第三百十七地区
第三百十八地区
第三百十九地区
第三百二十地区
第三百二十一地区
第三百二十二地区
第三百二十三地区
第三百二十四地区
第三百二十五地区
第三百二十六地区
第三百二十七地区
第三百二十八地区
第三百二十九地区
第三百三十地区
第三百三十一地区
第三百三十二地区
第三百三十三地区
第三百三十四地区
第三百三十五地区
第三百三十六地区
第三百三十七地区
第三百三十八地区
第三百三十九地区
第三百四十地区
第三百四十一地区
第三百四十二地区
第三百四十三地区
第三百四十四地区
第三百四十五地区
第三百四十六地区
第三百四十七地区
第三百四十八地区
第三百四十九地区
第三百五十地区
第三百五十一地区
第三百五十二地区
第三百五十三地区
第三百五十四地区
第三百五十五地区
第三百五十六地区
第三百五十七地区
第三百五十八地区
第三百五十九地区
第三百六十地区
第三百六十一地区
第三百六十二地区
第三百六十三地区
第三百六十四地区
第三百六十五地区
第三百六十六地区
第三百六十七地区
第三百六十八地区
第三百六十九地区
第三百七十地区
第三百七十一地区
第三百七十二地区
第三百七十三地区
第三百七十四地区
第三百七十五地区
第三百七十六地区
第三百七十七地区
第三百七十八地区
第三百七十九地区
第三百八十地区
第三百八十一地区
第三百八十二地区
第三百八十三地区
第三百八十四地区
第三百八十五地区
第三百八十六地区
第三百八十七地区
第三百八十八地区
第三百八十九地区
第三百九十地区
第三百九十一地区
第三百九十二地区
第三百九十三地区
第三百九十四地区
第三百九十五地区
第三百九十六地区
第三百九十七地区
第三百九十八地区
第三百九十九地区
第四百地区
第四百一地区
第四百二地区
第四百三地区
第四百四地区
第四百五地区
第四百六地区
第四百七地区
第四百八地区
第四百九地区
第四百十地区
第四百十一地区
第四百十二地区
第四百十三地区
第四百十四地区
第四百十五地区
第四百十六地区
第四百十七地区
第四百十八地区
第四百十九地区
第四百二十地区
第四百二十一地区
第四百二十二地区
第四百二十三地区
第四百二十四地区
第四百二十五地区
第四百二十六地区
第四百二十七地区
第四百二十八地区
第四百二十九地区
第四百三十地区
第四百三十一地区
第四百三十二地区
第四百三十三地区
第四百三十四地区
第四百三十五地区
第四百三十六地区
第四百三十七地区
第四百三十八地区
第四百三十九地区
第四百四十地区
第四百四十一地区
第四百四十二地区
第四百四十三地区
第四百四十四地区
第四百四十五地区
第四百四十六地区
第四百四十七地区
第四百四十八地区
第四百四十九地区
第四百五十地区
第四百五十一地区
第四百五十二地区
第四百五十三地区
第四百五十四地区
第四百五十五地区
第四百五十六地区
第四百五十七地区
第四百五十八地区
第四百五十九地区
第四百六十地区
第四百六十一地区
第四百六十二地区
第四百六十三地区
第四百六十四地区
第四百六十五地区
第四百六十六地区
第四百六十七地区
第四百六十八地区
第四百六十九地区
第四百七十地区
第四百七十一地区
第四百七十二地区
第四百七十三地区
第四百七十四地区
第四百七十五地区
第四百七十六地区
第四百七十七地区
第四百七十八地区
第四百七十九地区
第四百八十地区
第四百八十一地区
第四百八十二地区
第四百八十三地区
第四百八十四地区
第四百八十五地区
第四百八十六地区
第四百八十七地区
第四百八十八地区
第四百八十九地区
第四百九十地区
第四百九十一地区
第四百九十二地区
第四百九十三地区
第四百九十四地区
第四百九十五地区
第四百九十六地区
第四百九十七地区
第四百九十八地区
第四百九十九地区
第五百地区
第五百一地区
第五百二地区
第五百三地区
第五百四地区
第五百五地区
第五百六地区
第五百七地区
第五百八地区
第五百九地区
第五百十地区
第五百十一地区
第五百十二地区
第五百十三地区
第五百十四地区
第五百十五地区
第五百十六地区
第五百十七地区
第五百十八地区
第五百十九地区
第五百二十地区
第五百二十一地区
第五百二十二地区
第五百二十三地区
第五百二十四地区
第五百二十五地区
第五百二十六地区
第五百二十七地区
第五百二十八地区
第五百二十九地区
第五百三十地区
第五百三十一地区
第五百三十二地区
第五百三十三地区
第五百三十四地区
第五百三十五地区
第五百三十六地区
第五百三十七地区
第五百三十八地区
第五百三十九地区
第五百四十地区
第五百四十一地区
第五百四十二地区
第五百四十三地区
第五百四十四地区
第五百四十五地区
第五百四十六地区
第五百四十七地区
第五百四十八地区
第五百四十九地区
第五百五十地区
第五百五十一地区
第五百五十二地区
第五百五十三地区
第五百五十四地区
第五百五十五地区
第五百五十六地区
第五百五十七地区
第五百五十八地区
第五百五十九地区
第五百六十地区
第五百六十一地区
第五百六十二地区
第五百六十三地区
第五百六十四地区
第五百六十五地区
第五百六十六地区
第五百六十七地区
第五百六十八地区
第五百六十九地区
第五百七十地区
第五百七十一地区
第五百七十二地区
第五百七十三地区
第五百七十四地区
第五百七十五地区
第五百七十六地区
第五百七十七地区
第五百七十八地区
第五百七十九地区
第五百八十地区
第五百八十一地区
第五百八十二地区
第五百八十三地区
第五百八十四地区
第五百八十五地区
第五百八十六地区
第五百八十七地区
第五百八十八地区
第五百八十九地区
第五百九十地区
第五百九十一地区
第五百九十二地区
第五百九十三地区
第五百九十四地区
第五百九十五地区
第五百九十六地区
第五百九十七地区
第五百九十八地区
第五百九十九地区
第六百地区
第六百一地区
第六百二地区
第六百三地区
第六百四地区
第六百五地区
第六百六地区
第六百七地区
第六百八地区
第六百九地区
第六百十地区
第六百十一地区
第六百十二地区
第六百十三地区
第六百十四地区
第六百十五地区
第六百十六地区
第六百十七地区
第六百十八地区
第六百十九地区
第六百二十地区
第六百二十一地区
第六百二十二地区
第六百二十三地区
第六百二十四地区
第六百二十五地区
第六百二十六地区
第六百二十七地区
第六百二十八地区
第六百二十九地区
第六百三十地区
第六百三十一地区
第六百三十二地区
第六百三十三地区
第六百三十四地区
第六百三十五地区
第六百三十六地区
第六百三十七地区
第六百三十八地区
第六百三十九地区
第六百四十地区
第六百四十一地区
第六百四十二地区
第六百四十三地区
第六百四十四地区
第六百四十五地区
第六百四十六地区
第六百四十七地区
第六百四十八地区
第六百四十九地区
第六百五十地区
第六百五十一地区
第六百五十二地区
第六百五十三地区
第六百五十四地区
第六百五十五地区
第六百五十六地区
第六百五十七地区
第六百五十八地区
第六百五十九地区
第六百六十地区
第六百六十一地区
第六百六十二地区
第六百六十三地区
第六百六十四地区
第六百六十五地区
第六百六十六地区
第六百六十七地区
第六百六十八地区
第六百六十九地区
第六百七十地区
第六百七十一地区
第六百七十二地区
第六百七十三地区
第六百七十四地区
第六百七十五地区
第六百七十六地区
第六百七十七地区
第六百七十八地区
第六百七十九地区
第六百八十地区
第六百八十一地区
第六百八十二地区
第六百八十三地区
第六百八十四地区
第六百八十五地区
第六百八十六地区
第六百八十七地区
第六百八十八地区
第六百八十九地区
第六百九十地区
第六百九十一地区
第六百九十二地区
第六百九十三地区
第六百九十四地区
第六百九十五地区
第六百九十六地区
第六百九十七地区
第六百九十八地区
第六百九十九地区
第七百地区
第七百一地区
第七百二地区
第七百三地区
第七百四地区
第七百五地区
第七百六地区
第七百七地区
第七百八地区
第七百九地区
第七百十地区
第七百十一地区
第七百十二地区
第七百十三地区
第七百十四地区
第七百十五地区
第七百十六地区
第七百十七地区
第七百十八地区
第七百十九地区
第七百二十地区
第七百二十一地区
第七百二十二地区
第七百二十三地区
第七百二十四地区
第七百二十五地区
第七百二十六地区
第七百二十七地区
第七百二十八地区
第七百二十九地区
第七百三十地区
第七百三十一地区
第七百三十二地区
第七百三十三地区
第七百三十四地区
第七百三十五地区
第七百三十六地区
第七百三十七地区
第七百三十八地区
第七百三十九地区
第七百四十地区
第七百四十一地区
第七百四十二地区
第七百四十三地区
第七百四十四地区
第七百四十五地区
第七百四十六地区
第七百四十七地区
第七百四十八地区
第七百四十九地区
第七百五十地区
第七百五十一地区
第七百五十二地区
第七百五十三地区
第七百五十四地区
第七百五十五地区
第七百五十六地区
第七百五十七地区
第七百五十八地区
第七百五十九地区
第七百六十地区
第七百六十一地区
第七百六十二地区
第七百六十三地区
第七百六十四地区
第七百六十五地区
第七百六十六地区
第七百六十七地区
第七百六十八地区
第七百六十九地区
第七百七十地区
第七百七十一地区
第七百七十二地区
第七百七十三地区
第七百七十四地区
第七百七十五地区
第七百七十六地区
第七百七十七地区
第七百七十八地区
第七百七十九地区
第七百八十地区
第七百八十一地区
第七百八十二地区
第七百八十三地区
第七百八十四地区
第七百八十五地区
第七百八十六地区
第七百八十七地区
第七百八十八地区
第七百八十九地区
第七百九十地区
第七百九十一地区
第七百九十二地区
第七百九十三地区
第七百九十四地区
第七百九十五地区
第七百九十六地区
第七百九十七地区
第七百九十八地区
第七百九十九地区
第八百地区
第八百一地区
第八百二地区
第八百三地区
第八百四地区
第八百五地区
第八百六地区
第八百七地区
第八百八地区
第八百九地区
第八百十地区
第八百十一地区
第八百十二地区
第八百十三地区
第八百十四地区
第八百十五地区
第八百十六地区
第八百十七地区
第八百十八地区
第八百十九地区
第八百二十地区
第八百二十一地区
第八百二十二地区
第八百二十三地区
第八百二十四地区
第八百二十五地区
第八百二十六地区
第八百二十七地区
第八百二十八地区
第八百二十九地区
第八百三十地区
第八百三十一地区
第八百三十二地区
第八百三十三地区
第八百三十四地区
第八百三十五地区
第八百三十六地区
第八百三十七地区
第八百三十八地区
第八百三十九地区
第八百四十地区
第八百四十一地区
第八百四十二地区
第八百四十三地区
第八百四十四地区
第八百四十五地区
第八百四十六地区
第八百四十七地区
第八百四十八地区
第八百四十九地区
第八百五十地区
第八百五十一地区
第八百五十二地区
第八百五十三地区
第八百五十四地区
第八百五十五地区
第八百五十六地区
第八百五十七地区
第八百五十八地区
第八百五十九地区
第八百六十地区
第八百六十一地区
第八百六十二地区
第八百六十三地区
第八百六十四地区
第八百六十五地区
第八百六十六地区
第八百六十七地区
第八百六十八地区
第八百六十九地区
第八百七十地区
第八百七十一地区
第八百七十二地区
第八百七十三地区
第八百七十四地区
第八百七十五地区
第八百七十六地区
第八百七十七地区
第八百七十八地区
第八百七十九地区
第八百八十地区
第八百八十一地区
第八百八十二地区
第八百八十三地区
第八百八十四地区
第八百八十五地区
第八百八十六地区
第八百八十七地区
第八百八十八地区
第八百八十九地区
第八百九十地区
第八百九十一地区
第八百九十二地区
第八百九十三地区
第八百九十四地区
第八百九十五地区
第八百九十六地区
第八百九十七地区
第八百九十八地区
第八百九十九地区
第九百地区
第九百一地区
第九百二地区
第九百三地区
第九百四地区
第九百五地区
第九百六地区
第九百七地区
第九百八地区
第九百九地区
第九百十地区
第九百十一地区
第九百十二地区
第九百十三地区
第九百十四地区
第九百十五地区
第九百十六地区
第九百十七地区
第九百十八地区
第九百十九地区
第九百二十地区
第九百二十一地区
第九百二十二地区
第九百二十三地区
第九百二十四地区
第九百二十五地区
第九百二十六地区
第九百二十七地区
第九百二十八地区
第九百二十九地区
第九百三十地区
第九百三十一地区
第九百三十二地区
第九百三十三地区
第九百三十四地区
第九百三十五地区
第九百三十六地区
第九百三十七地区
第九百三十八地区
第九百三十九地区
第九百四十地区
第九百四十一地区
第九百四十二地区
第九百四十三地区
第九百四十四地区
第九百四十五地区
第九百四十六地区
第九百四十七地区
第九百四十八地区
第九百四十九地区
第九百五十地区
第九百五十一地区
第九百五十二地区
第九百五十三地区
第九百五十四地区
第九百五十五地区
第九百五十六地区
第九百五十七地区
第九百五十八地区
第九百五十九地区
第九百六十地区
第九百六十一地区
第九百六十二地区
第九百六十三地区
第九百六十四地区
第九百六十五地区
第九百六十六地区
第九百六十七地区
第九百六十八地区
第九百六十九地区
第九百七十地区
第九百七十一地区
第九百七十二地区
第九百七十三地区
第九百七十四地区
第九百七十五地区
第九百七十六地区
第九百七十七地区
第九百七十八地区
第九百七十九地区
第九百八十地区
第九百八十一地区
第九百八十二地区
第九百八十三地区
第九百八十四地区
第九百八十五地区
第九百八十六地区
第九百八十七地区
第九百八十八地区
第九百八十九地区
第九百九十地区
第九百九十一地区
第九百九十二地区
第九百九十三地区
第九百九十四地区
第九百九十五地区
第九百九十六地区
第九百九十七地区
第九百九十八地区
第九百九十九地区
第一千地区
第一千一地区
第一千二地区
第一千三地区
第一千四地区
第一千五地区
第一千六地区
第一千七地区
第一千八地区
第一千九地区
第一千十地区
第一千十一地区
第一千十二地区
第一千十三地区
第一千十四地区
第一千十五地区
第一千十六地区
第一千十七地区
第一千十八地区
第一千十九地区
第一千二十地区
第一千二十一地区
第一千二十二地区
第一千二十三地区
第一千二十四地区
第一千二十五地区
第一千二十六地区
第一千二十七地区
第一千二十八地区
第一千二十九地区
第一千三十地区
第一千三十一地区
第一千三十二地区
第一千三十三地区
第一千三十四地区
第一千三十五地区
第一千三十六地区
第一千三十七地区
第一千三十八地区
第一千三十九地区
第一千四十地区
第一千四十一地区
第一千四十二地区
第一千四十三地区
第一千四十四地区
第一千四十五地区
第一千四十六地区
第一千四十七地区
第一千四十八地区
第一千四十九地区
第一千五十地区
第一千五十一地区
第一千五十二地区
第一千五十三地区
第一千五十四地区
第一千五十五地区
第一千五十六地区
第一千五十七地区
第一千五十八地区
第一千五十九地区
第一千六十地区
第一千六十一地区
第一千六十二地区
第一千六十三地区
第一千六十四地区
第一千六十五地区
第一千六十六地区
第一千六十七地区
第一千六十八地区
第一千六十九地区
第一千七十地区
第一千七十一地区
第一千七十二地区
第一千七十三地区
第一千七十四地区
第一千七十五地区
第一千七十六地区
第一千七十七地区
第一千七十八地区
第一千七十九地区
第一千八十地区
第一千八十一地区
第一千八十二地区
第一千八十三地区
第一千八十四地区
第一千八十五地区
第一千八十六地区
第一千八十七地区
第一千八十八地区
第一千八十九地区
第一千九十地区
第一千九十一地区
第一千九十二地区
第一千九十三地区
第一千九十四地区
第一千九十五地区
第一千九十六地区
第一千九十七地区
第一千九十八地区
第一千九十九地区
第二千地区
第二千一地区
第二千二地区
第二千三地区
第二千四地区
第二千五地区
第二千六地区
第二千七地区
第二千八地区
第二千九地区
第二千十地区
第二千十一地区
第二千十二地区
第二千十三地区
第二千十四地区
第二千十五地区
第二千十六地区
第二千十七地区
第二千十八地区
第二千十九地区
第二千二十地区
第二千二十一地区
第二千二十二地区
第二千二十三地区
第二千二十四地区
第二千二十五地区
第二千二十六地区
第二千二十七地区
第二千二十八地区
第二千二十九地区
第二千三十地区
第二千三十一地区
第二千三十二地区
第二千三十三地区
第二千三十四地区
第二千三十五地区
第二千三十六地区
第二千三十七地区
第二千三十八地区
第二千三十九地区
第二千四十地区
第二千四十一地区
第二千四十二地区
第二千四十三地区
第二千四十四地区
第二千四十五地区
第二千四十六地区
第二千四十七地区
第二千四十八地区
第二千四十九地区
第二千五十地区
第二千五十一地区
第二千五十二地区
第二千五十三地区
第二千五十四地区
第二千五十五地区
第二千五十六地区
第二千五十七地区
第二千五十八地区
第二千五十九地区
第二千六十地区
第二千六十一地区
第二千六十二地区
第二千六十三地区
第二千六十四地区
第二千六十五地区
第二千六十六地区
第二千六十七地区
第二千六十八地区
第二千六十九地区
第二千七十地区
第二千七十一地区
第二千七十二地区
第二千七十三地区
第二千七十四地区
第二千七十五地区
第二千七十六地区
第二千七十七地区
第二千七十八地区
第二千七十九地区
第二千八十地区
第二千八十一地区
第二千八十二地区
第二千八十三地区
第二千八十四地区
第二千八十五地区
第二千八十六地区
第二千八十七地区
第二千八十八地区
第二千八十九地区
第二千九十地区
第二千九十一地区
第二千九十二地区
第二千九十三地区
第二千九十四地区
第二千九十五地区
第二千九十六地区
第二千九十七地区
第二千九十八地区
第二千九十九地区
第三千地区
第三千一地区
第三千二地区
第三千三地区
第三千四地区
第三千五地区
第三千六地区
第三千七地区
第三千八地区
第三千九地区
第三千十地区
第三千十一地区
第三千十二地区
第三千十三地区
第三千十四地区
第三千十五地区
第三千十六地区
第三千十七地区
第三千十八地区
第三千十九地区
第三千二十地区
第三千二十一地区
第三千二十二地区
第三千二十三地区
第三千二十四地区
第三千二十五地区
第三千二十六地区
第三千二十七地区
第三千二十八地区
第三千二十九地区
第三千三十地区
第三千三十一地区
第三千三十二地区
第三千三十三地区
第三千三十四地区
第三千三十五地区
第三千三十六地区
第三千三十七地区
第三千三十八地区
第三千三十九地区
第三千四十地区
第三千四十一地区
第三千四十二地区
第三千四十三地区
第三千四十四地区
第三千四十五地区
第三千四十六地区
第三千四十七地区
第三千四十八地区
第三千四十九地区
第三千五十地区
第三千五十一地区
第三千五十二地区
第三千五十三地区
第三千五十四地区
第三千五十五地区
第三千五十六地区
第三千五十七地区
第三千五十八地区
第三千五十九地区
第三千六十地区
第三千六十一地区
第三千六十二地区
第三千六十三地区
第三千六十四地区
第三千六十五地区
第三千六十六地区
第三千六十七地区
第三千六十八地区
第三千六十九地区
第三千七十地区
第三千七十一地区
第三千七十二地区
第三千七十三地区
第三千七十四地区
第三千七十五地区
第三千七十六地区
第三千七十七地区
第三千七十八地区
第三千七十九地区
第三千八十地区
第三千八十一地区
第三千八十二地区
第三千八十三地区
第三千八十四地区
第三千八十五地区
第三千八十六地区
第三千八十七地区
第三千八十八地区
第三千八十九地区
第三千九十地区
第三千九十一地区
第三千九十二地区
第三千九十三地区
第三千九十四地区
第三千九十五地区
第三千九十六地区
第三千九十七地区
第三千九十八地区
第三千九十九地区
第四千地区
第四千一地区
第四千二地区
第四千三地区
第四千四地区
第四千五地区
第四千六地区
第四千七地区
第四千八地区
第四千九地区
第四千十地区
第四千十一地区
第四千十二地区
第四千十三地区
第四千十四地区
第四千十五地区
第四千十六地区
第四千十七地区
第四千十八地区
第四千十九地区
第四千二十地区
第四千二十一地区
第四千二十二地区
第四千二十三地区
第四千二十四地区
第四千二十五地区
第四千二十六地区
第四千二十七地区
第四千二十八地区
第四千二十九地区
第四千三十地区
第四千三十一地区
第四千三十二地区
第四千三十三地区
第四千三十四地区
第四千三十五地区
第四千三十六地区
第四千三十七地区
第四千三十八地区
第四千三十九地区
第四千四十地区
第四千四十一地区
第四千四十二地区
第四千四十三地区
第四千四十四地区
第四千四十五地区
第四千四十六地区
第四千四十七地区
第四千四十八地区
第四千四十九地区
第四千五十地区
第四千五十一地区
第四千五十二地区
第四千五十三地区
第四千五十四地区
第四千五十五地区
第四千五十六地区
第四千五十七地区
第四千五十八地区
第四千五十九地区
第四千六十地区
第四千六十一地区
第四千六十二地区
第四千六十三地区
第四千六十四地区
第四千六十五地区
第四千六十六地区
第四千六十七地区
第四千六十八地区
第四千六十九地区
第四千七十地区
第四千七十一地区
第四千七十二地区
第四千七十三地区
第四千七十四地区
第四千七十五地区
第四千七十六地区
第四千七十七地区
第四千七十八地区
第四千七十九地区
第四千八十地区
第四千八十一地区
第四千八十二地区
第四千八十三地区
第四千八十四地区
第四千八十五地区
第四千八十六地区
第四千八十七地区
第四千八十八地区
第四千八十九地区
第四千九十地区
第四千九十一地区
第四千九十二地区
第四千九十三地区
第四千九十四地区
第四千九十五地区
第四千九十六地区
第四千九十七地区
第四千九十八地区
第四千九十九地区
第五千地区
第五千一地区
第五千二地区
第五千三地区
第五千四地区
第五千五地区
第五千六地区
第五千七地区
第五千八地区
第五千九地区
第五千十地区
第五千十一地区
第五千十二地区
第五千十三地区
第五千十四地区
第五千十五地区
第五千十六地区
第五千十七地区
第五千十八地区
第五千十九地区
第五千二十地区
第五千二十一地区
第五千二十二地区
第五千二十三地区
第五千二十四地区
第五千二十五地区
第五千二十六地区
第五千二十七地区
第五千二十八地区
第五千二十九地区
第五千三十地区
第五千三十一地区
第五千三十二地区
第五千三十三地区
第五千三十四地区
第五千三十五地区
第五千三十六地区
第五千三十七地区
第五千三十八地区
第五千三十九地区
第五千四十地区
第五千四十一地区
第五千四十二地区
第五千四十三地区
第五千四十四地区
第五千四十五地区
第五千四十六地区
第五千四十七地区
第五千四十八地区
第五千四十九地区
第五千五十地区
第五千五十一地区
第五千五十二地区
第五千五十三地区
第五千五十四地区
第五千五十五地区
第五千五十六地区
第五千五十七地区
第五千五十八地区
第五千五十九地区
第五千六十地区
第五千六十一地区
第五千六十二地区
第五千六十三地区
第五千六十四地区
第五千六十五地区
第五千六十六地区
第五千六十七地区
第五千六十八地区
第五千六十九地区
第五千七十地区
第五千七十一地区
第五千七十二地区
第五千七十三地区
第五千七十四地区
第五千七十五地区
第五千七十六地区
第五千七十七地区
第五千七十八地区
第五千七十九地区
第五千八十地区
第五千八十一地区
第五千八十二地区
第五千八十三地区
第五千八十四地区
第五千八十五地区
第五千八十六地区
第五千八十七地区
第五千八十八地区
第五千八十九地区
第五千九十地区
第五千九十一地区
第五千九十二地区
第五千九十三地区
第五千九十四地区
第五千九十五地区
第五千九十六地区
第五千九十七地区
第五千九十八地区
第五千九十九地区
第六千地区
第六千一地区
第六千二地区
第六千三地区
第六千四地区
第六千五地区
第六千六地区
第六千七地区
第六千八地区
第六千九地区
第六千十地区
第六千十一地区
第六千十二地区
第六千十三地区
第六千十四地区
第六千十五地区
第六千十六地区
第六千十七地区
第六千十八地区
第六千十九地区
第六千二十地区
第六千二十一地区
第六千二十二地区
第六千二十三地区
第六千二十四地区
第六千二十五地区
第六千二十六地区
第六千二十七地区
第六千二十八地区
第六千二十九地区
第六千三十地区
第六千三十一地区
第六千三十二地区
第六千三十三地区
第六千三十四地区
第六千三十五地区
第六千三十六地区
第六千三十七地区
第六千三十八地区
第六千三十九地区
第六千四十地区
第六千四十一地区
第六千四十二地区
第六千四十三地区
第六千四十四地区
第六千四十五地区
第六千四十六地区
第六千四十七地区
第六千四十八地区
第六千四十九地区
第六千五十地区
第六千五十一地区
第六千五十二地区
第六千五十三地区
第六千五十四地区
第六千五十五地区
第六千五十六地区
第六千五十七地区
第六千五十八地区
第六千五十九地区
第六千六十地区
第六千六十一地区
第六千六十二地区
第六千六十三地区
第六千六十四地区
第六千六十五地区
第六千六十六地区
第六千六十七地区
第六千六十八地区
第六千六十九地区
第六千七十地区
第六千七十一地区
第六千七十二地区
第六千七十三地区
第六千七十四地区
第六千七十五地区
第六千七十六地区
第六千七十七地区
第六千七十八地区
第六千七十九地区
第六千八十地区
第六千八十一地区
第六千八十二地区
第六千八十三地区
第六千八十四地区
第六千八十五地区
第六千八十六地区
第六千八十七地区
第六千八十八地区
第六千八十九地区
第六千九十地区
第六千九十一地区
第六千九十二地区
第六千九十三地区
第六千九十四地区
第六千九十五地区
第六千九十六地区
第六千九十七地区
第六千九十八地区
第六千九十九地区
第七千地区
第七千一地区
第七千二地区
第七千三地区
第七千四地区
第七千五地区
第七千六地区
第七千七地区
第七千八地区
第七千九地区
第七千十地区
第七千十一地区
第七千十二地区
第七千十三地区
第七千十四地区
第七千十五地区
第七千十六地区
第七千十七地区
第七千十八地区
第七千十九地区
第七千二十地区
第七千二十一地区
第七千二十二地区
第七千二十三地区
第七千二十四地区
第七千二十五地区
第七千二十六地区
第七千二十七地区
第七千二十八地区
第七千二十九地区
第七千三十地区
第七千三十一地区
第七千三十二地区
第七千三十三地区
第七千三十四地区
第七千三十五地区
第七千三十六地区
第七千三十七地区
第七千三十八地区
第七千三十九地区
第七千四十地区
第七千四十一地区
第七千四十二地区
第七千四十三地区
第七千四十四地区
第七千四十五地区
第七千四十六地区
第七千四十七地区
第七千四十八地区
第七千四十九地区
第七千五十地区
第七千五十一地区
第七千五十二地区
第七千五十三地区
第七千五十四地区
第七千五十五地区
第七千五十六地区
第七千五十七地区
第七千五十八地区
第七千五十九地区
第七千六十地区
第七千六十一地区
第七千六十二地区
第七千六十三地区
第七千六十四地区
第七千六十五地区
第七千六十六地区
第七千六十七地区
第七千六十八地区
第七千六十九地区
第七千七十地区
第七千七十一地区
第七千七十二地区
第七千七十三地区
第七千七十四地区
第七千七十五地区
第七千七十六地区
第七千七十七地区
第七千七十八地区
第七千七十九地区
第七千八十地区
第七千八十一地区
第七千八十二地区
第七千八十三地区
第七千八十四地区
第七千八十五地区
第七千八十六地区
第七千八十七地区
第七千八十八地区
第七千八十九地区
第七千九十地区
第七千九十一地区
第七千九十二地区
第七千九十三地区
第七千九十四地区
第七千九十五地区
第七千九十六地区
第七千九十七地区
第七千九十八地区
第七千九十九地区
第八千地区
第八千一地区
第八千二地区
第八千三地区
第八千四地区
第八千五地区
第八千六地区
第八千七地区
第八千八地区
第八千九地区
第八千十地区
第八千十一地区
第八千十二地区
第八千十三地区
第八千十四地区
第八千十五地区
第八千十六地区
第八千十七地区
第八千十八地区
第八千十九地区
第八千二十地区
第八千二十一地区
第八千二十二地区
第八千二十三地区
第八千二十四地区
第八千二十五地区
第八千二十六地区
第八千二十七地区
第八千二十八地区
第八千二十九地区
第八千三十地区
第八千三十一地区
第八千三十二地区
第八千三十三地区
第八千三十四地区
第八千三十五地区
第八千三十六地区
第八千三十七地区
第八千三十八地区
第八千三十九地区
第八千四十地区
第八千四十一地区
第八千四十二地区
第八千四十三地区
第八千四十四地区
第八千四十五地区
第八千四十六地区
第八千四十七地区
第八千四十八地区
第八千四十九地区
第八千五十地区
第八千五十一地区
第八千五十二地区
第八千五十三地区
第八千五十四地区
第八千五十五地区
第八千五十六地区
第八千五十七地区
第八千五十八地区
第八千五十九地区
第八千六十地区
第八千六十一地区
第八千六十二地区
第八千六十三地区
第八千六十四地区
第八千六十五地区
第八千六十六地区
第八千六十七地区
第八千六十八地区
第八千六十九地区
第八千七十地区
第八千七十一地区
第八千七十二地区
第八千七十三地区
第八千七十四地区
第八千七十五地区
第八千七十六地区
第八千七十七地区
第八千七十八地区
第八千七十九地区
第八千八十地区
第八千八十一地区
第八千八十二地区
第八千八十三地区
第八千八十四地区
第八千八十五地区
第八千八十六地区
第八千八十七地区
第八千八十八地区
第八千八十九地区
第八千九十地区
第八千九十一地区
第八千九十二地区
第八千九十三地区
第八千九十四地区
第八千九十五地区
第八千九十六地区
第八千九十七地区
第八千九十八地区
第八千九十九地区
第九千地区
第九千一地区
第九千二地区
第九千三地区
第九千四地区
第九千五地区
第九千六地区
第九千七地区
第九千八地区
第九千九地区
第九千十地区
第九千十一地区
第九千十二地区
第九千十三地区
第九千十四地区
第九千十五地区
第九千十六地区
第九千十七地区
第九千十八地区
第九千十九地区
第九千二十地区
第九千二十一地区
第九千二十二地区
第九千二十三地区
第九千二十四地区
第九千二十五地区
第九千二十六地区
第九千二十七地区
第九千二十八地区
第九千二十九地区
第九千三十地区
第九千三十一地区
第九千三十二地区
第九千三十三地区
第九千三十四地区
第九千三十五地区
第九千三十六地区
第九千三十七地区
第九千三十八地区
第九千三十九地区
第九千四十地区
第九千四十一地区
第九千四十二地区
第九千四十三地区
第九千四十四地区
第九千四十五地区
第九千四十六地区
第九千四十七地区
第九千四十八地区
第九千四十九地区
第九千五十地区
第九千五十一地区
第九千五十二地区
第九千五十三地区
第九千五十四地区
第九千五十五地区
第九千五十六地区
第九千五十七地区
第九千五十八地区
第九千五十九地区
第九千六十地区
第九千六十一地区
第九千六十二地区
第九千六十三地区
第九千六十四地区
第九千六十五地区
第九千六十六地区
第九千六十

わって丹生遺跡群中もっとも重要な資料群を構成する1－B地点は，石材の種類・帰属の時代にかかわらず全資料を取り扱うことにした。

なお，念のために記しておくと，土器はほとんどが弥生土器であり，古くても縄文後期を溯らないという観察所見を得ている。石器の中には，鍬形鏃が少なからず含まれており，押型文土器の存在も予測されたが，保管資料中にこれを確認することはできなかった。土壌の性質による遺存状態の悪さに起因するものであろうか。結局，土器および縄文時代以降に所属すると考えられる石器（1－B地点出土例を除いて）は，既報告分を参照していただくこととし，ここでは資料の再提示，再検討はしないものとする。

このような手続きの後に，本書で取り挙げることにした資料の報告単位は，以下のとおりである。調査年次・調査班の帰属は，第1表を参照されたい。

第1地区A地点（以下，1－Aと表記），1－B北区，1－B東南区，1－B西区，1－D，2－E，2－F，2－H，2－I，3－B，4－A，4－B，4－D，7－A，7－D，8－A，8－B，9－B，9－C，10－A，11－A，12－A，13－A，14－A，14－Cの計25ケ所である（第2・3図）。

なお，資料の性格上もっとも議論の集中する1－B地点各地区から記述を始め，このために可能なかぎりの紙幅をさくこととする。

（鈴　木）

註

1)　a）賀川光夫「西日本の礫器の問題」（「第4紀研究」第10巻第4号所収，東京，昭和46年）；b）橘昌信編『大分県旧石器時代遺跡分布図』（別府，昭和61年）。

2)　首藤次男・大西郁夫・日高稔「大分県丹生台地の地質－とくに旧石器時代遺跡と関連して」（『丹生綜括篇』所収，昭和43年）。

3)　本書では原則として角田文衛・佐原真両氏および筆者の主張に従って岩宿時代という呼称を用いる。この場合，従来の前（中）期旧石器時代を前期岩宿時代，後期旧石器・先土器時代を後期岩宿時代とする；a）角田文衛「無土器文化の名称について」（『古代文化』第3巻第1号所収，京都，昭和34年）；b）佐原真『大系日本の歴史1日本人の誕生』（東京，昭和62年）；c）鈴木忠司「先土器・旧石器そして岩宿時代」（『古代学研究所研究紀要』第1輯所収，京都，平成2年）。

第2節　第1地区B地点の細分

1．発掘の経過

1－B地点は試掘調査（昭和37年6月5日～8日）において藤原班，第1次調査（昭和37年10月5日～31日）において酒詰班[1]，第4次調査（昭和40年10月13日～11月2日）において三上班[2]，第5次調査（昭和41年9月27日～10月12日）において小野班および試掘班[3]によって，計4回調査された。

2．位置・地区・トレンチ

第1地区は大字丹生字日暮・辻・長迫に渡る地域に相当する。ほぼ70mの等高線によって縁どられる丘陵である。その中でB地点は，日暮・長迫・産神の三つの池に囲まれた標高約80mの丘を中心として広がり，地籍上は字長迫に属する。おおよそ東に向かって緩傾斜をなすが，産神の池に面

する側は崖となっている。この地点の大部分はブルドーザーによって削平され，多くの石器が地表に露呈していたという。

試掘調査では丘陵頂部の平坦部とその東斜面において試掘が行われたが詳細は不明である。

第1次調査では，未開墾だった南東斜面の笹薮を中心にAトレンチ(南北16.8m，東西14.7m，2.1m×2.1mグリッド)およびその南方8mにDトレンチが設けられた。また地層観察用にB・C両トレンチが丘陵東縁に設けられた。調査面積は124m²である。なお，Bトレンチの位置した場所は開墾時の土砂捨て場であった事が後に判明し，同トレンチは放棄されている(第2・4図)。

第4次調査では，丘陵西南斜面にある桃畑が発掘された。ブルドーザーではなく耕転機で開墾され堆積の遺存条件に恵まれていると予想されたためである。桃の木の間をぬってA・C・Eの3本のトレンチが設定され(各々3m×9m，トレンチ間隔は3m)，各トレンチは3区に分けられた。ただ，Aトレンチの第3区は桃の木との関係で不規則な形を強いられた。調査面積は約80m²である。

第5次調査では，まず小野班によって第1次調査時のトレンチの西隣りにある雑木林の中にトレンチ2本(2m×10m，S.Tトレンチ)が，また試掘班によって頂部北側にある杉苗に沿って東西に長くトレンチ(2m×12m，A・Bトレンチ)が設定された。しかし地層の攪乱が著しいため，両班のトレンチを接続する形で丘陵頂部を南北に切るトレンチを設けたところ(E・Fトレンチに相当)，攪乱の程度は変わらないが出土する遺物が急増した。そこで丘陵頂部の北半分をほぼ全面的に発掘することが決定された(A～D・G～Yトレンチ)。結局計27本のトレンチが設定され，調査面積は合計約700m²に達したのである。

3．B地点の細分

以上の調査経過に係わる記述のように，1－B地点は，試掘も含め4度の調査が実施されている。その範囲は南北約100m，東西約50mの広がりを有する。そして，第1次調査と第5次調査の調査地は交錯している。このような事情を考慮すれば，発掘成果の記述に際して1－B地点を一括して扱うか，あるいは調査年次ごとにこれを行うのは効率的でない。トレンチは，標高80mの丘の頂部付近とこの南斜面(5次)，東南斜面(1次)，西南斜面(4次)に設けられている。これらのトレンチでの遺物の出土状況や遺物の性格に加えて，地形単位とその広さを考慮すれば，1－B地点を仮に以下の北区(図版Ⅲ下段)・東南区・西区の三つのそれぞれ独立した別個の遺跡単位として扱うのがより現実的であると考えられる。したがって，以下の記述は，この北区・東南区・西区ごとに行っていきたい。

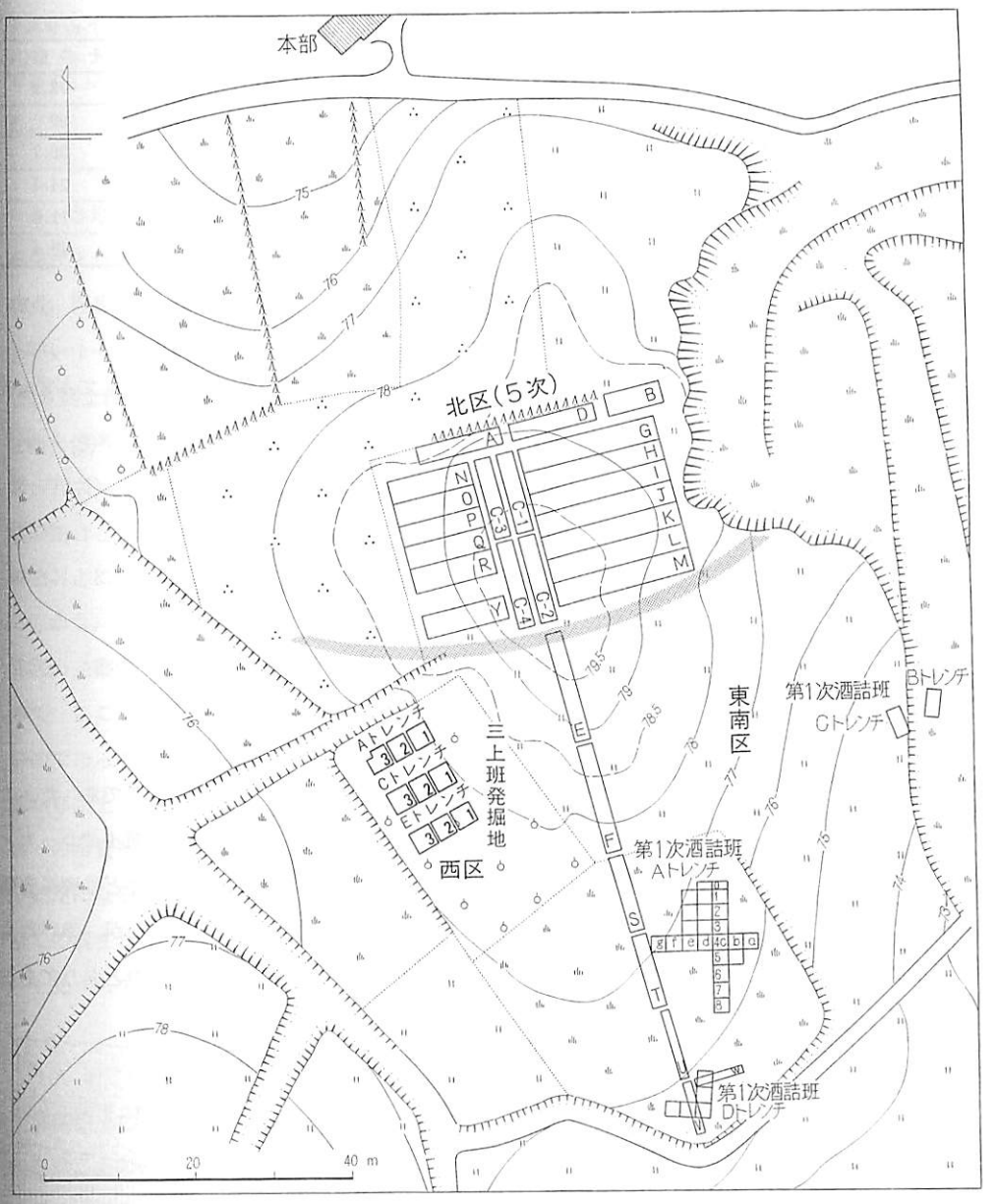
北　区　第5次調査の際のA～RおよびYトレンチ。

西　区　第4次調査の際のトレンチ一括。

東南区　第1次調査の際のトレンチ一括および第5次調査の際のE・F・S・T・U・Vトレンチ。

原報告では一つの地点として扱ったものを三つに細分して記述する合理性に係わって，三つの地区の出土遺物の特徴の比較をここに補足しておこう。

1－B地点全体は，合計360点の遺物が出土している。三つの地区でもれなく出土する打器・大



第4図　1－B地点(北区，東南区，西区)地形・トレンチ配置図

型石器類の突出した出土総数は，やはり1－B地点の最大の特徴であろう。また，出土地不明ではあるがハンマーが採取されている事や，数量的には僅かであるがナイフ形石器や石鏃が出土している事も留意すべき点である。

各区毎の器種組成を見るなら，西区は砕片類が占める割合が他に較べ非常に高い点，東南区は多量のRF・UF類を出土している点，そして北区は打器・大型石器類や母岩・石核類が非常に大量に集中する点で，各地区が決して総括できる内容を共有していない事が理解できる。更に各々の石材構成においてそれらの性質の違いが一層顕著になる(第3表)。各地区毎の黒耀石及びチャート類

の構成比率を比較すると，東南区では黒耀石が実に70%以上を占め，チャート類はほとんど見られないのに対し，西区ではチャート類が約60%，黒耀石が約30%を占め，非チャート・非黒耀石のものは全体の1割程度しかない。それに対し北区では3/4が非チャート・非黒耀石類が占めている。

第3表　第1地区B地点各区黒耀石・チャート占有比率表

地区名	年次	黒耀石(%)	チャート(%)	その他(%)
北　区	V	5.9	20.9	73.2
東南区	I	77.5	2.5	20
	V	63.3	0	36.7
	小計	73.9	1.7	24.4
西　区	IV	29.0	59.4	11.6
総　計		32.2	19.4	48.4

地形単位を基にした1－B地点の3区分は，器種組成・石材構成比を併わせて考察してみても妥当なものであると言えるだろう。

（竹　内）

註

1)『丹生1・2次概報』(昭和39年)。

2)『丹生4次概報』(昭和41年)。

3)『丹生綜括篇』(昭和43年)。

第3節　第1地区B地点北区

1．土　　層

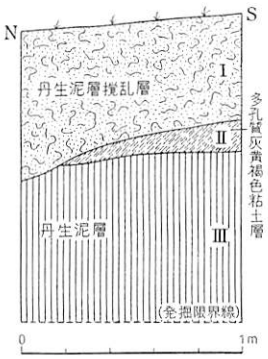
1－B地点北区は多数の石器が集中的に発見されたにもかかわらず堆積条件は劣悪であった。これは原報告の表現を借りれば，「最初予測したように殆ど完璧に撹乱・破壊され，腐植土やローム・粘土が混合して存在し，その中に旧石器類が点々と混っている有様であって，層序などは実に支離滅裂で，単に石器を掘り出すだけに終始するのかと諦めていた。[1)]」ような状況であったが，幸いにもGトレンチでは撹乱の免れた部分が僅かに遺存していたとされている。層序は以下のとおりである(第5図)。

第1層　開墾による丹生泥層撹乱層

第2層　多孔質灰黄褐色粘土層

第3層　黄褐色粘土層(丹生泥層)

上記3層のうち，第2層以下は開墾による被害を殆んど受けていなかったとされているが，ここからは3点の石器(No.2・34・66)が出土している。したがって，これらは原位置を留めていたことになる。



第5図　1－B地点北区Gトレンチ東壁土層断面図

そして，この第2層は東南区第5次調査S・Tトレンチ第2層に相当し，その成因については，「従来新しいロームの二次堆積物とされていたが，第14地区A地点でこれが表土状に堆積せず，水平に堆積して浸蝕をうけていることが判明したので，前記の如くこの辺りが陸化して丹生面が形成され，あまり浸蝕をうけぬうちに志村砂礫層や丹生泥層を供給源とし，多量のロームを混じえて二次堆積

したものと考えられるに至った。因みに陸化しない場所ではこの時期に小原台砂礫層が堆積したのである。[2)]」と原報告者は記している。原報告者が考える丹生文化の帰属年代に係って重要な記載である。

2．遺物の出土状況

1－B地点北区からはナイフ形石器1点，二次調整剝片3点，打器・大型石器類55点，石鏃1点，石斧片1点，使用痕と思われる小剝離を有する剝片6点から成るトゥール類計67点の他に，剝片類48点，破片類3点，母岩・石核類15点の合計134点の石器が出土している。

幸い1－B地点北区出土のほとんどの石器はその出土位置を平面分布図に落とす事が可能である(第6図上段)。原位置を留めていたとされる石器3点を除いては再堆積後の出土位置しか分からないから参考程度にしかならないが，いくつかの石器集中から成っているように見受けられる(第75図～79図)。石器群の分析から得られた結論からすれば，これらは帰属時期を異にする複数の石器群の集合として理解されるから，石器群ごとに分布状況を把握しなければならないし，この石器群単位ごとに分布論的観点からも資料を検討しうるようにも見受けられる。

しかし，1－B地点全体が全面的なブルドーザーの破壊を蒙っていたと記されていること，また北区の発掘所見(発掘日誌)でもこの点が確認されているし，石器の多くに激しい傷跡を留めているので，ここに示した分布状況は，あくまで最終的な遺物採集位置の記録が示されているのにすぎないのであって，攪乱がブルドーザーによっていることがはっきりしている以上，標高80mの丘の頂部から出土したという点以外は，人為的にかなりの出土位置と状況の改変を蒙っていると解釈しておくのが賢明であろう。

蛇足になるが，念のため，石器の垂直分布を示しておきたい。5群の石器は全て，出土レベル上全くの混在状態を示している(第6図下段)。

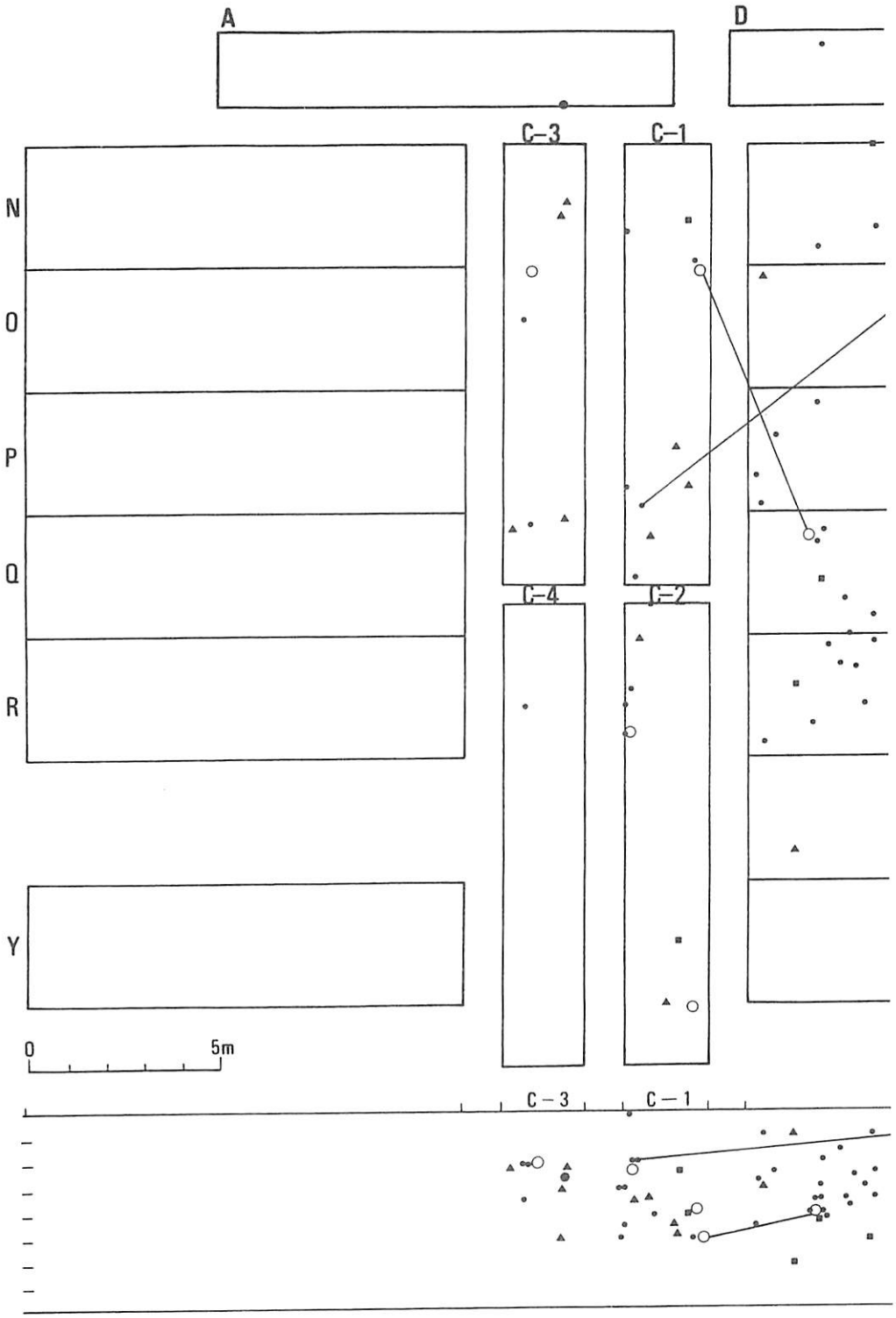
したがって，これらは基本的に現位置論的検討の対象としえないものと理解しておきたい。

3．石器群の構成と分類

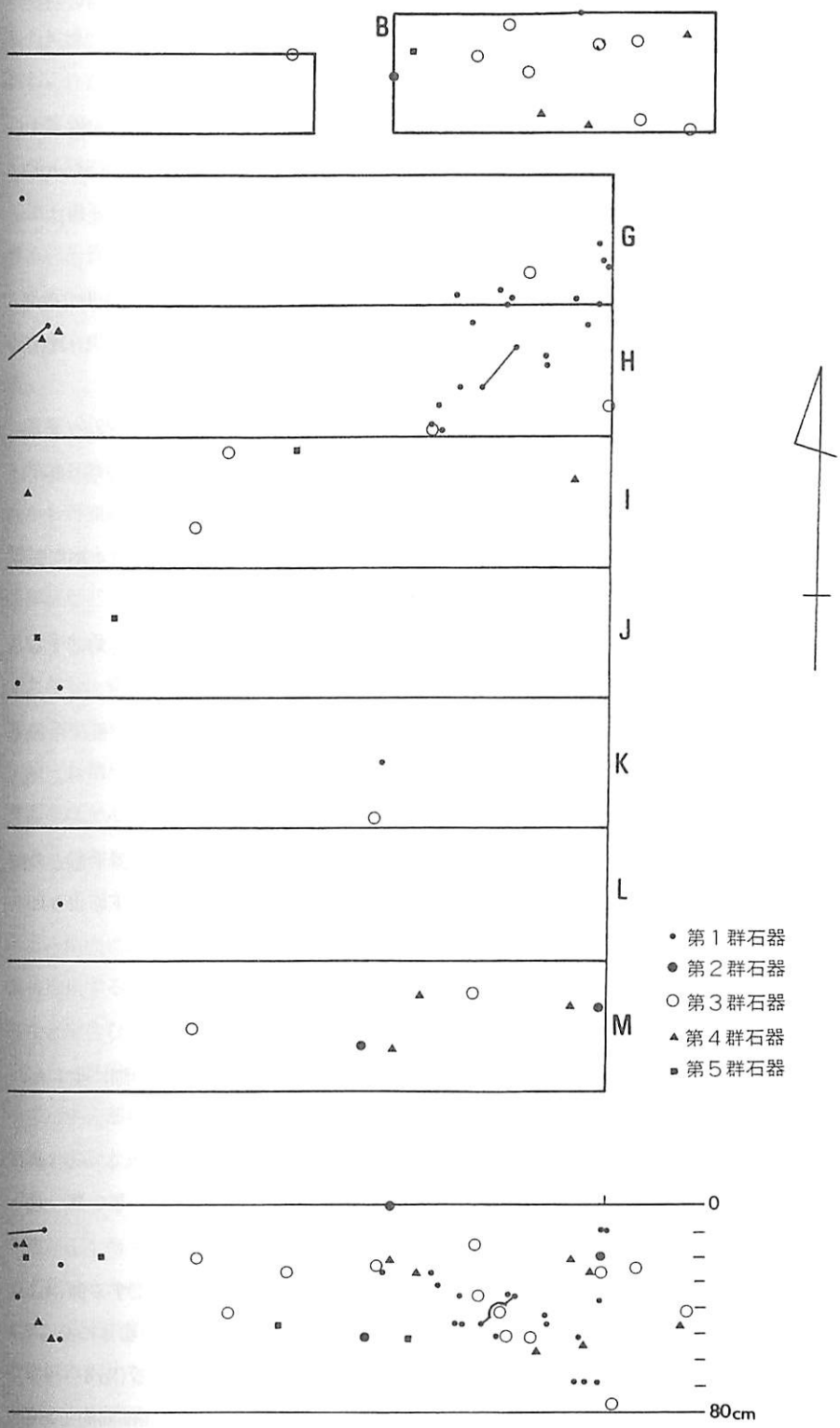
1)．石　質

北区出土の134点の石器は，先の出土状況の説明からも知られるように，出土位置・出土層などからは，その帰属する時代を判別する手懸かりは得られない。仮にブルドーザーによる削平・攪乱を受けていなかったとしても，丹生台地全体の堆積環境の劣悪さからみて，もともと同一層に混在した資料群であったであろう。そこに含まれる石器は，ナイフ形石器・石鏃など明らかに帰属時期が明瞭な石器が本来的に共存関係にありえないことからみても，机上操作によって共伴関係の高い一群ごとに区分することが必然的に求められたであろう。

北区出土石器群中に各種各様の石器が入り混じっていることは，資料群の初見の段階から明らかな印象であった。もう少し詳しく述べれば，ここにはいわゆる石核・打割器・斧状石器・槌石(ハンマー・ストーン)・ナイフ形石器・石鏃・チャートおよび黒耀石製剝片石器などが含まれており，資料群が多様であると同時に，資料の型式・形態学的特徴が，石質との間に強い関連性を有しているのではないかということが一目で予測された。そこで，まず石質別にその構成内容をあらまし検



第6図　1—B地点北区石器平面・垂直分布図


B
G
H
I
J
K
L
M
第１群石器
第２群石器
第３群石器
第４群石器
第５群石器
0
80cm

討し，その後，技術的・型式学的検討を行って，北区の石器群の構成の実態の把握の最初の前提作業にしたい。

石質は，以下の5群としてまず捉えられる。

Ⅰ群：　粗粒の石材グループで，A)流紋岩 B)凝灰岩に2分される。A)は灰黄色で風化が進んでいる。B)は黄色・灰黄色・暗灰色で粗粒，風化が激しく爪で傷がつくほどである。A)の中には黒色で，粗粒，ほとんど風化をしていないものが少数含まれる。流紋岩と凝灰岩の比率は7：3である。

丹生1－B地点を特徴づけるいわゆる斧状石器群およびこの製作過程に対応する剝片である。

Ⅱ群：　石質はA)良質，黄色・褐色の流紋岩，B)粗粒で黒い流紋の入る灰白色流紋岩，C)風化の激しい流紋岩でⅠ群と共通するもの，D)粗粒砂岩からなる。

丹生1－B地点のもう一方の特徴的な一群で，石核・打割器(チョッパー・チョッピングトゥール)から成る。Ⅰ群が主として風化の激しい石材から構成されるのに対して，こちらの風化は軽微である。

Ⅲ群：　大部分は良質で灰黄色に若干風化した流紋岩からなる。一部に，粗粒の流紋岩や凝灰岩を含む。

ナイフ形石器・翼状剝片石核・盤状剝片？・幅広縦長指向の剝片類およびこれと対応する石核。

Ⅳ群：　チャート製の一群。剝片と石核を主とするが，剝片には規格性があり，一部に微細な加工痕を留めるものがある。

Ⅴ群：　姫島産黒耀石・ガラス質安山岩の一群。石鏃を含む。

以上，石材を5群に分けてみると，細部は別にして，基本的に各群はそれが含む石器形態との間に強い関連性のあることがはっきり窺えた。したがって，石材の5群を基礎にして以下のように石器群を5群に分け特徴を述べる。

2)．石器の分類

第1群石器：斧状石器関連(第7～51図，図版Ⅴ～Ⅶ)

ここにはA)斧状石器，B)斧状石器未成品あるいは斧状石器素材および素材製作の際に生じた，大型厚手の裂片，C)この加工時に生じた可能性のある剝片の3者からなる。

A)　斧状石器群は，Ⅰ～Ⅷ類(第8図)および分類保留群，槌石(Ⅸ類：ハンマー・ストーン)から成る。

Ⅰ類(No.1～10)

主に薄手の長楕円礫を使用し，その一端を片側から薄く打剝加工する。両端に加工する例(No.10)もある。石質は1例(No.4)を除いて，風化の激しい流紋岩・凝灰岩使用。裏面側に，器体に沿って，垂直方向に薄く剝がれた使用痕(ダメージ)と思われる特徴的な剝離痕のある例もある(No.4・9)。

これらは2次加工の点においても特徴的である。加工は礫先端部に集中するが範囲は面的である。打剝は打・割器におけるように粗く打ち欠くと言うよりは，平坦で奥に深く伸び，そぎ取るように

なされており，その結果，先端にシャープな刃部が形成されている。器体の長軸に平行に剝ぎ取られた剝離痕で，その末端が強いステップ状態を示す例(No.3・6)は，使用による剝脱の痕跡であるかもしれない。

Ⅱ類(No.11～20)

厚手楕円礫(Ⅰ類ほど長手のものは少ない)を使用し，先端から一側縁にかけて，大きく打ち欠いて加工する。先端が尖らぬものと，先の鋭く尖るピック状のもの(No.16•17•19)を区分することもできる。石質は1例(No.11)を除いて，風化の激しい流紋岩使用。

2次加工は側縁部が裏面の自然面に対して鈍角であり，先端部は鋭角でかつ面的である。ほとんどが甲高で分厚いとは言え，このような2次加工の特徴によって，先端部は鋭い刃部を形成している。

Ⅲ類(No.21～45・47)

斧状石器群中もっとも多くの構成資料(26点)を有し，資料群中の中心的位置を占める。素材の先端から両側縁にかけて2次加工が施されているものを一括した。したがって，素材を円礫・分割礫(厚手剝片)・大型剝片(典型的剝片)に区分し，先端の尖り具合，横断面の形状(甲高かどうか)，平面形状などによって細分は可能である。しかし，細別区分の場合類型間の連続性が高く，必要以上の細分を招きかねないのであえてこれを行っていない。

ただし，資料群の構成の理解と説明には，大まかなグルーピングの中で行うのが好都合であるので，このために特徴的な数グループを抽出しながら記載を進めよう。

a)　長楕円礫(Ⅰ類に比較してやや厚手のものが多い)を用い，左右両側縁に2次加工を加える。背面のほとんどと正面の中央部・上半部に礫面を残す。先端の平面形は尖り気味のものと，弧状のものとがある(No.21～26)。

b)　粗割した礫(分割礫)あるいは厚手の大型剝片を利用し，先端から両側縁にかけて加工を加える。断面は三角形ないし台形で中央に稜をもち甲高な印象が強い。刃部の平面形は尖らずゆるい弧状を呈する(No.27～32)。しかし，中には，側縁部の加工が微弱なもの，一側縁だけに限られるものなどを含む。

c)　一見面的な加工が施されているようにも見受けられる一群である。しかし，1例(No.29)を除いて，中央部に素材の分割面を留める。b類と共通点が多い。相異点は両端が鋭く尖る例も含め，先端が尖鋭なところに特徴がある(No.33～36)。

d)　礫の厚さを半減するように2分割(半截)した剝片を主として用い，先端から側縁にかけて2次加工を施す。先端が尖り気味のものが多いが，c)類のような尖鋭なものは少ない。剝片を主として用いるために，大きさに比較して扁平である(No.37～45)。ただし，No.44は扁平な板状礫を使用していると判断される。素材の剝片は，礫を半截したもの(No.38～40)，分割礫とでも呼ぶべき大型の粗割り剝片を用いたもの(No.37・41～43)，典型的な剝片素材と言うべきもの(No.45)とがある。

なお，No.47は，先端を欠き正確な分類はできないが，礫の2側縁に2次加工がみとめられるという点で本類に含めておく。

なお，素材に関してNo.33・36・41・43・45には，裏面側にも礫の分割面を留め，大きな礫(幼児の頭大)をいくつかに分割するように粗割りし，剝片を取って素材としたことが知られることを補足しておきたい。

以上のように，細分が可能であると同時に連続する属性も多い。したがって，上記の他の重要な諸属性はⅢ類を一括して述べる。

2次加工は側縁部が裏面側に対し鈍角で，甲高な分厚い例の場合でも先端は鋭角に加工されている。ただし，No.39・45は先端付近や側縁にこの例から外れる点がある。いずれにしろ，加工時の意識が刃部に相当する先端一点に集中しているように見受けられる。

刃部付近に研磨痕を有する例が2例(No.33・35)あり，刃部背面側に石斧刃部の使用痕に共通する剝離痕を有する例が4点(No.22・29・30・32)ある。研磨痕を留める例2点はいずれもその部分はわずかに残るのみで，研磨して使用した後の剝落がそのままに放置されたか，刃部の再生を行った状態を示すのかのいずれかであろう。No.33の例は研磨痕を留める反対の先端から大きくステップする剝離が入っている。これが使用痕あるいは刃部再生の為の加工であるならば，両端に刃部を有する例ということになろう。刃部付近にこのような特徴を有する他の例(No.28・30・32)は，刃部研磨・石斧刃部特有の剝落痕と強く結びついており，これらの剝離痕が加工痕ではなく，使用時の剝落によるものであり，同時に先端の尖鋭な例が本来目的的に意識されたものではなく，使用と再生という使用過程の中で生じた結果的な姿であるということを示唆しているのかもしれない。

Ⅲ類に含まれる資料群がいくつかにグループ分けされる一方で，上記のような使用過程の問題と深く係わっている可能性を考慮して，本類の細分を避けたわけである。石質は，No.28・30・33・35・36・45・47を除いて風化の激しい流紋岩・凝灰岩に属する。

Ⅳ類(No.46・48～50)

楕円礫の厚さを半減させるように半截するか，これに類した剝片を使用し，周辺部全体に2次加工を施した扁平な一群で，平面形は小判形を呈する。周辺部に対して加えられた打剝は，裏面に対してさほど鈍角ではない。先端部に対する加工はこれより鋭角であるが，両者の差は他の類型ほど顕著ではない。

No.46の例は，刃部とした部分とは反対の先端裏面に，あるいは使用の結果生じたかもしれない剝離痕を留め，さらに表面側にも階段状を呈する長軸方向の剝離痕がある。したがって，上端側が本来の刃部であるか，または両端が刃部として機能していたと考えるべきかもしれない。

Ⅴ類(No.51～53)

大型の礫あるいは大型厚手の剝片を利用し，全体に平坦な2次加工が片面の大部分を面的に覆う一群である。ただし，加工が面的であるとは言っても完全ではなく，いずれも中央部分か上半部に素材の剝離面を留めている。構成数が少ないにもかかわらず全体形状の変異の幅が大きい。

Ⅵ類(No.54・55・58)

円礫の側縁部を利用し，分割面をほぼ面的に平坦な剝離が覆う。裏面側が極端な放物線状に突出する点で，少数とは言え目立った印象を与える一群である。

Ⅶ類(No.56・57・59)

やや厚手，幅広の角ばった円礫か類似の大型剝片を利用。片面のほぼ全面に水平方向の平坦な剝離加工が及ぶ例と明らかな周辺加工の例とがある。全体に角ばった小判形あるいは隅丸の長方形といった平面形を有す。したがって，刃部は尖らず，突状でもなく，平刃となる。礫を利用した2例の加工面は，大小の水平方向の剝離が全面を覆うが，周辺部沿いの細かな剝離痕は，あるいは礫を粗割り加工した際の素材剝離面であるかもしれない。もしそうであれば，3例とも周辺加工と見做すべきであろう。

刃部に目を向けてみると，刃部裏面側に石斧刃部に特徴的なそぎ取られたような剝落が認められる例が2例(No.57・59)ある。このうち，No.57の例は刃部先端が欠損している。刃部に対する加工は，いずれの場合も周辺部に対する加工と相違し，鋭角な刃部断面を作り出す意図を十分に窺うことができる。

石質は全て，風化の激しい流紋岩・凝灰岩である。

Ⅷ類(No.60～63)

円礫を使用し，加工が両面に及ぶものを一括した。この点を除けば，必ずしも一つの分類群を構成しているとは言い難いかもしれない。そのうえ，両面に加工が及ぶとは言え刃部裏面側には共通して礫面が残され，いわゆる典型的な両面加工と称するには躊躇されるが，このことは同時に，刃部の裏面側に意識的に自然面を残す意図を窺わせる。

No.60の例は上端で折れている。剝片の打点は側稜部にあり加工途次の剝離作業の失敗の結果と見做しうる反面，表面側刃部は極端な階段状剝離を呈しており，これは加工というよりも使用時の剝離による結果であるとも考えられる。そうであるとすれば，上端の欠損は加工途次の未完成段階に生じたものではないと判断されることになる。

No.61はかねがね話題になっていた刃部磨製の1例である。とりわけ大型で断面は台形を呈する。この例は両面に加工が及ぶとは言え，裏面側のそれは2次加工というより，素材形状を整えるための粗割り風である。表面側は側面の加工と，側面から水平方向に加えられた打剝からなっている。したがって，側縁部から表裏両面方向に打撃を加えて両面を面的に加工しようとする，いわゆる両面加工とはその趣を相当に異にする。

松沢亜生氏の御教示によれば，本来裏面側側面から打撃を加えて厚さを減じながら表面側に2次加工を施そうとした作業に失敗した結果，側面側から再度水平方向の打撃を加えざるを得なかった，いわば加工の失敗例ではないかと言う。

No.62の例は風化が激しく，各剝離面を精確に読み取りにくいが，本類中一番両面加工品に近いものである。刃部裏面側に残る礫面を意図的なものと判断し，完成品とみて本類に含めた。

またNo.63は刃部に横方向から加わった打撃により剝脱した刃部破片が，さらに打点側で欠損している例である。小破片であるとは言え，自然面を留めないこと，刃部両面に研磨が施されていることから，とりあえず本類に含めておく。両面加工品が異例である上に，刃部両面研磨の可能性を示唆するのは，本例が唯一である。

分類保留群(No.64～77)

ここには，欠損のため，あるいは未完成のため，形態が特異なため，風化が激しく自然面と加工面との識別がむずかしいためなどの理由で分類を保留したものを一括して含める。これらについては順不同で，気付いた点を補記しておく。

No.65・66はⅦ類に共通性がある。またNo.66は，一種の石核と見るべきかもしれない。No.67・68はⅡ類に近いと見るべきかもしれない。欠損と風化のためその本来の姿を知ることができない。No.69～71は風化が激しく本来の加工のあり方が判別できない。No.69は大型の剝片であるにすぎないかもしれない。No.72は打剝の際の失敗による欠損剝片であることが明瞭な例で，Ⅴ類の加工途次に生じたものである可能性が高い。No.73は，Ⅷ類の欠損品とも考えられる。No.74・75は風化が激しく加工状態を精確に読み取ることができないが，Ⅳ類中の小型例に類似しているとも言える。

Ⅸ類槌石(ハンマー・ストーン)(No.78～81)

本来，斧状石器とは全く異質の性格を有するものであるが，これとの識別に問題を残すものがあること，ならびに混在する大型石器のグルーピングの過程との関係で，斧状石器の延長上で取り扱うこととする。

円柱状あるいは厚手の楕円礫を利用する。敲打痕と特徴的な裂痕によって明らかに槌石と認められる流紋岩例(No.78)の他に3点をここに含めた。礫形態の他に刃部の剝離痕が主軸に平行で，先がステップするか浅く長く器体をそぐようなあり方を示すことによって，この3点も斧状石器，打・割器／石核とは別に一括りにした。このうちNo.79は，Ⅰ類の両端に打剝の加えられた例と同様に扱いうるかもしれないが，礫形態が円柱状である点と剝離痕のあり方から，これとは区別した。No.80は平らな上端から垂直方向に縦長の剝片が取られた一種の石核と見ることもできるかもしれないが，小型石器中の剝片類に同質の石材例がないこと，礫の形状，下端の剝離痕の性状から本類に含めた。No.81の例は，Ⅰ類中のNo.9と相通じる特徴を具えていると見ることもできる。しかし下端から加えられた加工剝離痕と見るよりも，槌石に共通の作業による副次的な剝落と見る立場から本類に含めた。これらの石質は，風化の激しい流紋岩・凝灰岩である。

B)　斧状石器未成品あるいは斧状石器素材剝片(No.82～96・98)

斧状石器未成品？

円礫を分割したような分厚い例(No.87)と明らかな剝片(No.88)とがあり，両者とも斧状石器素材としての条件は十分に備えている。いずれも風化および欠損の為，加工意図と加工痕がはっきりせず，斧状石器群との類型的関連を推測することができない。あるいは単なる素材剝片であるかもしれない。石質はともに流紋岩である。

斧状石器素材剝片

No.82～86・89・91・92～94は，大きさ・厚さの点で十分に石斧状石器類の素材たりうると考えられる。このうちNo.85は，むしろ素材剝片の石核と見做しうるかもしれない。この他は素材としては大きさの点で問題があり，素材剝片の剝取に関連して生じたものと考えておきたい。

石質は風化の激しい(No.94・96・98を除く)流紋岩・凝灰岩である。

C）斧状石器調整加工剝片？（No.97・99～101）

斧状石器素材剝片のうち一番小型の例を一括した。斧状石器は基本的に円礫を部分・片面加工したものであり，余程加工度が進まないかぎり，打面か背面側に自然面がかなりの割合で残る筈である。このような典型例でないまでも，斧状石器の調整加工時に生じた剝片は特徴的であるはずであり，その可能性が高いのは4例中，せいぜい背面に自然面を留めるNo.101ぐらいである。

1－B地点北区では，多量の斧状石器が使用されている。また素材剝片や槌石また加工時の欠損例の存在から見て，この地で最終的な調整加工が行われたと考えるに十分な状況証拠がある。しかしながらこれを裏付ける調整加工剝片はほとんど見当たらないと言ってよい。ここに挙げた例も確実な例とは言い切れない。この点は本地点の性格を考える上で見逃しえない重要な点である。チャート製石器群中には，微細な剝片も多く検出されているので，発掘の精度に原因があるとは考え難い。主たる最終仕上げの場が，本地点とは遠く離れた別の場所にあるのか，あるいは発掘区域外にあるのであろうか。

本地点出土資料の大部分がことごとくブルドーザーによる削平を受けて原位置を失っているために，これ以上の推論を許さないことが惜しまれる。

石質は風化の進んだ流紋岩である。

第2群石器：打・割器/石核類（第52～59図，図版Ⅶ上段右）

円礫を素材としてその一部に連続的に粗い打剝を加えた一群で，いわゆる礫器という言葉のもつイメージにぴったり当てはまる一群を一括した。打・割器および石核が含まれるであろう。4類型に区分して記述する。

Ⅰ類（No.102）

大型礫の一端で両面からやや大型幅広の剝片を取るもの。図示した位置関係に置けば，左から右方向に大きな打剝によって打面を設け，正面と両側面から剝片を取る石核と見ることができる。この解釈を択りたい。中粒の流紋岩を用いる。風化はほとんど受けていない。

Ⅱ類（No.103～109）

厚味のある中・大型円礫使用。いずれも，礫面から一方向にやや大型幅広の剝片を連続的に取る。作業面端は直線状に延びるものを主体とする。打面に相当する自然面と作業面とのなす角度（打面角）は直角に近い。石材は良質流紋岩の例（No.103・104・109），粗粒だが灰白色で黒い流紋が入り，あまり風化せずシャープなもの（No.105～108）とがある。No.107の剝片は，ここから取られたものと推定される。

取られた剝片の性質・打面角などの点で，全体に打器というよりは自然面打面の石核という趣がつよい。特に石材と剝片剝離作業ならびにこれによって剝離された剝片の特徴からみて，石核という印象が強い。

Ⅲ類（No.110～113）

大型の礫の一面から，連続的な幅広の剝片を取ったもの。打面角はⅡ類より鋭角である。石質はNo.110・111が砂岩，No.113が粗粒の流紋岩でいずれも風化はあまり進まずシャープな遺存状況を示

す。No.112は風化の進んだ流紋岩質の例である。打面角がより鋭角であって，よりシャープなエッジを有すること，打剝の加えられた縁辺の平面形が山形を呈する点で，Ⅱ類と相違すると同時にⅣ類の打器により近い特徴を示すと言える。

Ⅳ類(No.114～116)

小型の円礫の一端に片側から少数回打剝を加えたものと，礫の側面両側から打剝を加えたものとがある。打面と剝離面との成す角度はシャープである。石質は斑文のある暗紫色流紋岩(No.114)，灰白色に黒い流紋の入る流紋岩の例(No.115)および流紋岩(No.116)で，いずれも風化は進まずシャープである。典型的なチョッパーおよびチョッピングトゥール(横型)と言ってよいであろう。

以上のうち，Ⅱ・Ⅲ類は区別に感覚的判断以上のものを求めると難しいものがある。Ⅳ類はオルドワン型のチョッパーを念頭に置いた場合，真正のチョッパー，チョッピングトゥールと呼ぶものに近い。Ⅲ類の刃部平面形が山状・斜刃で，打点側の自然面と剝離面との成す角度がやや鋭角であるのも，Ⅳ類と共通する点とも言える。ただし，両者の間には礫の大きさの点で決定的な差がある。

打・割器／石核として一括りにしたものの中には，上記のように石核と打・割器を含むと解釈したが，この間の区別は明瞭ではない。その反面，第1群石器(斧状石器)と石材を比較すると，材質名は別にしてその質感が明らかに異なり，第1群石器とは別の範疇を成すという印象が強い。風化した流紋岩の一例(No.112)を除けば，風化による器面の鈍化はほとんど見受けられず遺存状態はシャープである。また明らかに第3群石器と質感の点で共通する例も多く(No.102～105・109)，石材の点でも石核と理解する方に傾く。

Ⅲ類には小型石器群中の剝片(第3・4・5群石器)に類例を見出しがたく，さらに第1群石器中においても同様であり，石核か打器かの判断に苦しむ。Ⅳ類と対比すると大きさの点で大きな違いがあり，Ⅲ類も含めて石核とみておきたい。しかし，Ⅳ類とても第1群石器との石質上の違いを考えると石核と見ることもできる。

いずれにしろ，礫核石器の区分は定義の問題に帰着する。ここでは，Ⅰ～Ⅲ類を石核，Ⅳ類を打・割器と見ておくが，このように見た場合，丹生遺跡群中の主要資料を構成する1－B地点北区出土資料中には，いわゆる打・割器は，ほとんど含まれていないと判断せざるをえないことになる。

第3群石器：流紋岩製(ナイフ形)石器関連(第60～69・73図)

まず資料構成の概略を述べる。ここに一括された一群は，第1・2群石器とは性格を異にし，石質も基本的に，黄色～灰色を呈する緻密質流紋岩から成る。ナイフ形石器・削器・各種石核を含み，剝片も表皮剝片を多く留めるとはいえ，技術的にも石質の点でも第1・2群とは無関係としてよい。

A)ナイフ形器(No.117)

石刃状縦長剝片を用い，打面を残し右側縁を斜めに整形加工した小型の例品である。

B)削　　器(No.136)

幅広・縦長の大型表皮剝片を用い，主として腹面側2側縁に2次加工を施した，先の尖る削器である。

C)剝　　片(No.118～134・137～148)

石質に良質流紋岩と，少量だが粗粒で風化が激しく第1群石器の石材と共通するものとの2群ある。しかし，後者も斧状石器の制作過程で副次的に生じたものではなく，それ自体の剝取を意図した目的的な剝片であると判断され，本群に含めた。

剝片は概略3グループとして捉えることが可能であろう。

イ）中央に稜を有し，石刃状ないし逆三角形の平面形を呈する概して縦長の剝片である(No.118～126)。頭部調整の念入りな例も目立つ。

ロ）背面側に礫面を多く留め，剝離打面から打ち剝がされた横長ないし幅広の厚い縦長剝片である(No.127～134)。

ハ）粗粒で風化の激しい石材を用いる一群で，横長ないし幅広の縦長剝片である(No.145～148)。背面側の剝離痕の特徴は一方面から連続的に剝離作業がなされるというよりも，求心的な方向での剝離作業によるものが主体を占める。No.135の接合例なども類例かもしれない。

この他に，大型厚手の表皮剝片がある(No.139・140・142)。後述する翼状剝片石核(No.152表採)が本来的共存関係にあるとするならば，このうちNo.142の例などは石核用素材の盤状剝片とみることもできる。

D)石　核(No.149～153・193)

石核は多様である。イ)表裏両面で立体的に剝離作業が行われる例(No.149)。No.153は本例と同様の資料とも考えられるが，風化が激しく判然としない。あるいは自然礫かもしれない。ロ)周縁部から求心的に剝離作業がなされる円盤状石核(No.150)。ハ)打面を90°に転移しながら，剝片剝離がなされた方柱状の石核(No.151)。ニ)翼状剝片石核(No.152)。以上の四者が区別される。

石核イ)・ロ)は剝片ハ)やNo.135の接合例に，石核ハ)は剝片イ)とロ)の一部に対応しよう。なお，石核ニ)に対応する剝片はない。

ナイフ形石器の素材剝片を石刃の範疇で捉えれば，石核中に対応する石核を欠くことになる。先端を欠くのではっきりしないが剝片イ)中の2点(No.118・119)の評価もむずかしい。石刃とみることも不可能ではないが，同類中の他の資料同様に単なる縦長剝片であり，しいて挙げれば対応する石核はハ)類とみておくべきかもしれない。このあたりは，ナイフ形石器の時間的位置の問題とも係わろう。

なお，翼状剝片石核に対応するナイフ形石器を欠くが，第3群石器が基本的に共伴関係にあるとみれば，ナイフ形石器に対照的な二つのグループがあることになり，本群石器の位置付けともからんで興味深い。なお地点不明ながら第1地区採集とされる典型的翼状剝片石核がある(No.193)。

第4群石器：チャート製石器関連(第70・71図)

残核には，1例(No.175)を除いて剝離作業に明瞭な規則性と企画性を窺えないが，剝片ともども共通した特徴を有する一群である。2次加工と考えられる微細な剝離痕を留める例もある。メノーの1例も本群に含めた(No.174)。

A)加工痕または使用痕のある石器(No.158・164・167・172・173)

幅広く明瞭な打面を留め，台形ないし逆三角形を呈する小型剝片の先端部に，連続する微細な剝

離痕を留める例(No.158・167)と楕円形の剝片の一部に不規則な2次加工と覚しき剝離痕を有する例とがある(No.172・173)。前者は加工痕の位置と加工痕の性状に規則性を窺うことができる。

B)剝　　片(No.154～157・159～163・165・166・168～171・174)

2次加工痕・使用痕を具える例も含めて記述する。

剝片には明らかな縦長の例(No.154～156・160)もあるが，全体に寸づまりの縦長から若干横長に傾く例を主体とする。幅が広く厚い打面を留め，台形ないし三角形の平面形を呈する小型の剝片という点に特徴がある。

C)石　　核(No.175～181)

石核として取り扱う資料中には，明瞭に剝離過程を推測される例は1点(No.175)しかない。これは亀甲状ないし多辺形の正面観を呈する石核の，上辺付近の一端に最終打面が設けられている。剝片剝離作業時における打撃は垂直方向というよりも，石核先端付近で交叉するか求心的な傾向を窺わせる例である。No.177は表裏両面で他方向の打撃が繰り返された結果生じたもののようであり，No.180もこの類例と見做しうるかもしれない。その他の諸例は現存状況からは残核とも単なる裂片とも判断のつけかねるような例である。

しかし，ここで示される石核の特徴は，剝片の特徴とよく一致している。すなわち剝片の中に水平の幅広い平坦な打面を有する例と，山形を呈する複剝離打面の稜上の一点に加撃したと考えられる例(No.174)の2者は，それぞれNo.175・177の石核に対応すると考えることができる。第4群石器全体は，接合例こそないが同一個体別資料を含む一連の作業工程の中で生じたと理解されるものである。

第5群石器：安山岩・黒耀石製石器関連(第72図)

姫島産の黒耀石およびガラス質安山岩を主体とする。石鏃・石核・ピエス・エスキーユからなる。

石鏃(No.182)は二等辺三角形の平基無茎石鏃。石核(No.183・191)は表裏両面で剝離がなされ楔状の薄い残核となっている。No.184はピエス・エスキーユと理解される。その他はいわゆる不定形剝片である。

4．斧状石器の類型間関係

槌石を別にして斧状石器を八つの類型に仮に区分してみた。しかし，この8類型間には形態差に反して強い共通性があり，素材形態に応じて2次加工技術を用い分けてはいるが，全体的な統一性を有する一連の同一石器群として理解できる可能性が十分に有る。以下の諸点についてこれを検討しておこう。

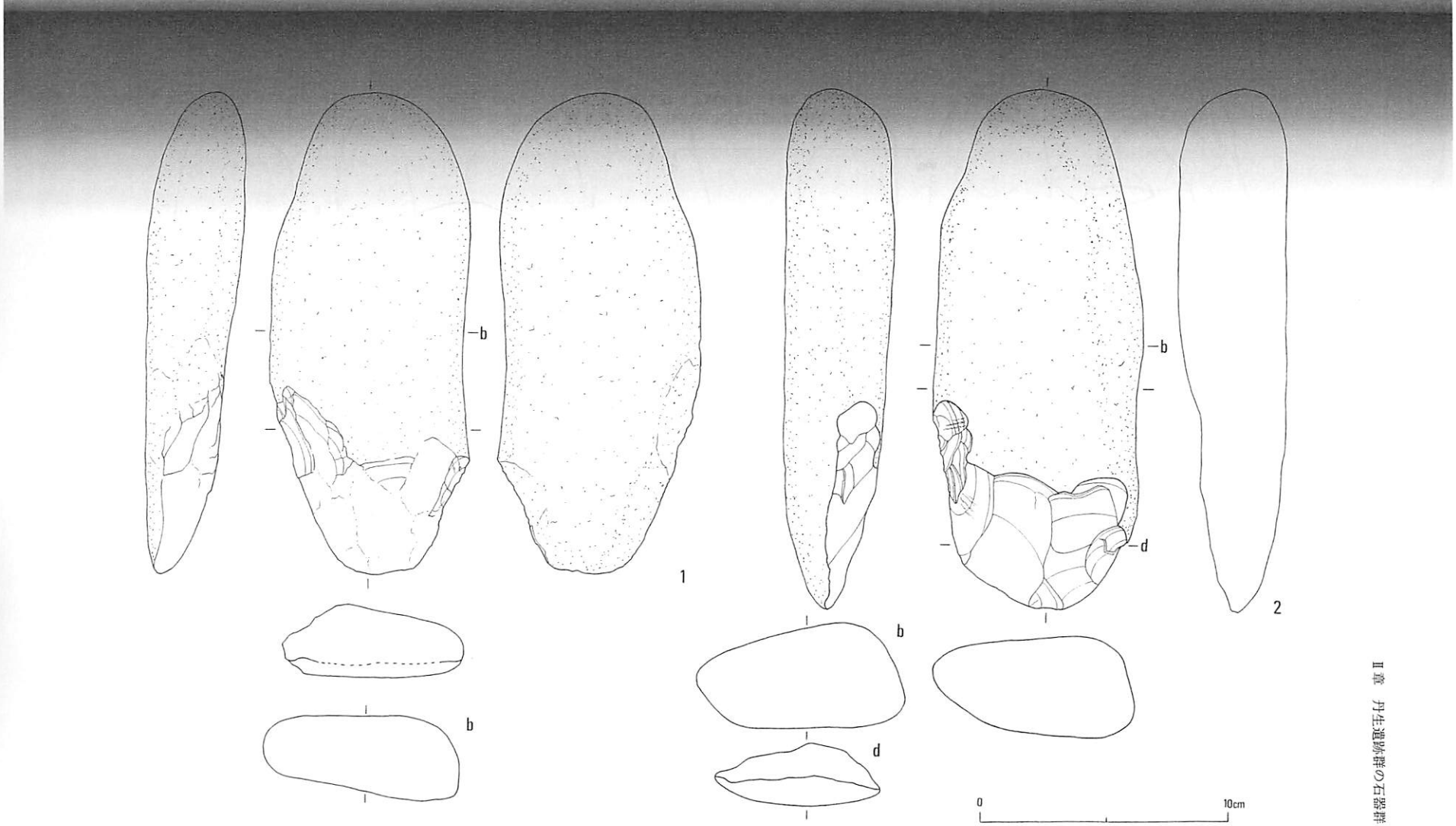
なお，類型間比較の前に分類について若干問題のある点について補足しておく。

1）類型間の異同(第74図)

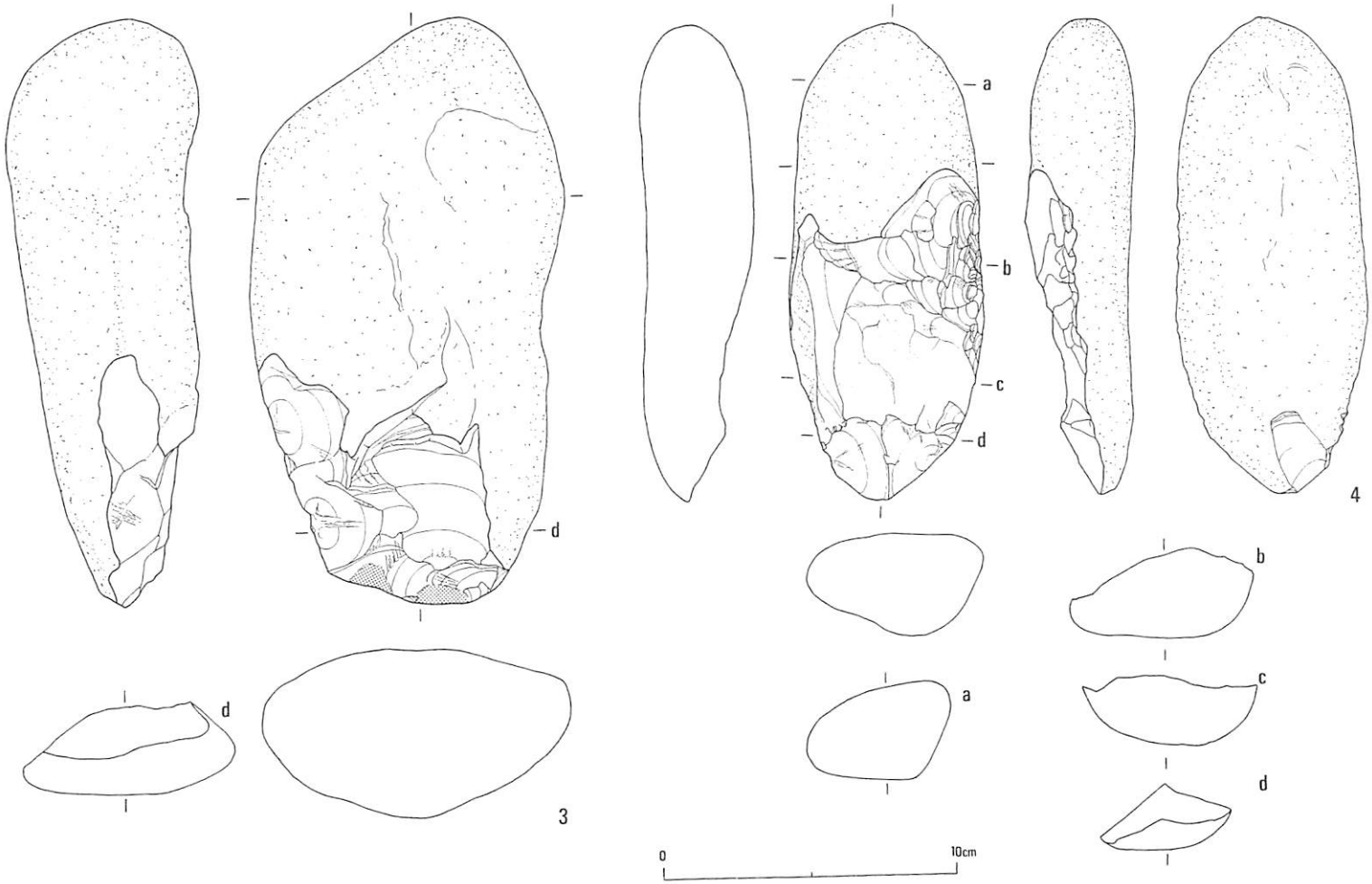
A)　Ⅰ類中には，加工が表面過半に及ぶ例がある(No.4・7)。この点は，片面全面加工のⅤ類と共通移行する要素かもしれない。

B)　Ⅲ類の1例(No.44)は，素材形態と加工状態からは，Ⅰ類とすべきかもしれない。

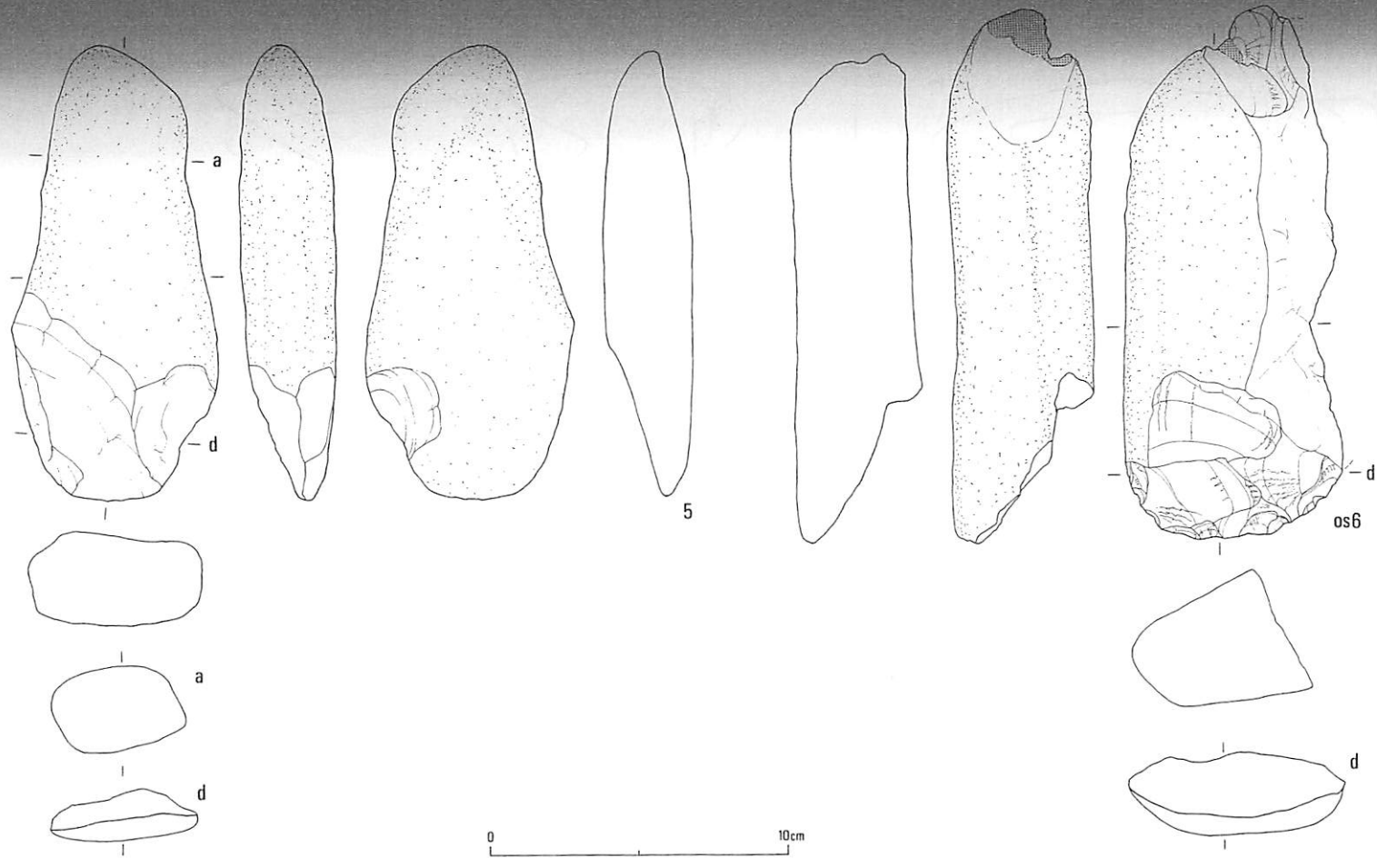
C)　Ⅲ類(No.29)・Ⅴ類(No.52)の各1例は下底が極端な凸状を呈し，礫側面部を下底(裏)面におい



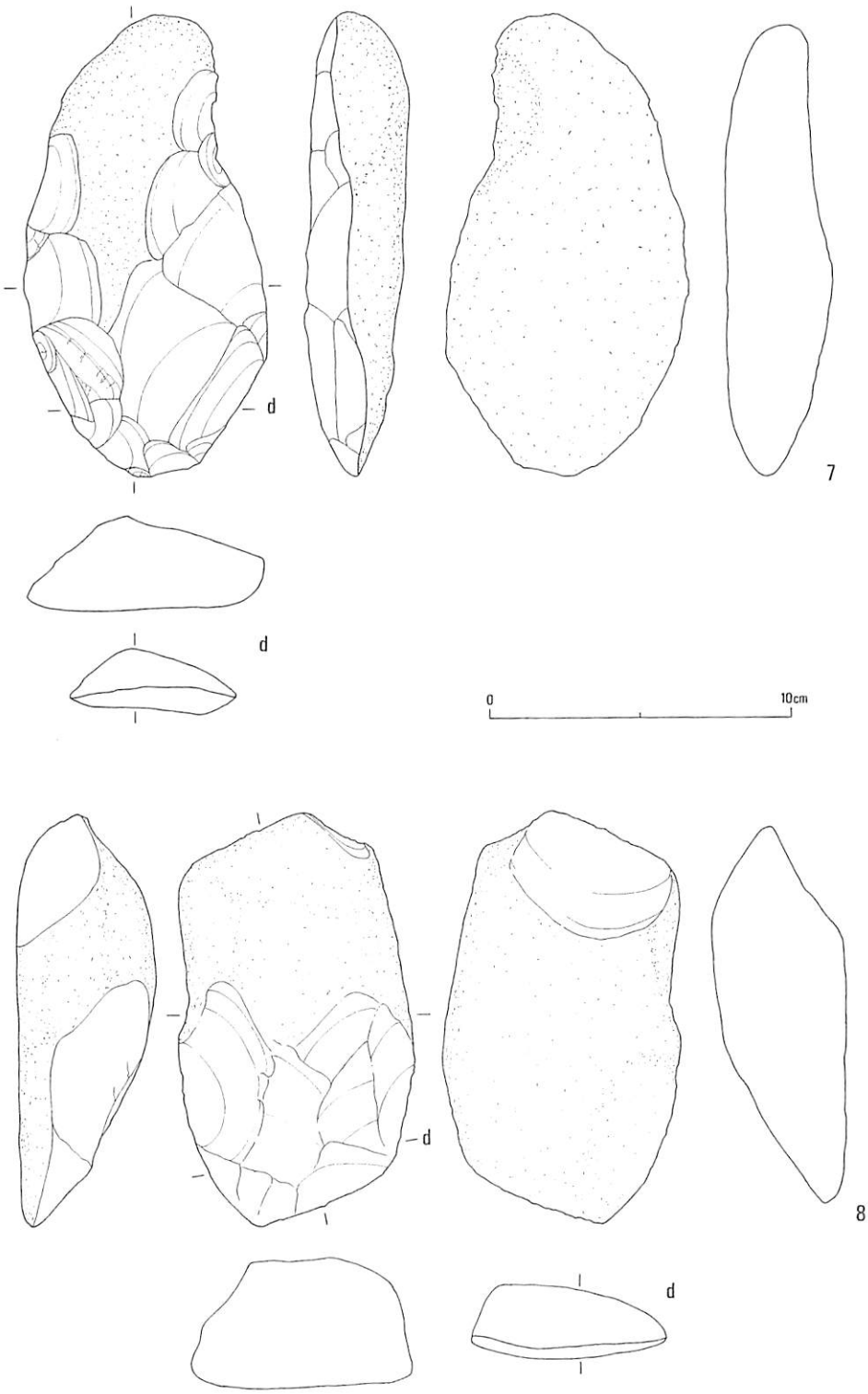
第７図　１－Ｂ地点北区石器実測図　1）
第１群：斧状石器　Ⅰ類



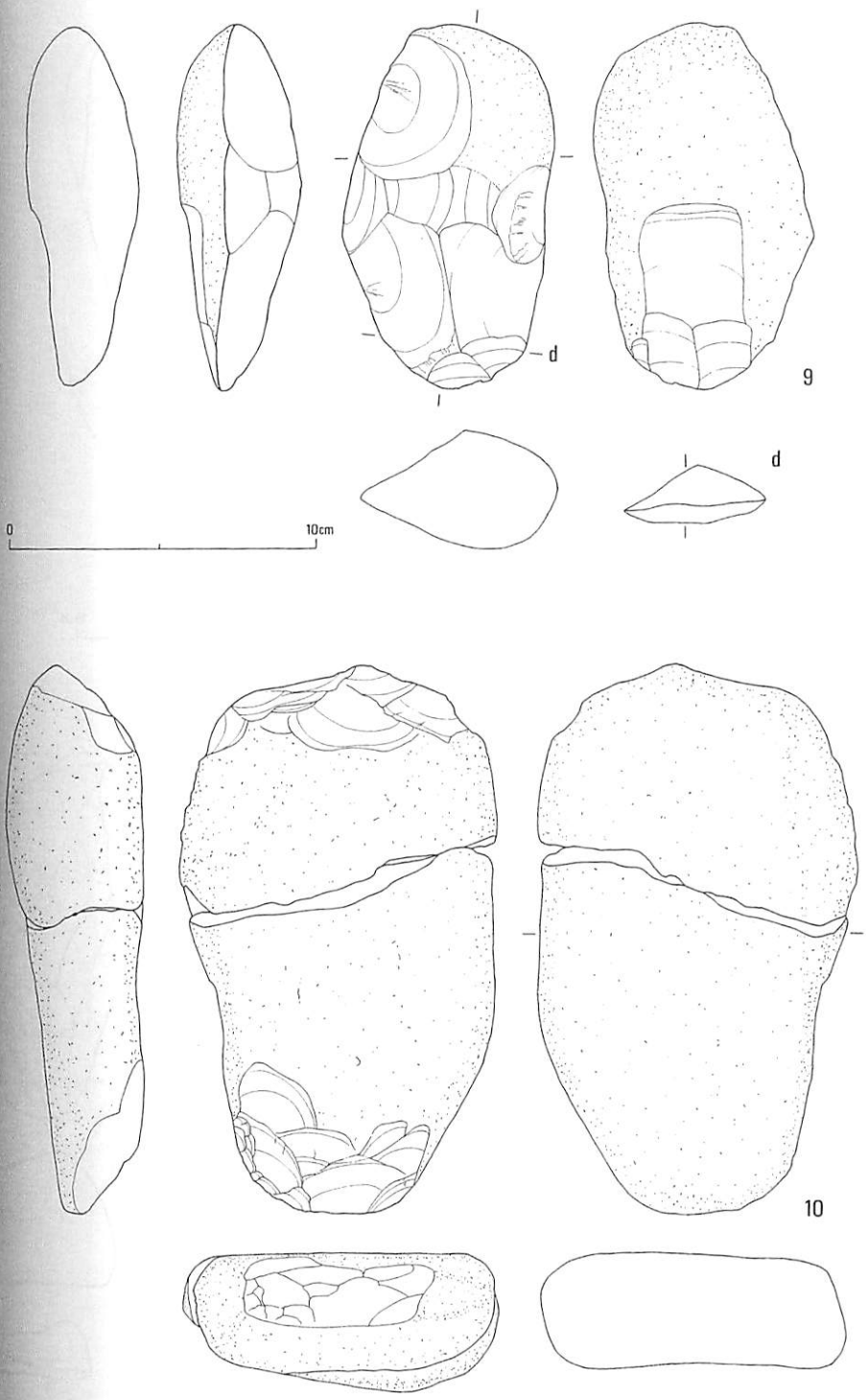
第8図　1－B地点北区石器実測図　2）
第1群：斧状石器　Ⅰ類



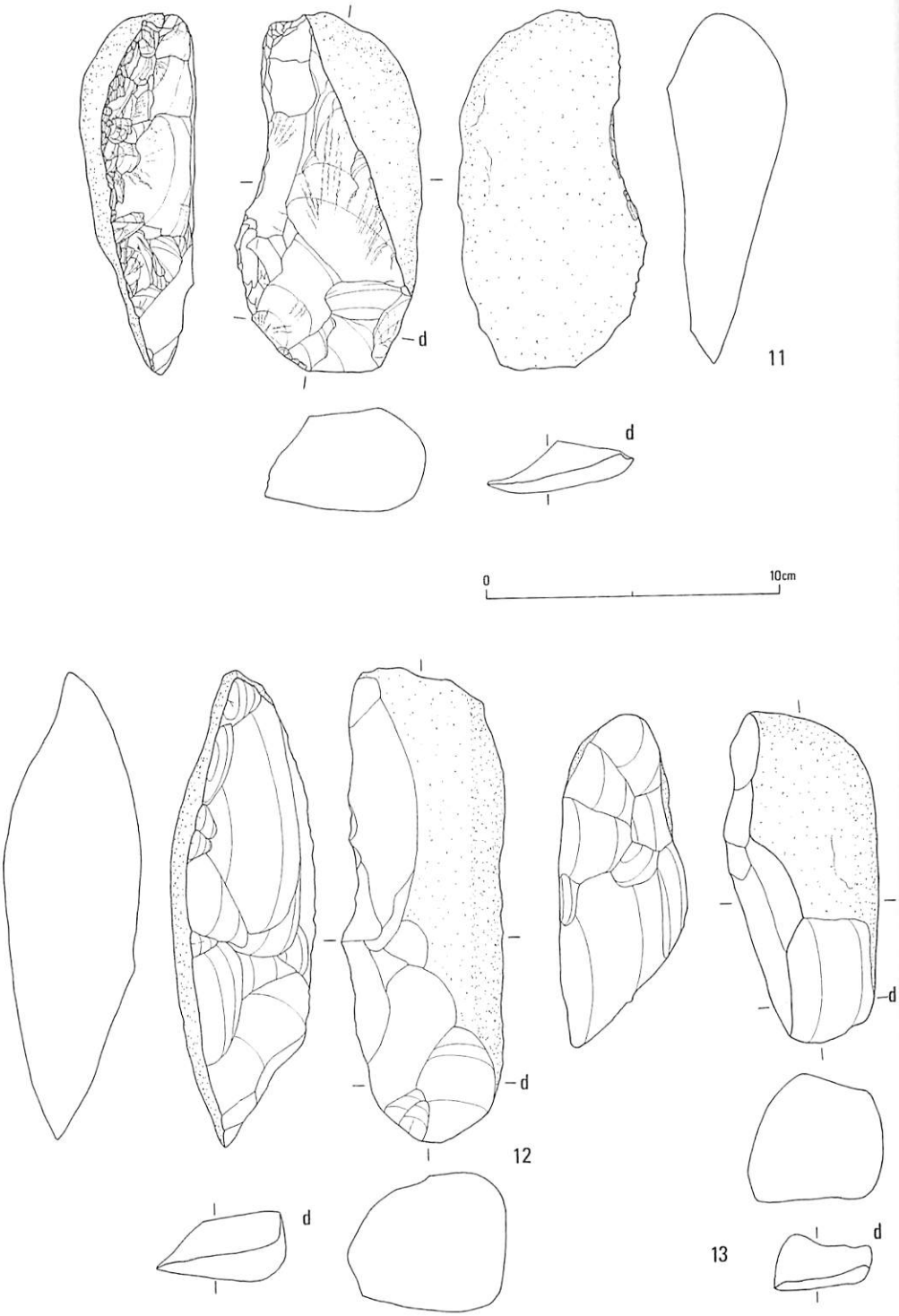
第9図　1－B地点北区石器実測図　3）
第1群：斧状石器　Ⅰ類



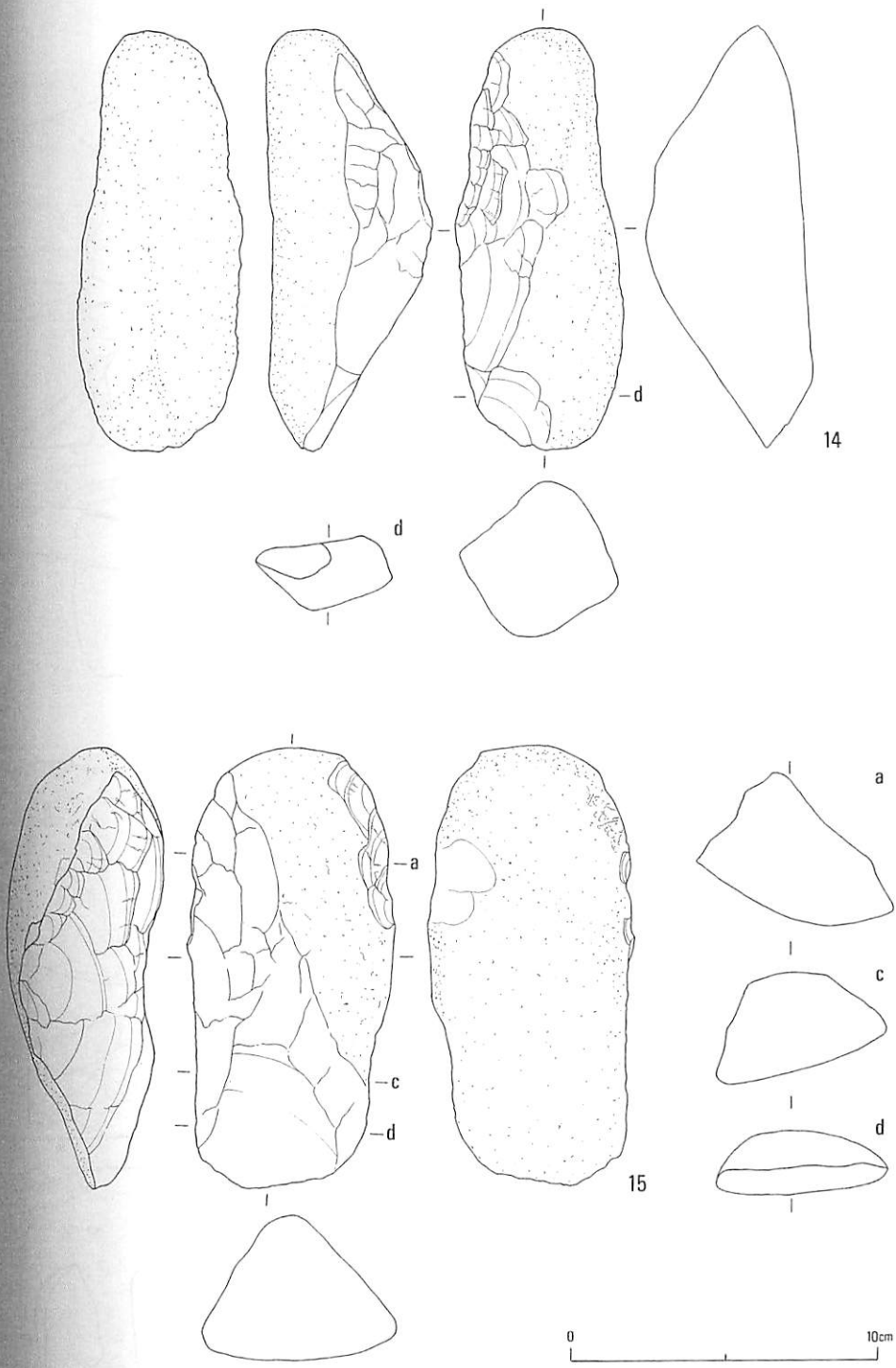
第10図　1－B地点北区石器実測図　4)
第1群：斧状石器　I類



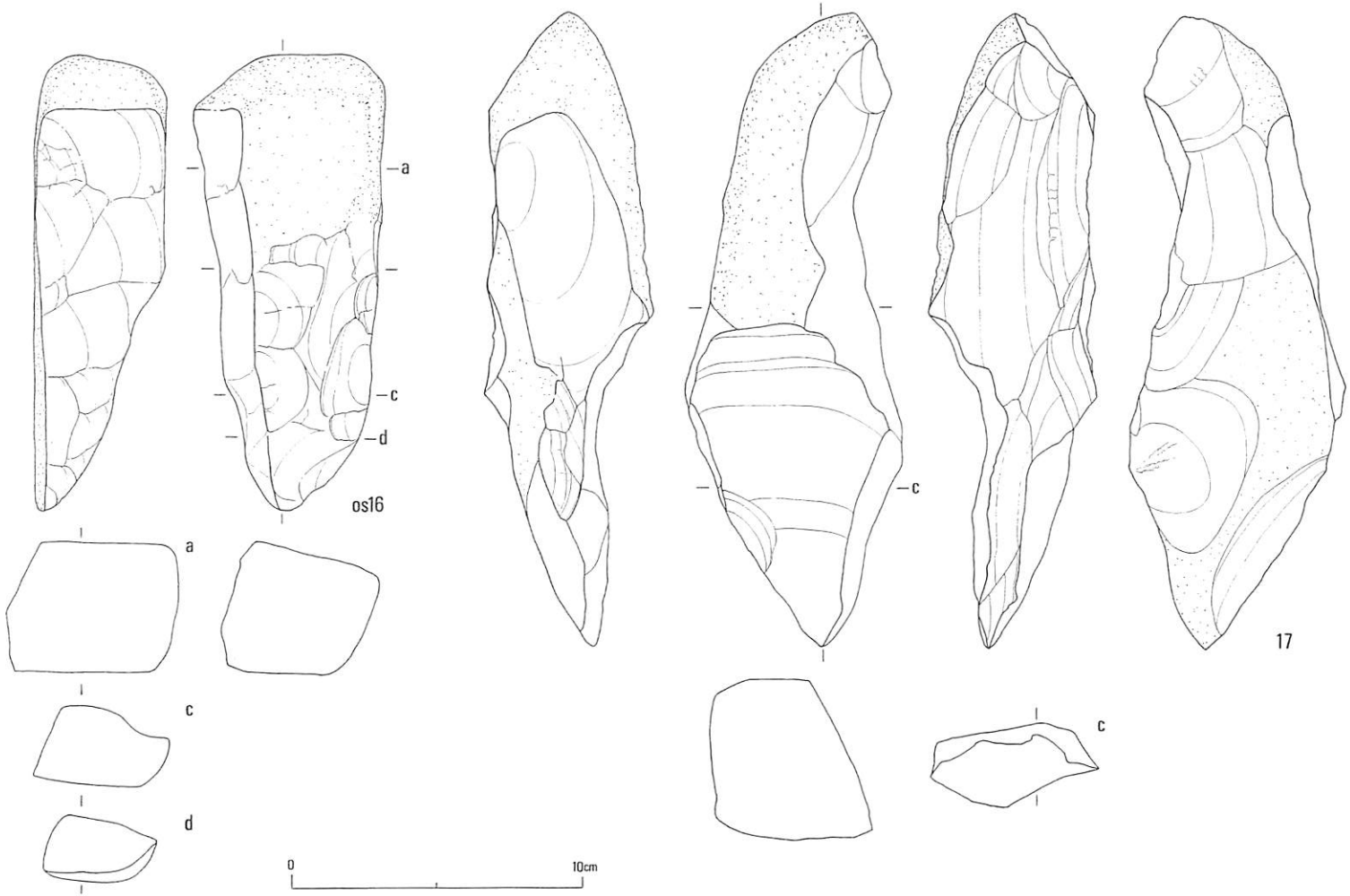
第11図　1－B地点北区石器実測図　5）
第1群：斧状石器　Ⅰ類



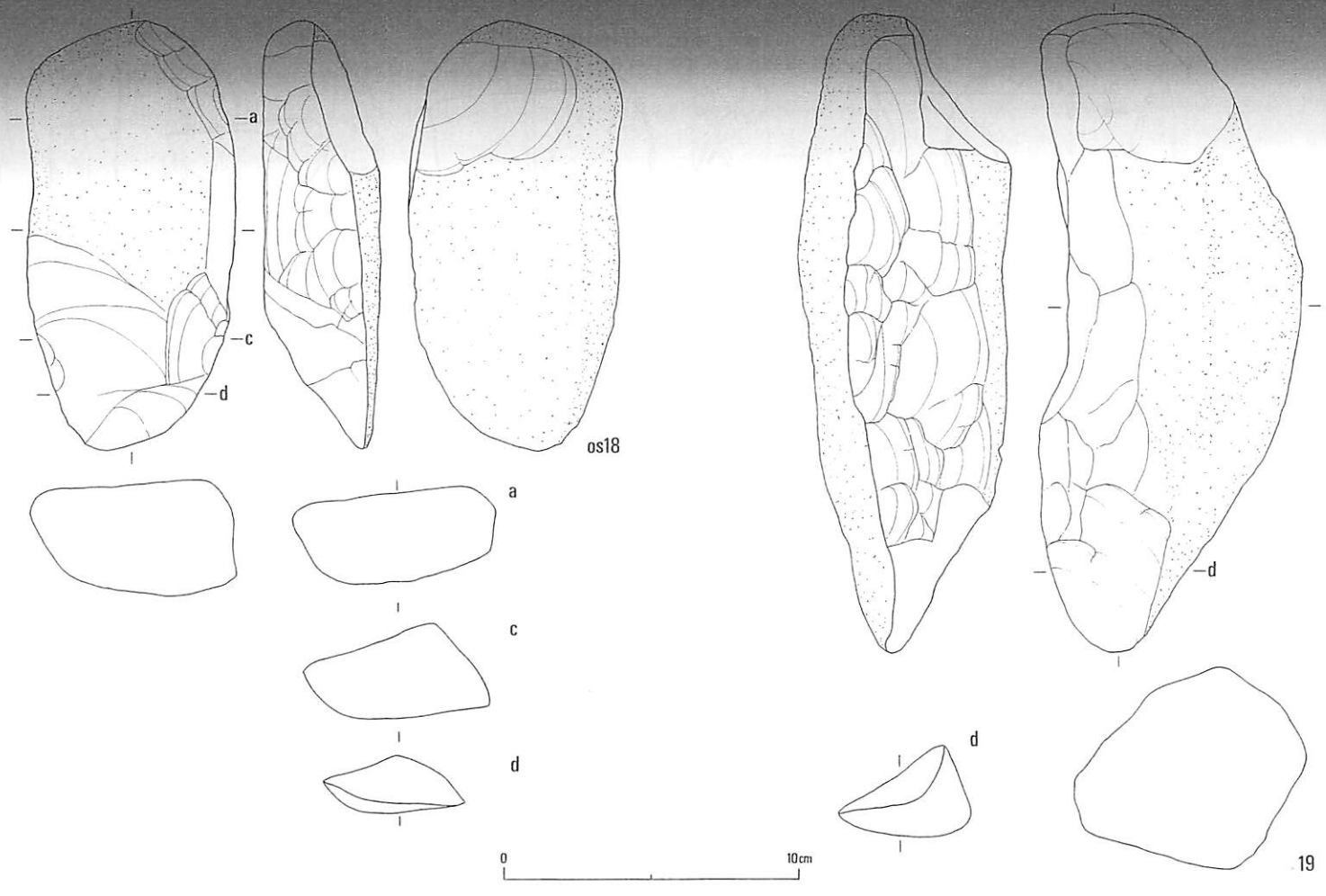
第12図　1－B地点北区石器実測図　6）
第1群：斧状石器　Ⅱ類



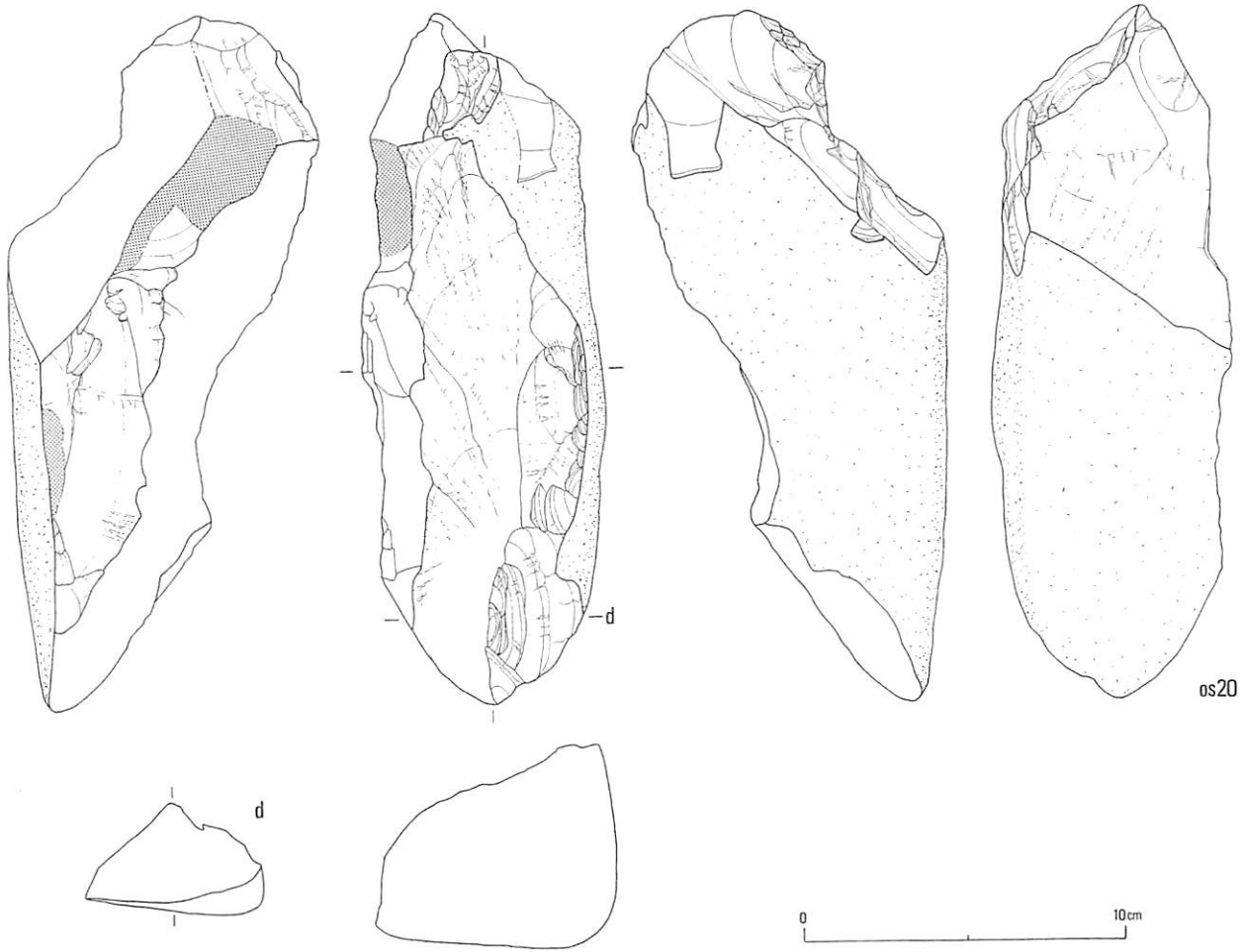
第13図　1－B地点北区石器実測図　7）
第1群：斧状石器　Ⅱ類



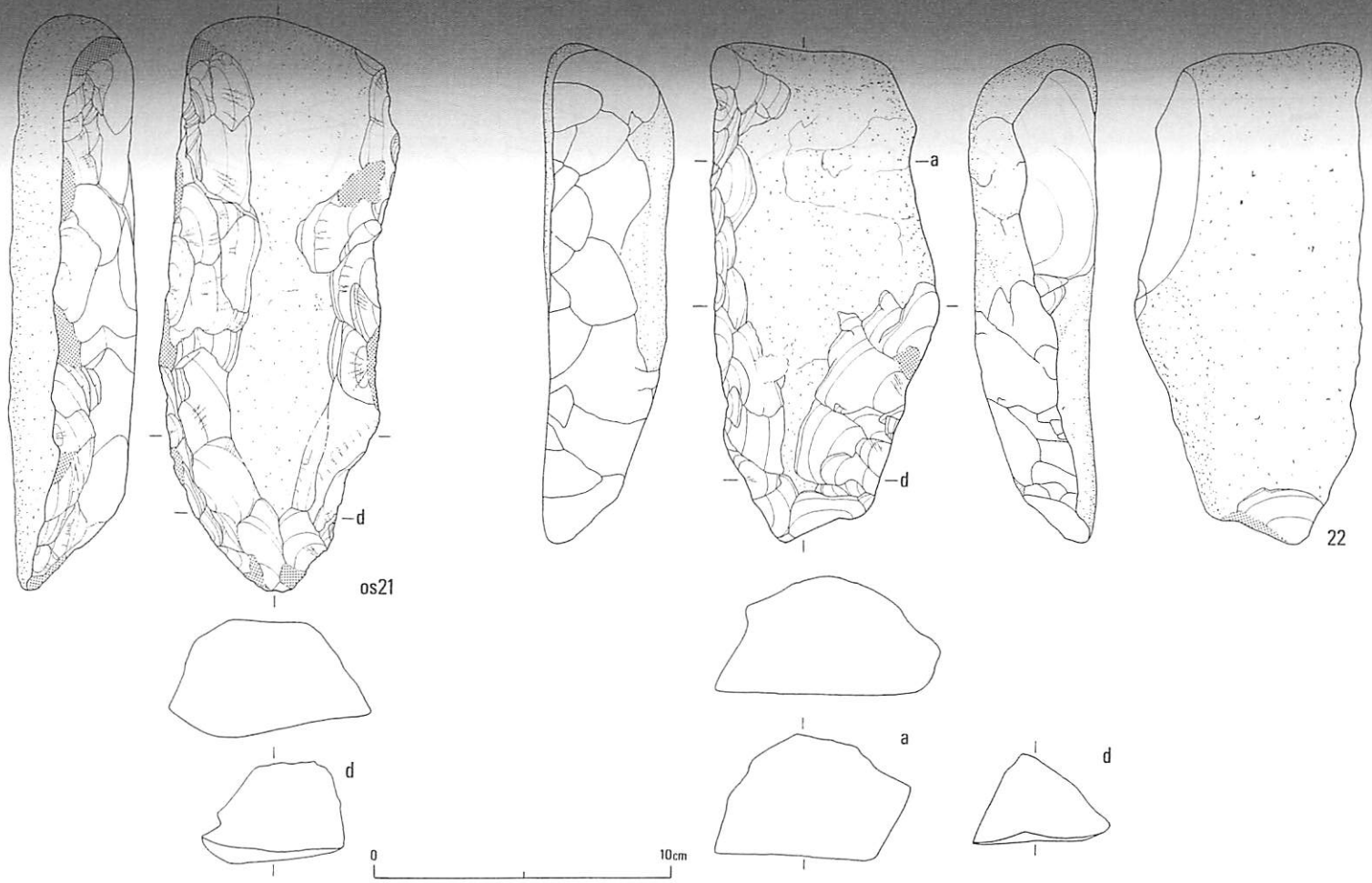
第14図　1－B地点北区石器実測図　8）
第1群：斧状石器　Ⅱ類



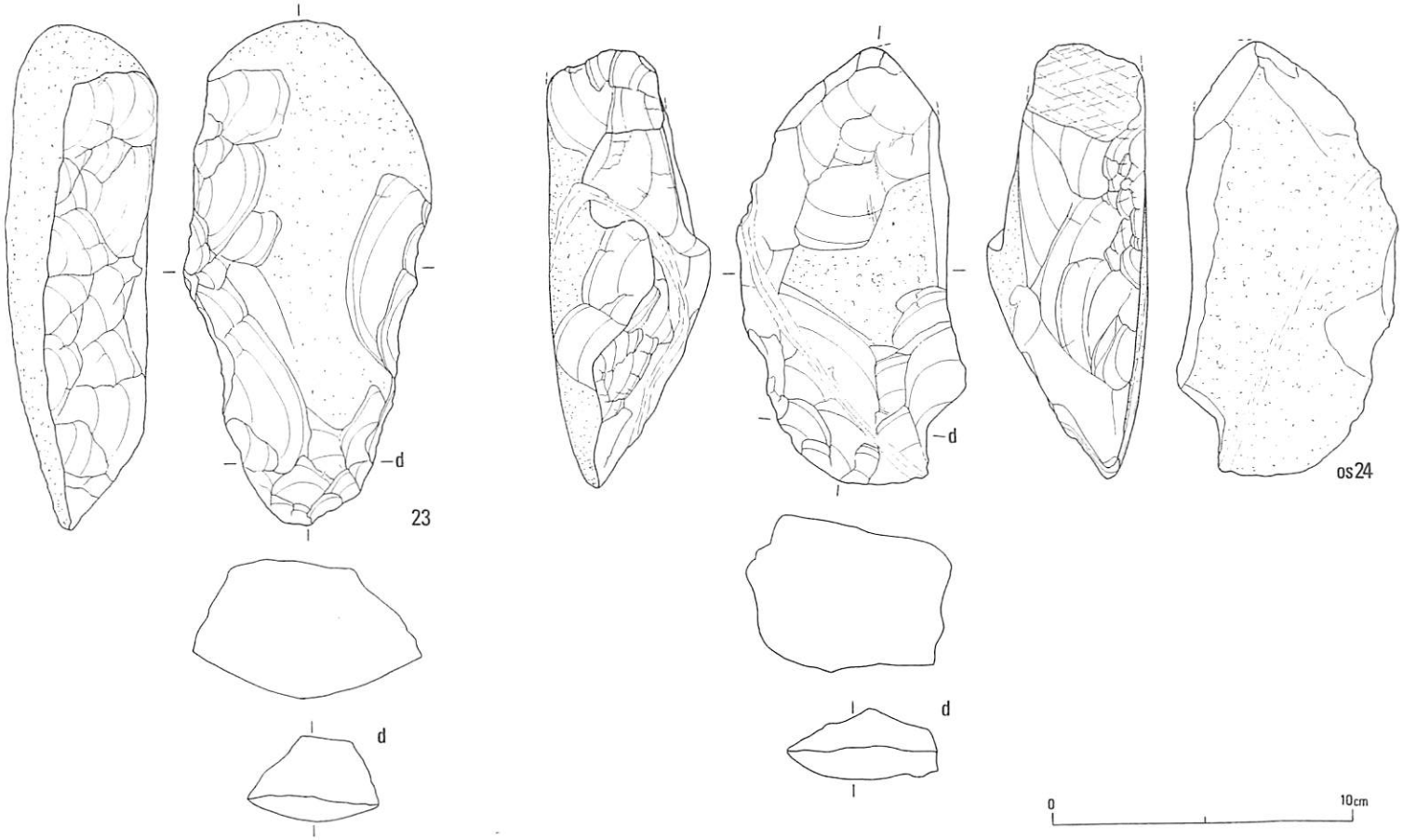
第15図　1－B地点北区石器実測図　9）
第1群：斧状石器　Ⅱ類



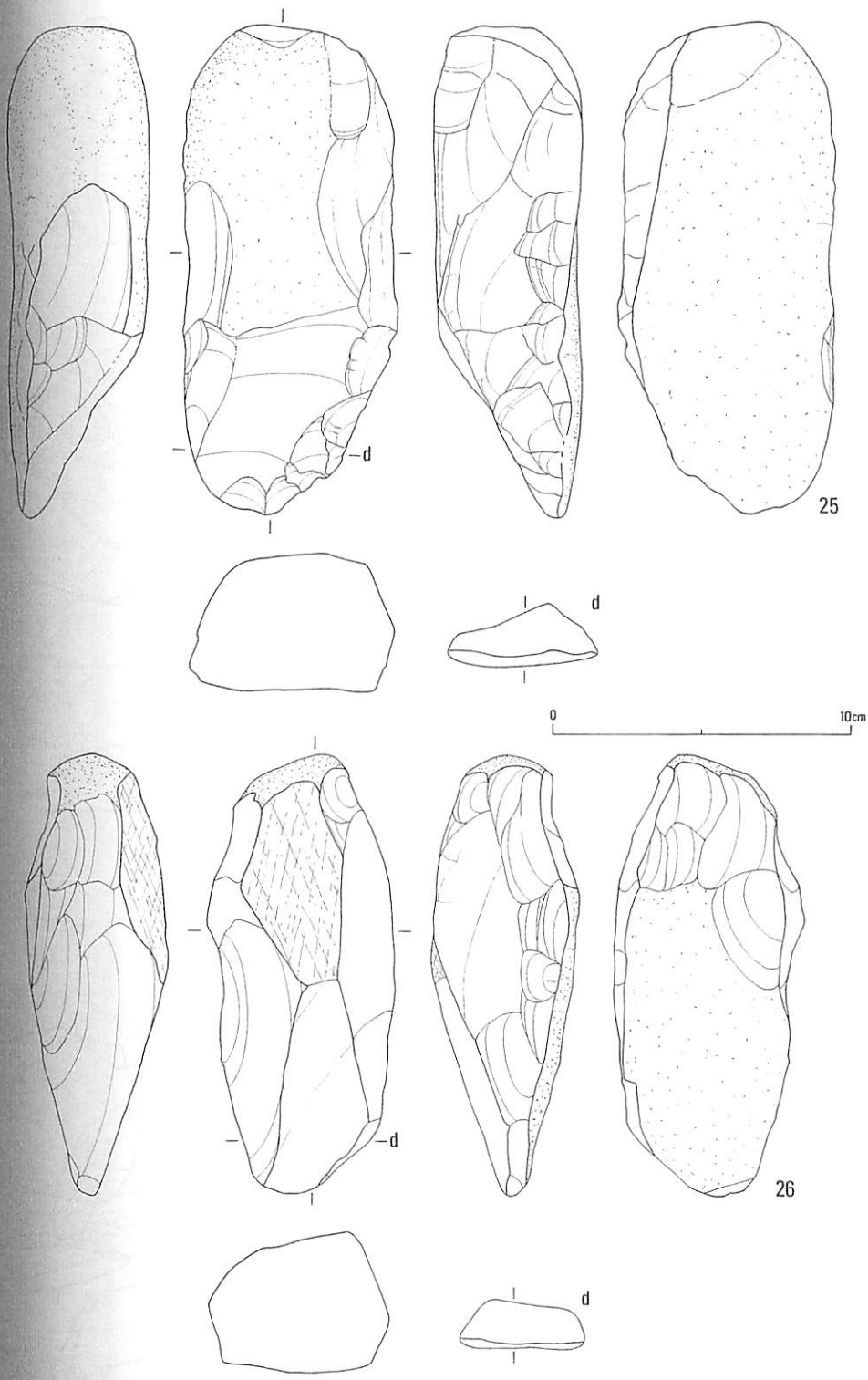
第16図　1－B地点北区石器実測図 10)
第1群：斧状石器　Ⅱ類



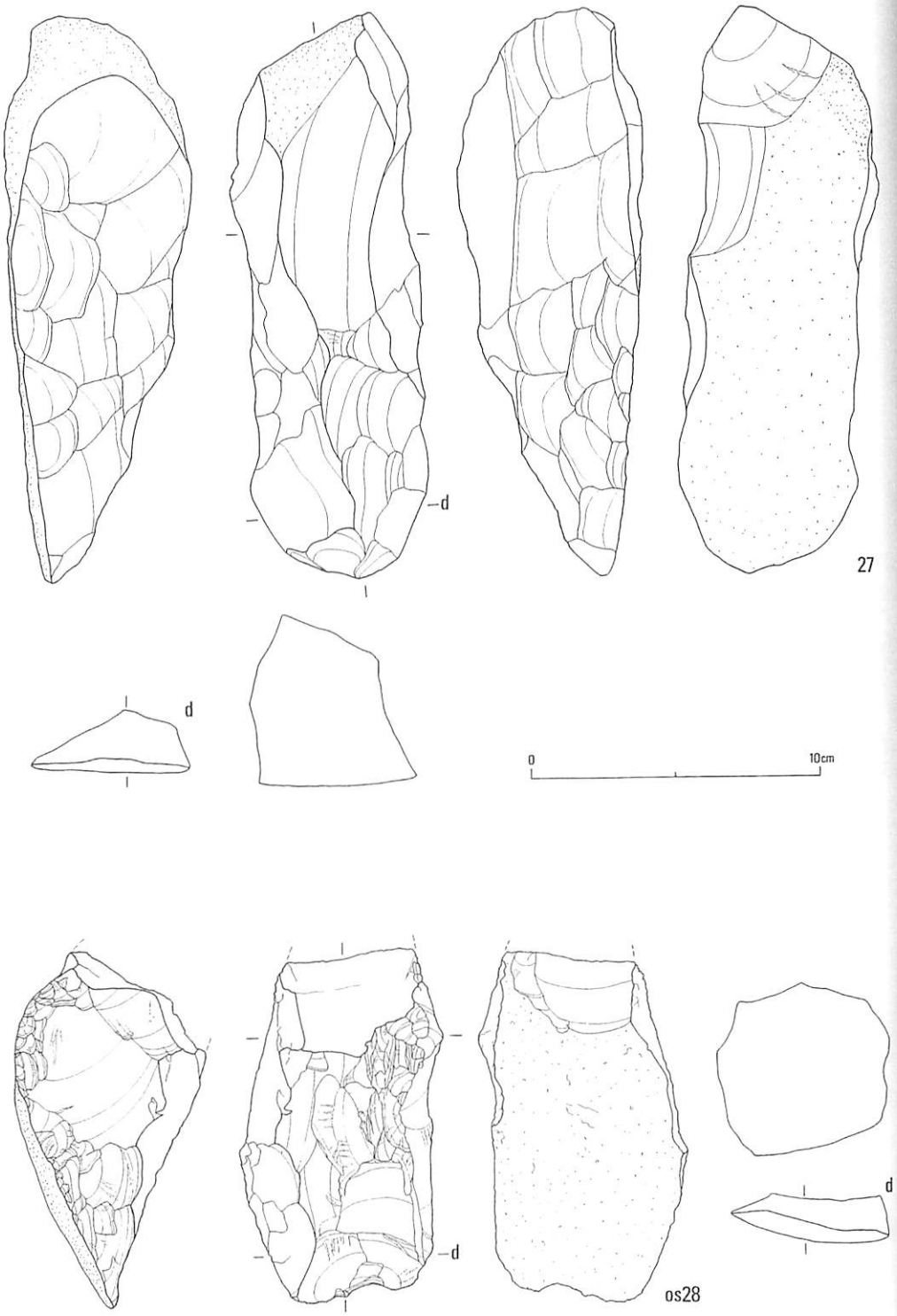
第17図　1－B地点北区石器実測図 11)
第1群：斧状石器　Ⅲ類



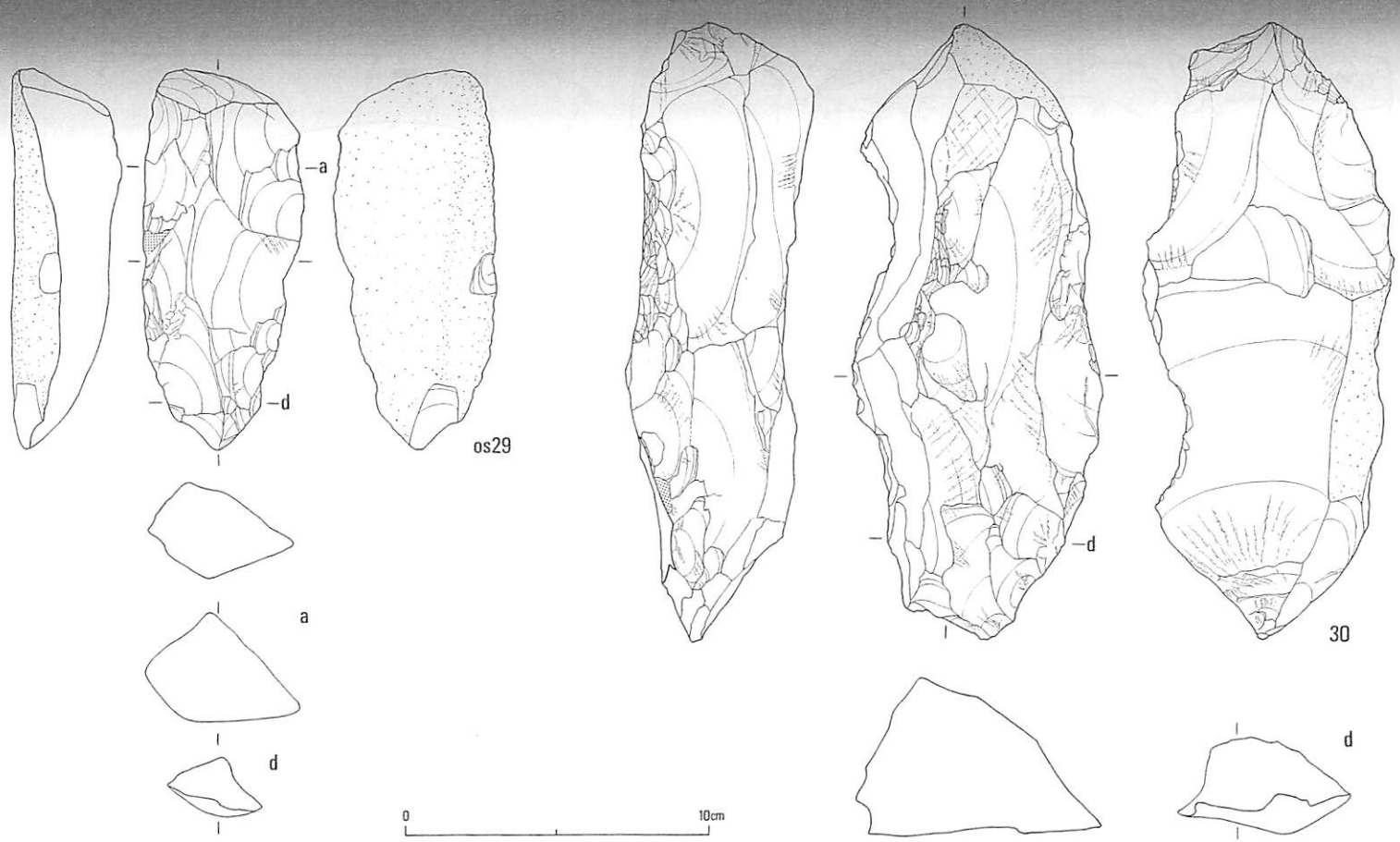
第18図　1－B地点北区石器実測図 12)
第1群：斧状石器　Ⅲ類



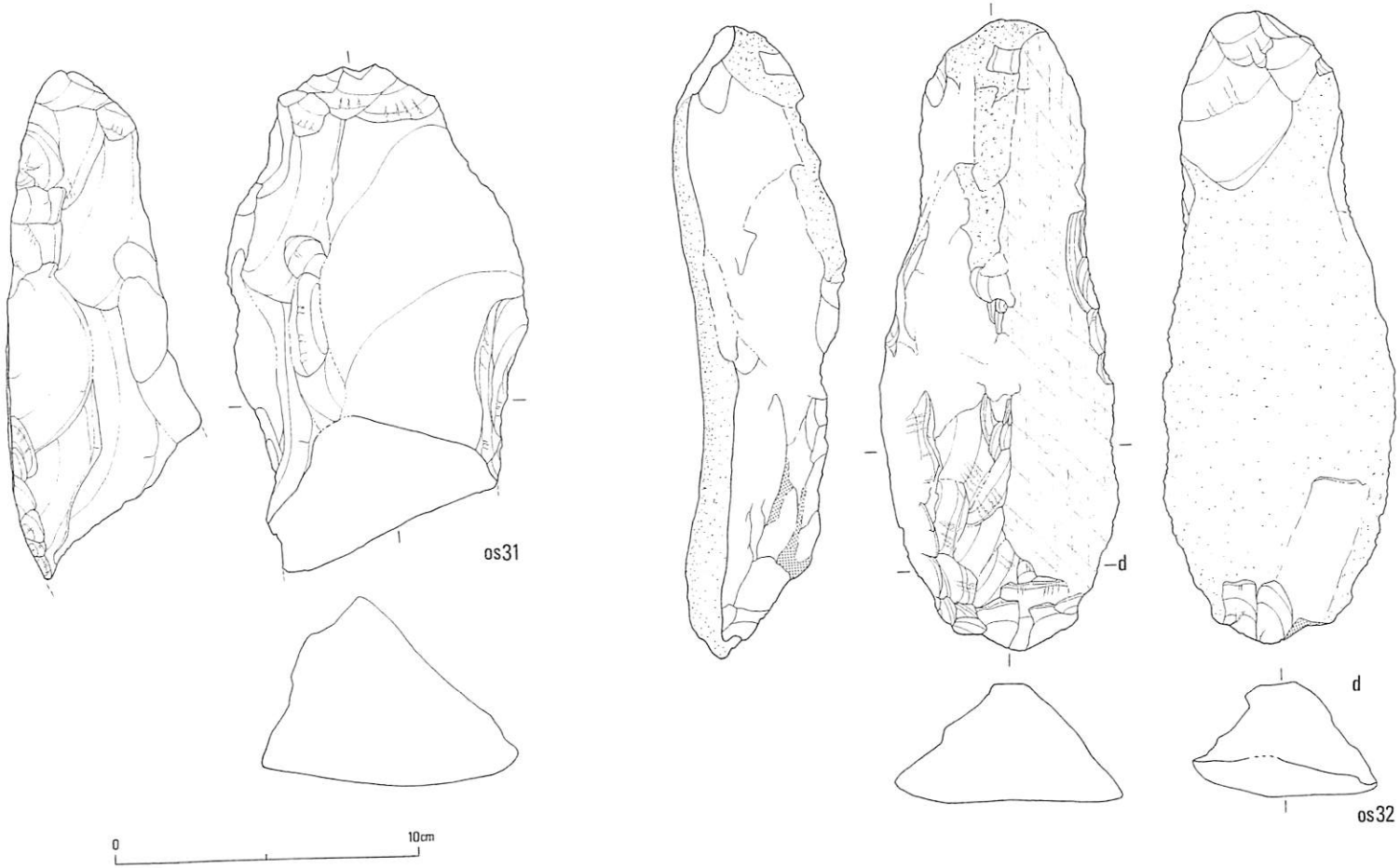
第19図　1－B地点北区石器実測図 13)
第1群：斧状石器　Ⅲ類



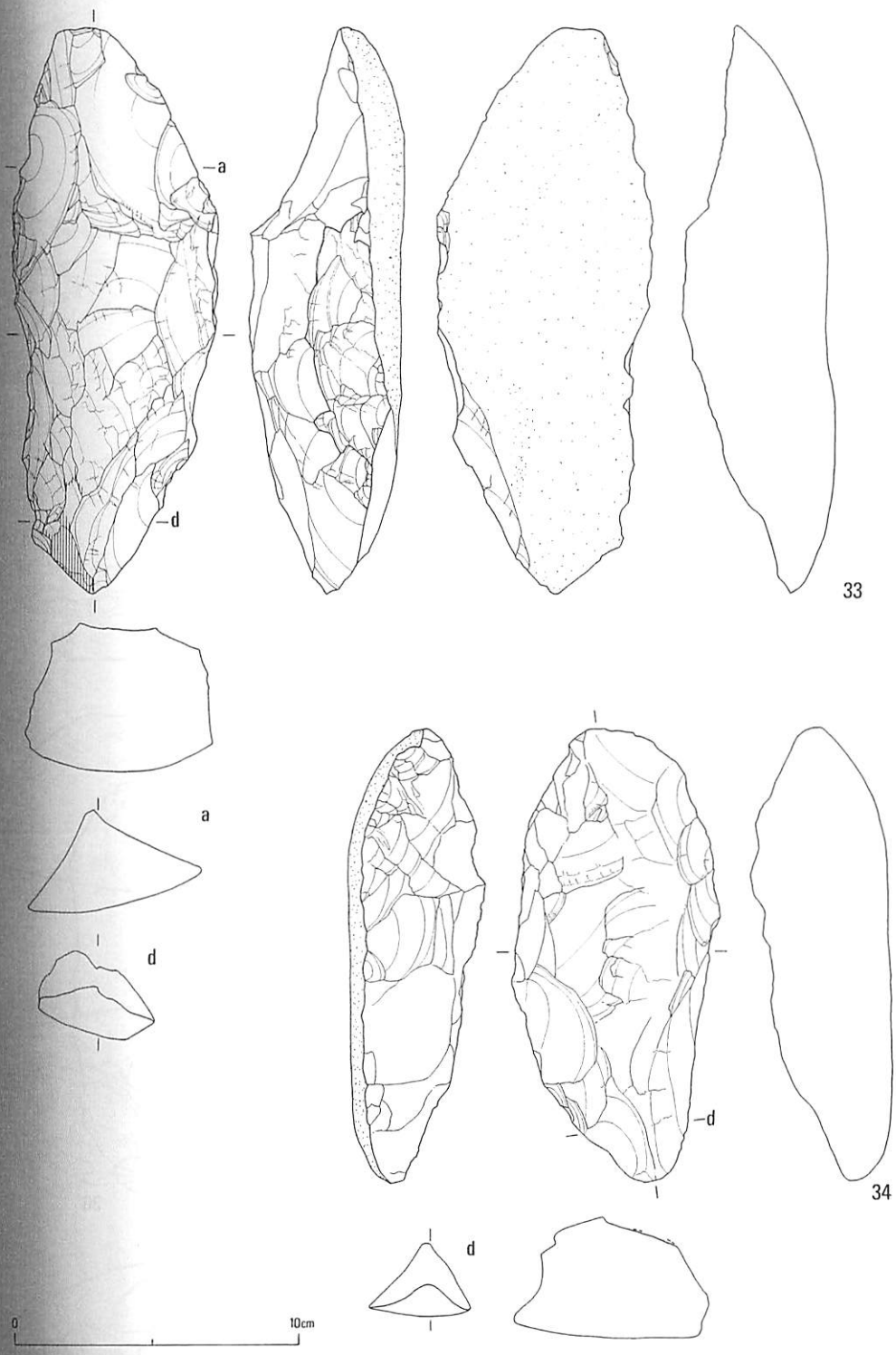
第20図　1－B地点北区石器実測図 14)
第1群：斧状石器　Ⅲ類



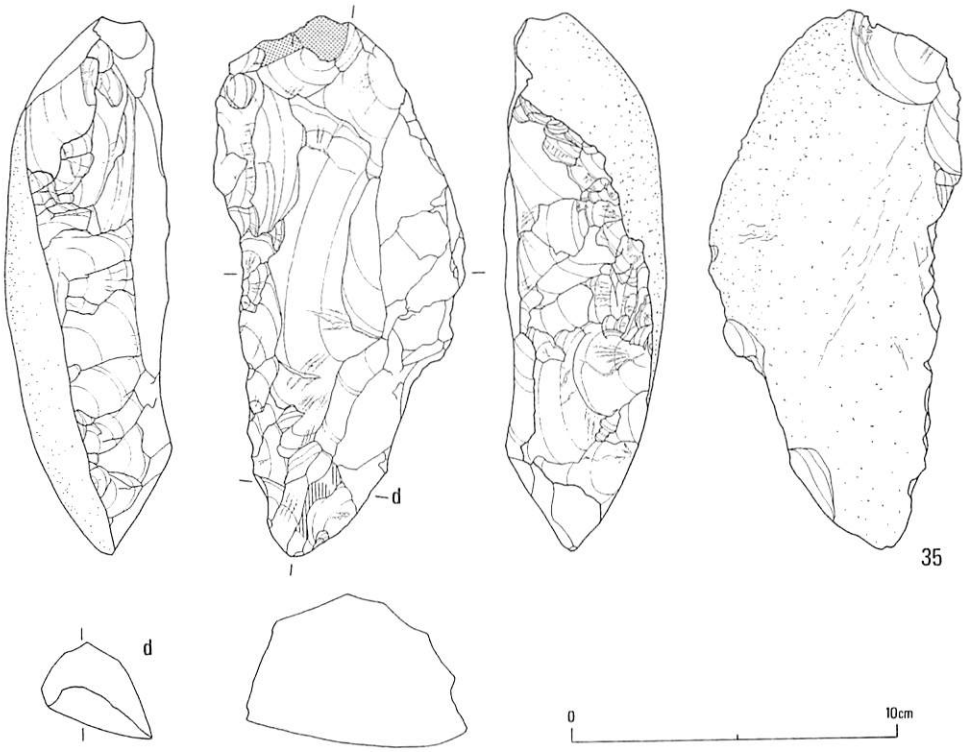
第21図　1－B地点北区石器実測図 15）
第1群：斧状石器　Ⅲ類

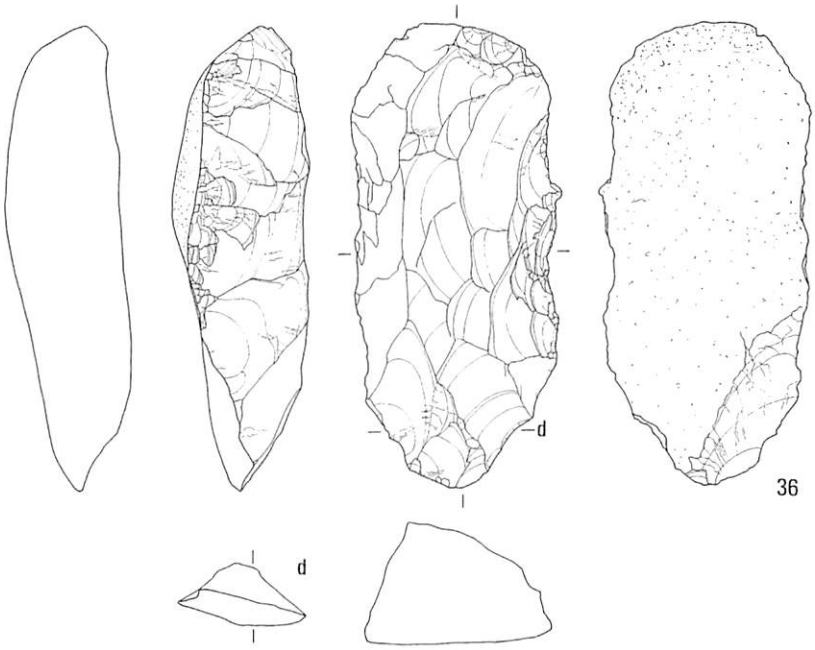


第22図　1－B地点北区石器実測図 16)
第1群：斧状石器　Ⅲ類

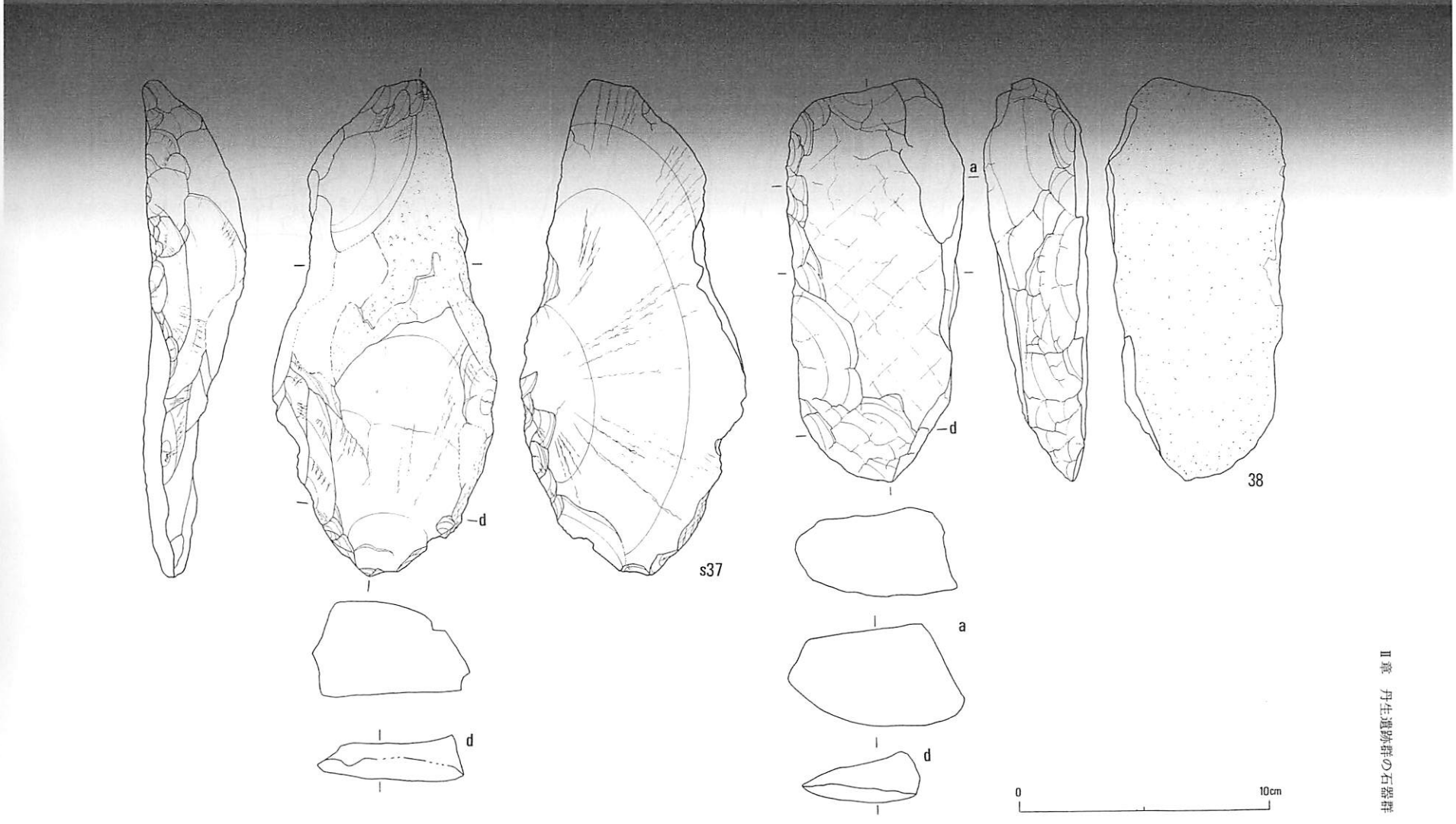


第23図　1－B地点北区石器実測図 17）
第1群：斧状石器　Ⅲ類

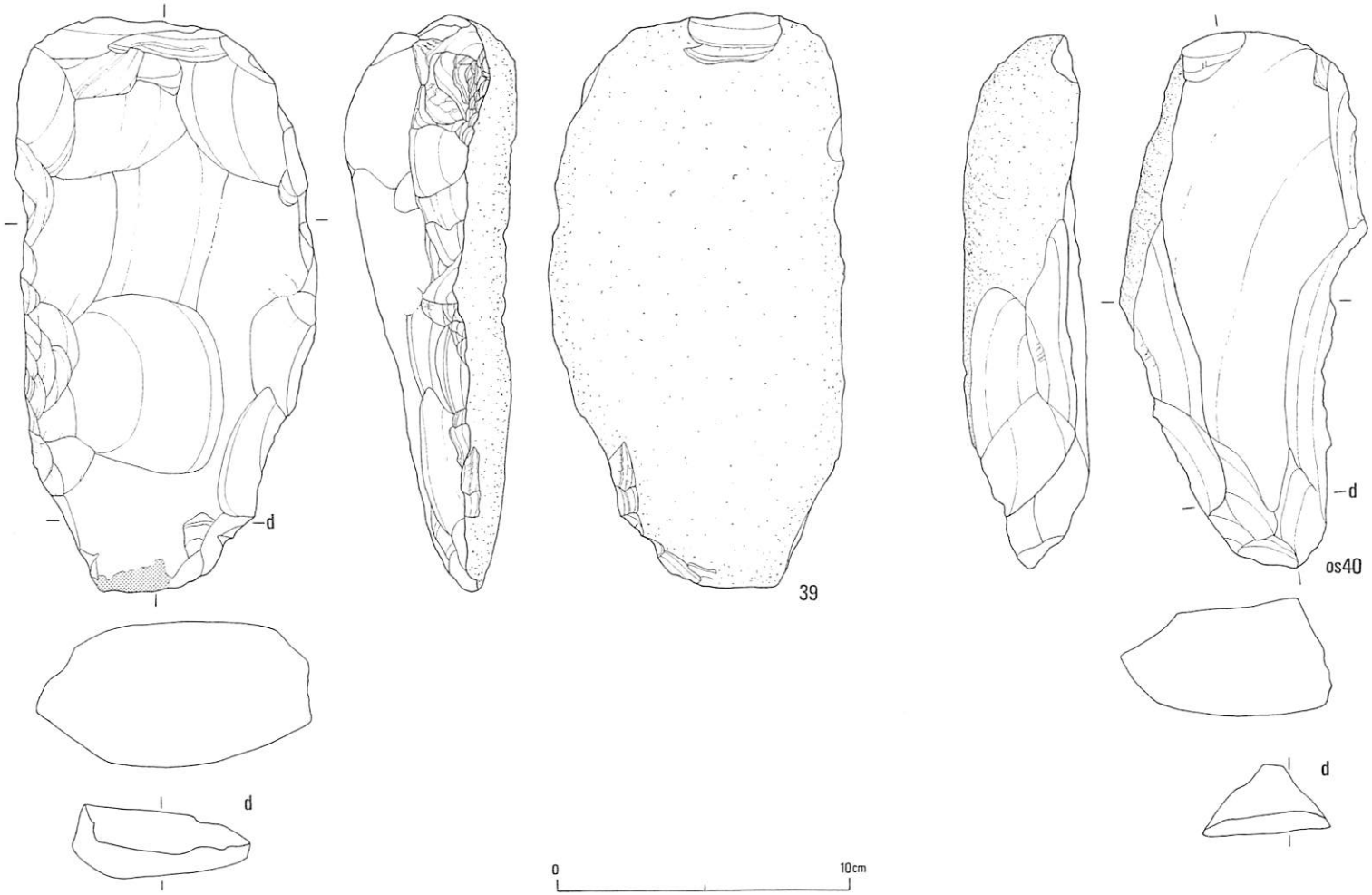




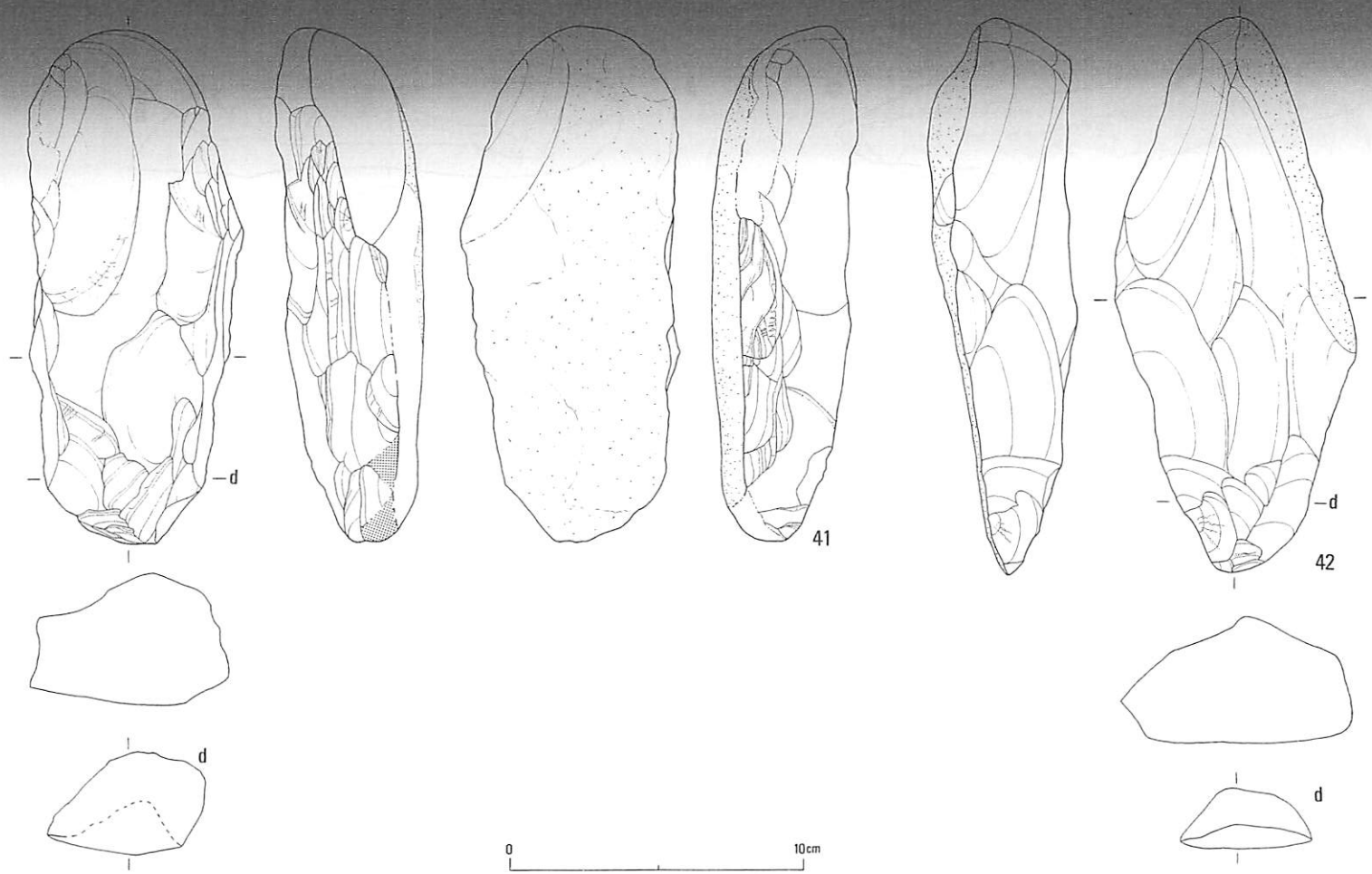
第24図　1－B地点北区石器実測図 18)
第1群：斧状石器　Ⅲ類



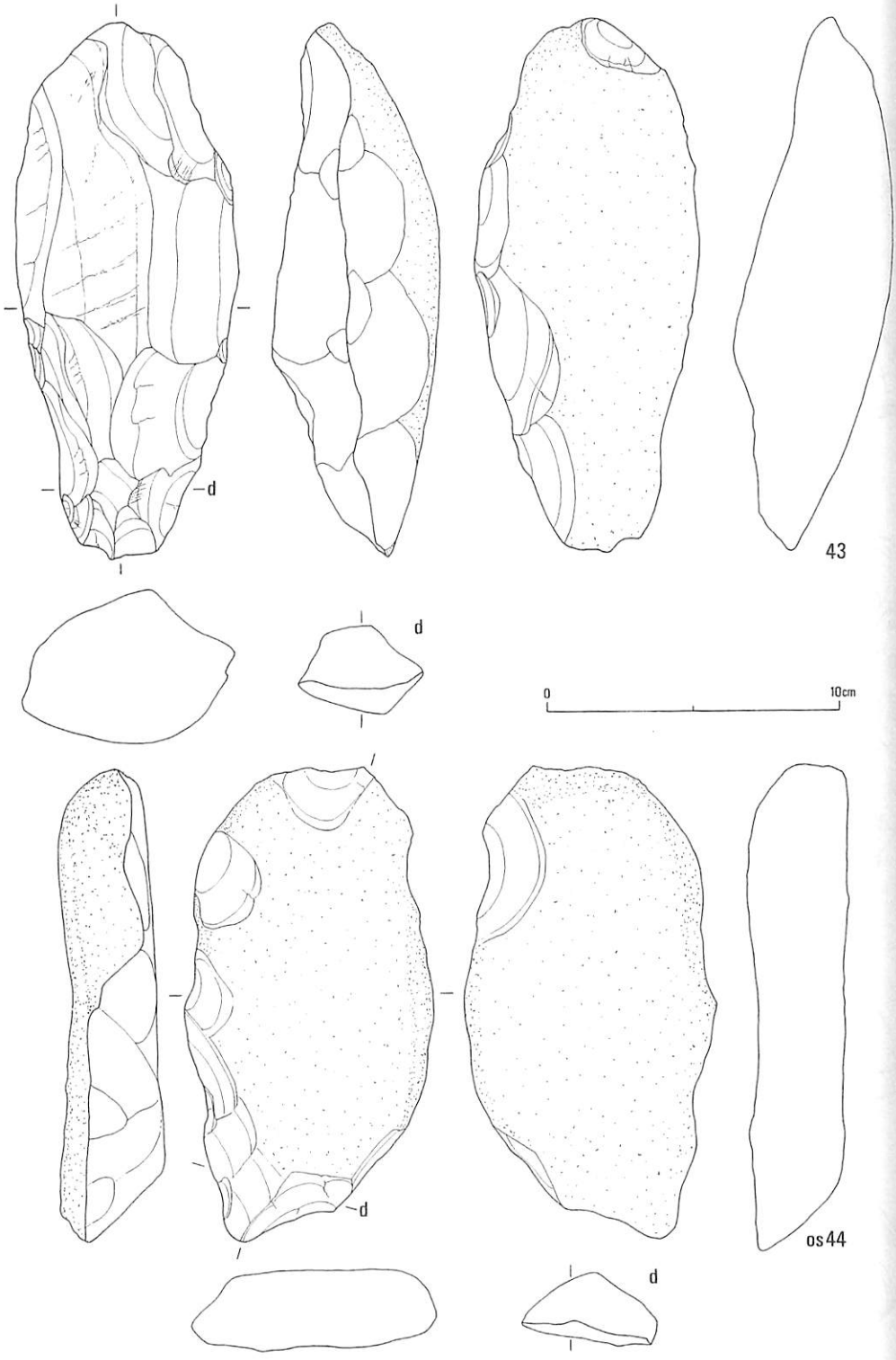
第25図　1－B地点北区石器実測図 19）
第1群：斧状石器　Ⅲ類



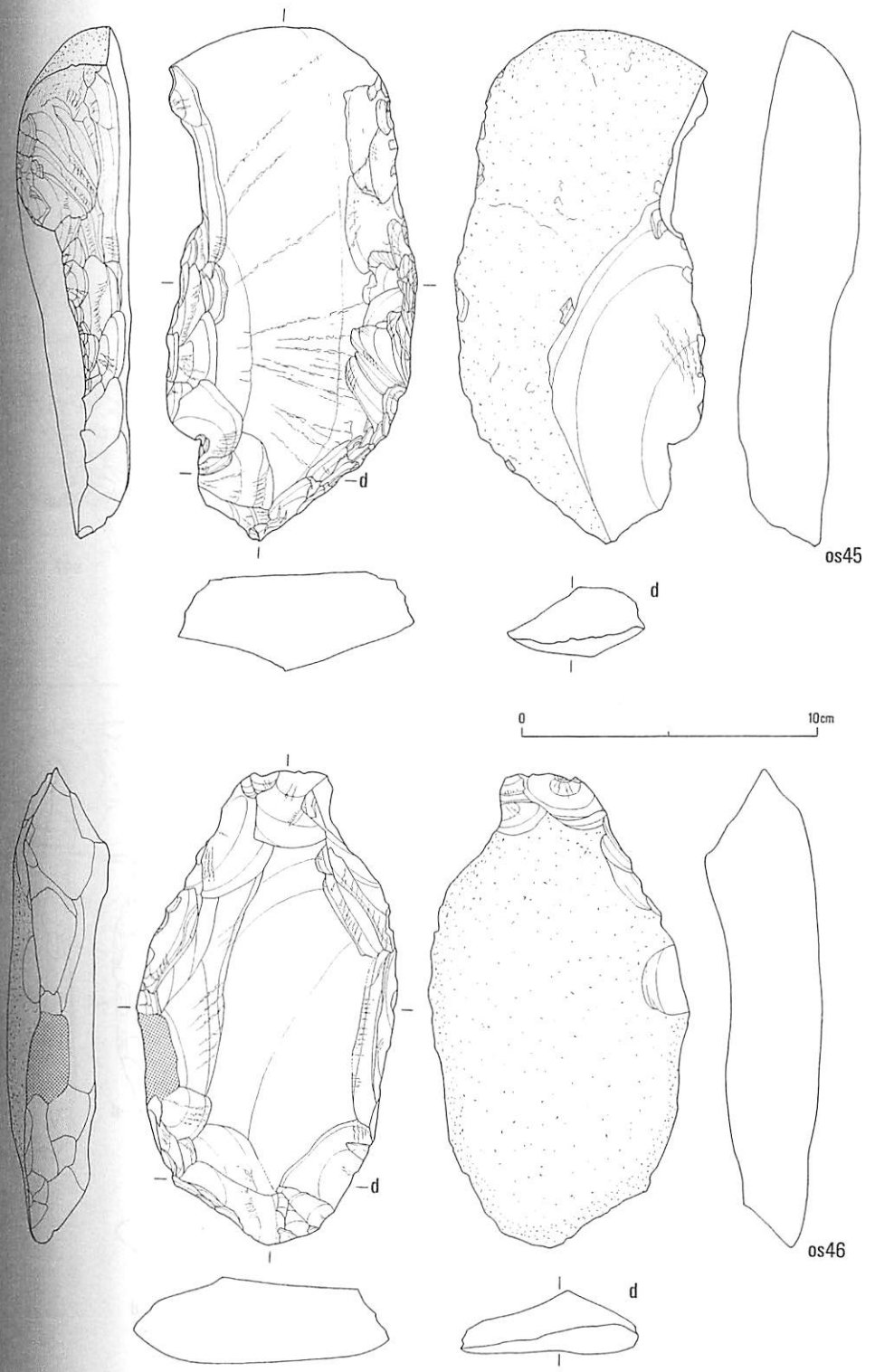
第26図　1－B地点北区石器実測図 20）
第1群：斧状石器　Ⅲ類



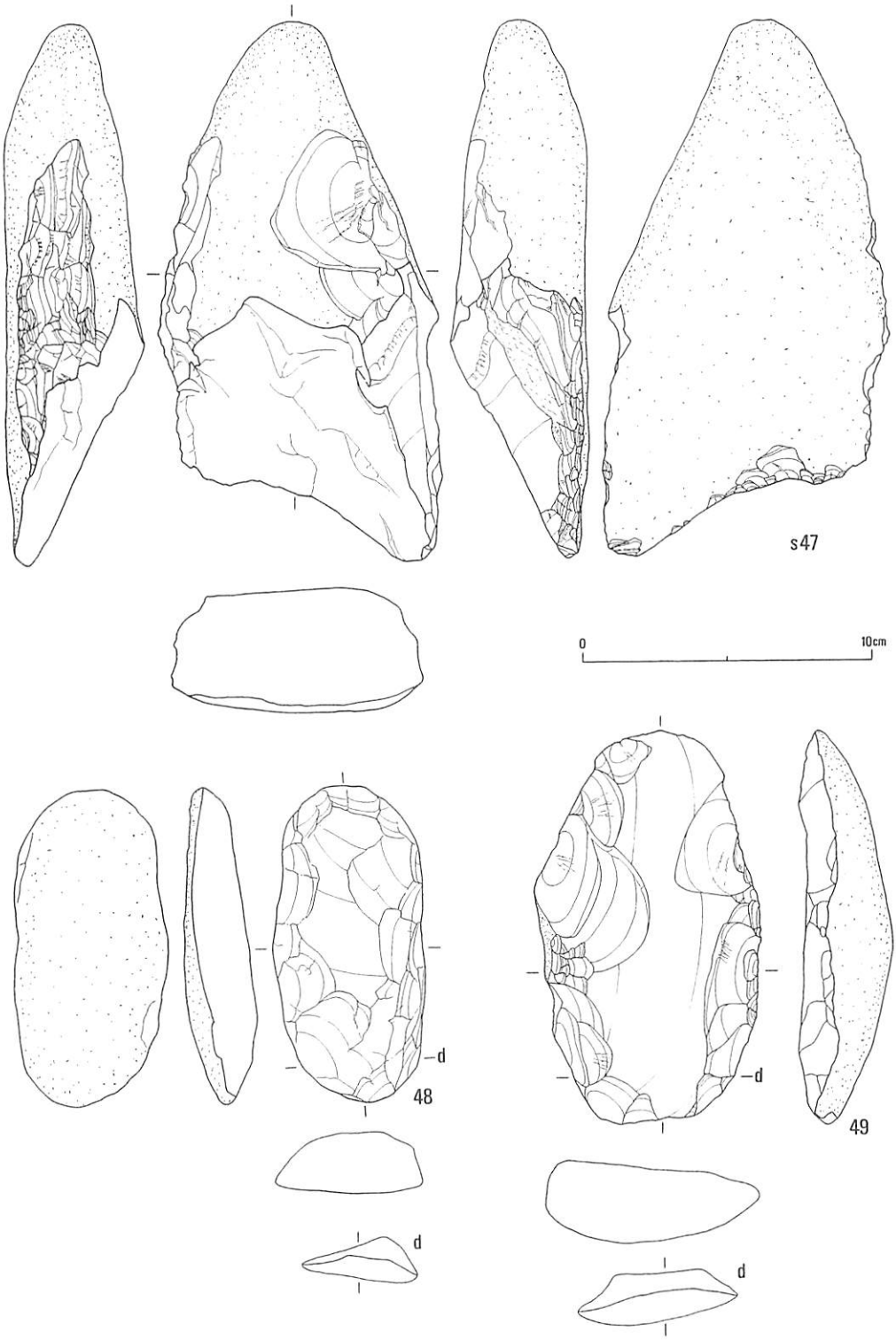
第27図　1－B地点北区石器実測図 21）
第1群：斧状石器　Ⅲ類



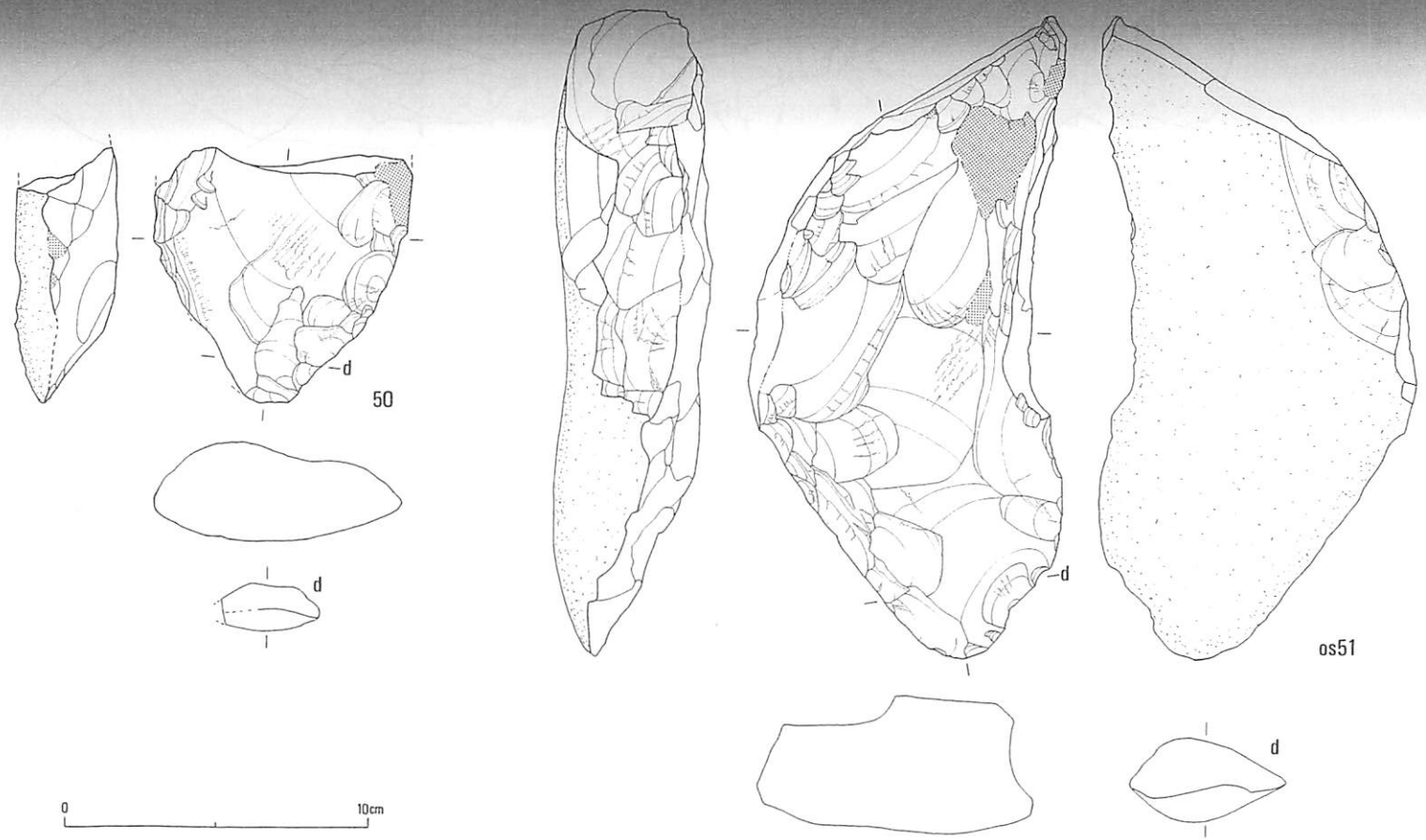
第28図　１－Ｂ地点北区石器実測図 22）
第１群：斧状石器　Ⅲ類



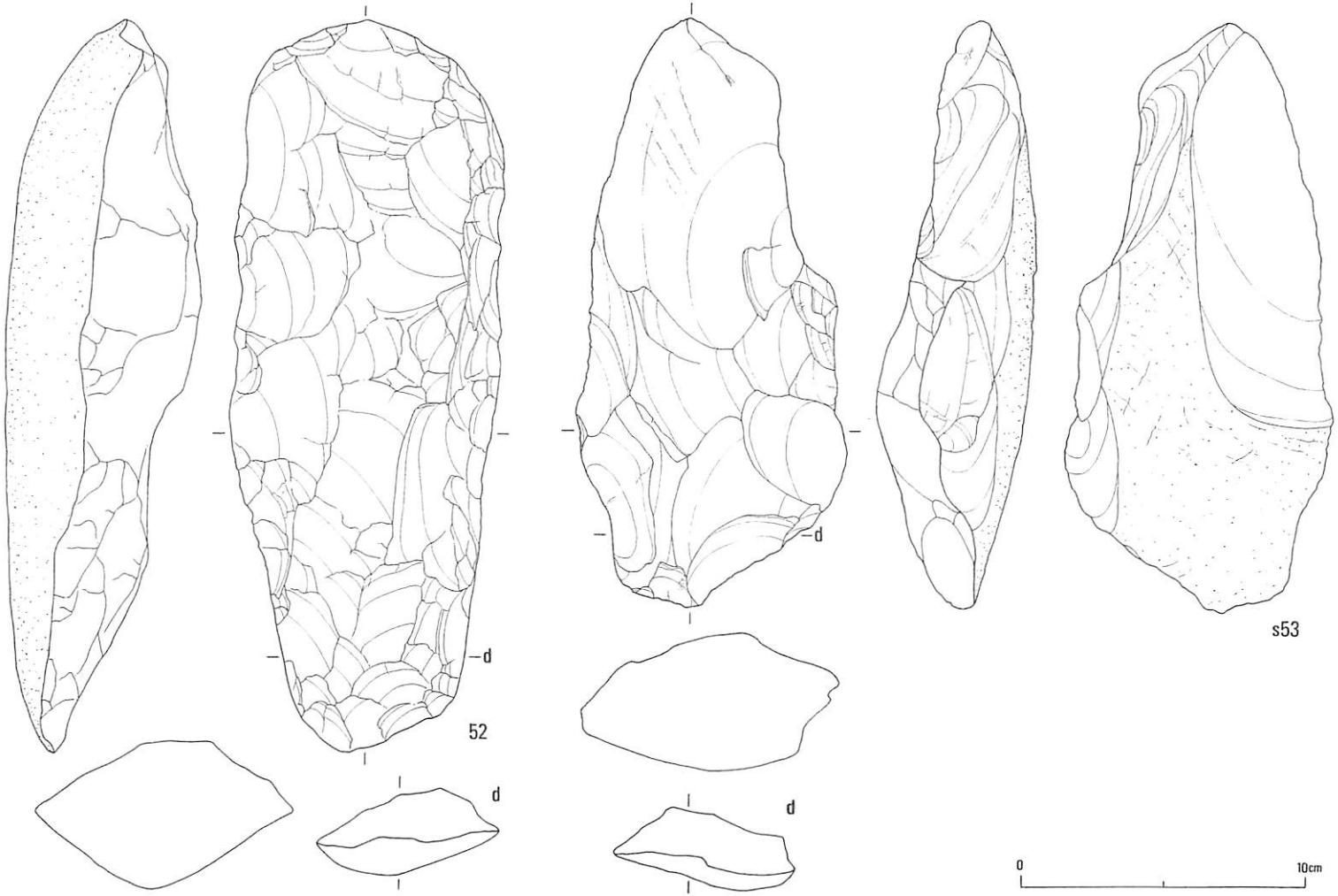
第29図　1－B地点北区石器実測図 23)
第1群：斧状石器　Ⅲ類・Ⅳ類(No.46)



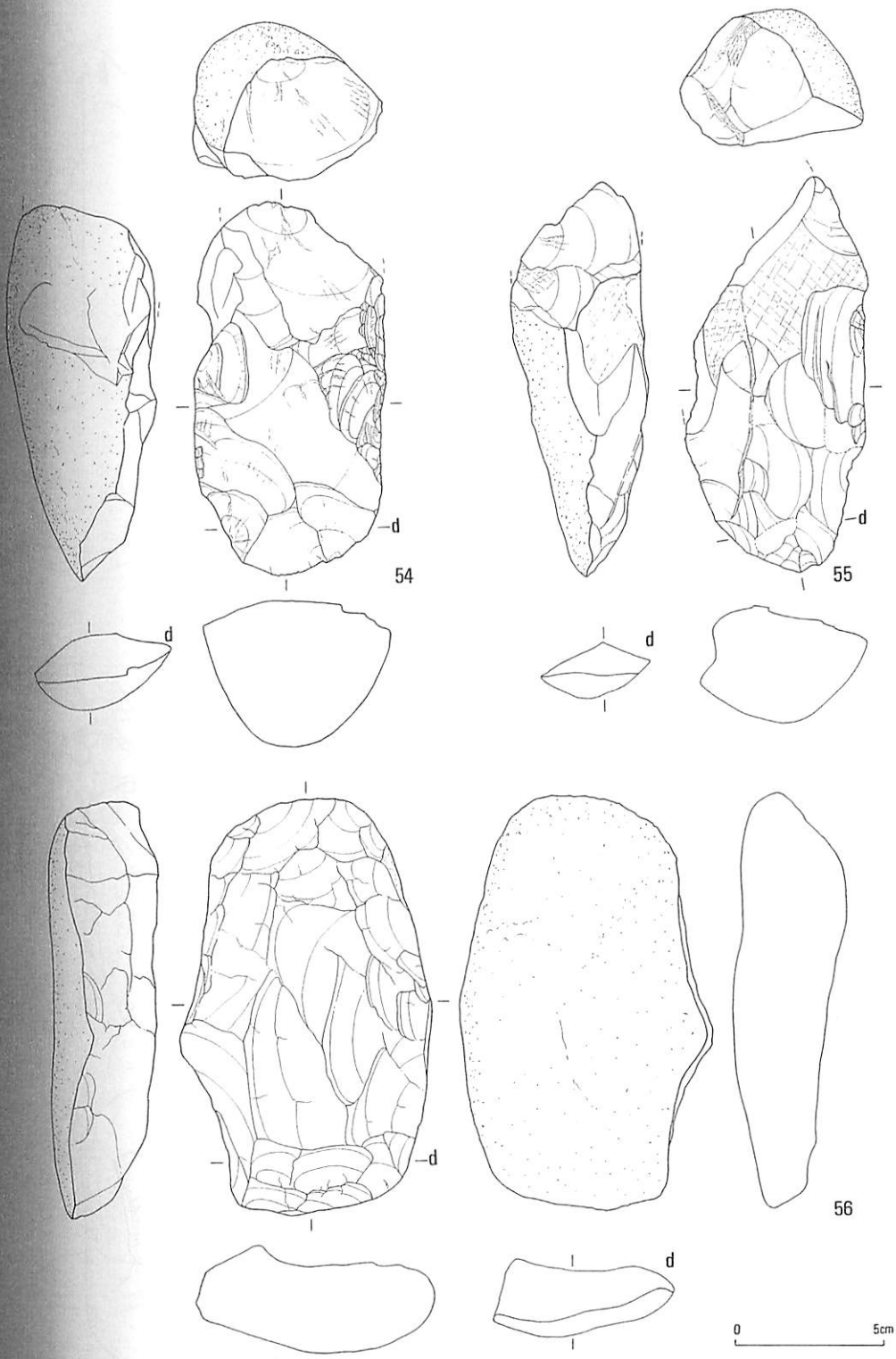
第30図　1－B地点北区石器実測図 24)
第1群：斧状石器　Ⅲ類(No47)・Ⅳ類



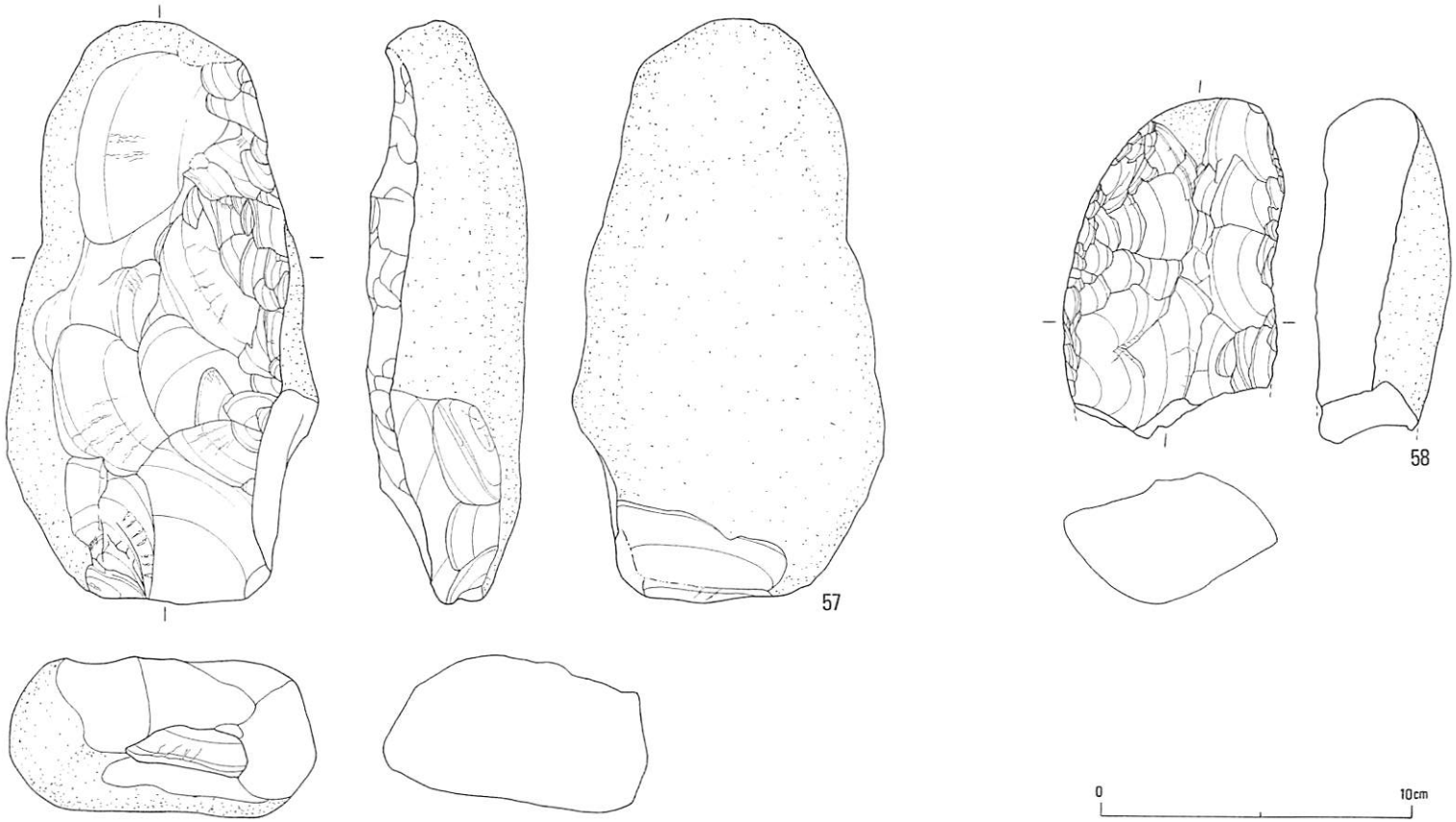
第31図　1－B地点北区石器実測図 25)
第1群：斧状石器　Ⅳ類(No.50)・Ⅴ類



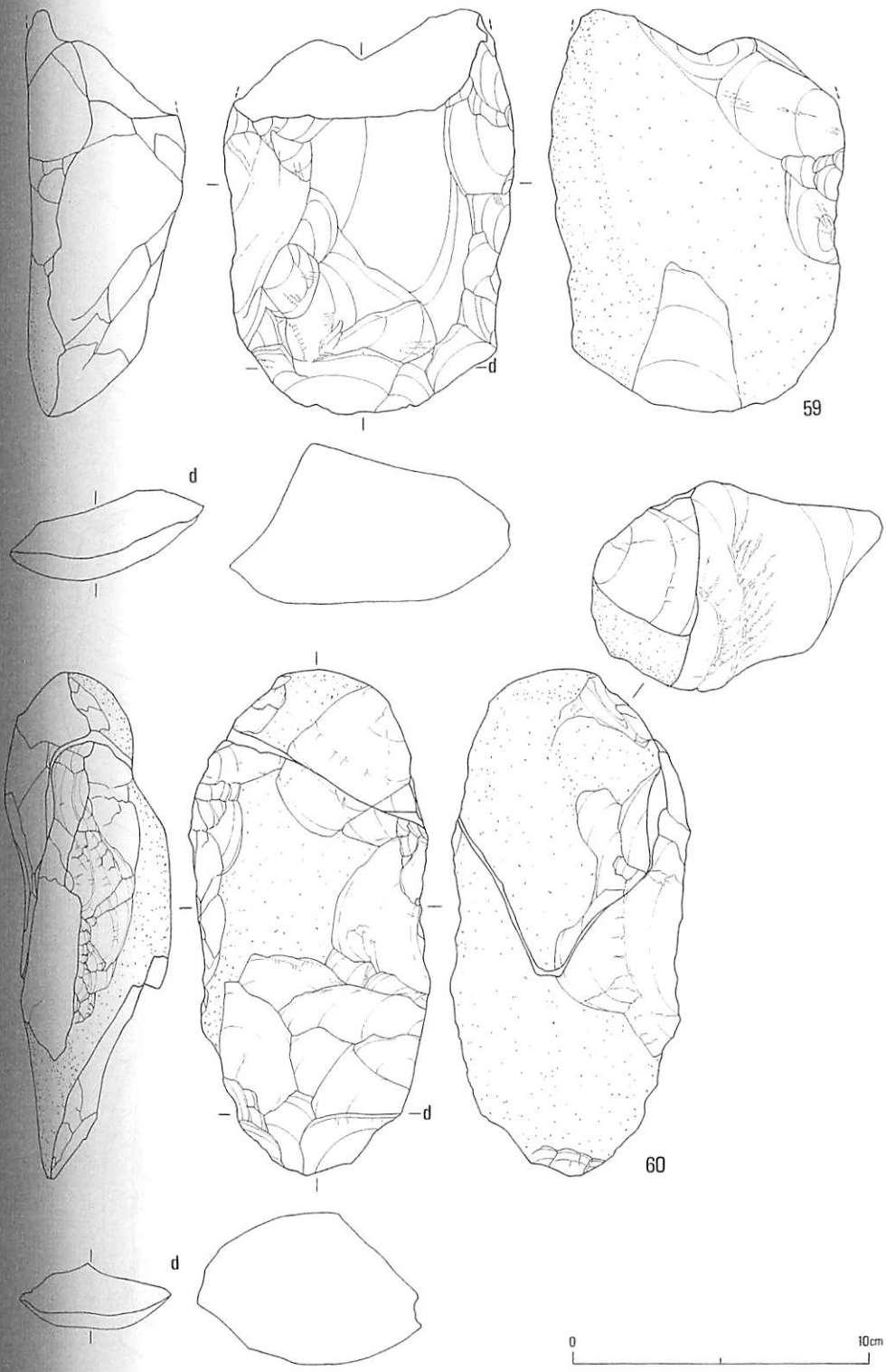
第32図　1－B地点北区石器実測図 26）
第1群：斧状石器　V類



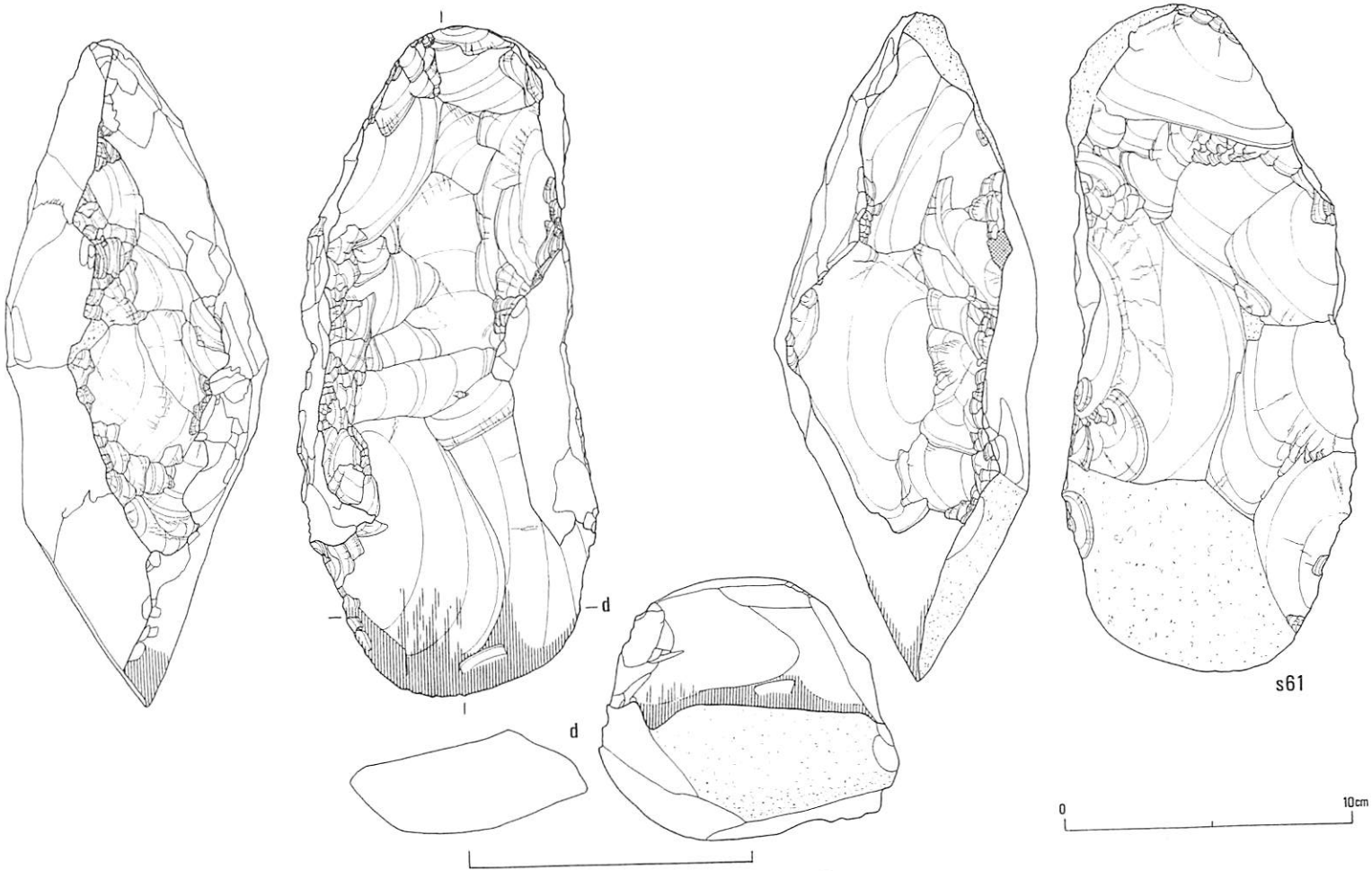
第33図　1－B地点北区石器実測図 27)
第1群：斧状石器　Ⅵ類(No.54・55)・Ⅶ類



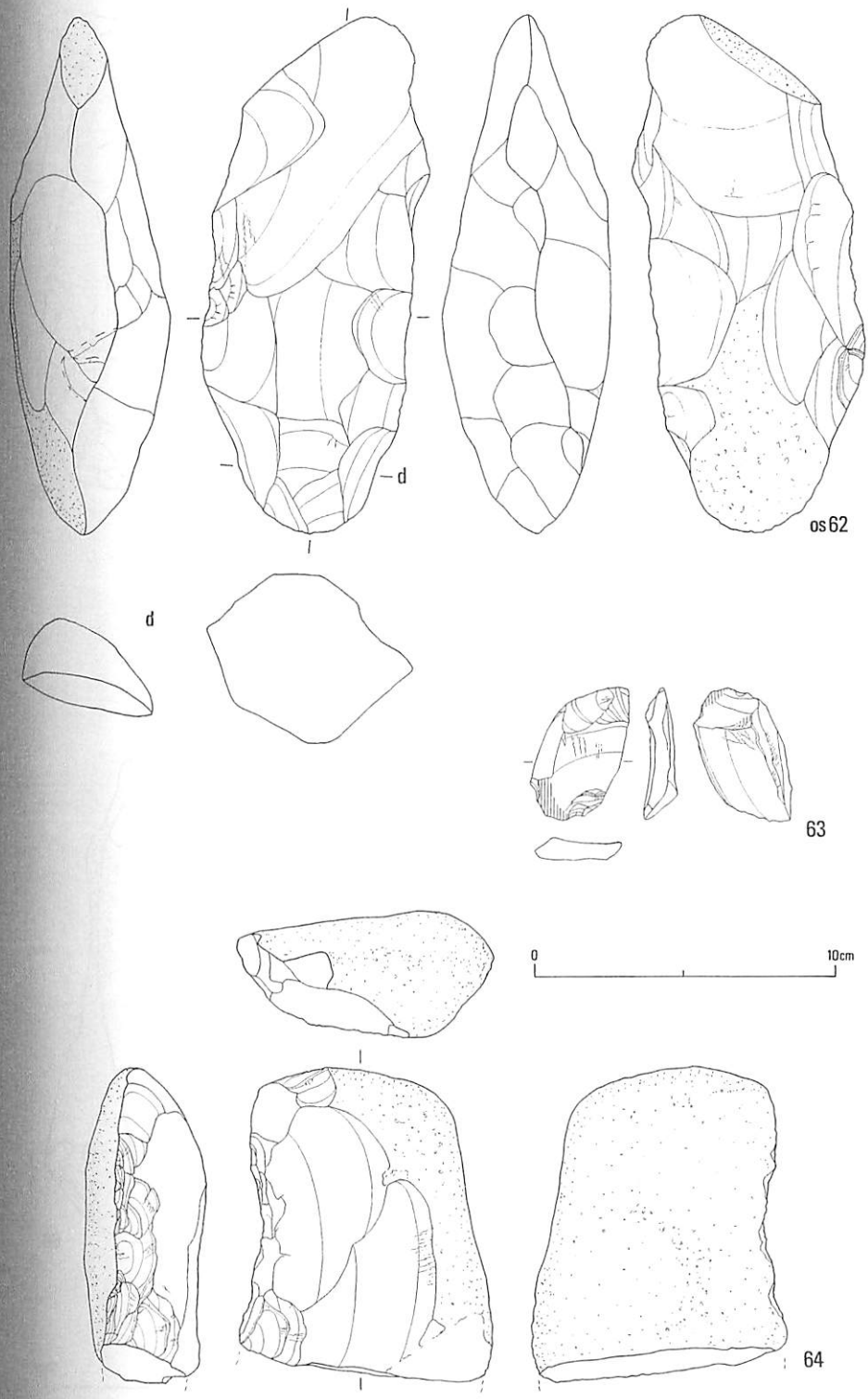
第34図　1－B地点北区石器実測図 28)
第1群：斧状石器　Ⅵ類(No.58)・Ⅶ類



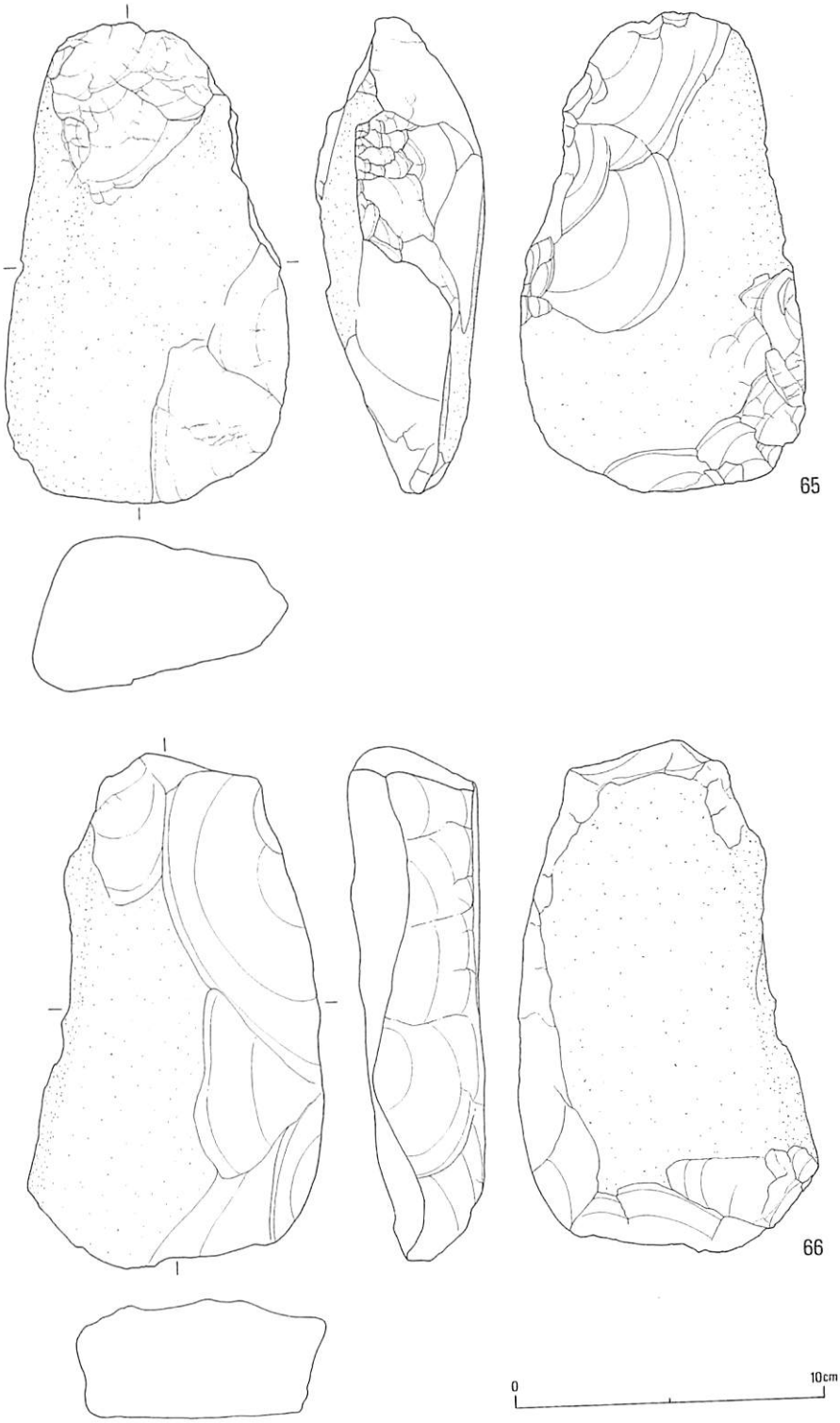
第35図　1－B地点北区石器実測図 29）
第1群：斧状石器　Ⅶ類（No.59）・Ⅷ類



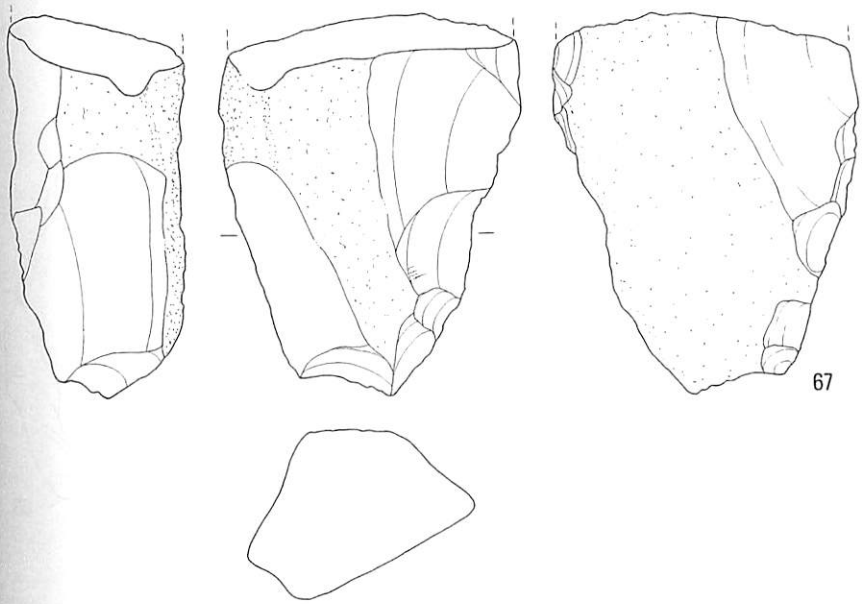
第36図　1－B地点北区石器実測図 30)
第1群：斧状石器　Ⅶ類

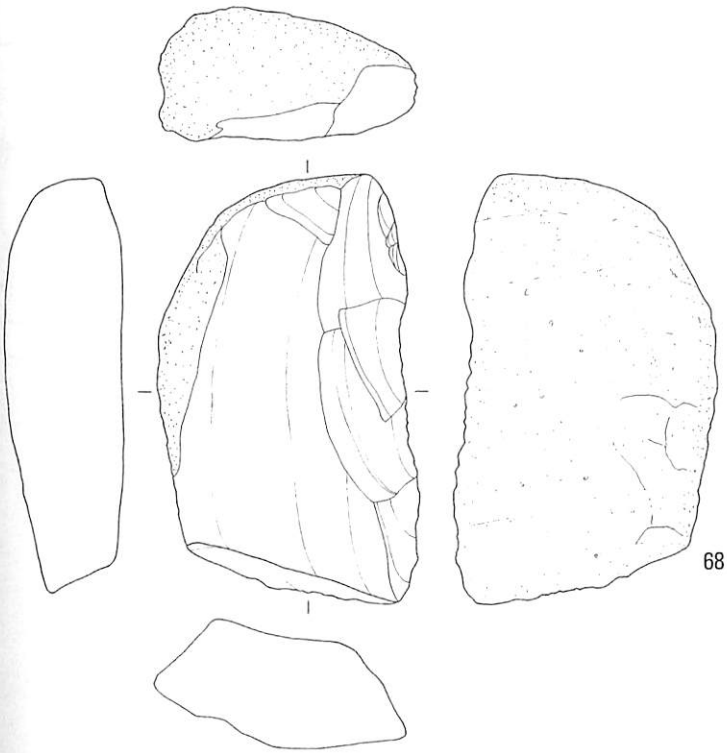


第37図　1－B地点北区石器実測図 31)
第1群：斧状石器　Ⅷ類・分類保留群(No.64)



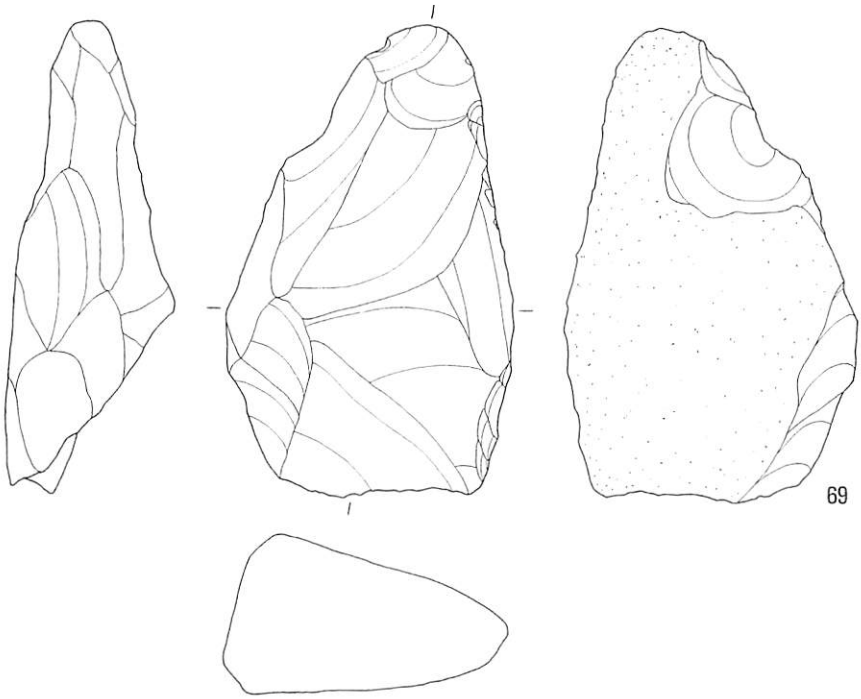
第38図　1－B地点北区石器実測図 32)
第1群：斧状石器　分類保留群

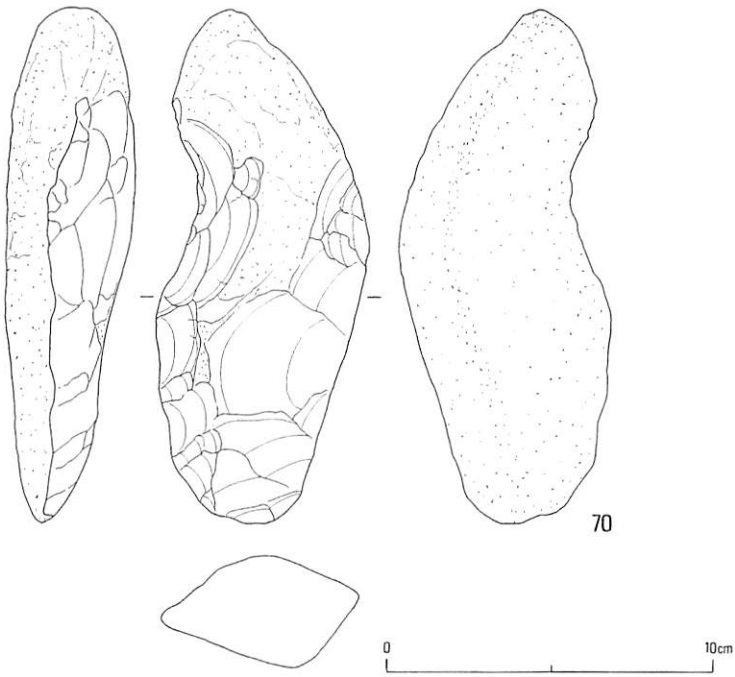




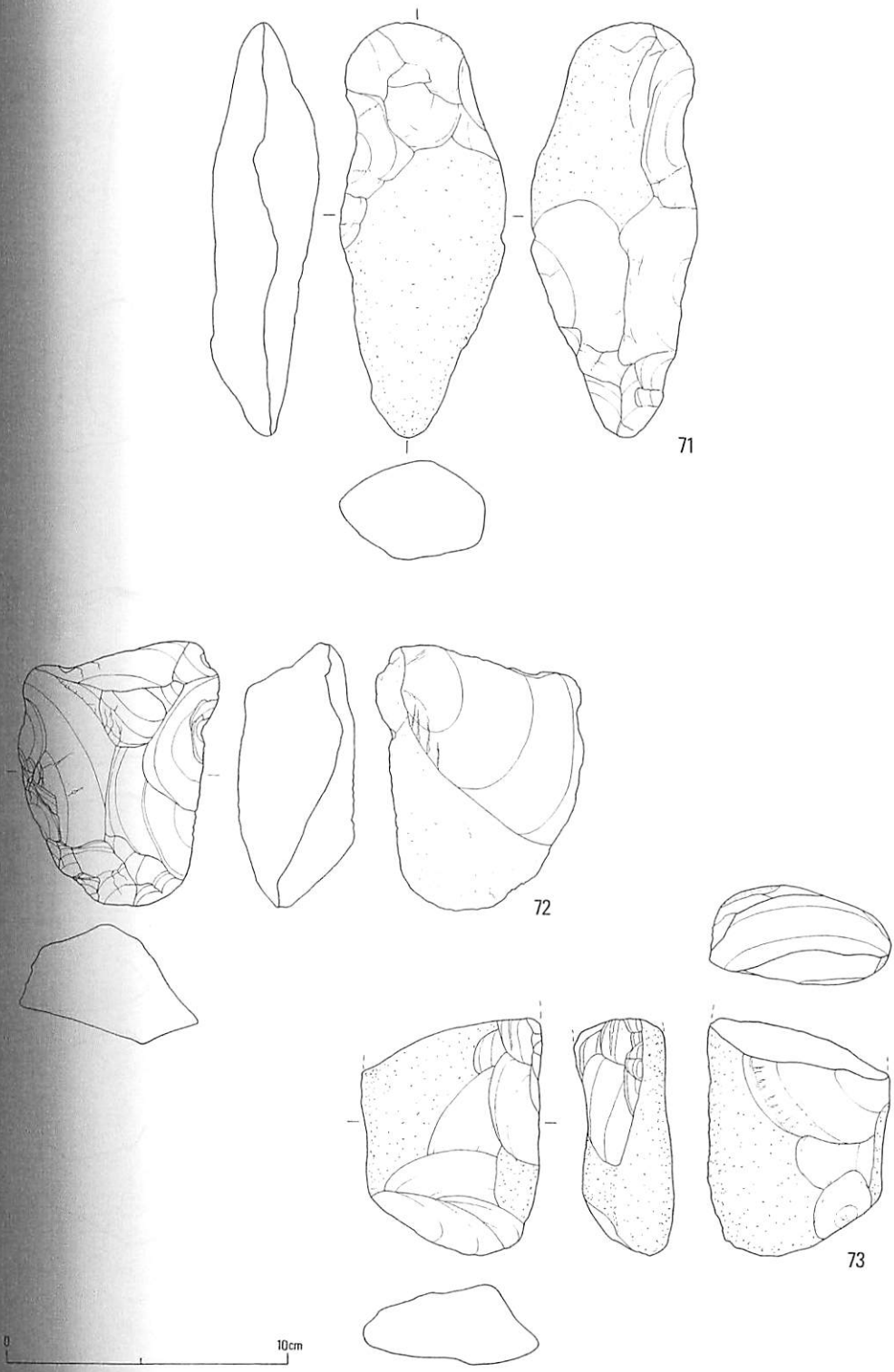
0　10cm

第39図　　1－B地点北区石器実測図 33）
第1群：斧状石器　分類保留群

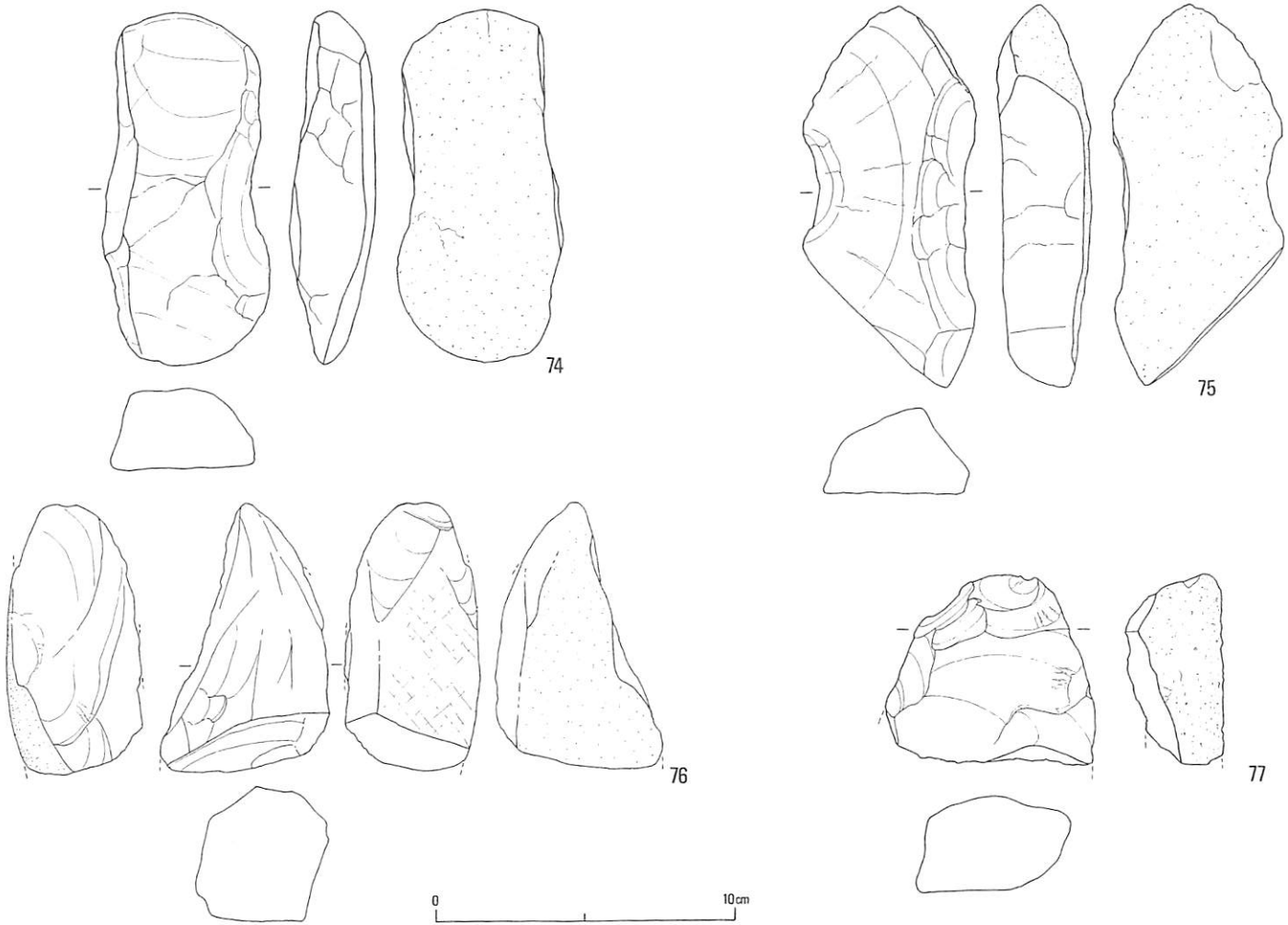




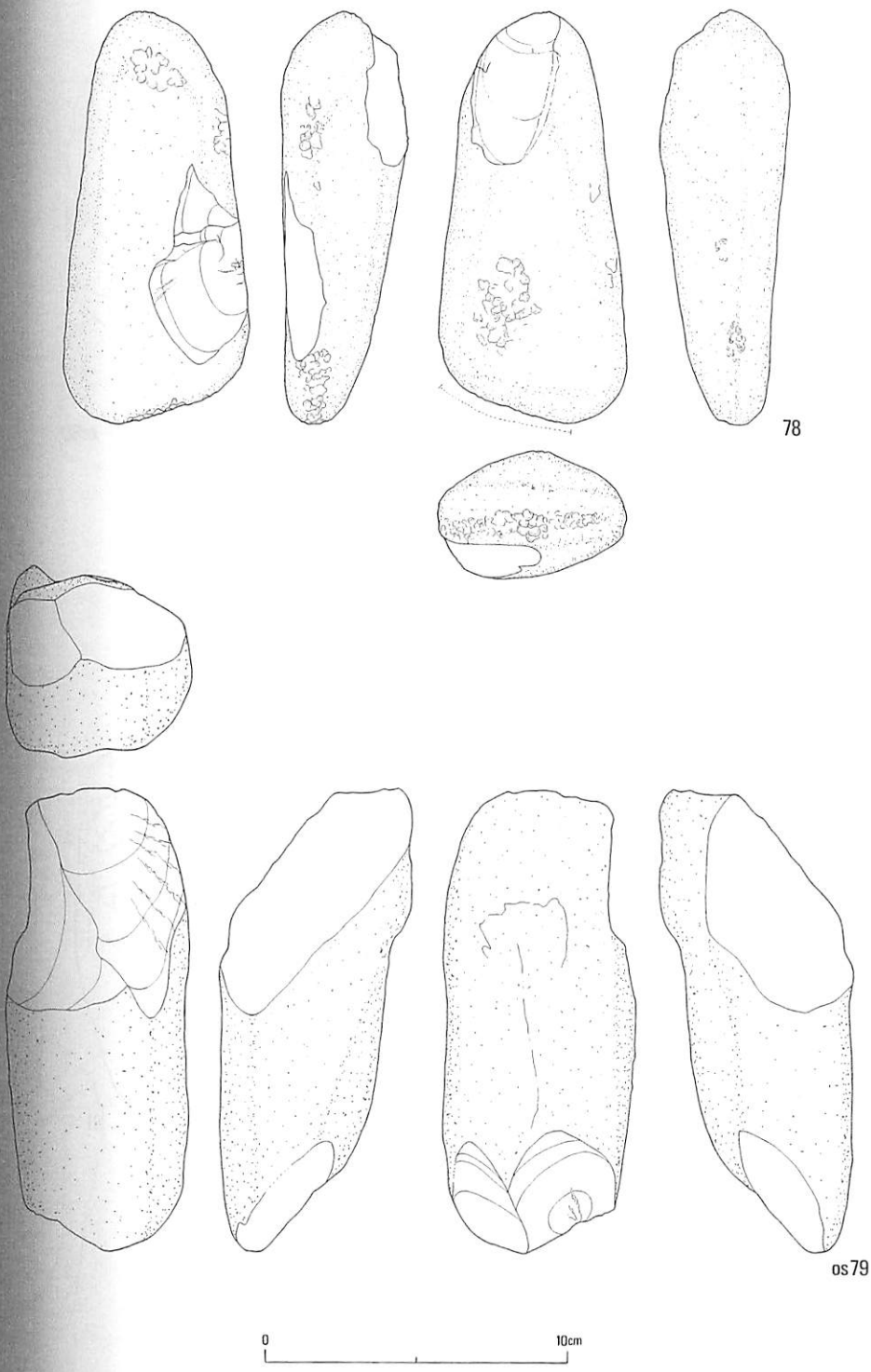
第40図　1－B地点北区石器実測図 34)
第1群：斧状石器　分類保留群



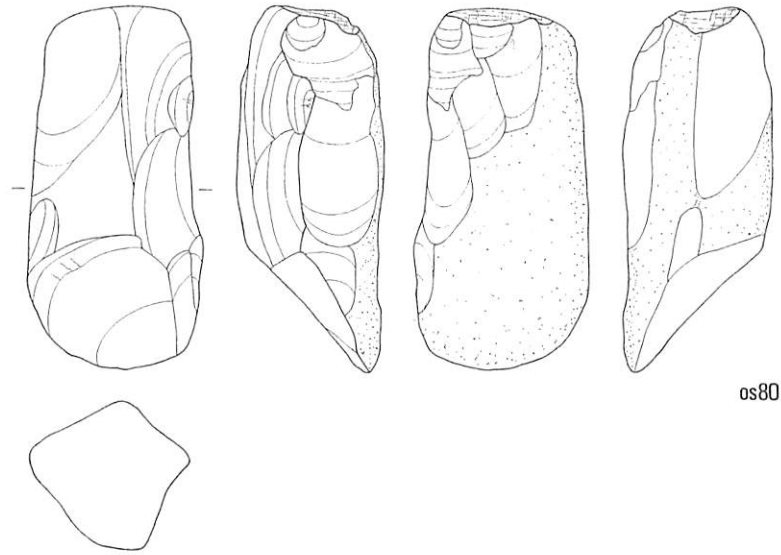
第41図　1－B地点北区石器実測図 35）
第1群：斧状石器　分類保留群

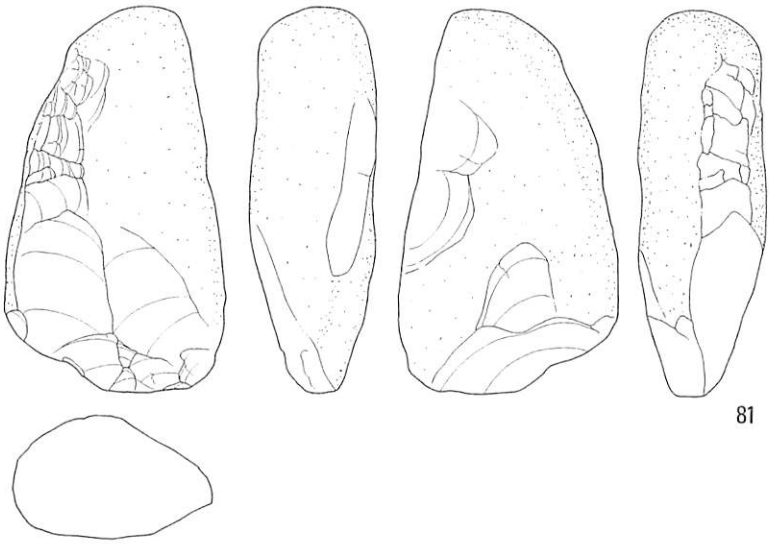


第42図　1－B地点北区石器実測図 36)
第1群：斧状石器　分類保留群

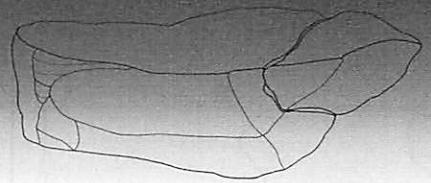


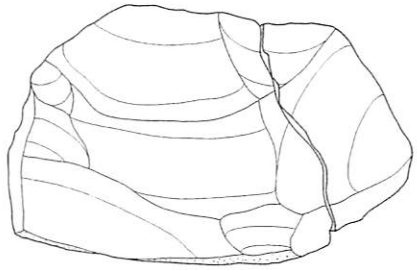
第43図　1－B地点北区石器実測図 37)
第1群：斧状石器　槌石(ハンマーストーン)

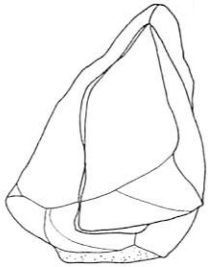


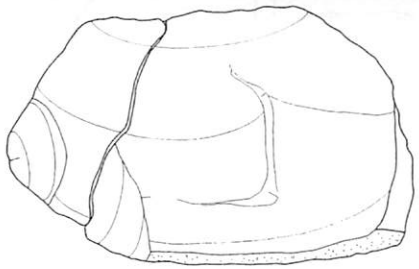


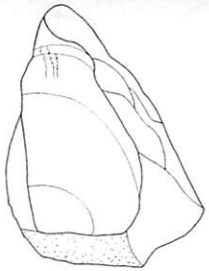
第44図　1－B地点北区石器実測図 38)
第1群：槌石(ハンマーストーン)



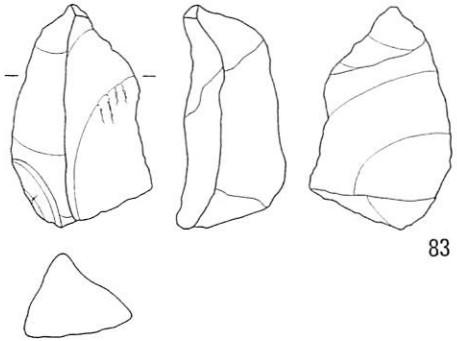






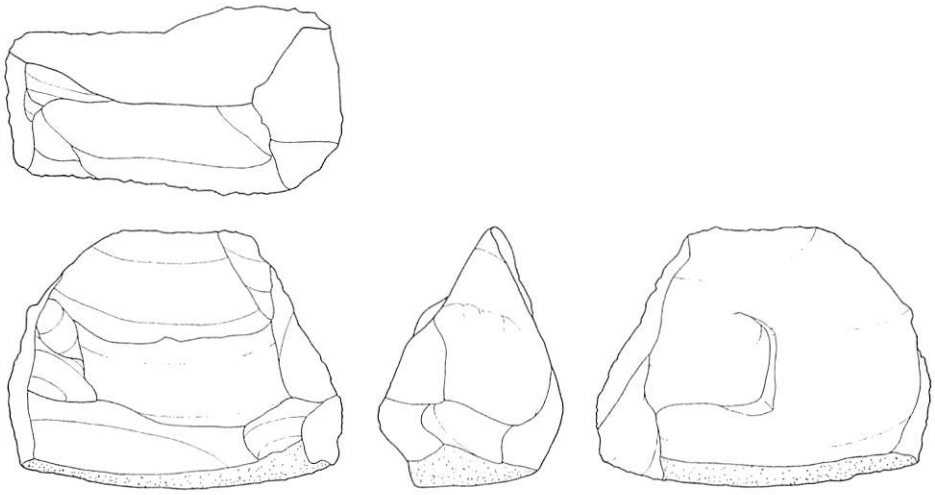


os82

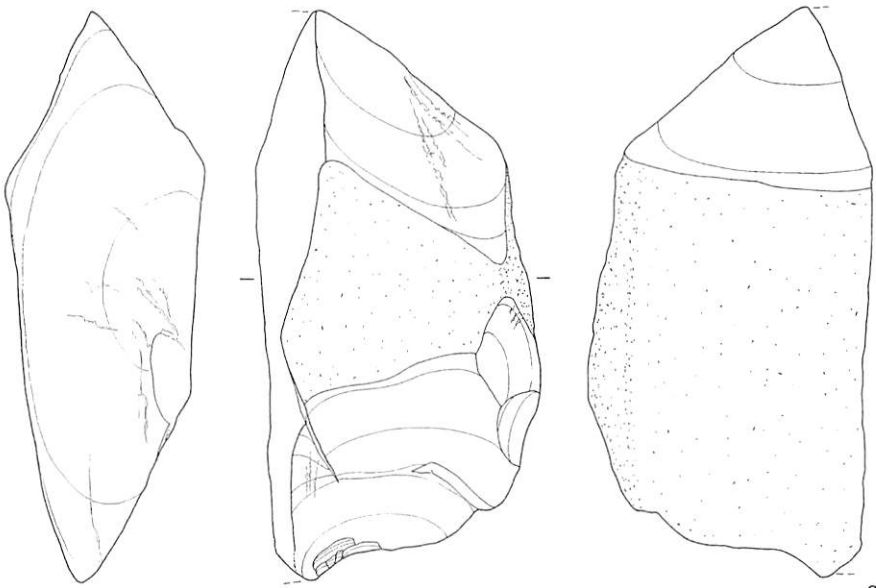


83

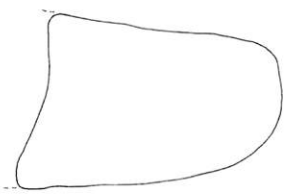
第45図　1－B地点北区石器実測図 39）
第1群：斧状石器　未成品・素材剥片

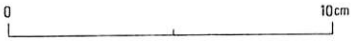


os 84

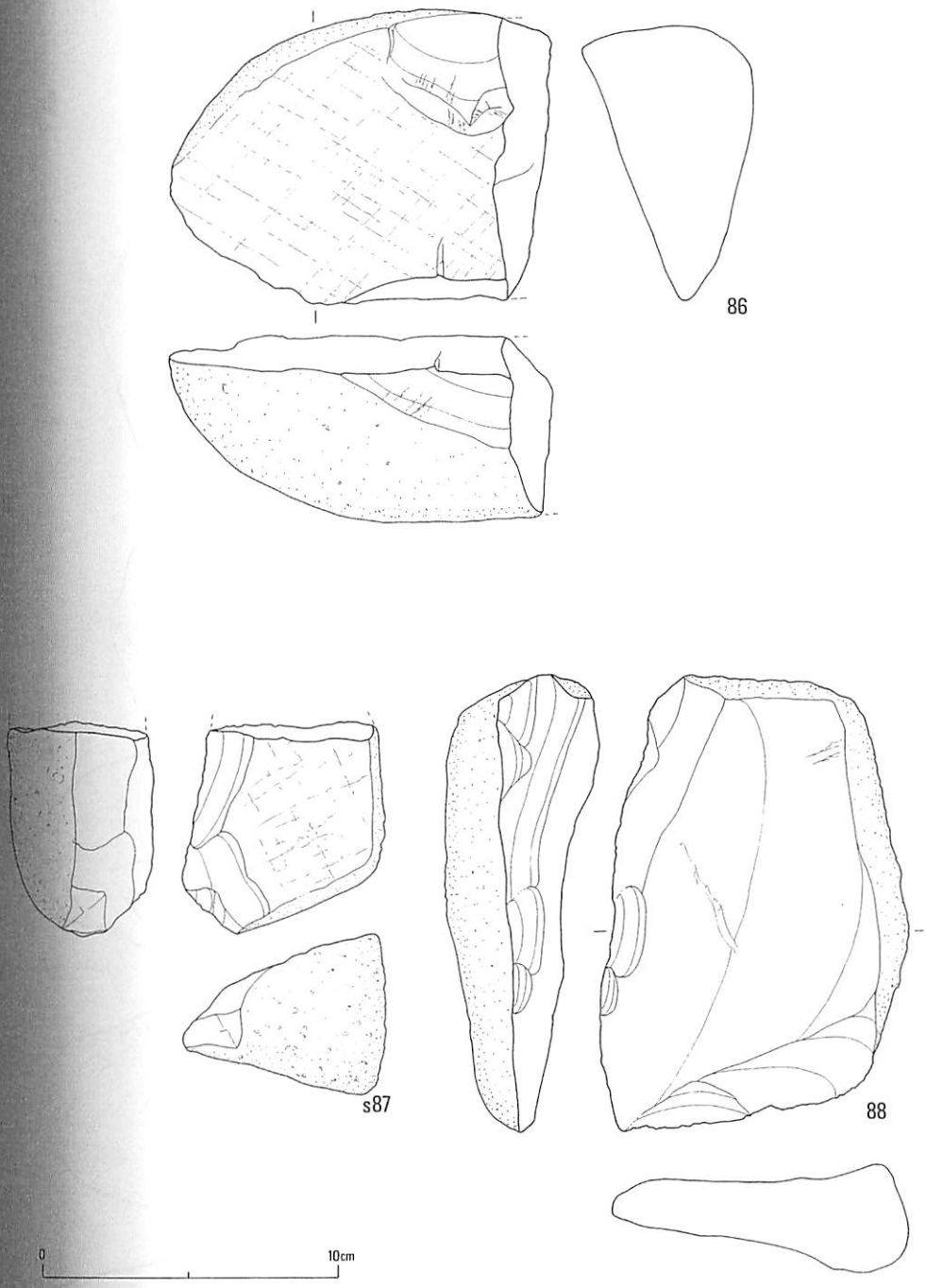


85

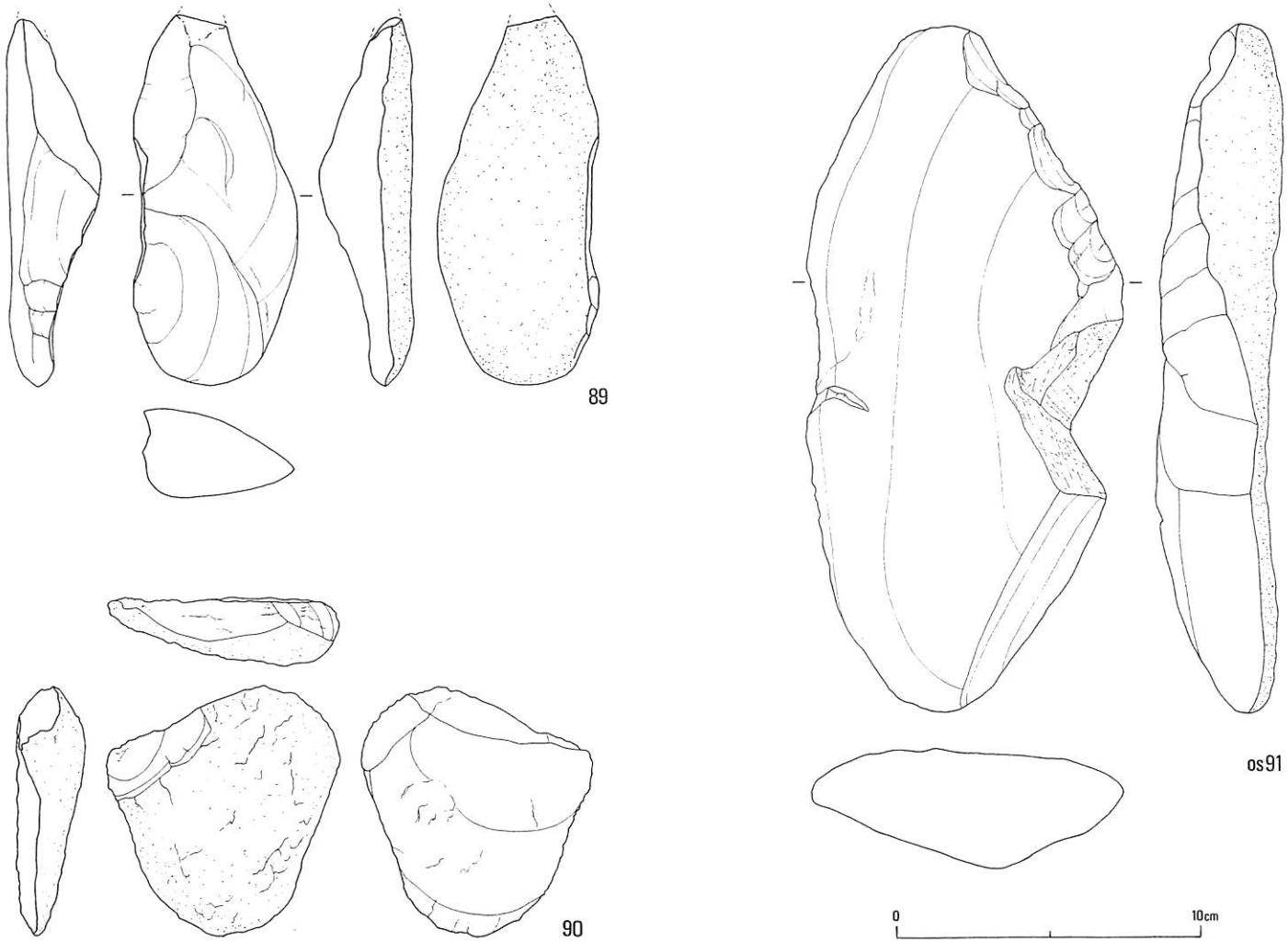




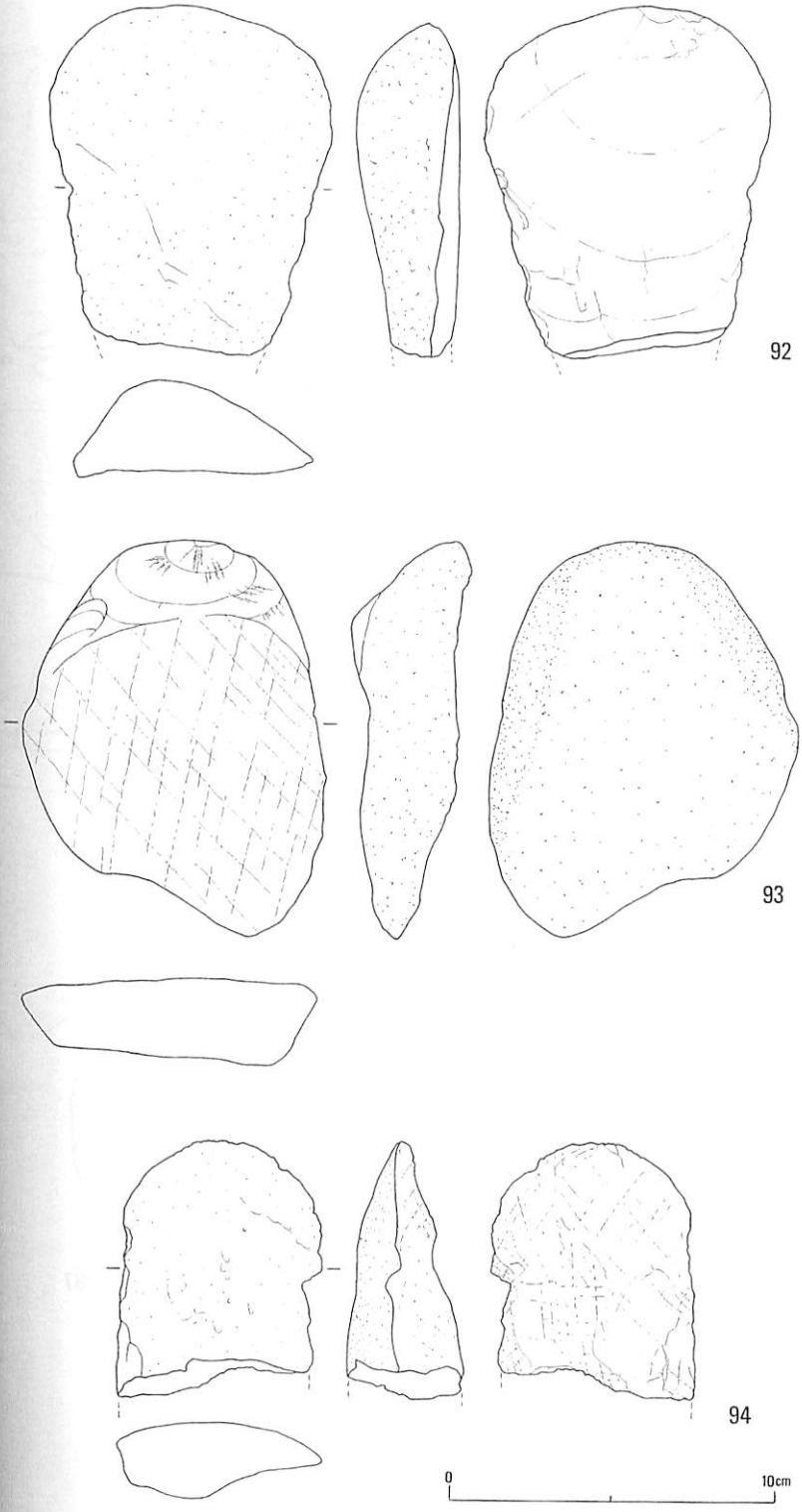
第46図　1－B地点北区石器実測図 40）
第1群：斧状石器　未成品・素材剝片



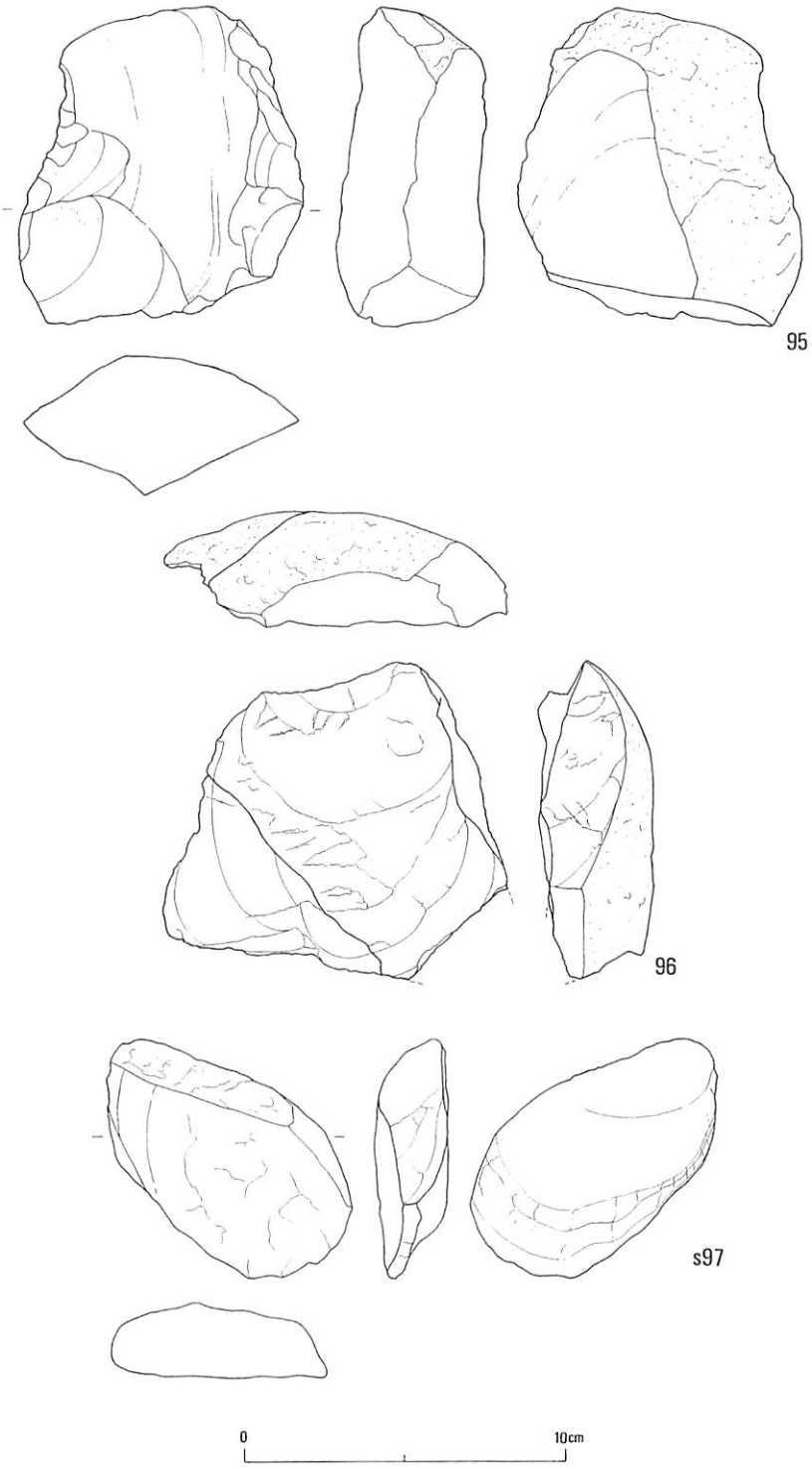
第47図　1－B地点北区石器実測図 41）
第1群：斧状石器　未成品・素材剝片



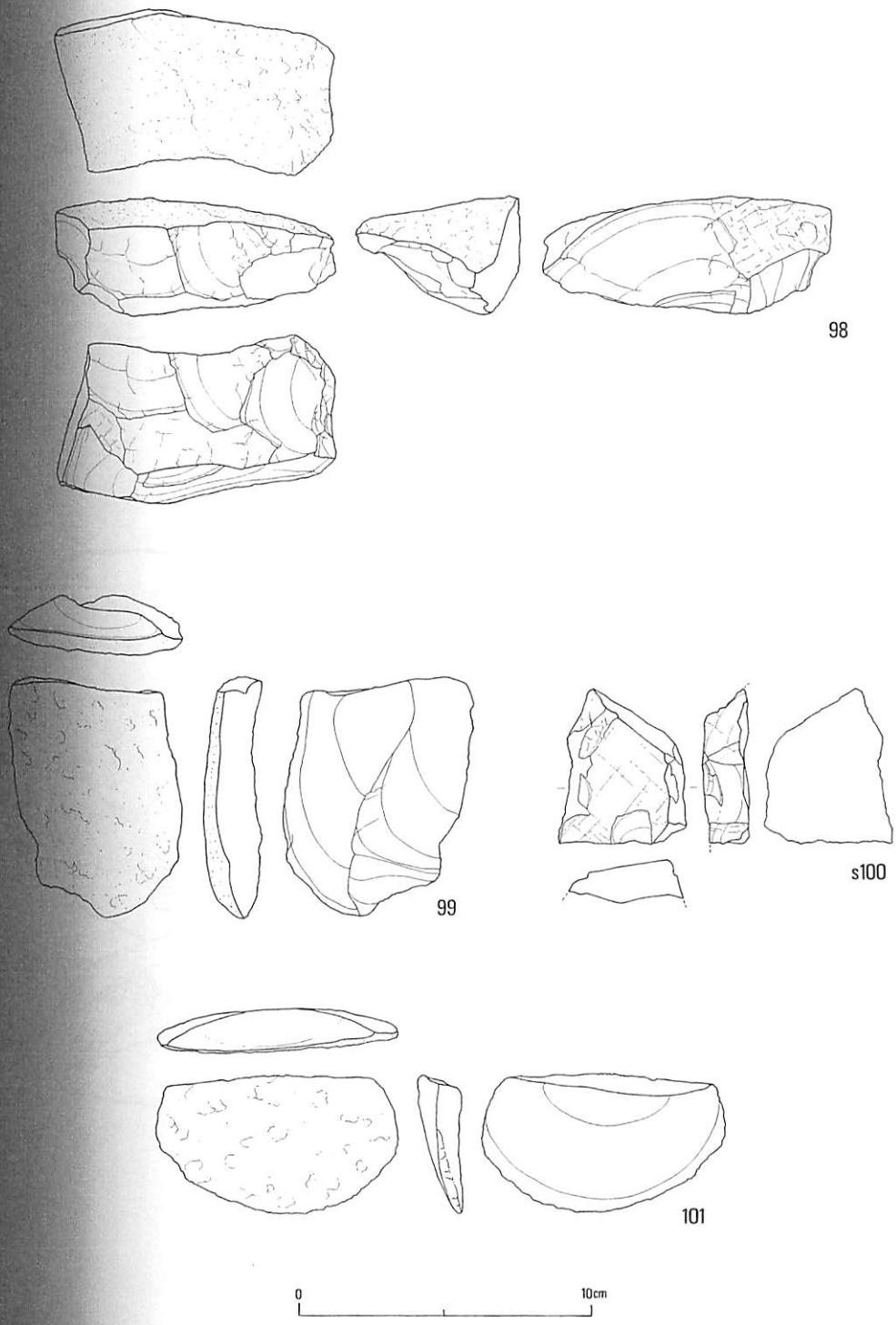
第48図　1－B地点北区石器実測図 42)
第1群：斧状石器　未成品・素材剥片



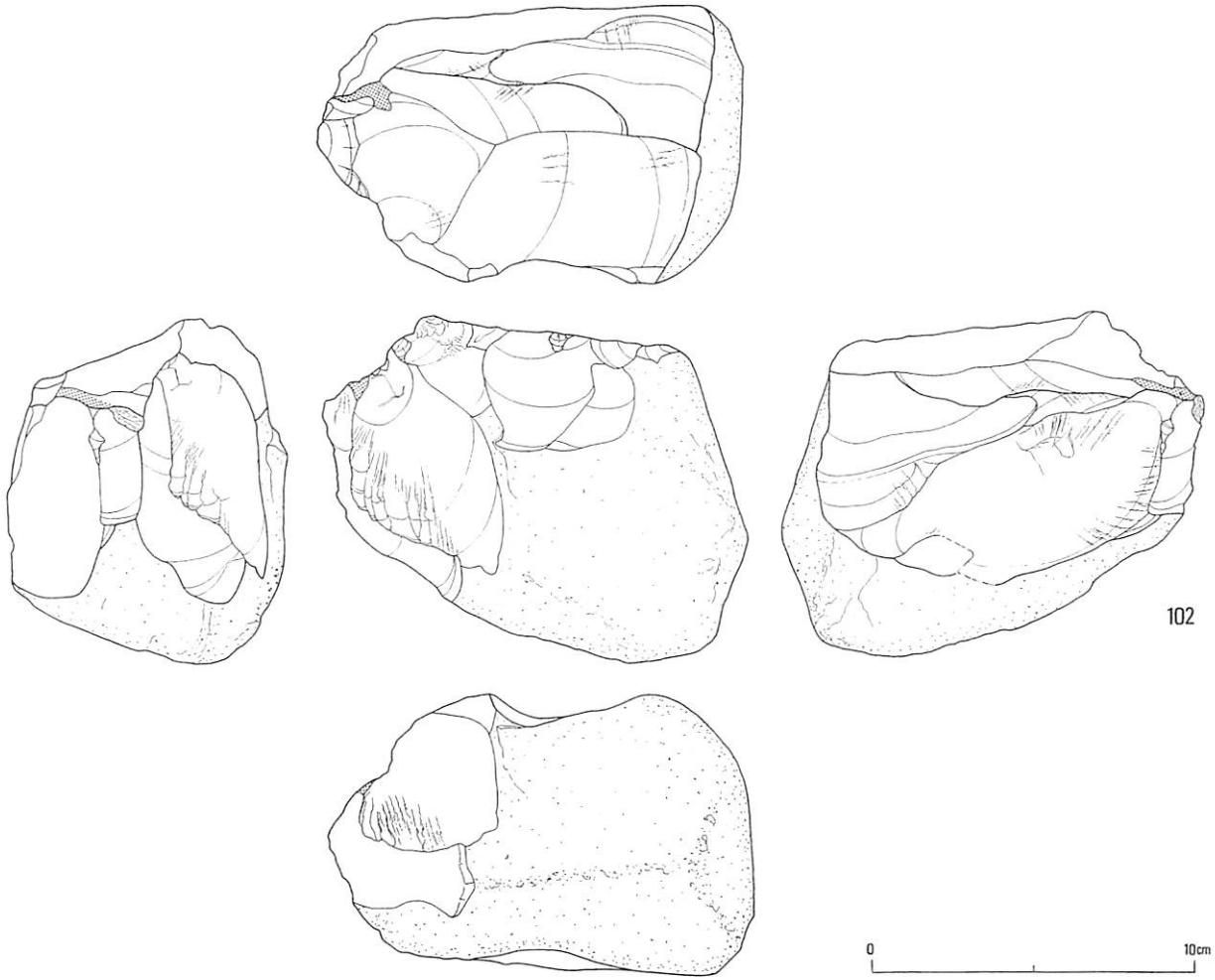
第49図　1－B地点北区石器実測図 43)
第1群：斧状石器　未成品・素材剥片



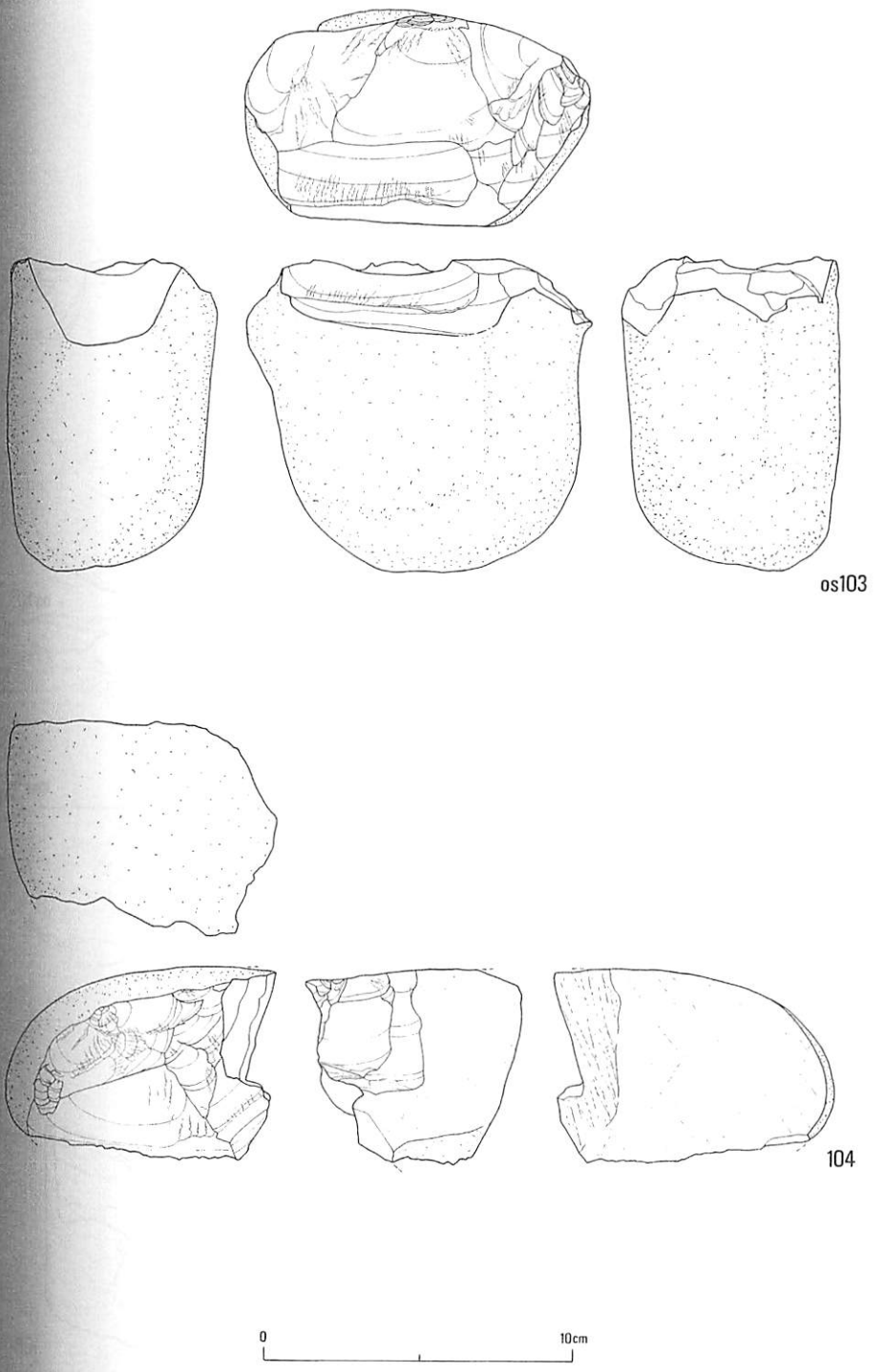
第50図　1－B地点北区石器実測図 44)
第1群：斧状石器　未成品・素材剝片・調整加工剝片？(No.97)



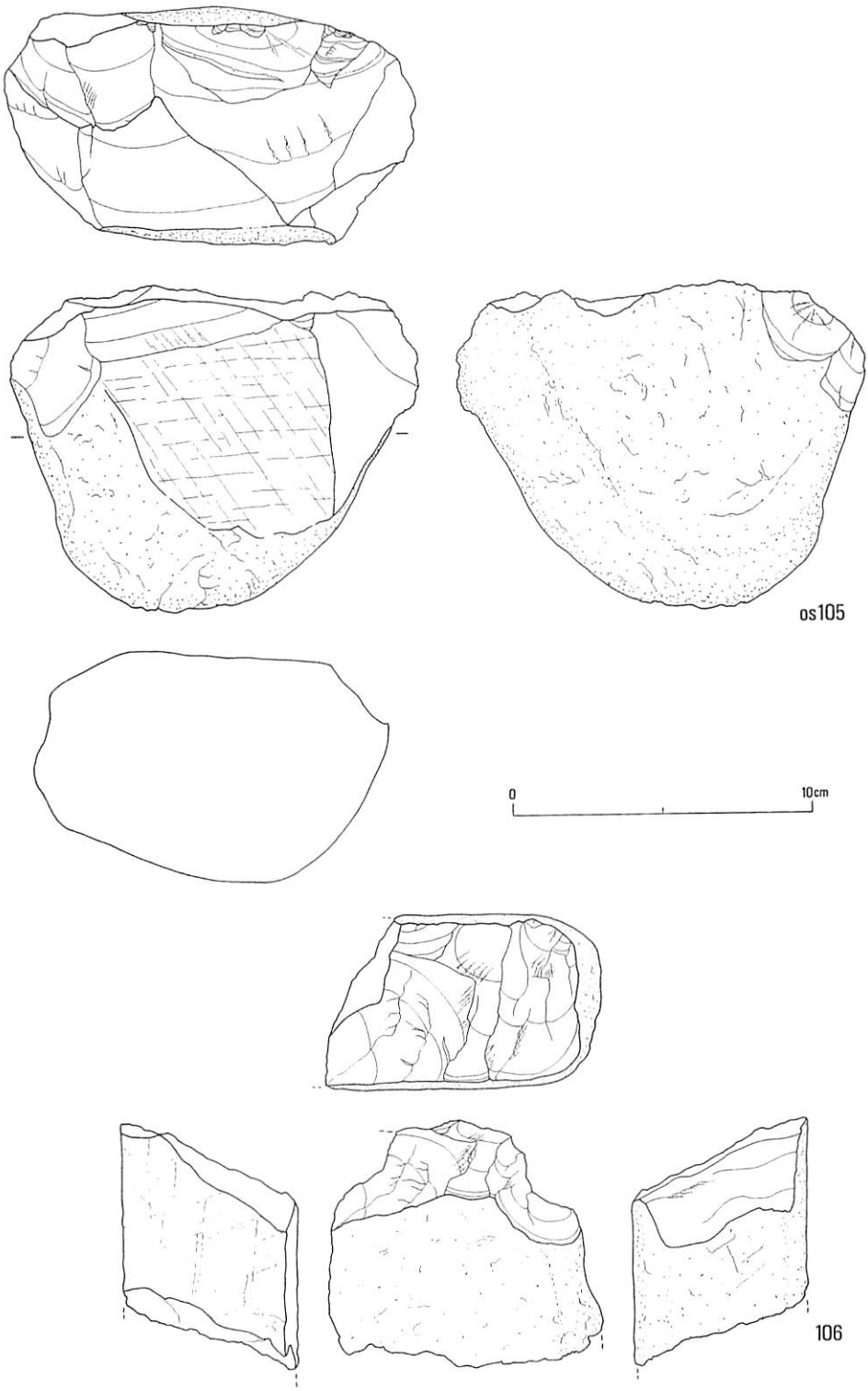
第51図　1－B地点北区石器実測図 45)
第1群：斧状石器　未成品・素材剝片(No.98)・調整加工剝片？



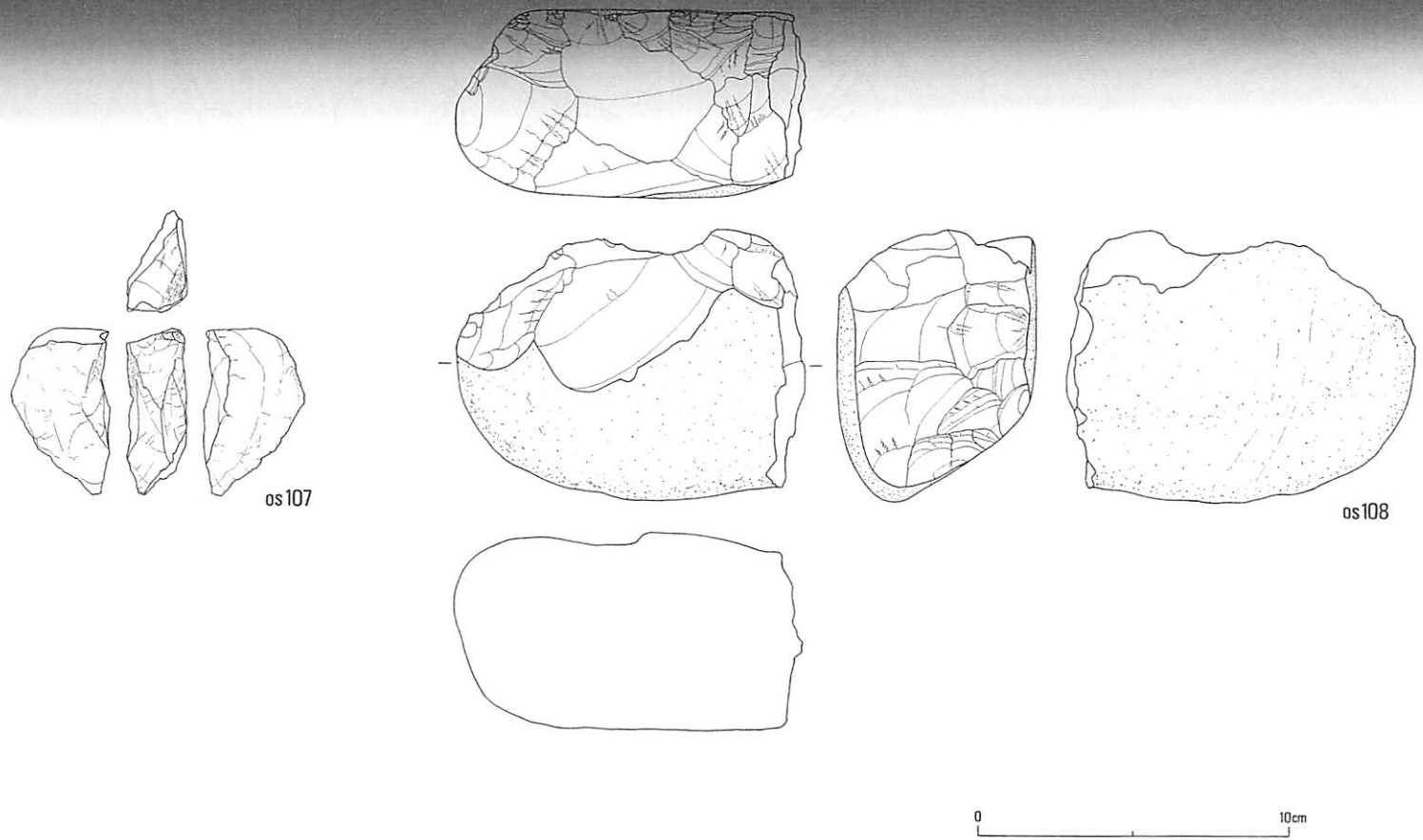
第52図　1－B地点北区石器実測図 46)
第2群：打・割器/石核　I類



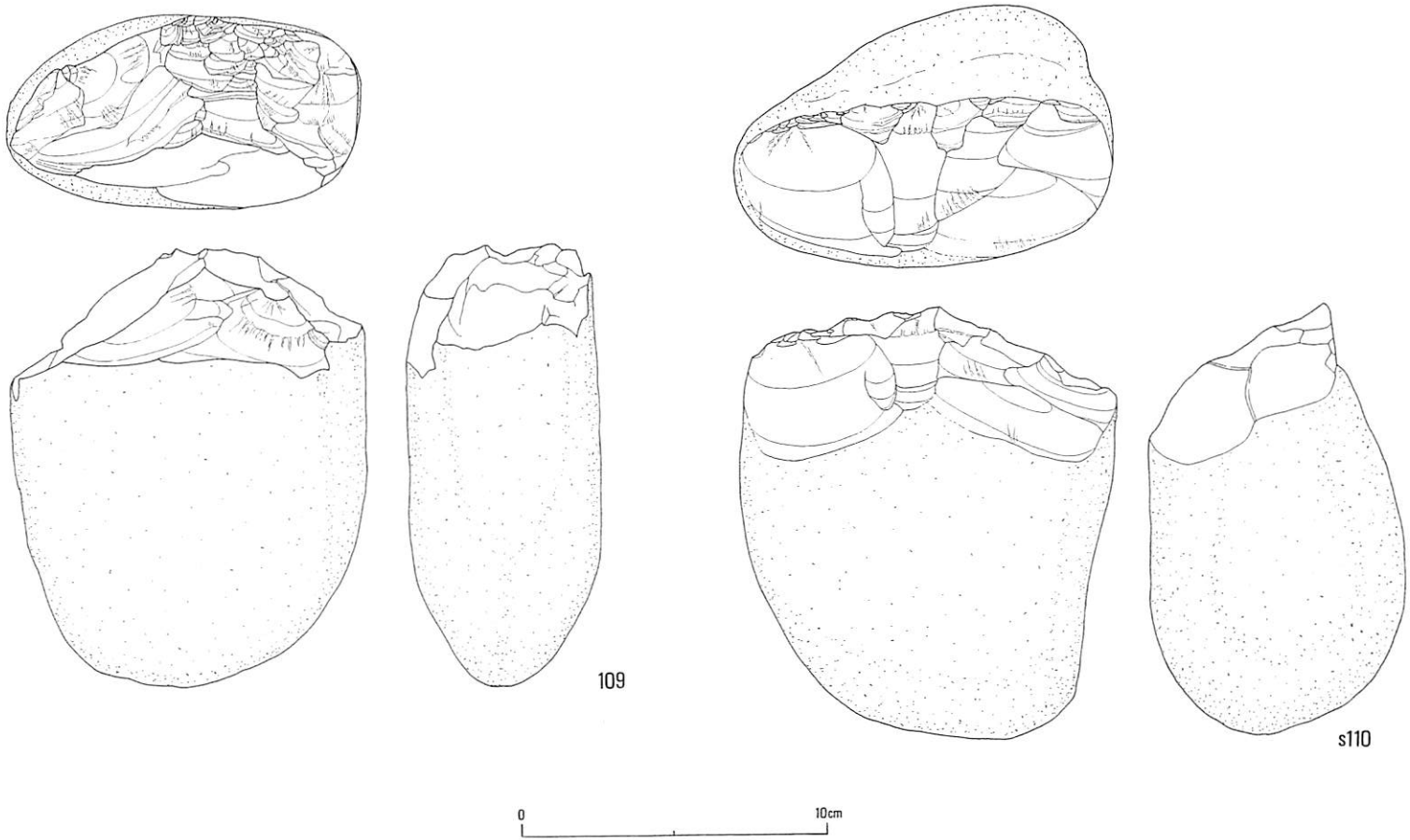
第53図　1－B地点北区石器実測図 47)
第2群：打・割器/石核　Ⅱ類



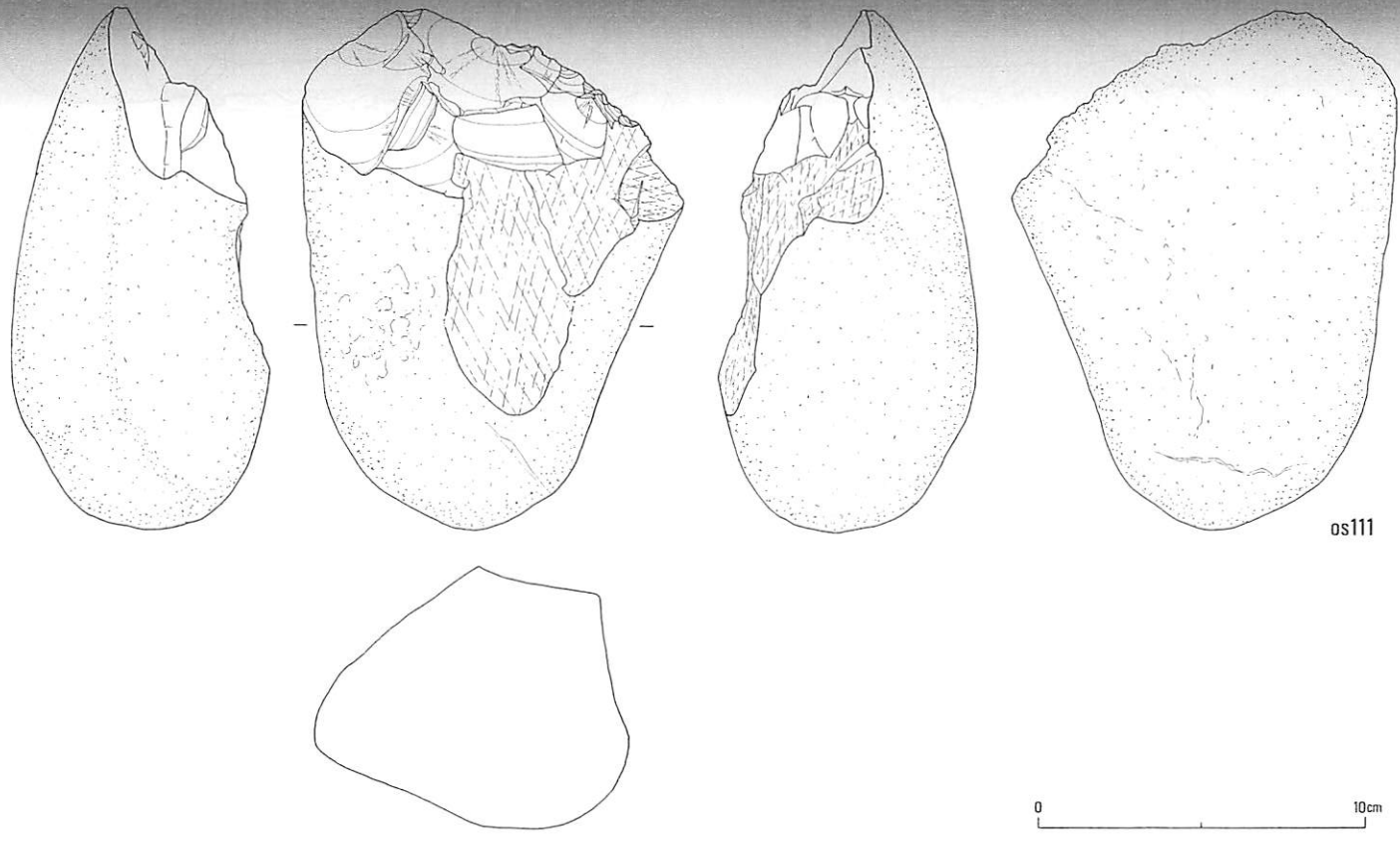
第54図　1－B地点北区石器実測図 48)
第2群：打・割器/石核　Ⅱ類



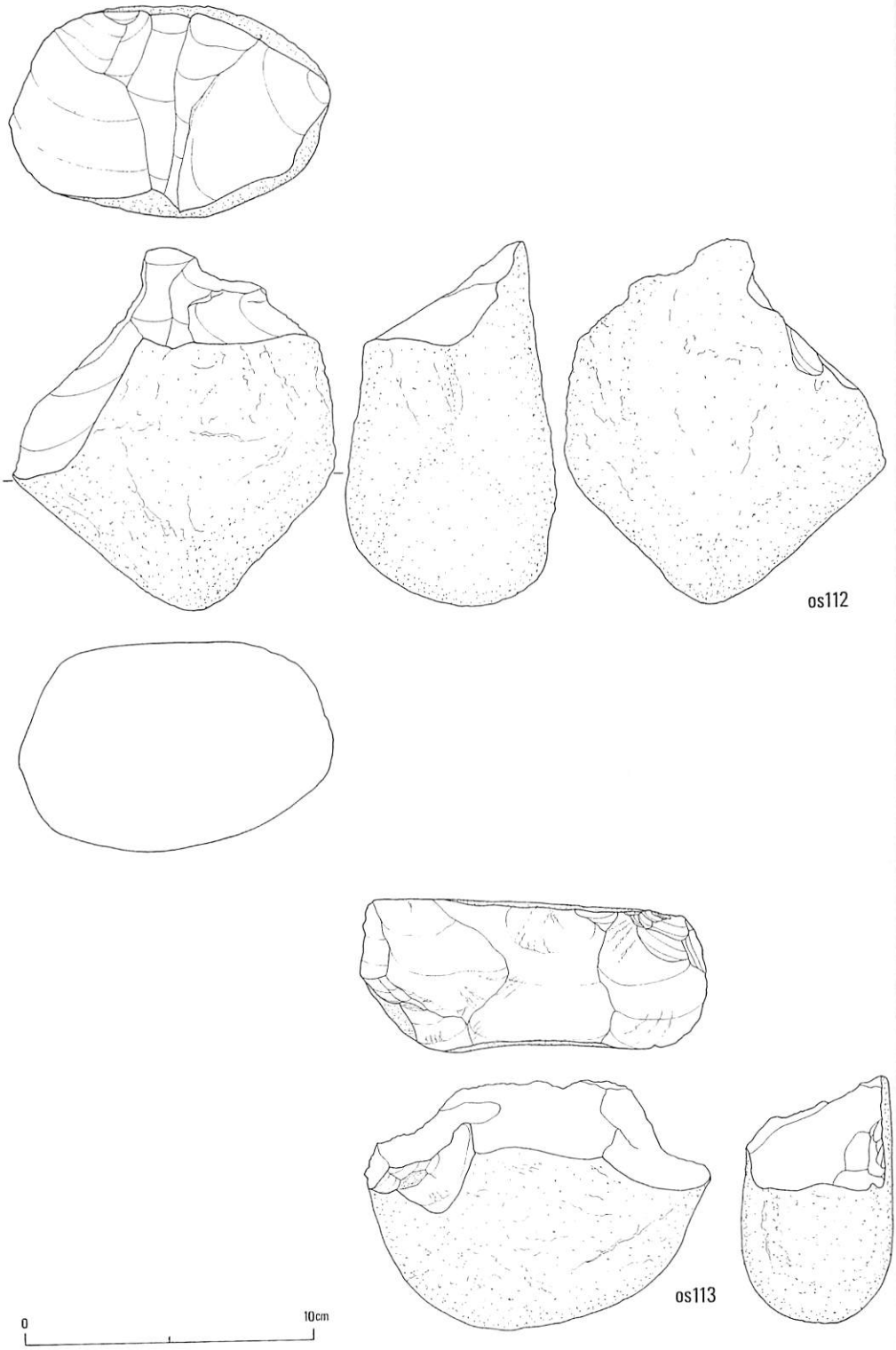
第55図　1－B地点北区石器実測図 49)
第2群：打・割器/石核　Ⅱ類



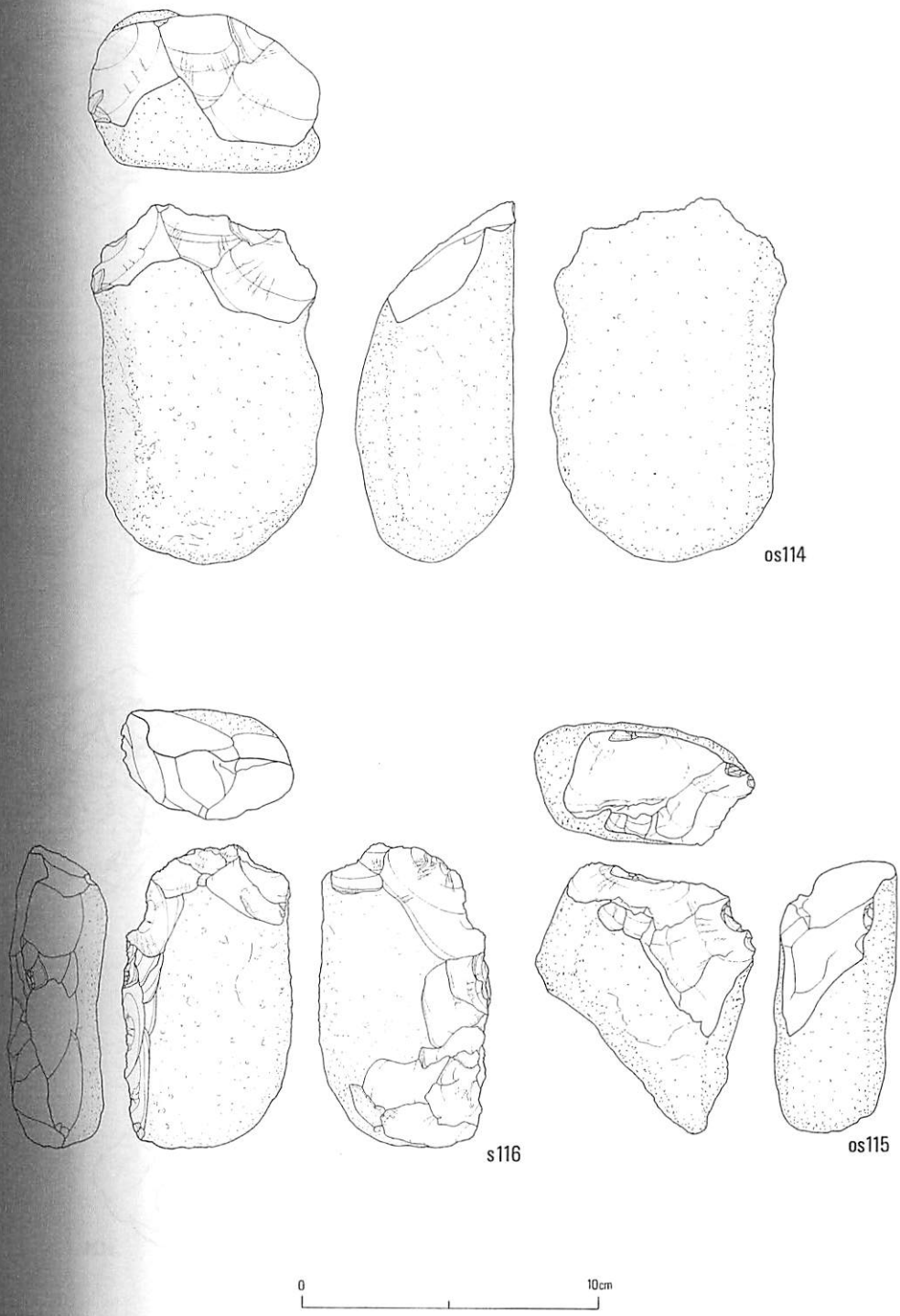
第56図　1－B地点北区石器実測図 50)
第2群：打・割器/石核　Ⅱ類・Ⅲ類(No.110)



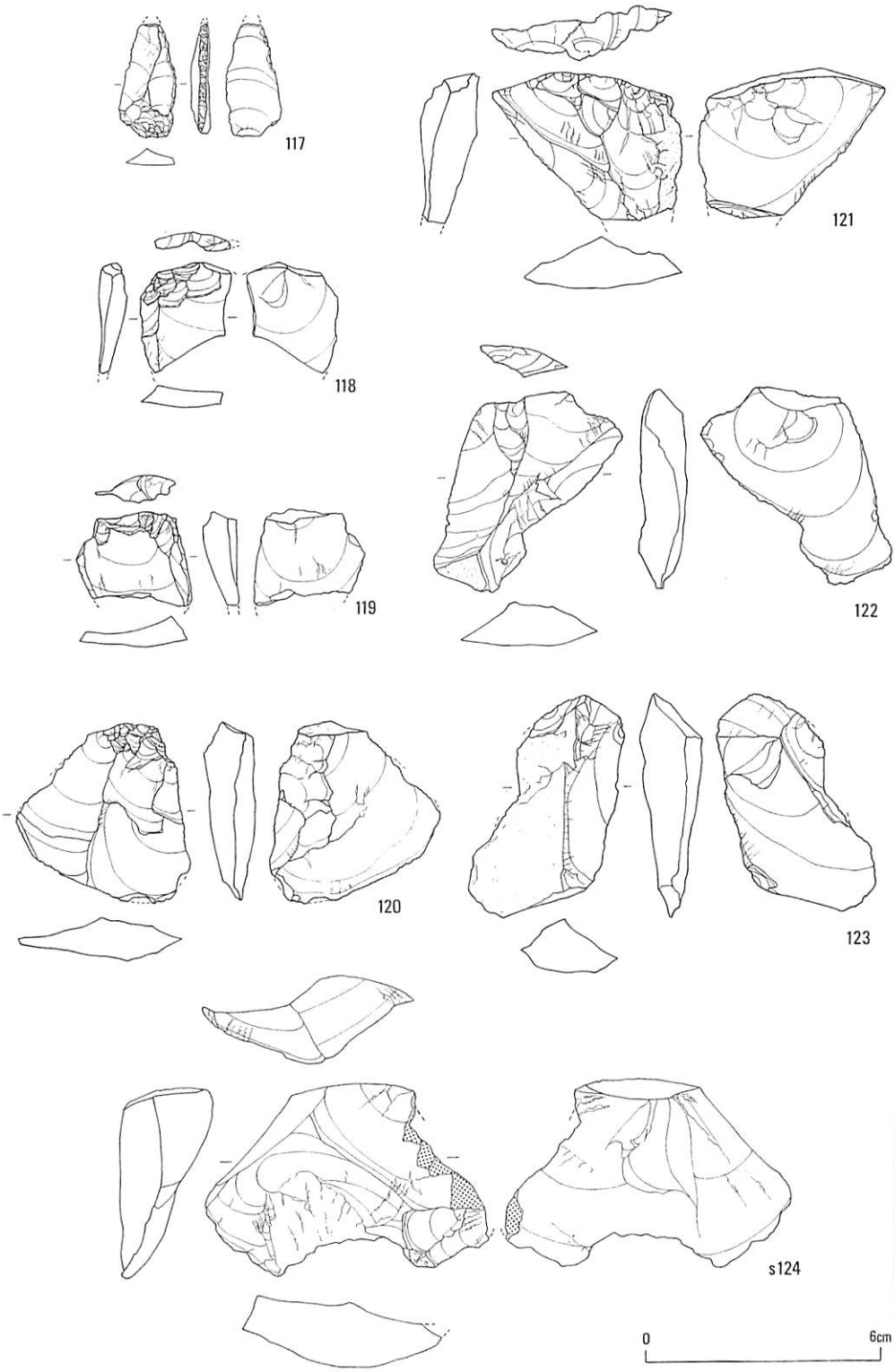
第57図　1－B地点北区石器実測図 51)
第2群：打・割器/石核　Ⅲ類



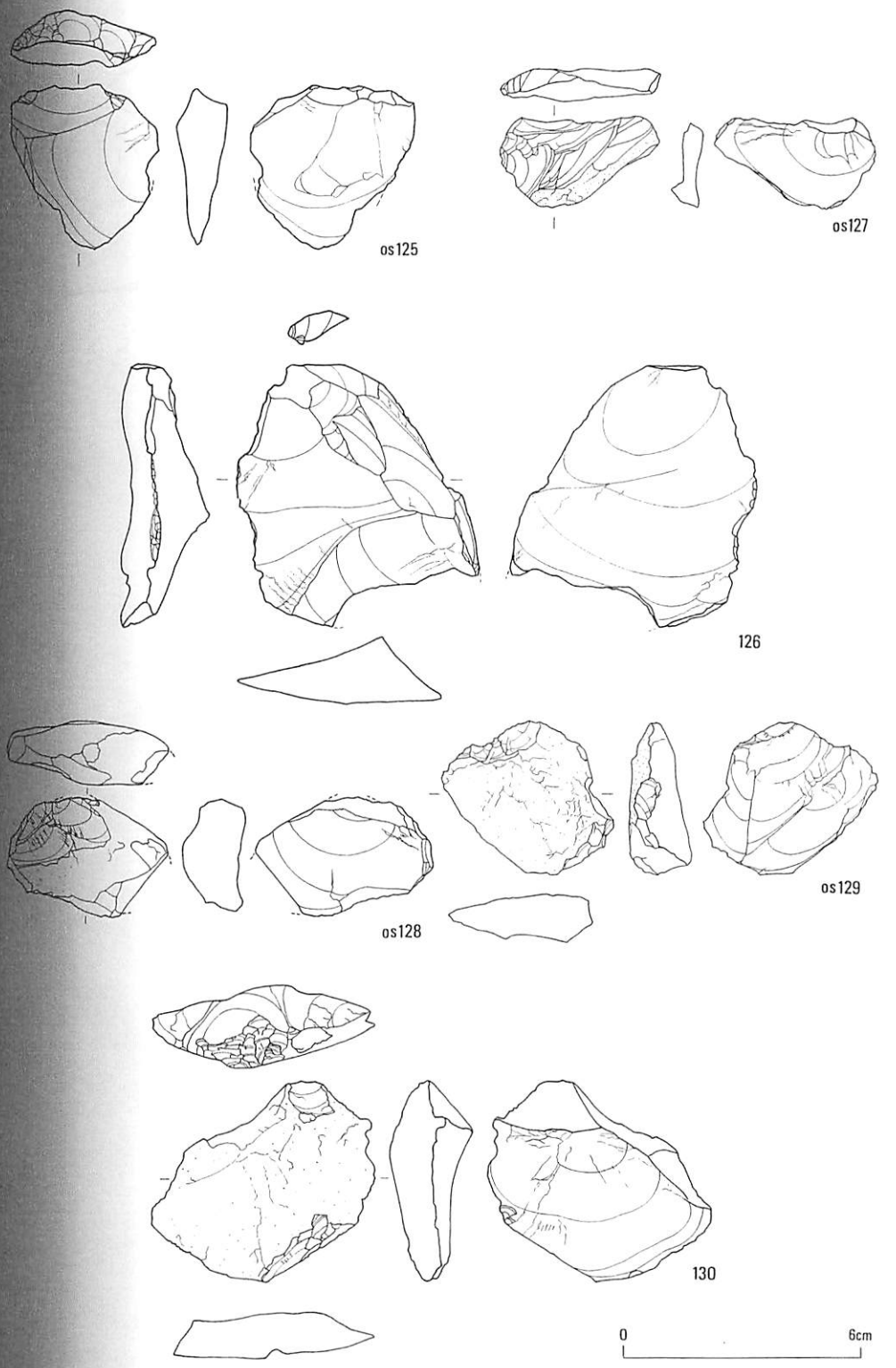
第58図　1－B地点北区石器実測図 52)
第2群：打・割器/石核　Ⅲ類



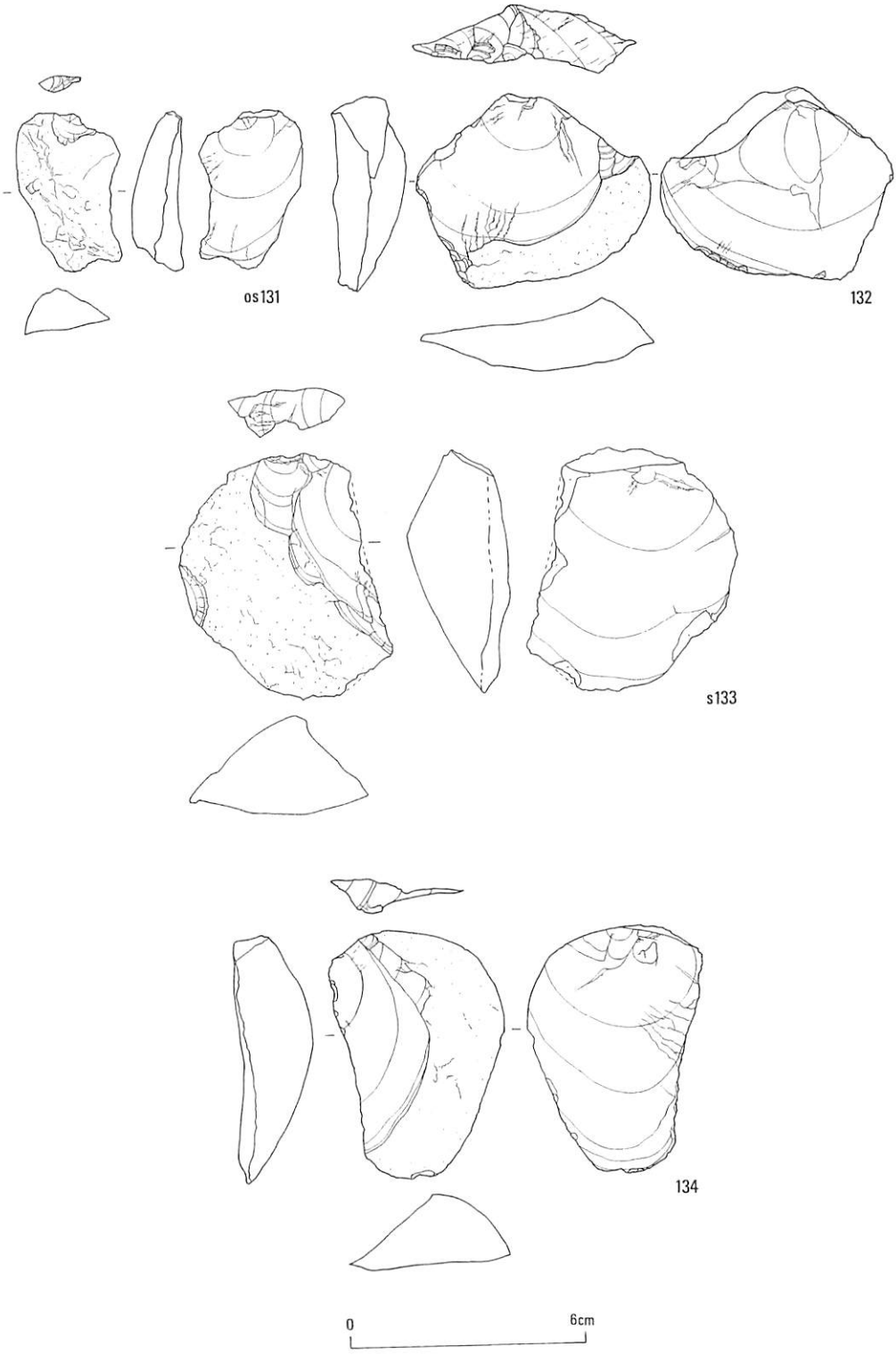
第59図　1－B地点北区石器実測図 53）
第２群：打・割器/石核　Ⅳ類



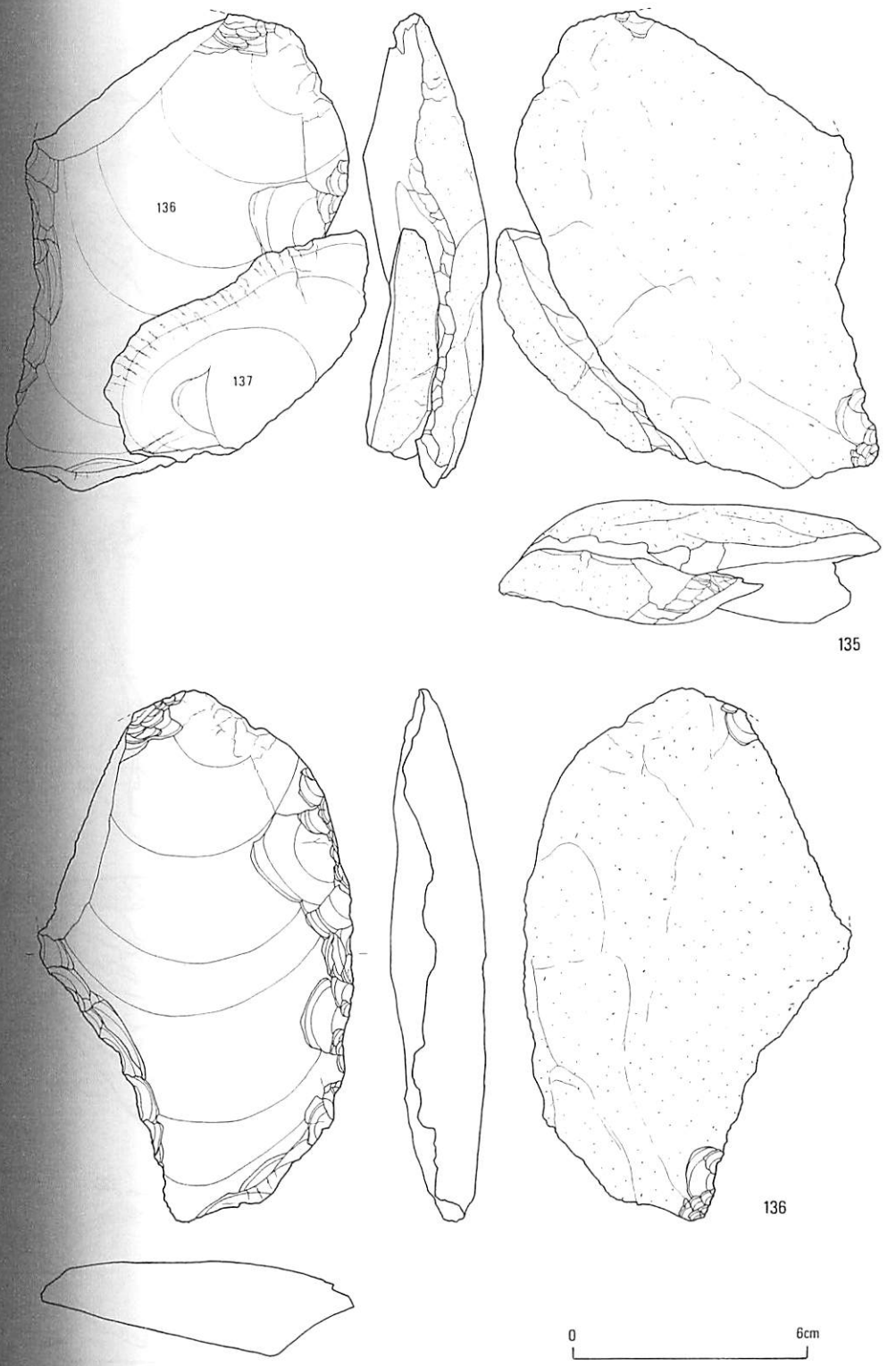
第60図　1－B地点北区石器実測図 54)
第3群：ナイフ形石器(No.117)・剥片



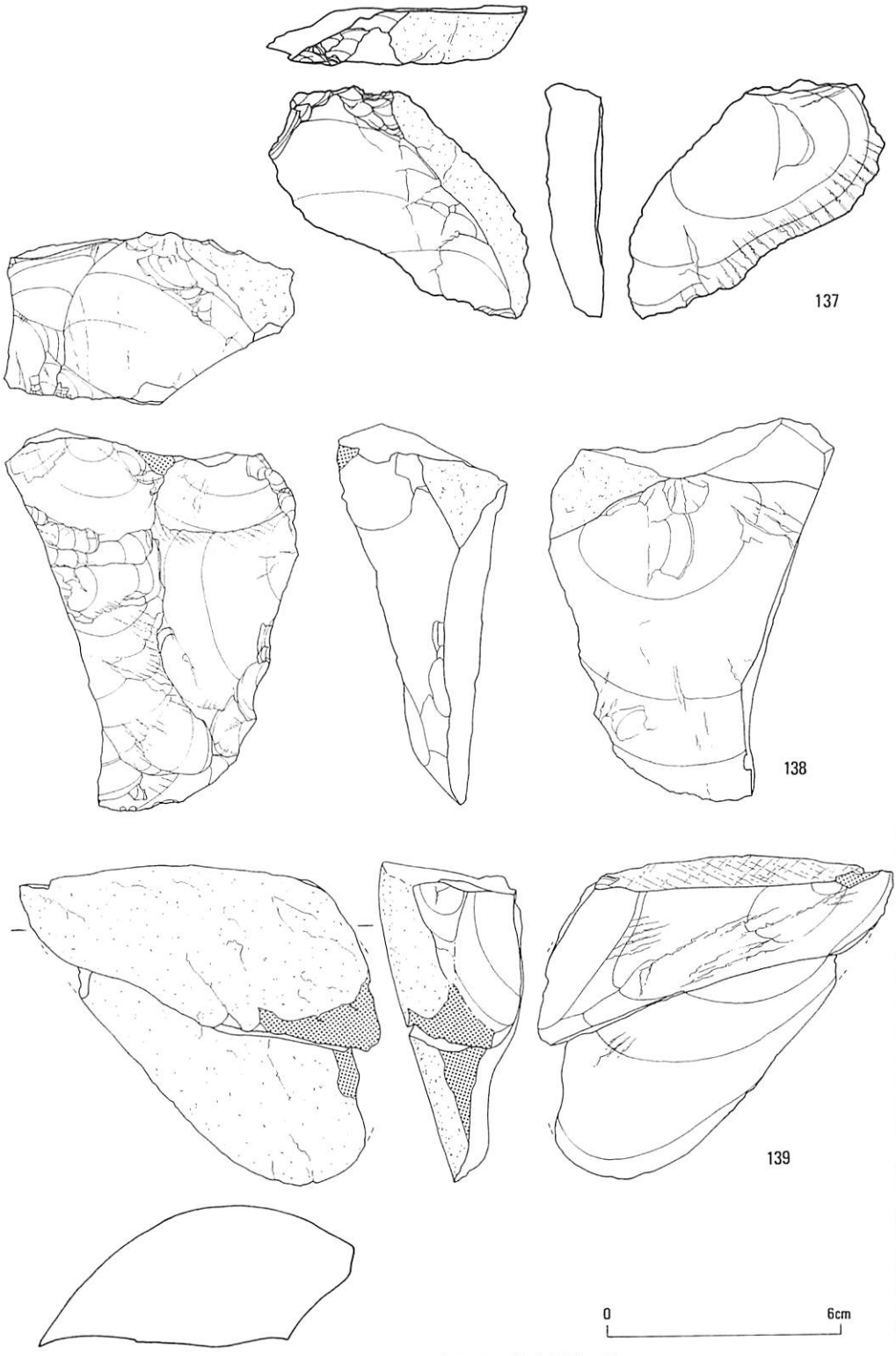
第61図　1－B地点北区石器実測図 55)
第3群：剝片



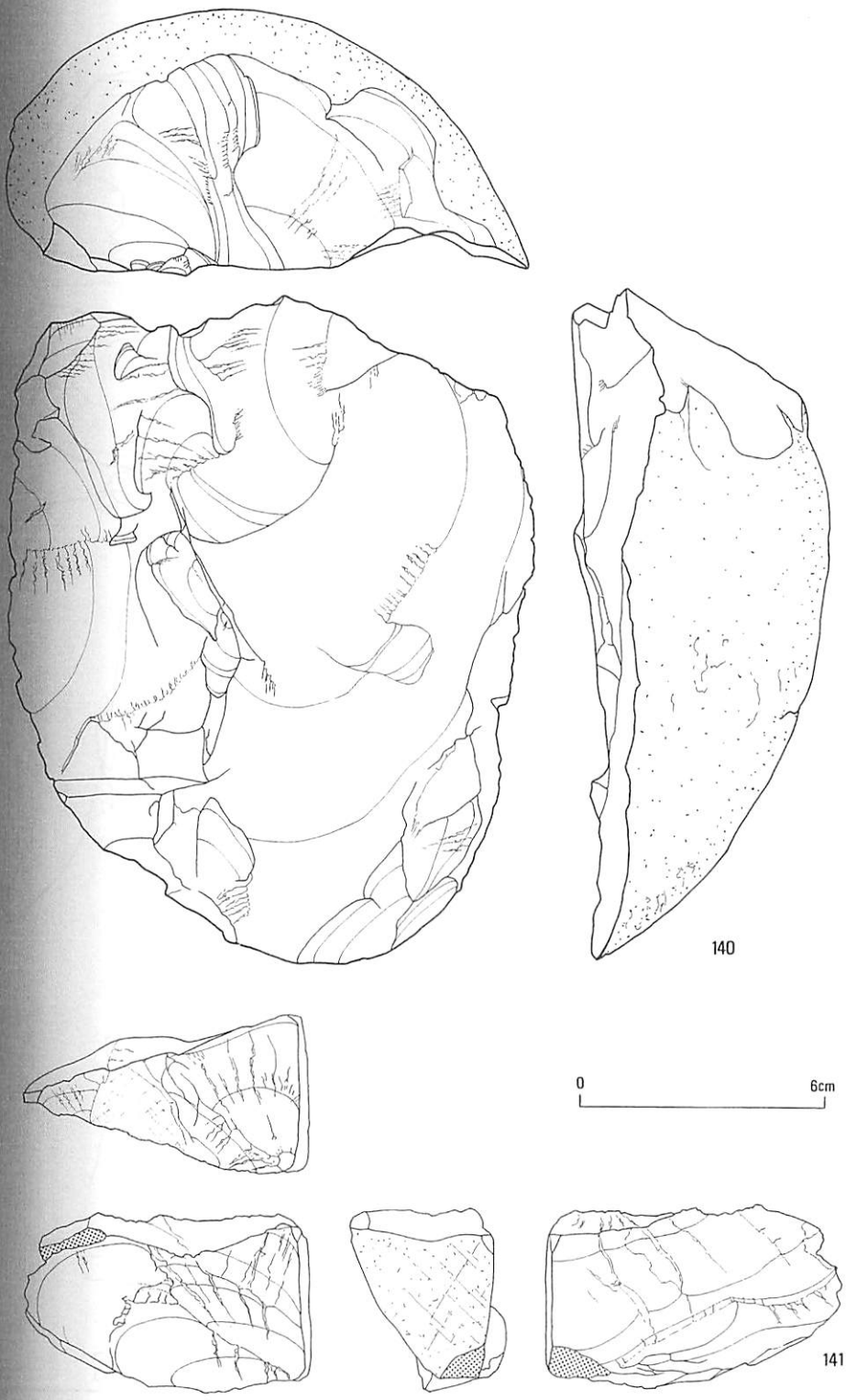
第62図　1－B地点北区石器実測図 56)
第3群：剝片



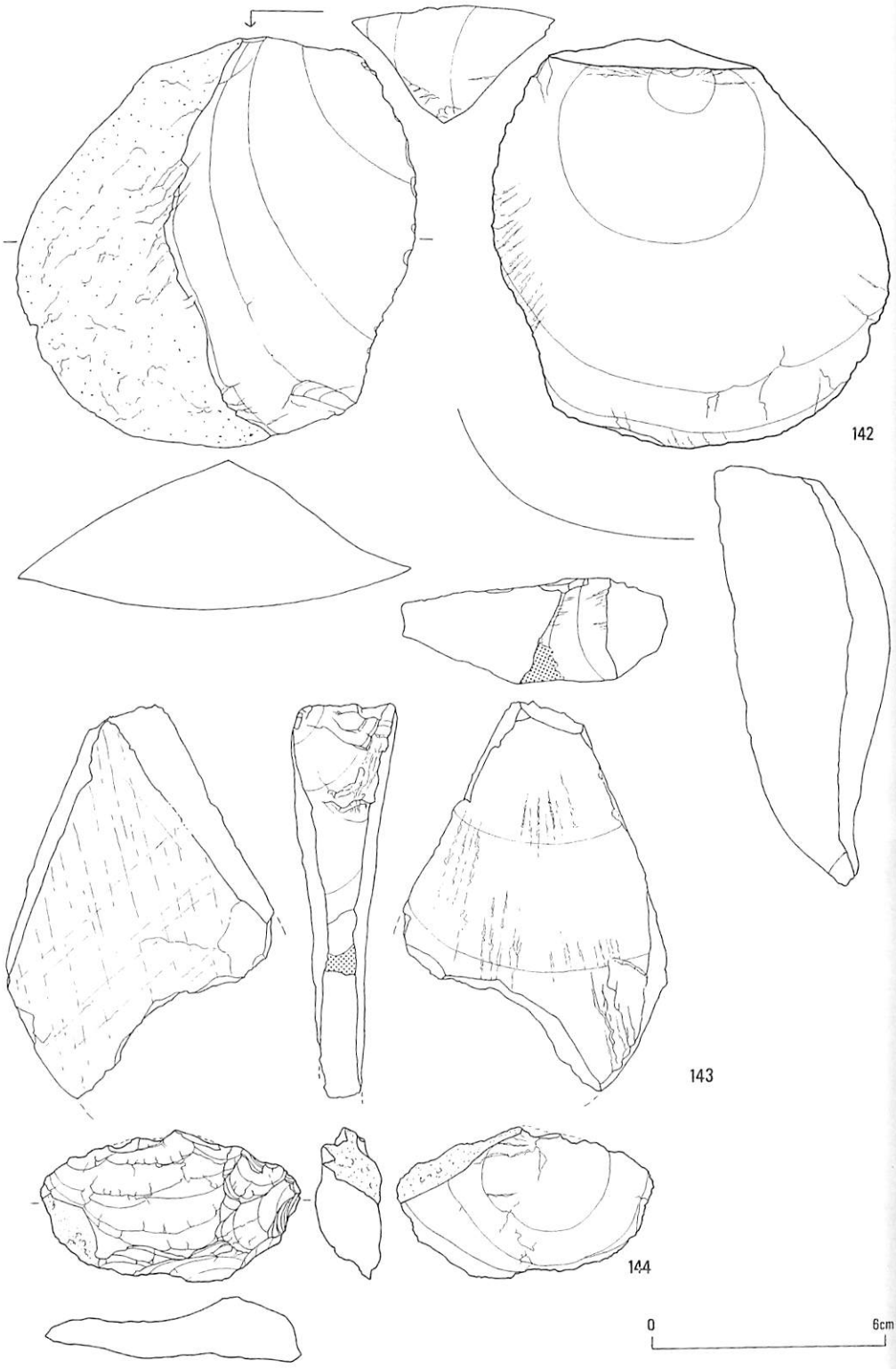
第63図　1－B地点北区石器実測図 57）
第3群：削器



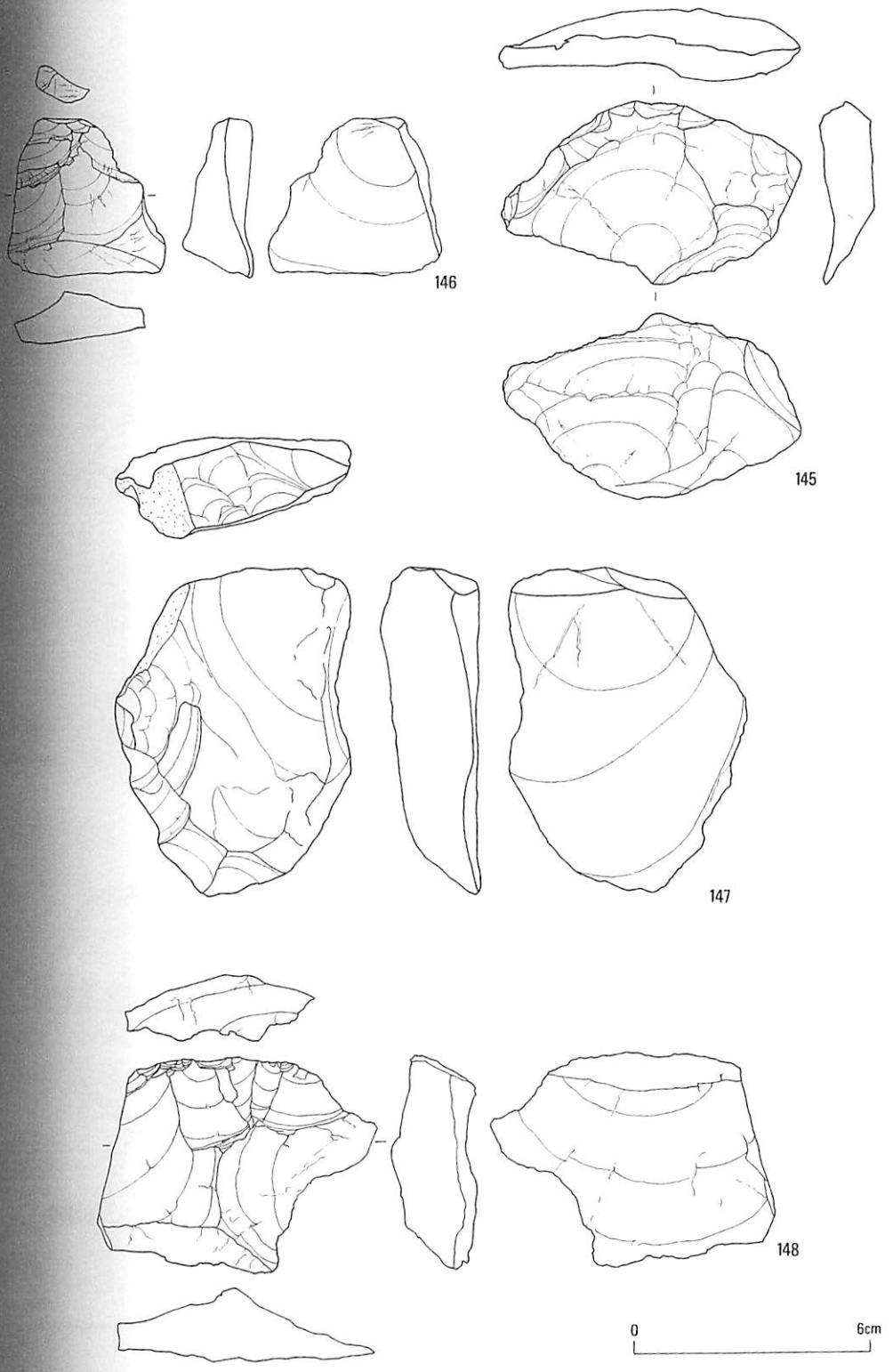
第64図　1－B地点北区石器実測図 58）
第3群：剥片



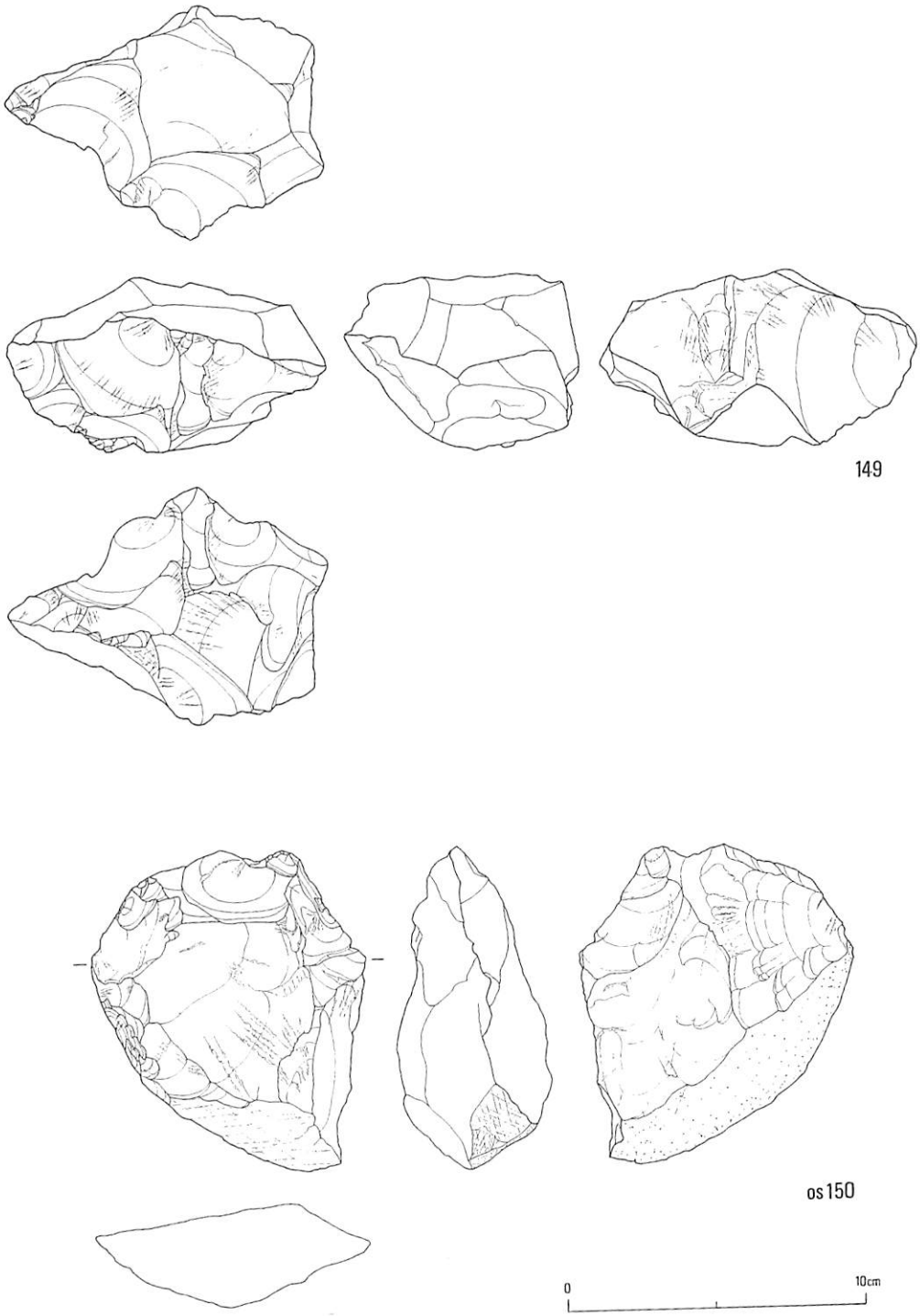
第65図　1－B地点北区石器実測図 59)
第3群：剥片



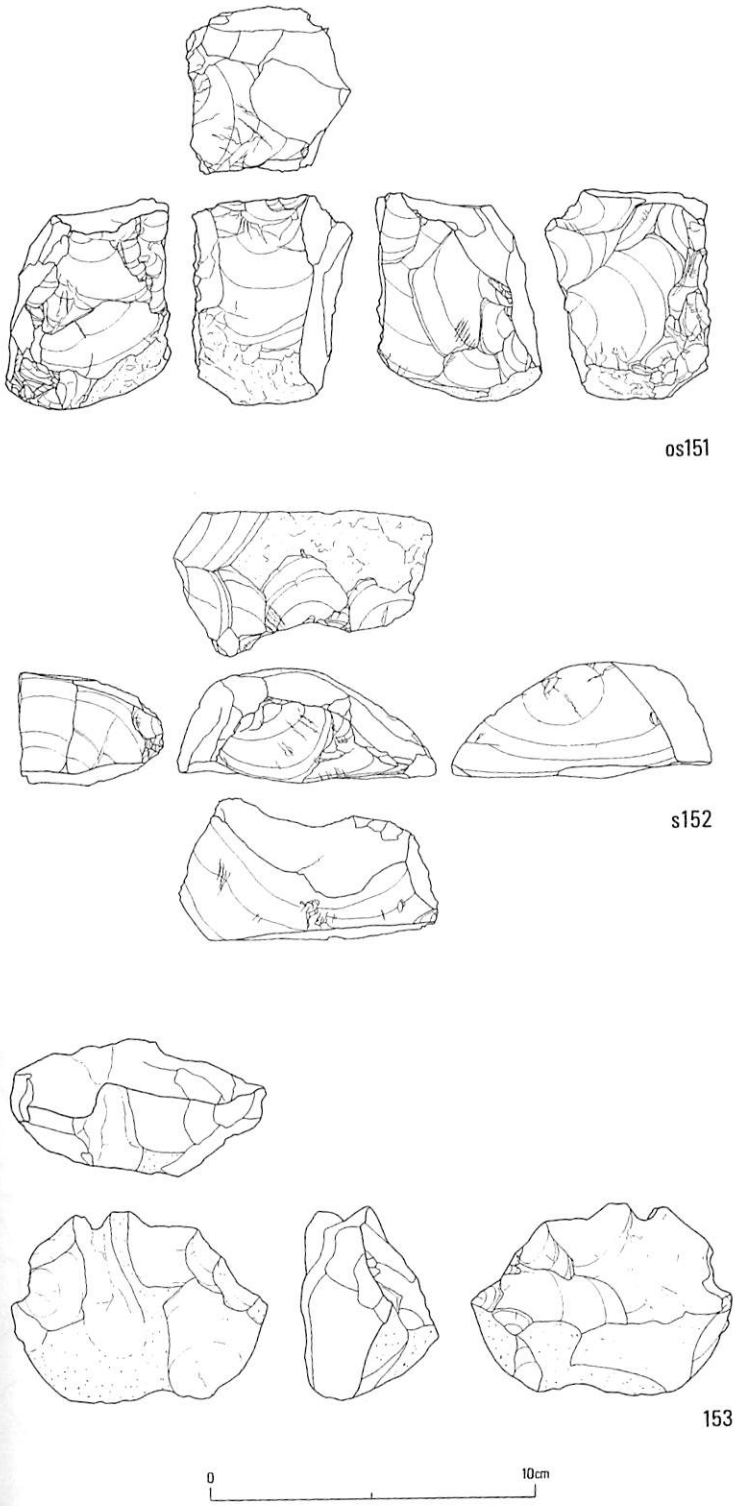
第66図　1－B地点北区石器実測図 60)
第3群：剥片



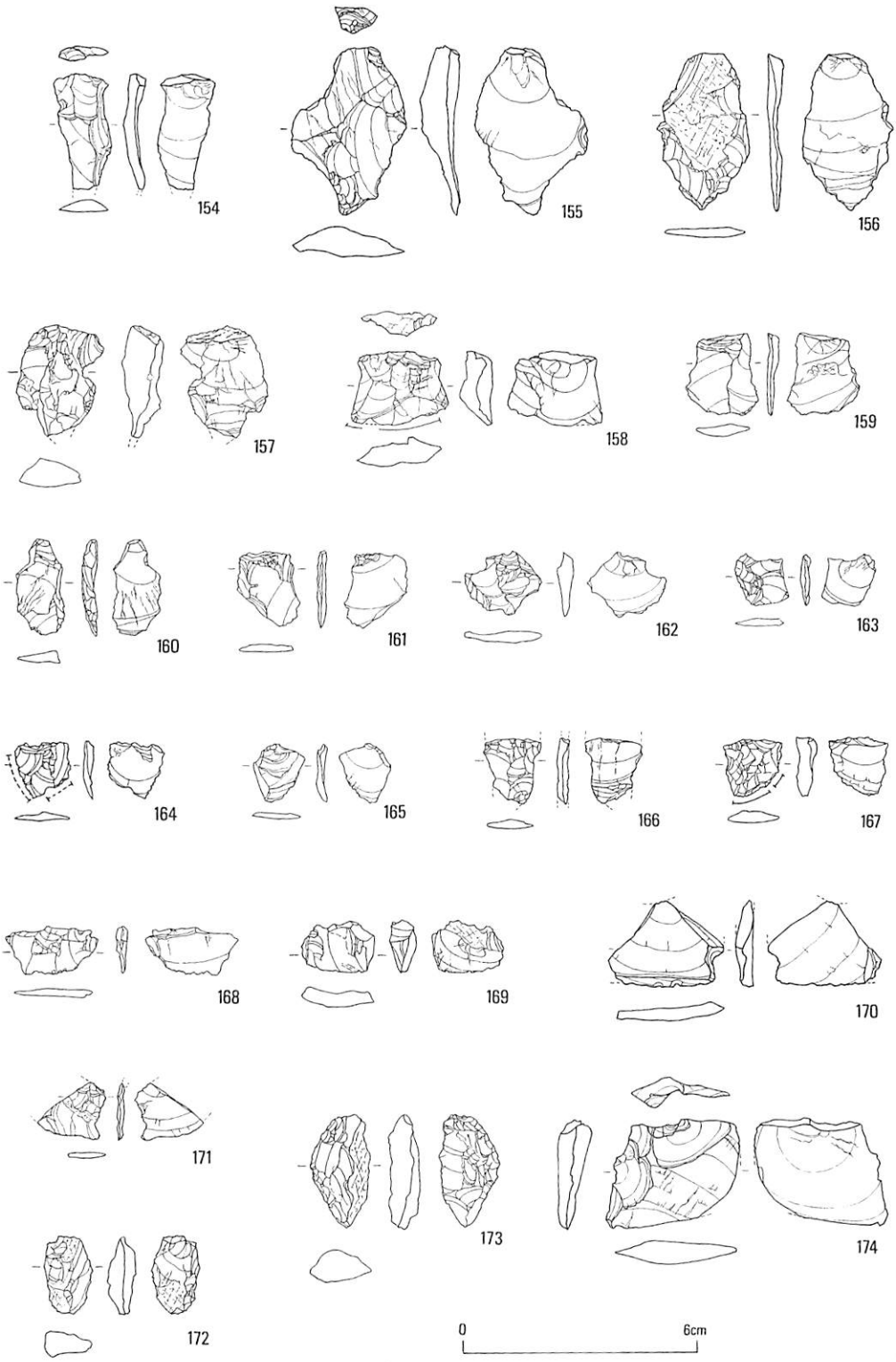
第67図　1－B地点北区石器実測図 61）
第3群：剥片



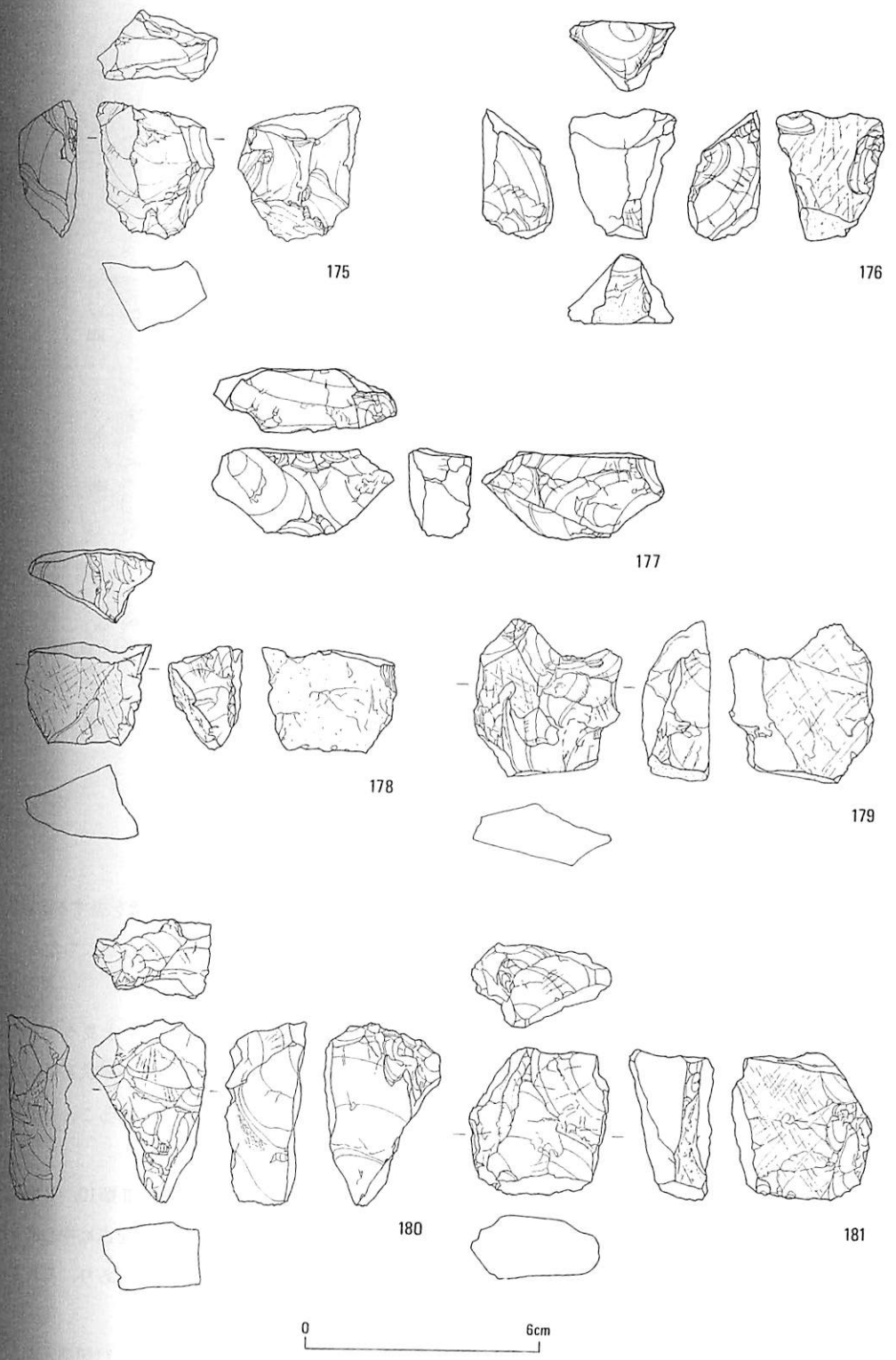
第68図　1－B地点北区石器実測図 62)
第3群：石核



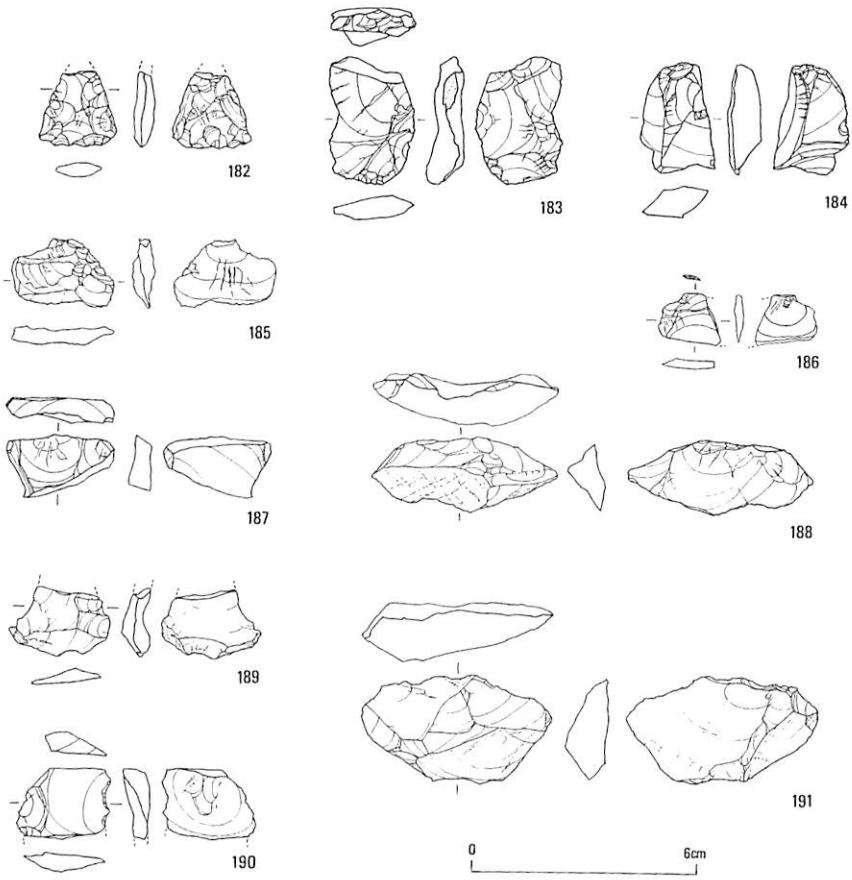
第69図　1－B地点北区石器実測図 63）
第3群：石核



第70図　１－Ｂ地点北区石器実測図 64）
第４群：ＵＦ・ＲＦ・剥片



第71図　1－B地点北区石器実測図 65)
第4群：石核



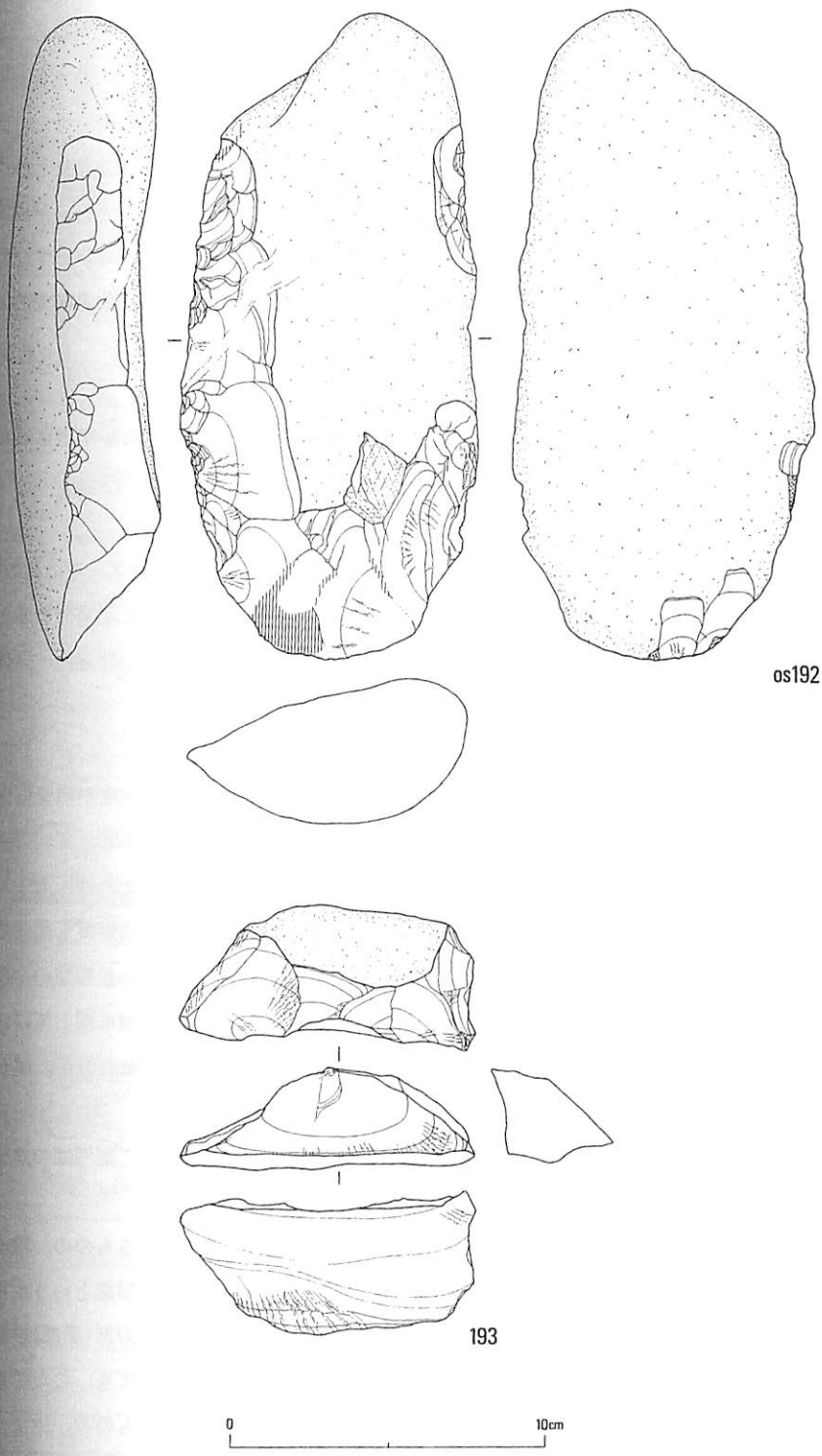
第72図　1－B地点北区石器実測図 66)
第5群：石鏃・ピエス エスキーユ・石核・剥片

ている点でⅥ類と共通する。あるいはⅥ類が極端に変則的とも思える器体の形状を呈することは，これらが本来Ⅲ・Ⅴ類の未成品あるいは失敗品であることを示すものかもしれない。ちなみにⅥ類は全て欠損している。

D)　一般に一つの類型を構成する点数が少なければ，同一類型内の変異は小さいと見ることができる。しかし，Ⅴ・Ⅷ類はこれに反し，バラツキが大きい。この点は，これらが斧状石器中の異例の存在であるか，またはそれぞれが本来別の類型の中に含み込まれるべきであることを示唆するかもしれない。この点は次に述べるⅢ類の捉え方とも関連する。

E)　斧状石器を8類型に区分した。各類型ごとの構成点数の内訳は，Ⅰ類10，Ⅱ類10，Ⅲ類26，Ⅳ類4，Ⅴ類3，Ⅵ類5，Ⅶ類3，Ⅷ類4点となる。Ⅲ類が65点中26点(40%)を占め中心的な存在である。しかし，Ⅲ類は多様性が高くa)～d)に細分して捉えることも可能であり，それぞれの構成点数を示すと，a)6，b)6，c)4，d)10点となる。

このような点数構成に注目すれば，大別8類はⅢ類の4細分レベルで区分し，11類型とみることもできるという点で，分類基準に不統一があるとみることができるかもしれない。しかし逆に，



第73図　出土地点不明石器実測図
斧状石器・翼状剥片石核(No.193)

このことは類型間の連続性の反映と見ることもできる。たとえば，Ⅱ類資料のもう一方の側縁に加工を加えればⅢ類に移行するように，素材形態として礫・分割礫・剝片が併用され，加工部位が端部・1側縁・2側縁・周縁・片面全面加工・両面加工と漸移する事実は，こうした考え方を支持するかのようである。

Ⅲ類の構成資料が一番多く，その結果変異に富むことも，見かけ状の形態差を有しつつ，遺存状態に加工・使用段階のさまざまの差を含みながら，Ⅲ類を構成していることも，斧状石器の本来的なあり方の反映とみることができることを示唆するものであるかもしれない。すなわち，Ⅲ類に代表される形態の石器を製作し，使用することが，斧状石器製作の中心的意図であったと考えておくべきではないだろうか。

2）　石質から見た類型間比較

いずれの類型も風化の激しい流紋岩か凝灰岩を主に用い，他の風化の少ない堅緻な石材は少ない点で共通する。

3）　素材の形態から見た類型間比較

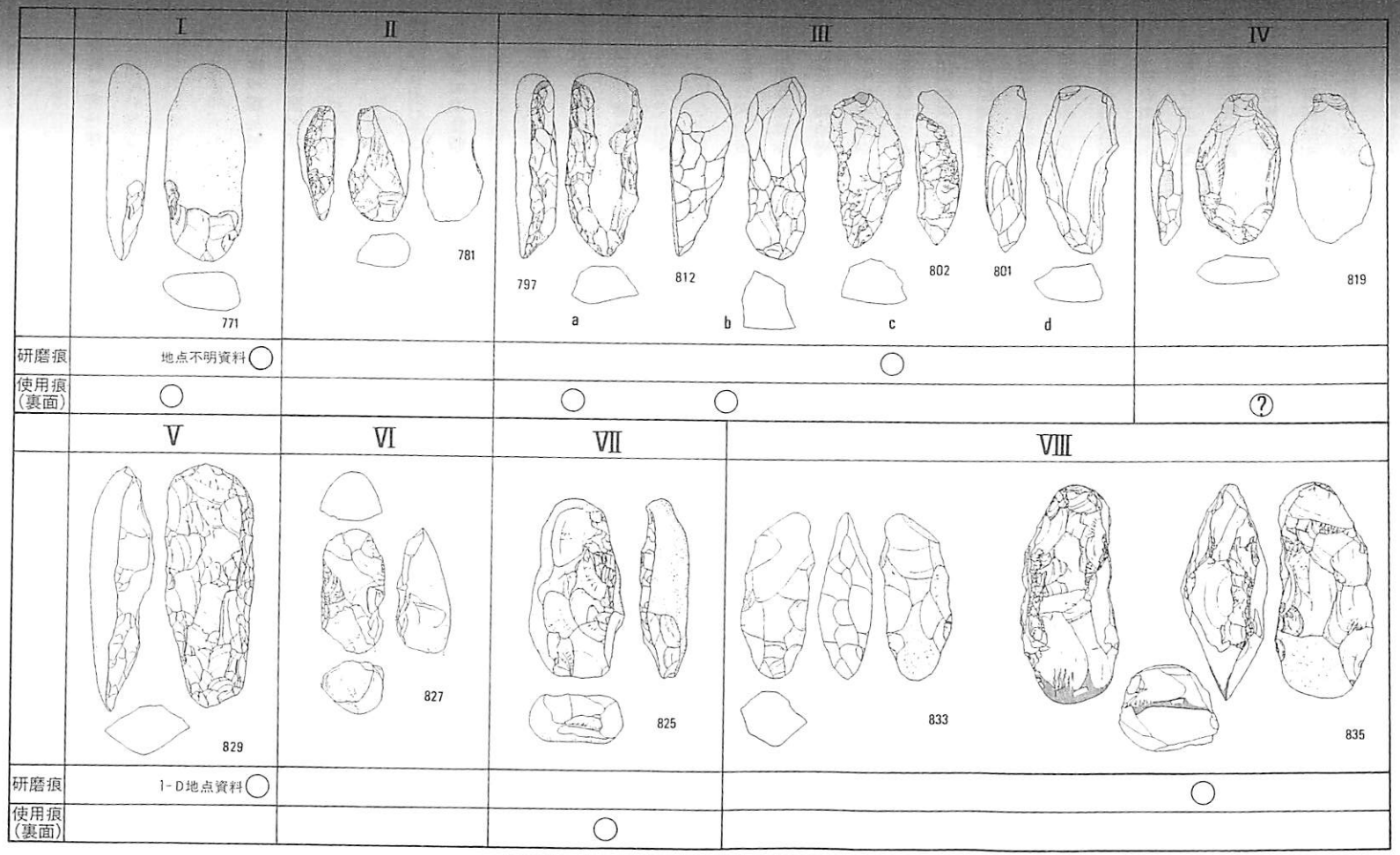
Ⅰ類が楕円礫をそのまま用い，Ⅳ類が扁平な剝片を用いる両極にあるとするとその他の類型は，礫・分割礫・典型的剝片の3者が共存使用されている。加工部位が連続的に説明できることと同時に，素材利用の状態と類型との上記対応関係を考慮すると斧状石器全体の関連性・全体的統一性が浮かび上がってくる。

4）　研磨痕および刃部背面の使用痕から見た類型間比較(第74図)

刃部研磨痕および刃部背面に生ずる石斧特有の使用痕はそれぞれ，Ⅰ(地点不明資料№192)・Ⅲ・Ⅴ(1—D地点資料)・Ⅷ類，Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ(?)・Ⅶ類に認められる。これに加えて，刃部における長軸方向に沿い剝離痕が強い階段状を示す例も，使用に係わるものと考えれば，Ⅱ・Ⅴ・Ⅵを除いた5類型に完成後の使用を認めることができよう。このことは逆に，研磨痕も使用痕のいずれも見られないⅡ類をⅢ類の延長(加工途次)で考え，Ⅴ・Ⅵ類を未完成品か他類型の中に含め類型そのものを解消して考えるべきことを示唆するかもしれない。しかしⅤ類に関しては，後述するように，同様の石器が出土する1－D地点でⅤ類に含まれるべき1例(№210)が，明らかな刃部研磨を伴っていることも想起しておかなければならない。

上記の諸要素を類型間の機能的な共通の属性とみると，若干の例外を除いて類型間の連続性をここにおいても認めることができる。

以上によって，形態・素材・加工方法に各類型それぞれに独立性を認めうるものの，機能的には相互に強い連続性を読み取ることができ，八つの類型を同一範疇に属する諸形態というかたちで理解ができると思う。そして，刃部研磨例が端的に示すように，この一群は，刃部(局部)磨製石斧と同じ機能的性格を有するものであろうことも示唆している。この点は別にしても，ここに斧状石器として一括した一群は，素材の形態や2次加工，石器の全体形状に差はあるものの，少なくともとりわけ刃部の作出意図・方法に一貫した強い同質性を窺うことができるという点で，同一器種に属する石器の表現形態の多様性と把握することができたと思う。



第74図　1－B地点北区斧状石器分類区分図
図中の数字は挿図No.

5．石器の分布

当地点はブルドーザーによる削平がなされており，出土遺物は基本的に原位置を失っている。したがって，その分布状況，石器ブロックのあり方から，遺跡構造の一端を探ることは困難であるというのが基本的な認識である。しかしながら，当地点の発掘が丹生遺跡群の一連の調査の中でも最後の本格的調査であり，その分だけ調査に対する姿勢も周到さが増しており，発掘面積も大きい。その結果として，丹生遺跡群中で出土遺物の位置記録が詳しく残された唯一の例となっている。

ブルドーザーの削平を受け遺物は原位置を失しているとはいえ，あるいは旧状を幾分かでも分布状態に反映している可能性も念頭におきながら，第1～5群それぞれに出土状態を図示し，簡単な説明を加えておきたい。

第1群石器(第75図)

斧状石器はトレンチ中央の空白部を挟んで，東側にまとまりのよい1群，西側により広い一つの分布のまとまりがある。西側の一群が南半と北半とに2分されると見てもよいのかもしれない。東・西の分布集中間の空白部は幅約10m程あり，原位置論的分布論の対象としてではなく，概略的な位置に意味があるとするならば，東・西2つの分布のまとまりは，遺跡の成り立ちを考えるうえで，多少なりとも示唆を与えるものかもしれない。このような立場で分布状況を見てみると，内容にはさして大きな差はないように見受けられる。ただ多少気掛かりなのは東側に分布する斧状石器製作過程で生じる素材剝片が，西側にあまり見当たらないことである。製作行為の場が一方に限られていたものであろうか。

第2群石器(第76図)

打・割器／石核類は，出土位置を確認できるものが少ない。一見すると出土位置は特定の集中域を形成せず，調査区の外縁部に散在する。なおかつ，第1群石器との関係では，これと分布位置が重複しない。

第3群石器(第77図)

ナイフ形石器関連資料は，中央に空白部を有し，外周全域に分布するように見受けられる。しかしながら，西・南側は数量的に限られており，調査区の東北端に集中域を持つと見ることができる。第1・2・5群と対比して，その分布中心域は明らかなズレを生じている。

第4群石器(第78図)

チャート製石器群は，中央から東側にかけて広い空白地帯が認められる。東北隅・東南隅・西側北半の3ヶ所に主たる分布域を有すると認めることができる。全体的な分布傾向は，第3群とおおむね重なると見ることができよう。

第5群石器(第79図)

安山岩・黒耀石製石器類は，石器数が少ないため，目立った集中域を形成しないようにも見受けられる。しかしながら，絶対量に比して中央付近に多くの資料が位置する点は，第1～4群の分布傾向と著しい相違点であると見ることもできよう。

以上五つの石器群は，概してそれぞれ固有の分布傾向を示すと解することができるが，出土状況

の原位置性に対する評価が困難で，本来，遺跡の成り立ちや石器群間相互の同時性の検証に供しうるデータについて詳しい検討をなしえないことを遺憾とする。

6．1－B地点北区の性格

1－B地点北区の石器群は，刃部の局部研磨技術を有した多量の斧状石器の存在によって第1に特徴づけられるが，斧状石器群の遺跡における遺存状態からみた，当区の性格を検討しておきたい。

㈶古代学協会所蔵の1－B地点北区出土斧状石器類は，採集・発掘品双方合せて確実な例だけで約80点にのぼる(分類保留群を含む)。別の採集例を合わせれば100点近くになろう。問題の石器の器種区分や所属時期の如何にかかわらず，特異な石器群構成・出土状況と言わなければならない。この特異な性格の実体を探るために，これまでに気のついた点を挙げておきたい。

1)製作の痕跡

多量の斧状石器が作られたとすると，その素材が円礫を主とするという点からみて，容易に加工過程に生じた剝片を指摘できるはずであるが，素材製作過程は別にして，最終(2次調整)加工剝片はこれをほとんど認めえない点で，最終整形加工がこの場において行われたことの否定的な材料である。

一方，斧状石器の加工時に生じた欠損を窺わせる資料もある。No.60・72の2例が好例である。前者は裏面側への剝離が，後者は表面側への加工のための打剝が，結果的に器体自身の損壊を招いたものである。これらの資料は，逆に最終整形加工の痕跡とも受け取ることができる。この他の欠損例の原因については定かではないが，整形加工時の失敗と判断できない以上，使用中の欠損と見ても支障はないであろう。

この他，多くの素材剝片および槌石の存在は製作行為を積極的に支持する。ただし，用いられた礫の大きさからみて，素材獲得の段階ではなく，2次加工段階の製作行為か，あるいは斧状石器以外の石器製作に関与するかもしれない。

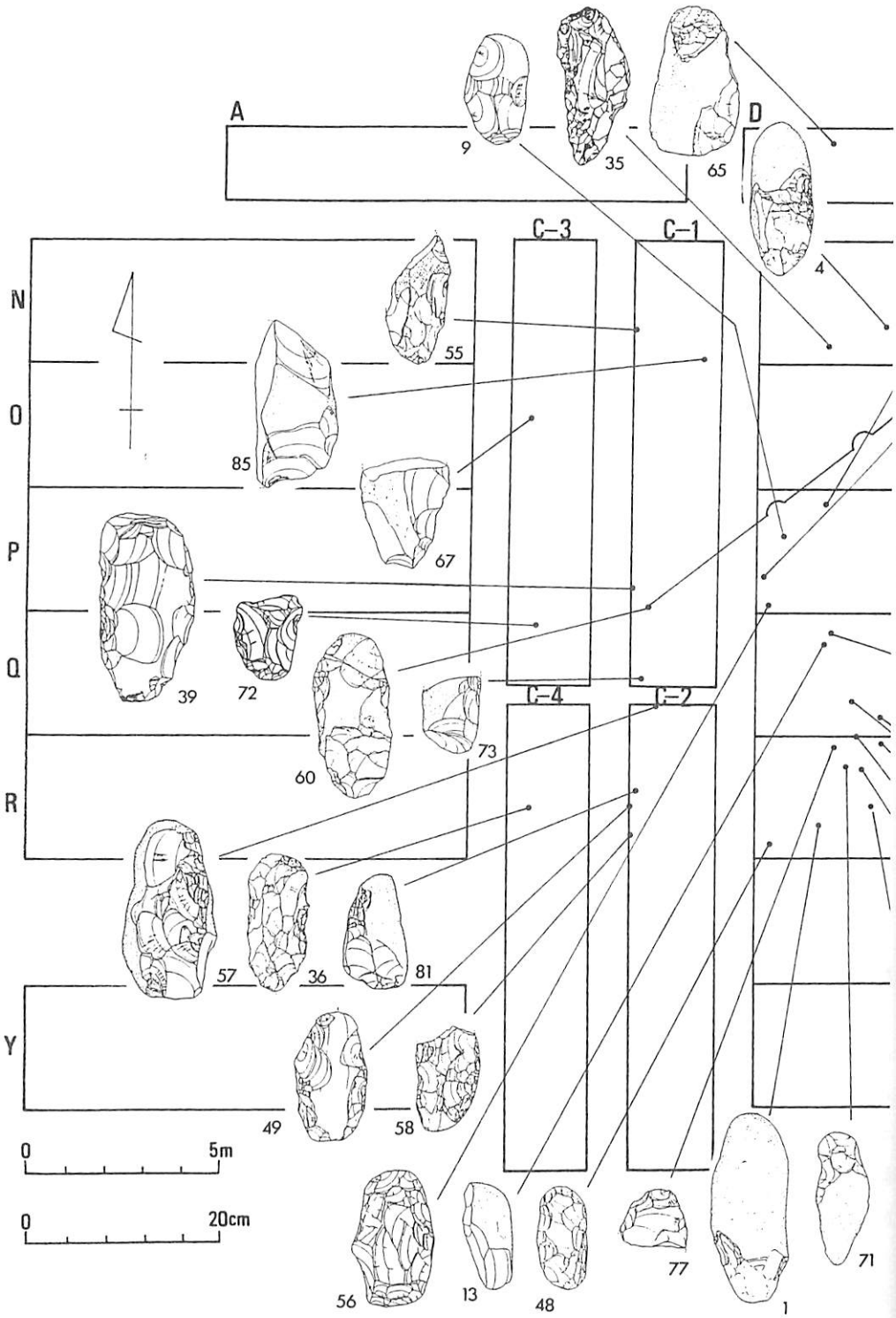
2)使用の痕跡

Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ類の石斧には，いまのところ明確な使用痕・研磨痕を認めていない。しかし，Ⅴ類に属する1－D地点出土例(No.210)には，明瞭な研磨痕を認めうるし，出土地区地点とも不明の資料とは言え，Ⅰ類の例品(No.193)に明確な研磨痕を認めることができる。しかも，研磨痕を有する例のうち多くが，研磨部分にその後の剝落部分を留めており，研磨後における使用ないしは再加工(刃部再生)のあったことを窺わせる。

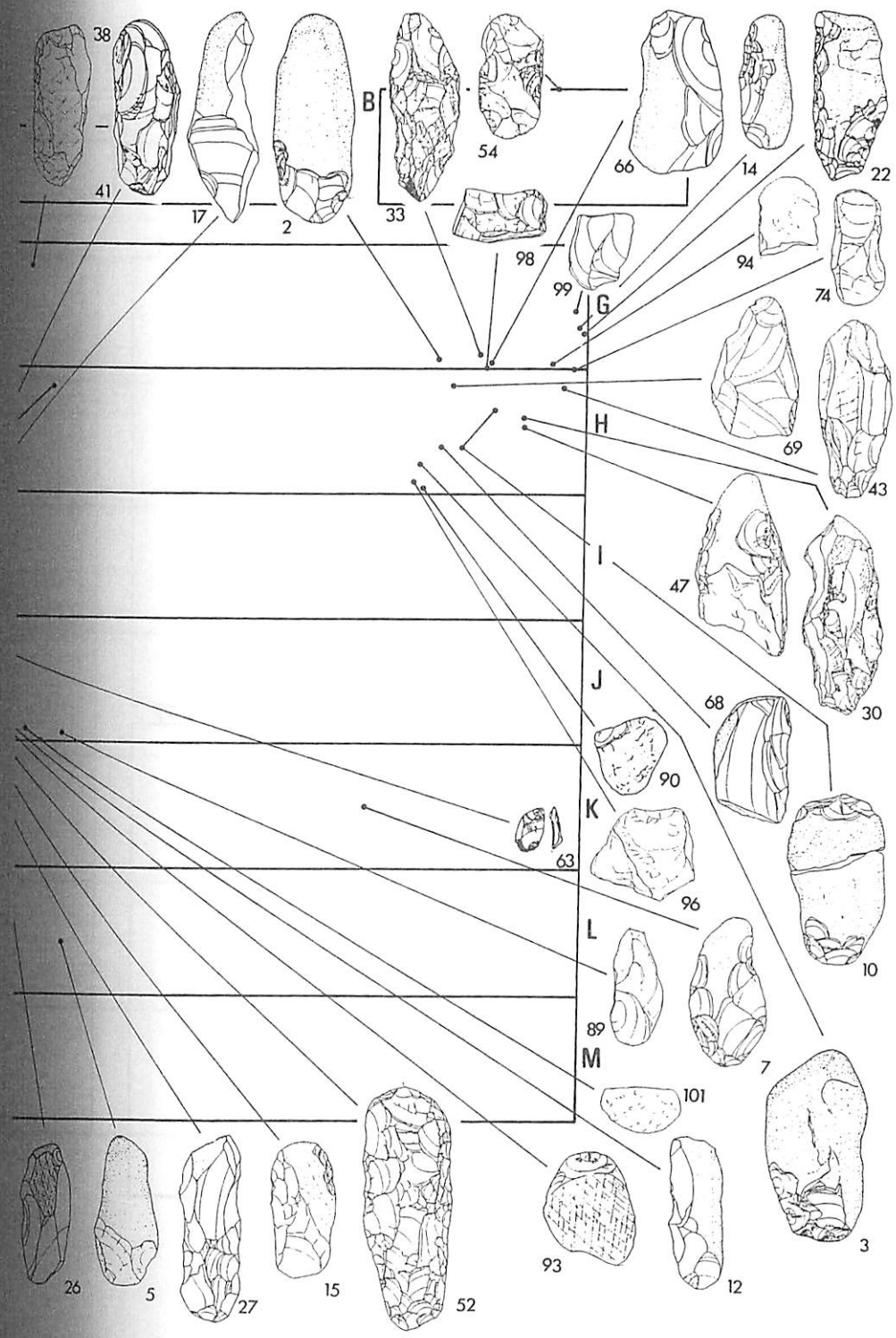
以上によって本地点が，多量の斧状石器を伴っているという意味で特殊性を有しながらも，デポ説を窺わせるような遺存状態をいまのところ認めがたいという意味で，特殊な遺跡ではなく，一般的な生活址であると見るべきであることを示唆しているのではないかと思う。

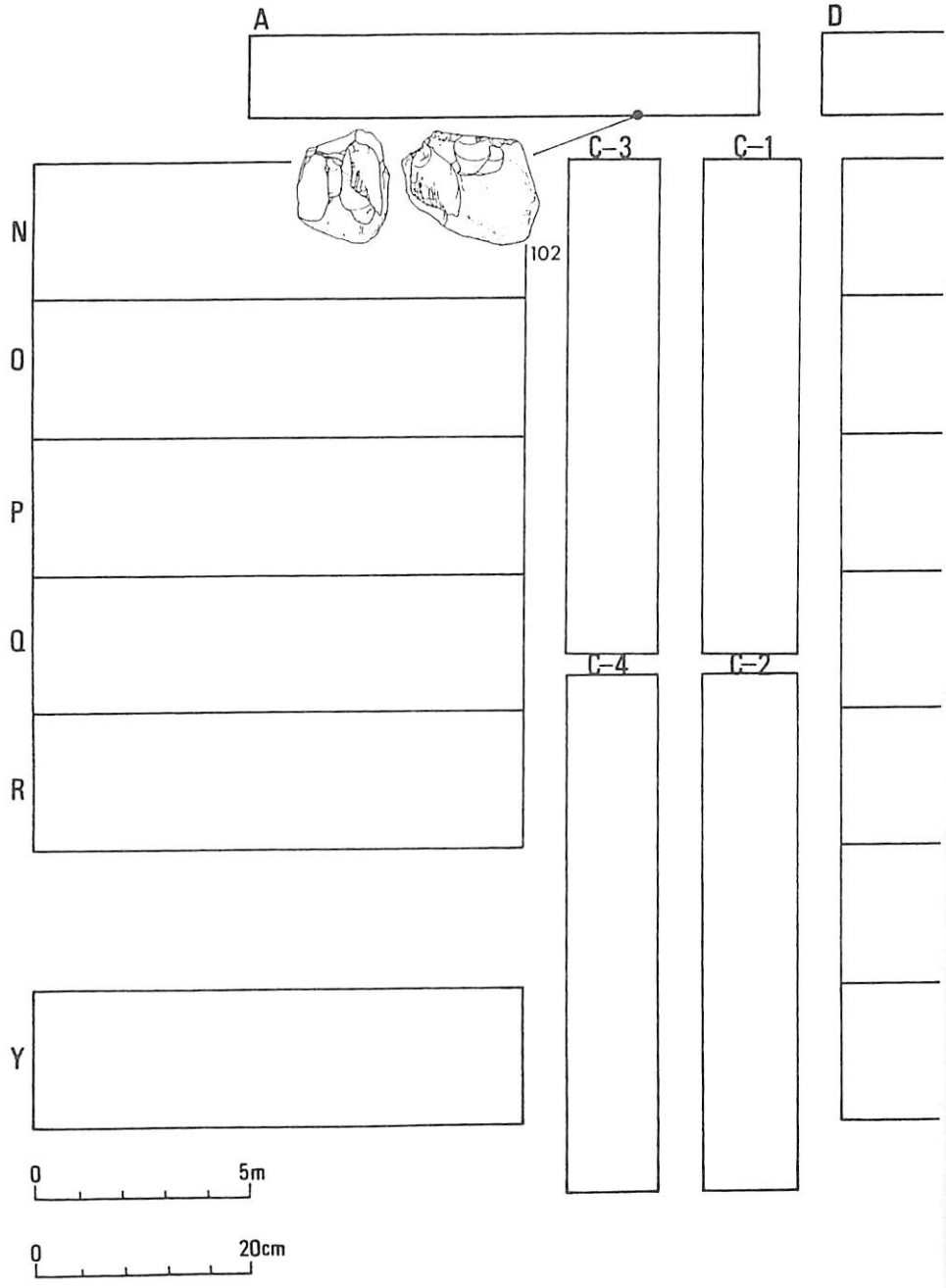
7．斧状石器の特徴とその位置付け

最後に，他の石器群との比較の手掛かりとなるような要素を指摘し，所属時期の判断の前提作業としておきたい。なお，斧状石器群の製作技法の考察はⅢ章第2節を参照されたい。

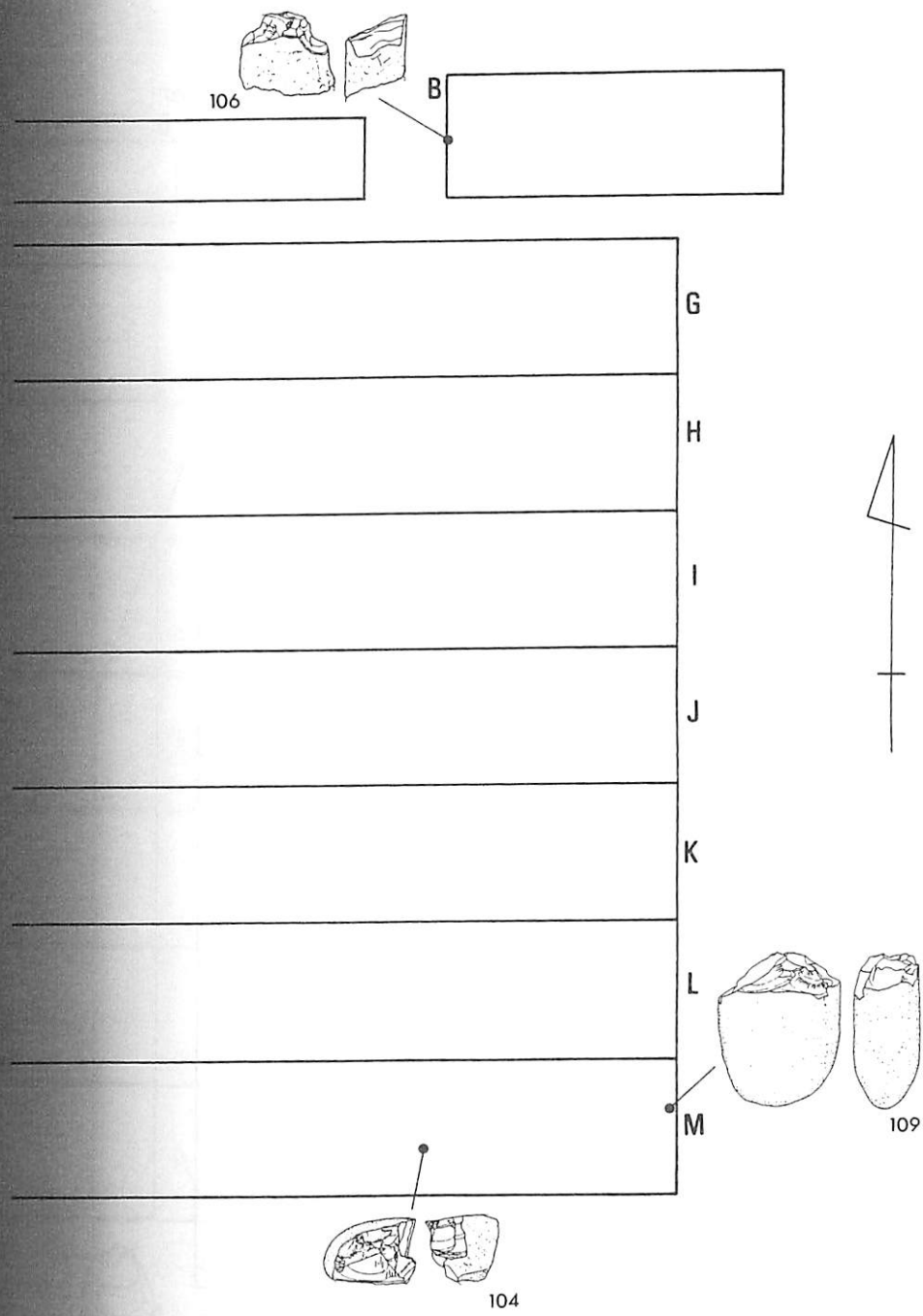


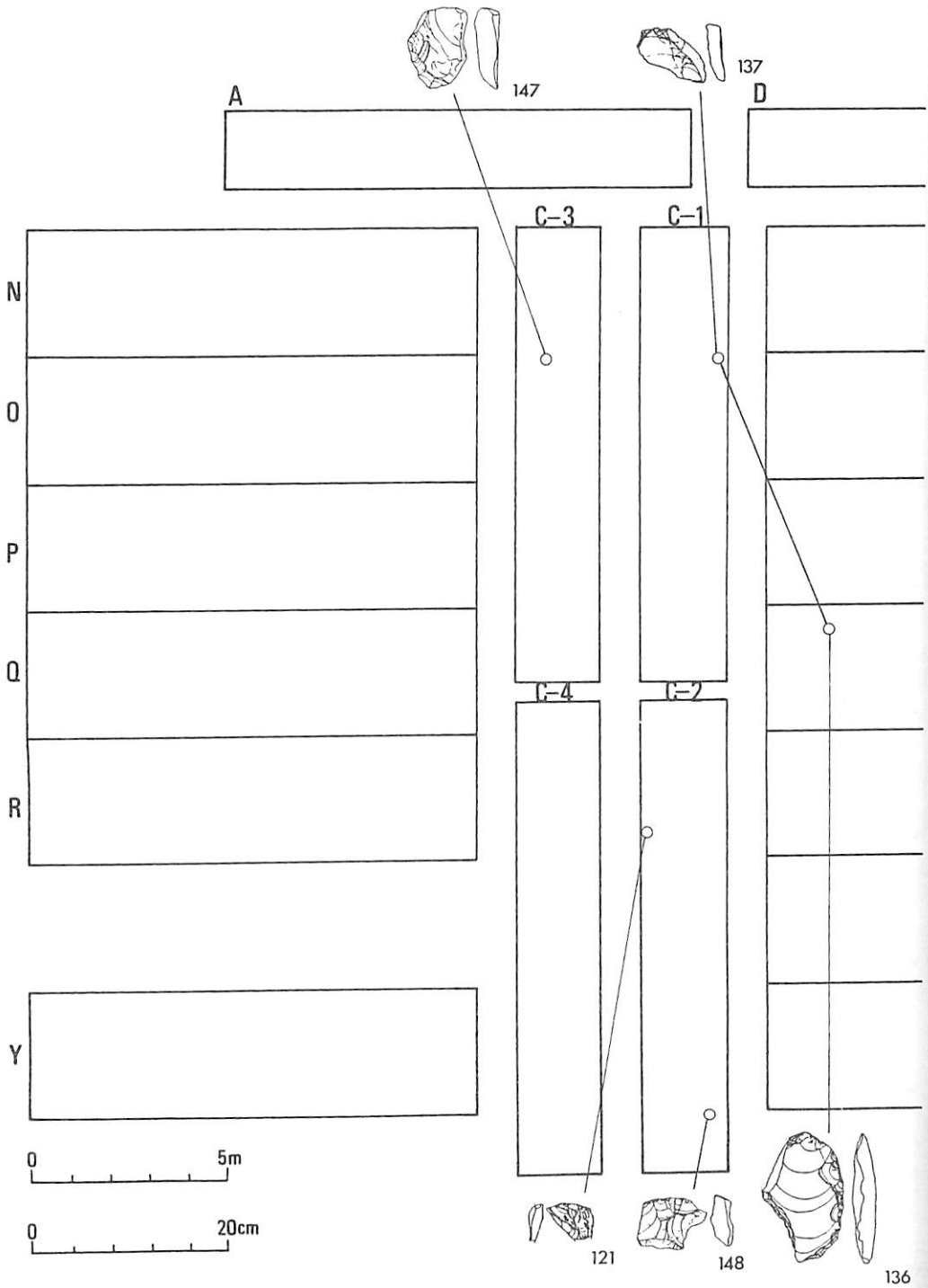
第75図　1－B地点北区第1群石器平面分布図
図中の数字は挿図No.(以下第79図まで同様)。


38
41
17
2
B
33
54
66
14
22
98
99
94
74
G
69
43
H
47
I
30
J
68
90
K
63
96
10
L
89
7
M
101
3
26
5
27
15
52
93
12

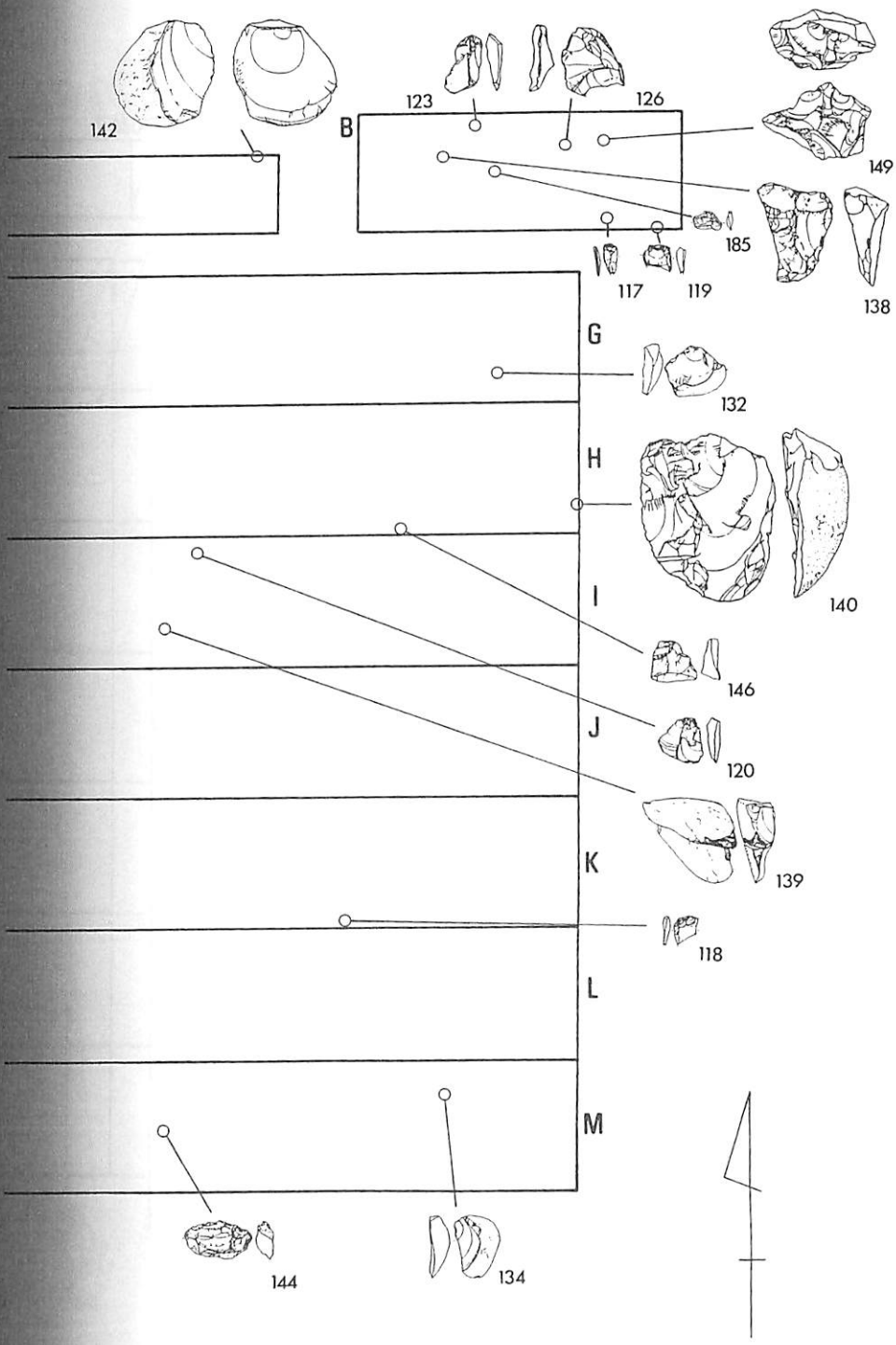


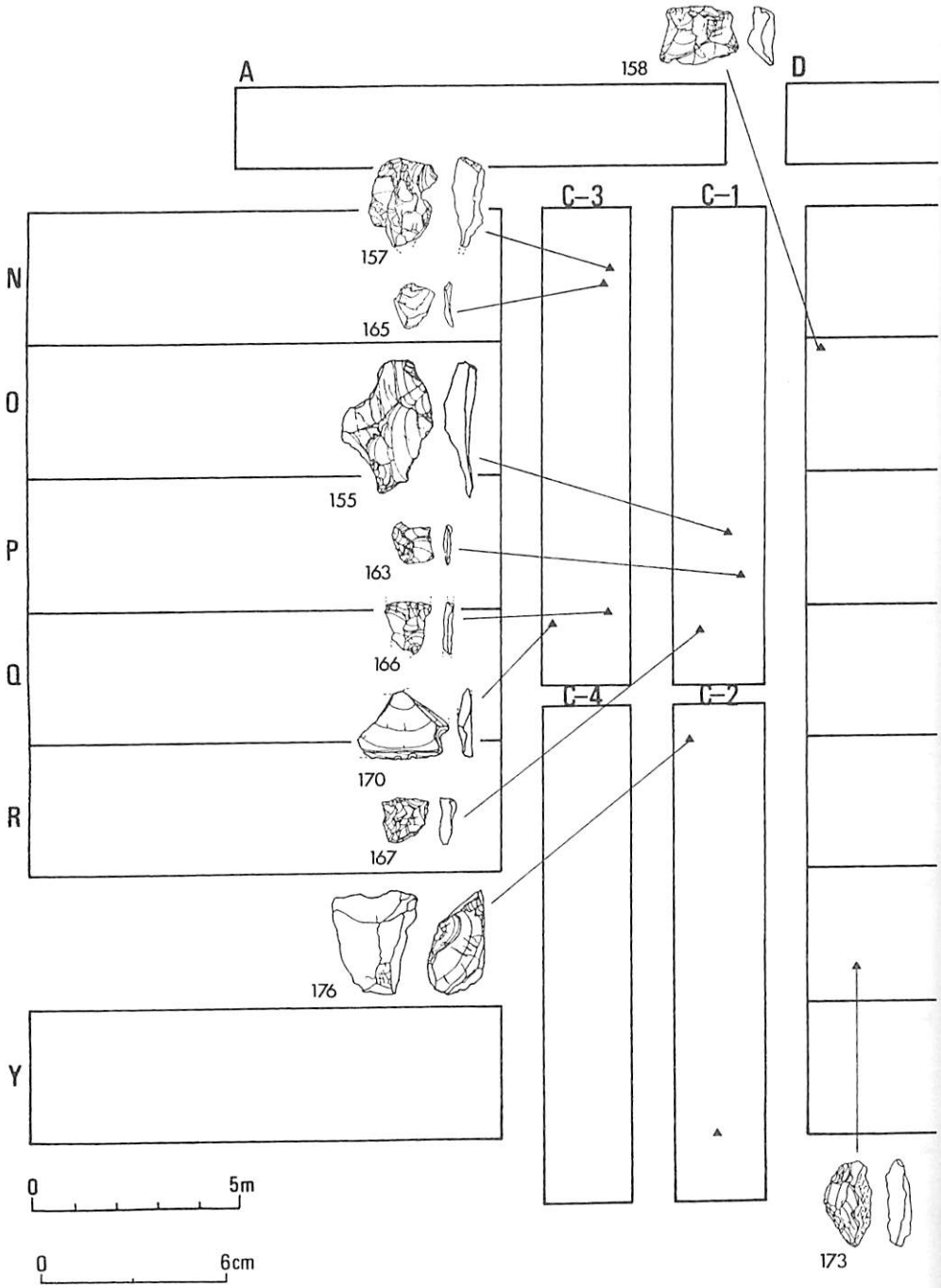
第76図　1－B地点北区第2群石器平面分布図


106
B
G
H
I
J
K
L
M
109
104

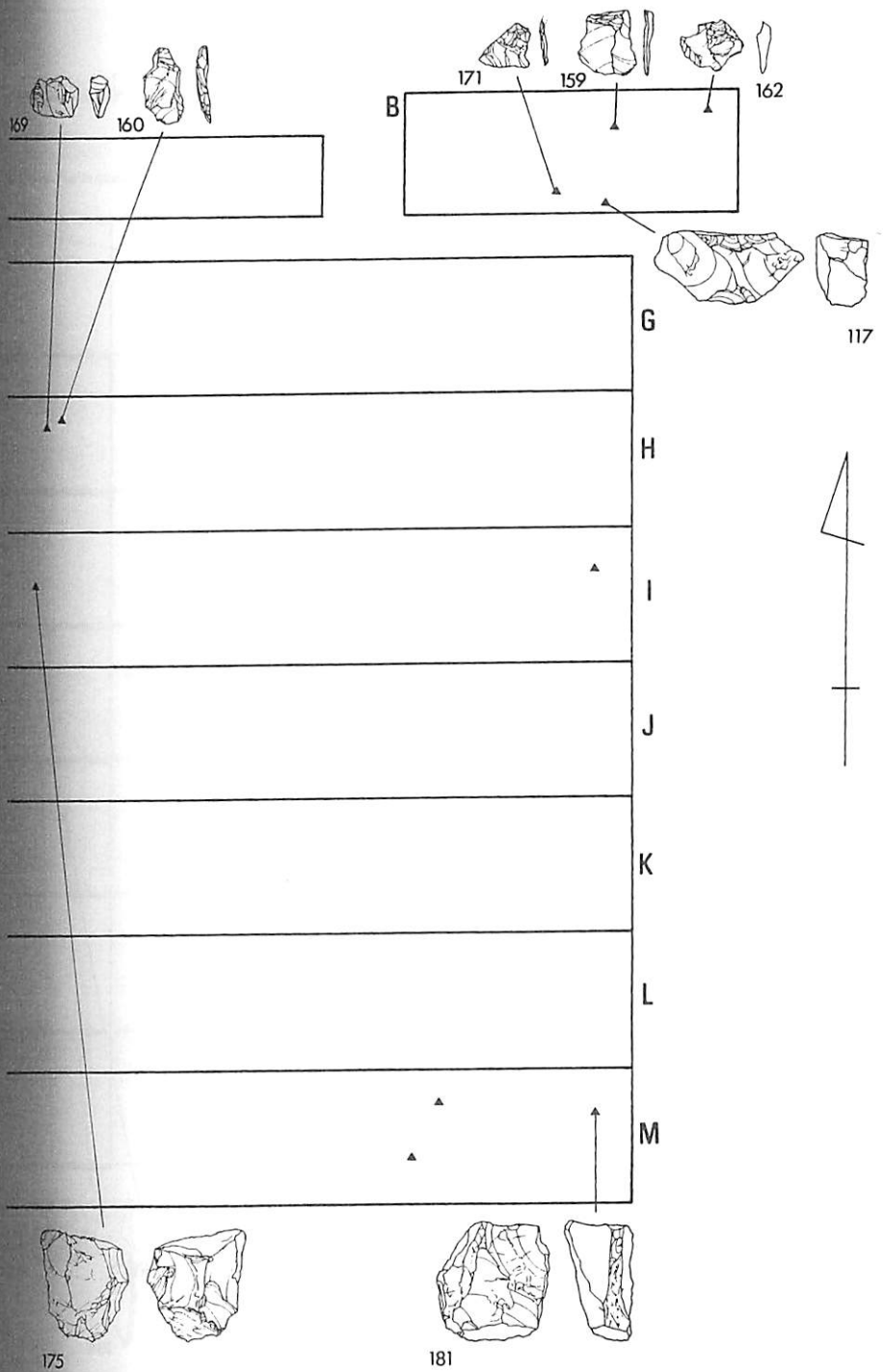


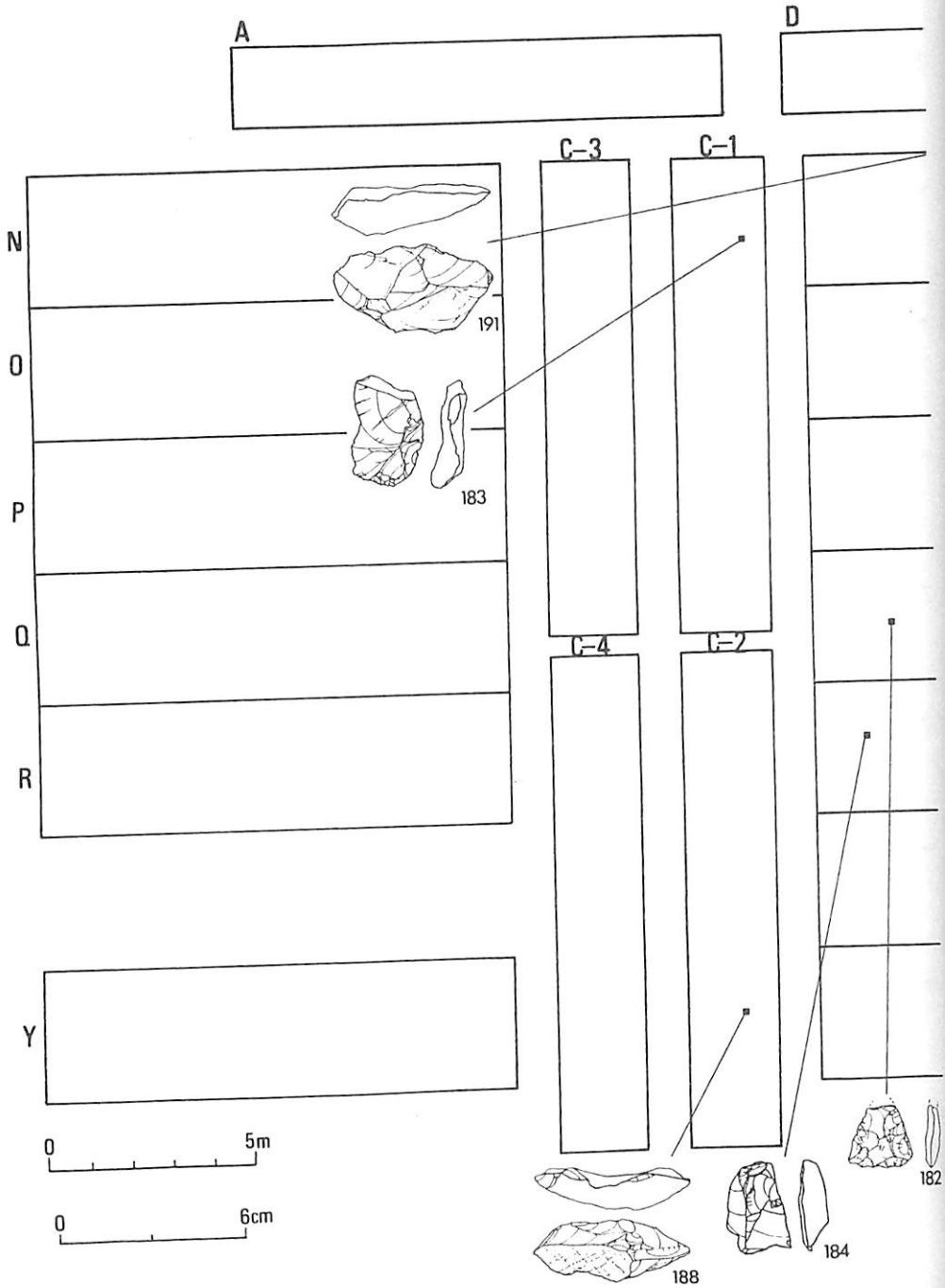
第77図　1－B地点北区第3群石器平面分布図


142
B
123
126
149
185
117
119
138
G
132
H
140
I
146
J
120
K
139
118
L
M
144
134

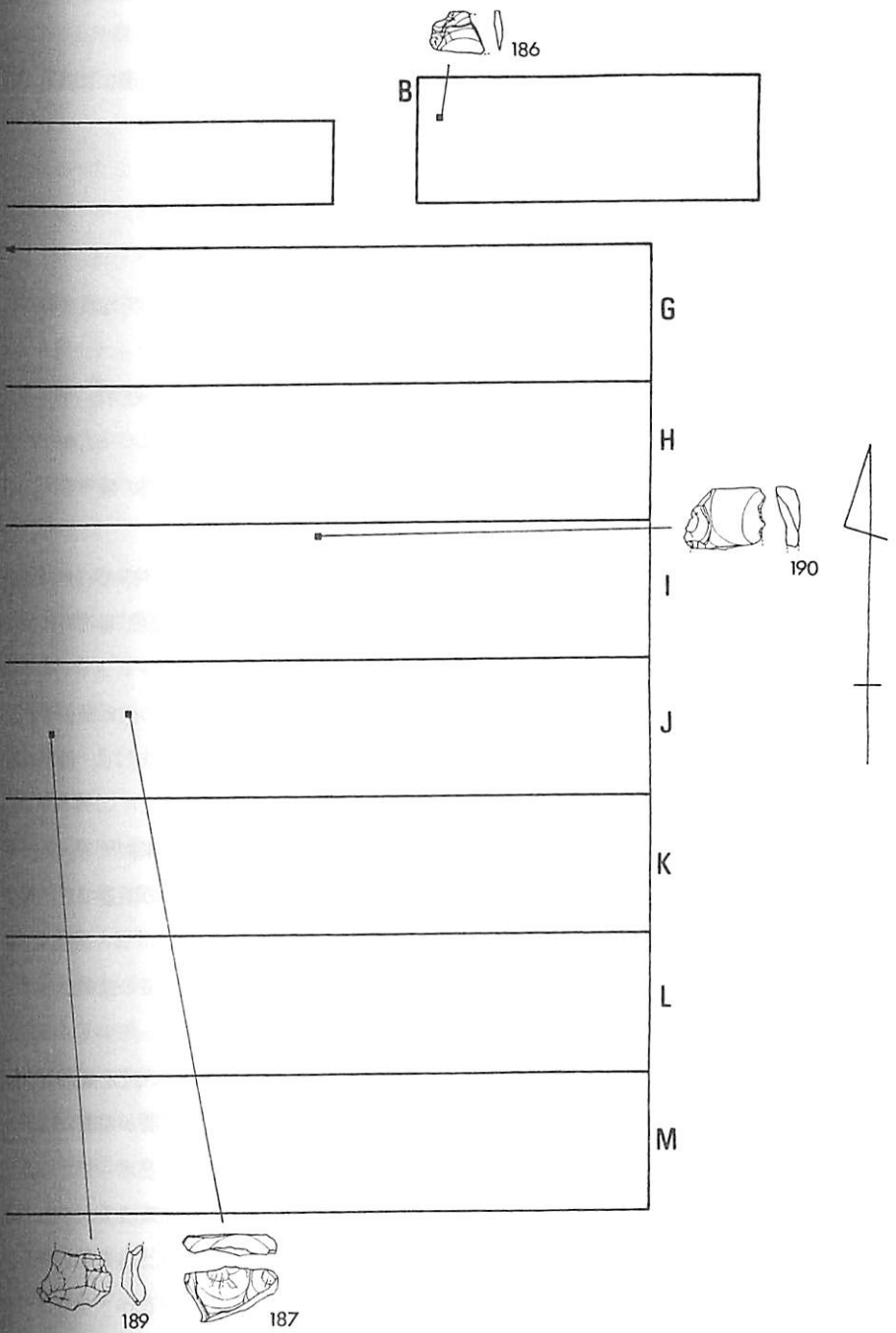


第78図　1－B地点北区第4群石器平面分布図


169
160
171
159
162
B
G
117
H
I
J
K
L
M
175
181



第79図　1－B地点北区第5群石器平面分布図


186
B
G
H
190
I
J
K
L
M
189
187

1．斧状石器中明らかに刃部磨製品があり，打製主体で刃部研磨技術を有する斧状石器群であると理解できる。

2．斧状石器は基本的に片面・部分加工で，かなりの部分に礫表を留める。刃部裏面には共通にそして意図的に礫面を残す。

3．素材は大まかにみると次の3種となる。

1)扁平・縦長の円礫利用：礫の形をほとんどあるいはあまり変えない。

2)大型の分割礫利用：礫の旧形を相当に変え，加工度が高い。

3)大型剝片利用：周辺部加工の例が多い。この中に礫を半截(厚さを半減させ，刃部裏面側に自然面を残したままにしておく)した剝片を利用するものがある。

4．1－B地点北区の斧状石器の大きさは，草創期と岩宿時代の中間値にある(第80図)[3]。

5．Ⅰ類は薄い長楕円形礫を利用し，先端部に加工を施す。あたかも細長いチョッパーと呼びたいような一群である。強いて類似した形態の例を挙げれば，夏島や大丸遺跡の小型の礫斧類であろうか。

6．Ⅳ・Ⅴ類のとりわけⅣ類の扁平でオーヴァルな例は，立川ローム下部のワラジ形の石斧に類似すると言えよう。形の外に，扁平な円礫を半截した剝片を用いる点は，多くの後期岩宿時代例に共通する性格と言える。

7．Ⅲ類中には尖刃例が多いと同時に甲高なものが多い。このような尖刃例はどの例に類似し，どう評価すべきか難しいが，甲高な点は草創期的な特徴というべきであろうか。ただし，後期岩宿時代に属する千葉県草刈六之台のような例もある。

8．Ⅵ類などの裏面が極端な凸状を呈する例は，茨城県額田大宮の礫の用い方に類似する。額田大宮例は細石刃石器群と共伴と見れば細石刃文化期，分離できるとすれば層位との関連で草創期の所産とすべきであろう。

9．九州出土の明確な神子柴型石斧として，大分県市之久保・同松山，福岡県門田の諸例が挙げられる。いずれも細石核と関連するが，これらは典型的な神子柴型と言ってよく，丹生との関連を想起させない。また，隆線文土器や石鏃と共伴し草創期の石斧の出土例の多い鹿児島県下の例(加栗山・東黒土田など)は，いずれも研磨技術の応用が徹底していることや刃部が明瞭に凹レンズ状に湾曲した丸ミノであることに特徴があり，丹生とは似ても似つかぬものと言ってよい。

10．九州におけるＡＴ下位の石斧として，熊本県曲野，大分県百枝Ｂ地点，佐賀県技去木中山・同甚蔵山などが知られる。片面に自然面を残すなどの素材利用に類似性は強いが，扁平なものが主体である点などの形態上の特徴は，丹生との間に違和感を生じさせる要素である。

11．これらを公平にみると草創期的な要素と岩宿時代的要素との両様あって，どちらとも決しがたいけれども，後期岩宿時代前葉(立川ロームⅨ・Ⅹ層)に属する可能性大としたい。

以上，Ⅲ章で詳述する点は除いて，観察視点の主要部分と帰属時期に関する要点だけを述べた。結論を一言で言えば，形態に斉一性があり，加工技術が洗練され，加工度の高い草創期局部磨製石斧群との関連は想定し難いのであり，形態上の特徴に完全な整合性を認めるのに躊躇させるものは

あるにせよ，裏面に自然面を留める例が多いこと，加工度と定型性が低いことなどは，後期岩宿時代前葉の石斧群との間に相当の共通要素を見出しうるという点で，丹生遺跡の斧状石斧を後期岩宿時代前葉の所産と考えるのが妥当ということになろう。

8．石器群の共伴関係

先に述べたように，石器群は以下の5群から成る。

第1群：斧状石器関連

第2群：打・割器／石核関連

第3群：流紋岩製ナイフ形石器関連

第4群：チャート製石器関連

第5群：黒耀石・安山岩製石器関連

これらがどのような共伴関係にあるのか。全てが同時共存か。反対に5群がそれぞれ別個の石器群を構成するのか。あるいはその他の組み合わせがありうるのかという点について検討しておきたい。

なお，この共伴関係の想定および石器群の評価については，共同研究篇においてそれぞれの論者が独自の考えを開陳されている。ここでは筆者の考え方で筆を進めるが，読者は共同研究篇における各種の考え方も併せて参照のうえ，ここでの所論を批判的に受け止められたい。

箇条書で記す。

1．第1～5群までの共伴関係は考え難い。

2．第3群(ナイフ形石器関連)は独立して考えられ，他の石器群との共伴関係の想定は難しい。

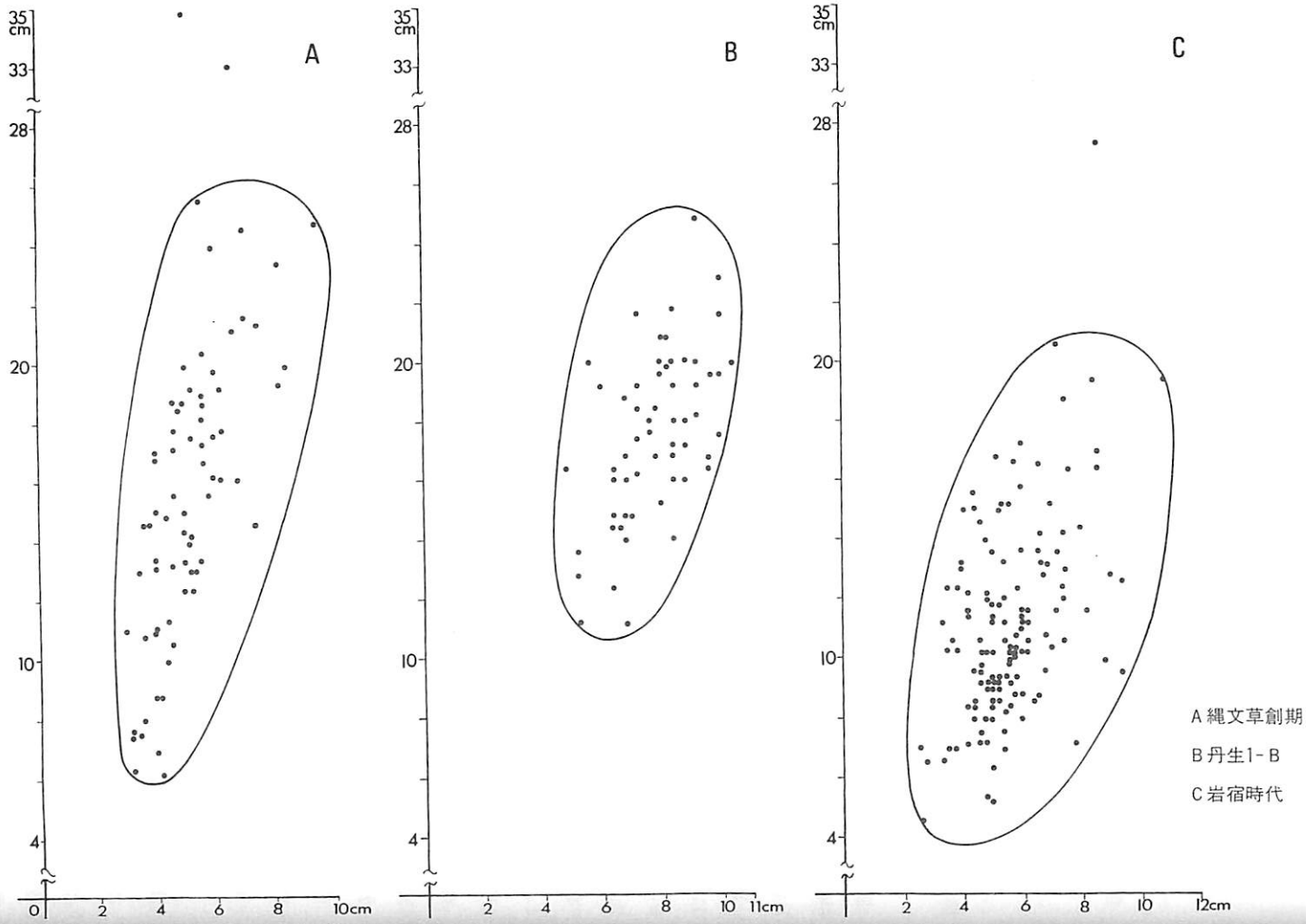
3．第5群(黒耀石・安山岩石器群)は石鏃を含み，石材等の点で一括性を考えうるので，石鏃を指標とする縄文時代(早期？)と考えて大過ないであろう。

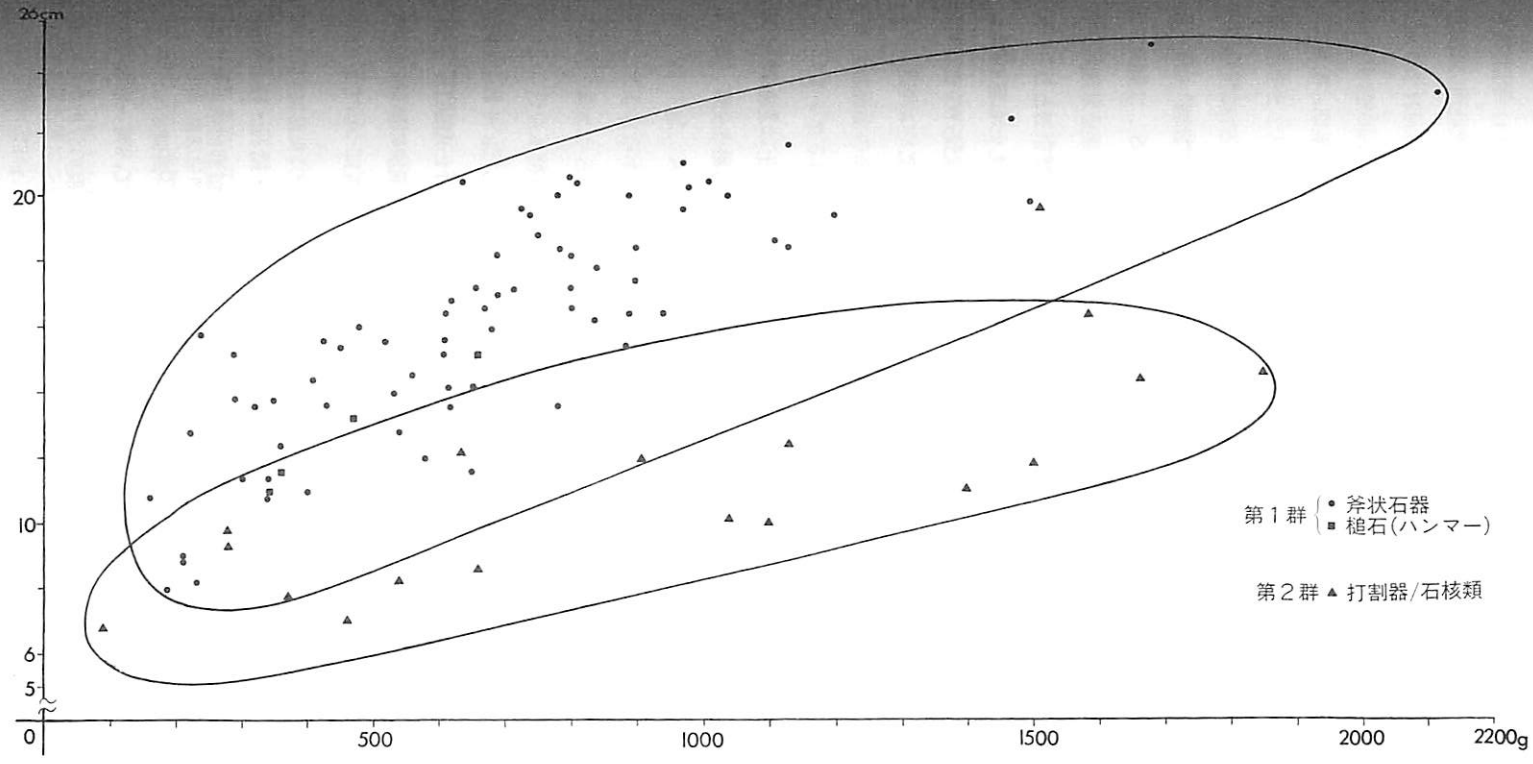
4．大分県大野川流域では，縄文早期段階でチャートの使用率が格段に高くなるという[4]。大分県下の研究者は第3群(チャート製石器群)に対して一致して早期説を主張された。筆者もひとまずこの考え方に従っておきたい。

　ただし，斧状石器の所属時期を立川ローム下部相当の可能性ありとする筆者の立場からは，これが同期の石器群でありうることの可能性をいくばくかでも保留しておきたい。石器群中に，剝片の先端に非常に微細ではあるが，連続的なマイクロフレイキングないしリタッチを有するものに，いわゆる立野ヶ原型ナイフ形石器に通ずる要素を認め，岡山県早風A地点や下里本邑のナイフ形石器例などとの関連性を捨て切れないのではないかという立場である。

　大分県下あるいは九州全体を含めて見ても，ＡＴ下位特に暗色帯付近の石器群について十分な資料的蓄積を欠いている実情は，対比資料を欠くということと同時に，今後に類似の石材を用いた剝片剝離法・石器構成からなる石器群の検出がありうることを示唆するものではないだろうか。

5．第2群(打・割器／石核)は，器種区分の問題はとりあえずおいて，打・割器と対比した場合，早水台例などでは先端が尖りチョッピングトゥール状を呈する形態が目立っていることなどから，早期の可能性よりも後期岩宿時代の前半期の可能性を択りたい。


A
B
C
35 cm
33
28
20
10
4
0
2
4
6
8
10cm
11cm
12cm
A 縄文草創期
B 丹生1-B
C 岩宿時代



第80図　1—B地点北区斧状石器　長/幅比(上)・長さ/重量比分布グラフ(下)〔欠損品を含む〕

6．第1群(斧状石器)は，Ⅲ章で詳述するように，1)立川ローム下部，2)縄文草創期，3)縄文早期，4)その他の可能性のうち，立川ローム下部相当期所産の可能性を第1に選択したい。早期説を択らなかったのは別に記した比較検討結果に加えて，この点の判断を重点課題の一つとする共同研究者・橘昌信氏の判断も尊重させていただいた。

7．以上から，1－B地点北区の石器群の共伴関係を，A)第1・2群，B)第3群，C)第4・5群の三者と考えたい。したがって1－B地点北区の石器群は，A)後期岩宿時代前半期，B)後期岩宿時代後半期，C)縄文早期の3時期の所産と考えたい。

共伴関係については，ここで若干の補足をしておきたい。A)第1・2群から成る後期岩宿時代前半期石器群は，そもそもの丹生問題の出発点から，両者を一体としていわゆる“礫器”として捉えていたという学史的背景も尊重していること。第1群斧状石器の帰属時期について，立川ロームⅨ・Ⅹ層相当の可能性を第1に選択したことにともなって，同期の関東地方には，局(刃)部磨製石斧にここでいう打・割器／石核が顕著に伴うとされていることの2側面からの判断を主としている。

しかし，逆に第2群を縄文時代早期に属する可能性を何番目かに想定しうるとしたら第1群も，さらに第4群，第5群も早期に一括しうる可能性が高まるとみなければならないだろう。この場合は，第3群／第1・2・4・5群という2グループの共伴関係石器群を想定することになる。

しかし，この考えを選択しなかったことは先に述べたとおりである。

9．小　　結

1－B地点北区は多種多様な石器群から構成され，その共伴関係・帰属時期などはあらゆる可能性を考えうるものであった。しかし，種々の可能性のうち，従来の議論の経過も踏まえて，次の3時期の石器群が混在したものと判断した。

A)　第1群斧状石器，第2群打・割器／石核：後期岩宿時代前葉

B)　第3群良質流紋岩(ナイフ形)石器群：後期岩宿時代後葉

C)　第4群チャート製石器，第5群黒耀石・安山岩石器群：縄文早期

これらが，出土層・出土位置・正確な組成を正しく把握できるものであるならば，それぞれ時期別に石器群の構成と性格を詳しく記述してまとめておくべきであるが，それが叶わぬ以上，本書の成立の背景すなわち丹生論争の現在的帰着点を示すという観点からは，従来の議論の経過と密接なつながりを有するA)斧状石器・打・割器／石核を中心にして，その実態と性格についてまとめをし，ひとまずここでの記述を終えることにしよう。

A)ここに同時存在・共伴関係を想定した資料は，斧状石器・同素材・剝片・槌石・打・割器／石核の計115点である。斧状石器は，打剝調整技術・形態上の特徴から八つの類型に示される変異を含みながらも，これは素材の形態とそれに応じた2次加工の差に基づくものであって，形態変化の大きさに比較して刃部形成にかかわる加工意図の斉一性が高いことから推して，同一器種の製作を目的として作られた単一の石器器種であると判断された。また，研磨・使用痕の分析からは，これが機能的には刃部磨製の石斧であるとの認識に致った。

そして，ここでは，この斧状石器に関連した素材剝片等が明瞭に識別され，製作から使用までの

一連の行為がここでなされていたことが判明した。それらは同時に，打・割器から剝片剝離用の石核までを含む大型石器を伴う。打・割器と石核との区分原理を明確にはしえなかったが，少なくとも主体は剝片剝離用の石核であり，打・割器と認定しうるものはごく少数であると考えられた。このような判断により，１－Ｂ地点北区の石器群すなわち丹生遺跡群を代表する石器群は，打・割器(いわゆる礫器)主体の石器群ではないことがここに明らかになった。

したがって，本地区の石器群は，Ａ)斧状石器を主体にし，この制作過程および使用の痕跡を明瞭に示すとともに，剝片剝離用の石核を多く含み(ここから剝がされた剝片およびそれから作られた道具類ははっきりしない)，そこに少量の打・割器を有した後期岩宿時代前葉に属するものである可能性がまず第１に考えられる生活址であると理解することができる。

この他に，B)ナイフ形石器を含む良質流紋岩製の一群がある。ナイフ形石器は小型薄手の石刃状縦長剝片を素材とするものである。その他の石核・剝片は，ナイフの素材をこのように理解すると，これと技術的に必ずしも関連性が高い資料群であるとは言い切れない。むしろナイフ形石器とは異質の石核・剝片類で主として構成されている。一方表採資料中に翼状剝片石核を含み，発掘品の中にその石核素材たりうる盤状剝片(?)を含む点からみて，ここに九州型ナイフ形石器と瀬戸内系の石器群の２者を読みとることもできる。これを本来的共存とみるか，別個の石器群と見るかについては議論のあるところであろう。とりあえず，ここではその事実のみを指摘しておきたい。

C)第４・第５群のチャート・黒耀石・安山岩石器群の存在は，当地の石材の利用傾向やその内に石鏃を含むことから，それが当時の石器組成を十分に満たしていず，痕跡は断片的なものであるにせよ，明らかに縄文時代(早期)の生活の跡を見て取ることができる。そして，チャート製の石器群については，Ａ群との共伴関係の可能性もなしとしないこと，黒耀石・安山岩石器群は，第２群とそしてもしかすると第１群との共存関係も完全に否定しえないことから，石器群全体の共伴関係の評価の鍵になる位置を占めているとも見ることができる。

なお，丹生遺跡の問題の焦点は１－Ｂ地点北区の斧状石器群にあるが，同様の資料は１－Ｂ地点東南区，１－Ａ，１－Ｄ地点，出土地点不明資料中にもある。事情は打・割器類についても同じであり，製作技法・器種認定・帰属時期などの検討は，これら全資料を対象としてなされる必要があり，本書の構成上，Ⅲ章“丹生遺跡群と岩宿文化”で再論詳述することとする。

(鈴木・竹内)

註

1) 『丹生綜括篇』(昭和43年)，71頁。

2) 同上。

3) 作表にあたっては，次の文献を利用した。a)岡本東三「長者久保文化について」(「奈良国立文化財研究所学報」第35冊所収，奈良，昭和54年)；b)北陸旧石器文化研究会『旧石器時代の石斧』(富山，平成元年)；c)長崎潤一「後期旧石器時代前半期の石斧－形態変化論を視点として－」(「先史考古学研究」第３号所収，東京，平成２年)。

参考までに１－Ｂ地点出土の第１群：斧状石器の石質・重量を示しておく(挿図No.石質・重量の順)。第２群石器については第28表(織笠論文)参照。

No.1：凝：725g，No.2：凝：970g，No.3：凝：1500g，No.4：流：480g，No.5：流：425g，No.6：流：785g，No.7：流：290g，No.8：流：620g，No.9：流：300g，No.10：凝：900g，No.11：流：360g，No.12：流：610g，No.13：

流：340g，No.14：流：430g，No.15：流：530g，No.16：流：610g，No.17：流：800g，No.18：流：610g，No.19：流：1470g，No.20：流：1350g，No.21：凝：890g，No.22：流：715g，No.23：流：800g，No.24：流：650g，No.25：流：835g，No.26：流：560g，No.27：流：970g，No.28：流：580g，No.29：凝：220g，No.30：流：1010g，No.31：流：940g，No.32：凝：810g，No.33：流：750g，No.34：凝：450g，No.35：流：670g，No.36：流：410g，No.37：凝：640g，No.38：流：620g，No.39：凝：1200g，No.40：流：800g，No.41：凝：690g，No.42：流：740g，No.43：流：840g，No.44：流：680g，No.45：流：650g，No.46：凝：520g，No.47：流：900g，No.48：流：160g，No.49：凝：320g，No.50：凝：230g，No.51：凝：1130g，No.52：流：1680g，No.53：流：980g，No.54：流：540g，No.55：凝：350g，No.56：流：615g，No.57：凝：1130g，No.58：流：340g，No.59：凝：780g，No.60：凝：800g，No.61：流：2120g，No.62：流：690g，No.64：凝：400g，No.65：流：885g，No.66：流：890g，No.67：流：650g，No.68：流：590g，No.69：流：580g，No.70：流：240g，No.71：流：290g，No.72：凝：210g，No.73：凝：185g，No.74：流：230g，No.75：流：270g，No.76：凝：210g，No.77：流：170g，No.78：流：410g，No.79：凝：660g，No.80：流：340g，No.81：凝：360g，No.192：流：1040g，No.194：流：450g，No.195：流：1110g，No.196：流：1000g，No.202：流：1940g，No.203：流：1370g，No.210：流：780g

4)　共同研究篇橘論文参照。

第4節　第1地区B地点東南区

1．土　　層

東南区の土層は第5次調査S・Tトレンチ，第1次調査のAトレンチにおける記載がある。地点は近接しているうえに，相似た状況にあるので，Aトレンチによってそれを示し，S・Tトレンチとの対比関係を示しておく[1)]。

Aトレンチの土層は以下のとおりである(第81・82図)。

第1層　砂と細かい粘土と有機物の混ざる鼠色ないし黒褐色表土層(厚さ約10～20cm)。

第2層　黒褐色の細かい粘土を含む土層で，乾燥し易く，乾燥すれば灰色に変色し，脆弱になる(厚さ約10～20cm)。

第3層　水を含むと黝んで見え，砂混りの更に粘土の多い淡褐色層。第2層より乾燥速度は遅い(厚さ約10～25cm)。

第4層　青灰色，赤褐色ないし黄褐色の縞状粘土層(厚さ約240cm)，非常に堅硬かつ緻密である。深掘部では，この粘土層の上面から1m位で，厚さ4.5cmの褐鉄鉱沈殿層がある。

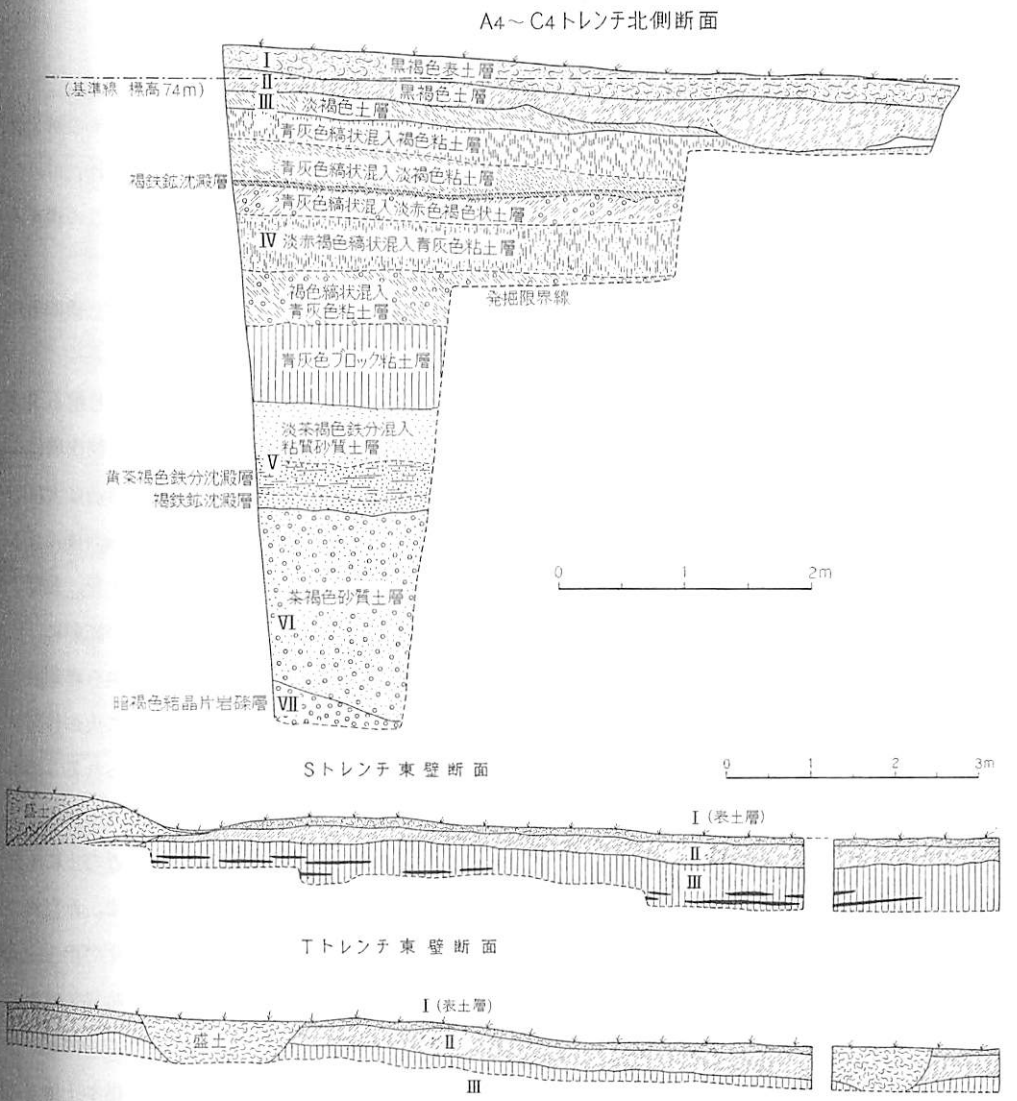
第5層　茶褐色粘質砂質土層(厚さ約80～90cm)。

第6層　砂層(厚さ約140cm)。

第7層　暗褐色結晶片岩礫層(クサリ礫層)という層序を示している。

このうち第4層以下が，地質学上尋常な地層であって，大在層に相当し，第4層以下の諸層は丹生泥層，第7層は志村砂礫層にそれぞれ該当する。それにひきかえ第1～3層は，いわば疑層であって，2次堆積，3次堆積による表土的性格を有する地層である。第3層は，Aトレンチにだけ現れた層で，Cトレンチでは人工的な削平を受け，Dトレンチでは自然に流失していた。

S・Tトレンチにおける土層は以下のとおりである。



第81図　1—B地点東南区A_4～C_4トレンチ北壁土層断面図(上)，ＳＴトレンチ東壁土層断面図(下)

第１層　表土，10～15cm(Ａトレンチ第１層相当)。

第２層　灰黄褐色の砂混じり粘土層，15～35cm(Ａトレンチ第２・３層相当)。

第３層　丹生泥層(Ａトレンチ縞状粘土層相当)。

以上のように，Ｓ・Ｔトレンチは，Ａトレンチとほぼ同一の層序を示す。このうち第２層は陸成層で，海成の丹生泥層が陸化して浸蝕をうけ，その浸蝕面に堆積した薄い層であるとされる。

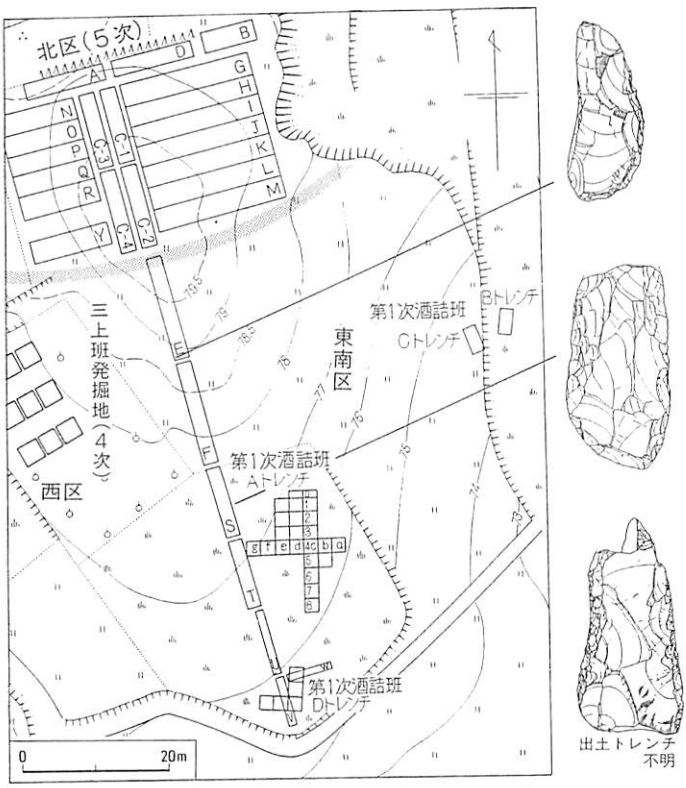
第82図　1—B地点東南区
Ａトレンチ深掘状況

2．遺物・遺構の出土状況

1)遺　物

遺物を包含していたのは，Aトレンチの第2層・第3層で，DトレンチではAトレンチの第2層に当る第2次堆積層であった。Aトレンチでは，第3層に突っ込んだ形で遺物が発見されたが，これはこの粘土層上面が生活面になることを想定する好材料となろう。遺物は，全般的にこの調査区の東北寄りに多く，西南寄りに進むに従って漸減する。

S・Tトレンチでは，石器類は陶磁器片とともに地表面や表土・攪乱土層から出土した(第83図)。



第83図　1—B地点東南区斧状石器出土位置図

2)遺　構

Aトレンチ Id区より配石遺構が検出されている[2]。検出層は3層上面であるが。構造は大は20cm前後から小は5cm前後に亘る大小30個以上の礫片を，長径1m，短径75cmほどの範囲に，西端が幅広く東端が尖る卵型状に配し，中に明らかに火の作用を受けていると認められる3個の半割礫のほかは，炭・灰の如きものが皆無で，附近の土にも焼けた痕跡を認め得ず，ただ周辺に数点の土器の小片の出土を見たのみであった。時代・性格とも不明と報告されているが，当然のことながら石鏃や土器との関連を考えておく必要はあろう。

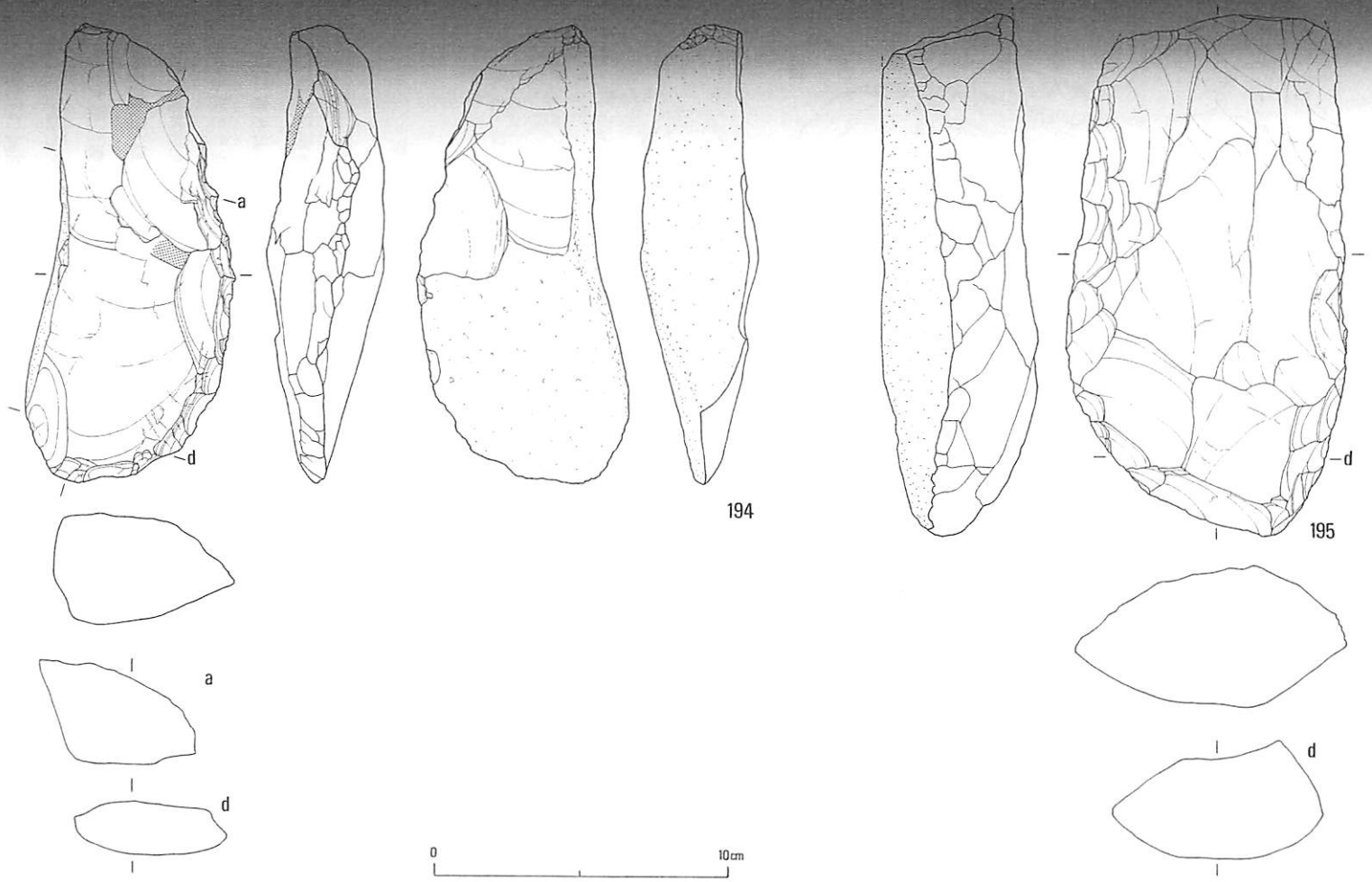
3．石　器

第1・5次調査分合わせて119点の石器と若干の土器が出土している。第3表に示したように，このうち85点が姫島産黒耀石製で，全体の73.9%を占める。主体は小型の剝片石器および剝片であるが，この他に石核2点，礫器が6点ある。小型の定型的な石器は無茎石鏃5点が特徴的で，その他は加工痕ある剝片・使用痕ある剝片である[3]。

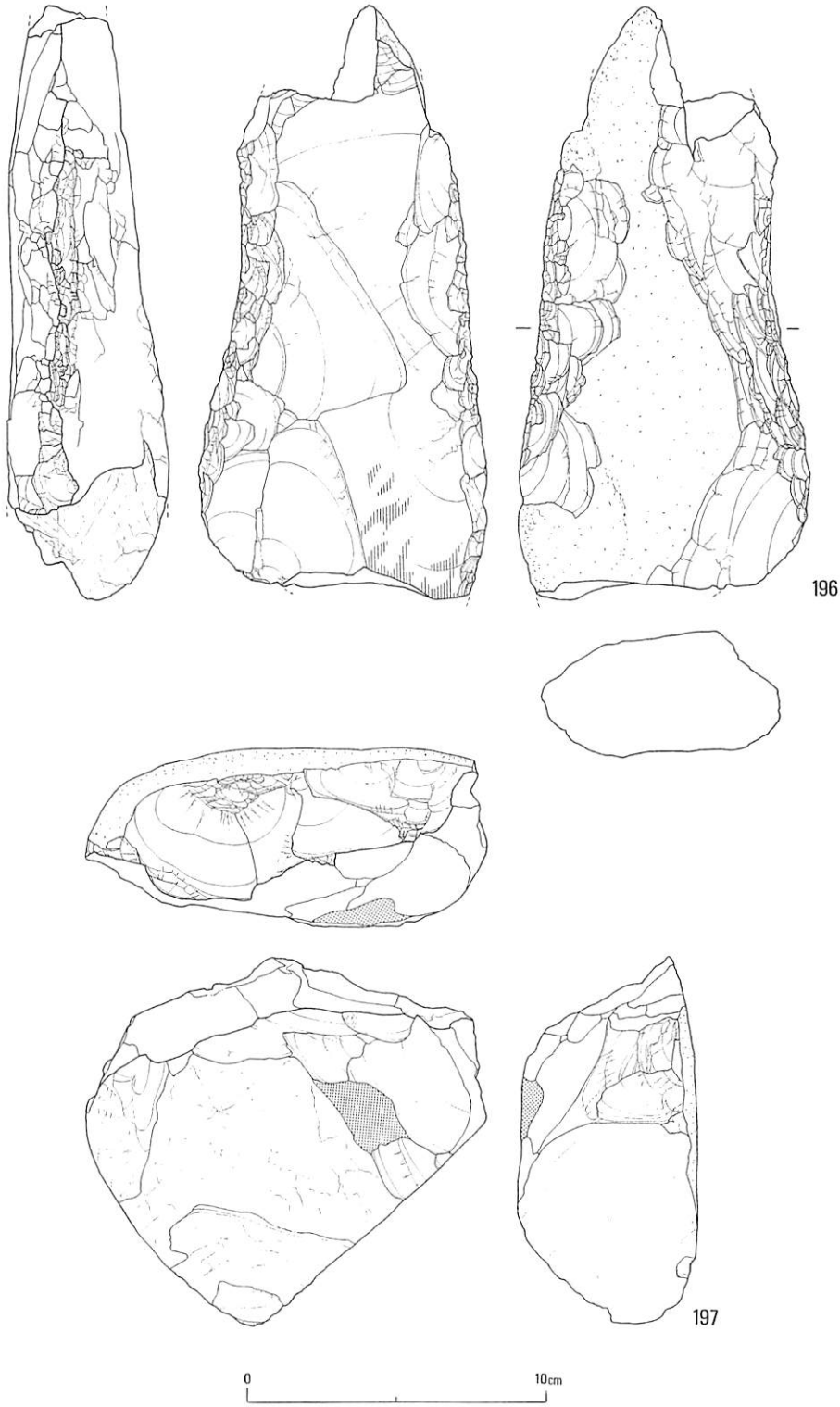
本報告の発刊の主旨に従って，斧状石器および石核について簡単な記載をしておく。

A)斧状石器(第84・85図，図版Ⅶ)

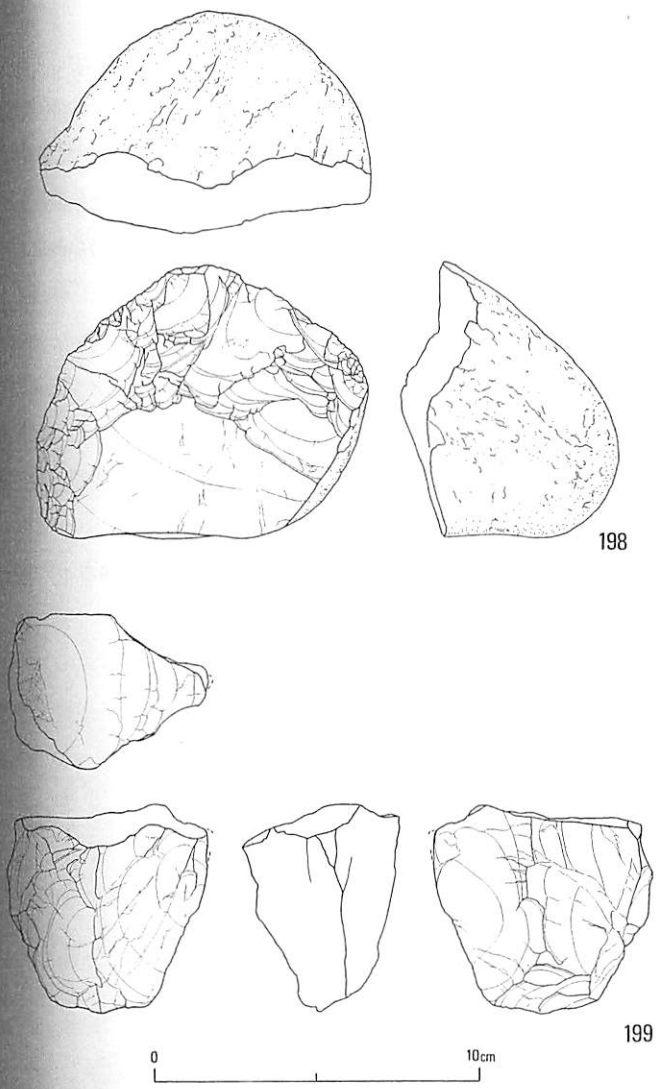
No.194　中型の円礫を半截するか，これよりも大きな礫から打ち剝がした剝片を素材とする。下端部裏面側に素材の原形を断ち切ったような剝離面が認められ，さらに自然面の上方に素材剝離面と同段階に生じた同じ性格の大きな剝離面が認められること，表面側下方にも2次加工の前に素



第84図　1－B地点東南区石器実測図 1）



第85図　1－B地点東南区石器実測図 2)



第86図　1―B地点東南区石器実測図 3)

材の厚さを均等にするためと考えられる大きな剥離面が認められること等を重視すれば，剥片素材の可能性が高い。北区礫器第Ⅳ類？に相当。2次加工は自然面側にはなく素材の剥離面側の右側縁にのみ縁辺に沿うように浅い剥離が施されている。

No.195　大型円礫を半截するかあるいは大型円礫から得られた剥片を利用する。2次加工は全縁辺から加えられ，ほぼ片側全面加工となっているが，中央に素材の剥出の際の旧い剥離面を留める。一端を欠失するが，現存状の下端部が側縁の加工よりも角度が鋭角で，体部中心部に深く伸びているので刃部形成の可能性を考えることも可能である。断面は凸レンズ状を呈する。北区斧状石器第Ⅴ類に相当。

No.196　大型円礫から打ち取られた剥片を素材とする。自然面側上・下端に素材剥片に対する2次加工前の粗調整の剥離痕を留め，表面側には素材剥片の主剥離面が広く残っている。2次加工は両面に施されるが縁辺部に限られる。表面側(主剥離面)の下方には，かすかであるが広く磨痕が認められここが刃部に連なった部位であったことを推測させる。したがって，本例は刃部磨製であり，現状は刃部の主要部を欠失したものであろう。北区斧状石器第Ⅶ類に相当。

B)打・割器/石核(第85・86図)

No.197　大型円礫の分割素材を利用する。表面側・右側はともに節理面から成るが，後の欠損品でなく，分割面であろう。礫面側から連続的に打撃が加えられ，作業面の縁辺は弧状を呈する。幅広で縦長の剥片が相当量取られている。打面に相当する礫面と作業面のなす角度は，幾分鋭角であり，打器状の刃部から形成されていると言えなくもないが，大型の礫片に加えられた剥離作業

量の多さからみて，石核と解すべきではなかろうか。

No.198　チャートの円礫を層理面に沿って半割し，この分割面の一端から剝片がとられている。細かく何度も打撃が加えられていること等から，打割器類とみるよりも石核と見るべきであろうか。

No.199　全面剝離面に覆われた角柱状の塊状石器である。上端(打面側)を欠いているので，正確な判断はできないが，上方から幅広縦長の中型剝片を取った石核の可能性とシャープな横断面を形成する側に刃部作出が意図された一種の打割器と見る解釈も可能であろう。円礫素材の例としては，他に分割礫(未加工)1点がある。

4．小　結

当地区からは1－B北区出土例と類似の大型石器が3点出土している。E・Sトレンチで各1点と出土トレンチ不明が1点である。Eトレンチは北区に接していることを考慮すれば，当地全体がブルドーザーによる削平を受けているとは言え，東南区の一部にも，北区に特徴的な大型石器の分布域が，本来延びてきていた可能性を考えておかなければならないかもしれない。

(鈴木・竹内)

註

1)　a)『丹生1・2次概報』(昭和39年)；b)『丹生綜括篇』(昭和43年)。

2)　『丹生綜括篇』(昭和43年)，第9・10図。

3)　註2)，第8図。

第5節　第1地区B地点西区

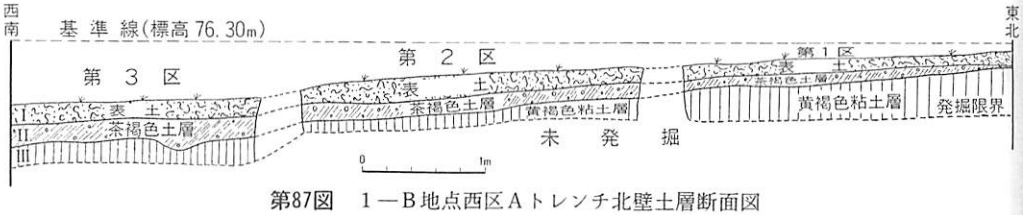
1．土層および遺物の出土状態[1)]

西区の土層は以下のとおりである(第87図)。

第1層　黒色の表土層，10～15cm(第1次調査Aトレンチ第1層相当)。

第2層　茶褐色粘土層，4～14cm(第1次調査Aトレンチ第2・3層相当)。

第3層　砂を含む黄褐色粘土層(第1次調査Aトレンチ縞状粘土層相当)。



第87図　1—B地点西区Aトレンチ北壁土層断面図

遺物の出土層は，第1・2層に限られていた。ここは手作業によって開墾された桃畑であったので，良好な堆積条件が得られるのではないかと期待されたが，遺物の出土層は結局，2・3次堆積による表土的性格を有するものであると判断された。

2．石　器

A)打・割器／石核(第88図)

西区からは69点の石器が出土した。このうち約60%をチャート，約30%を黒耀石がしめている

(第3表)。細片が多く打•割器/石核類2点の他は加工痕ある剝片・使用痕ある剝片を少量含むにすぎない。第4次の概報にある石鏃は確認できていない。打•割器/石核類器2点について簡単な記載をしておく。

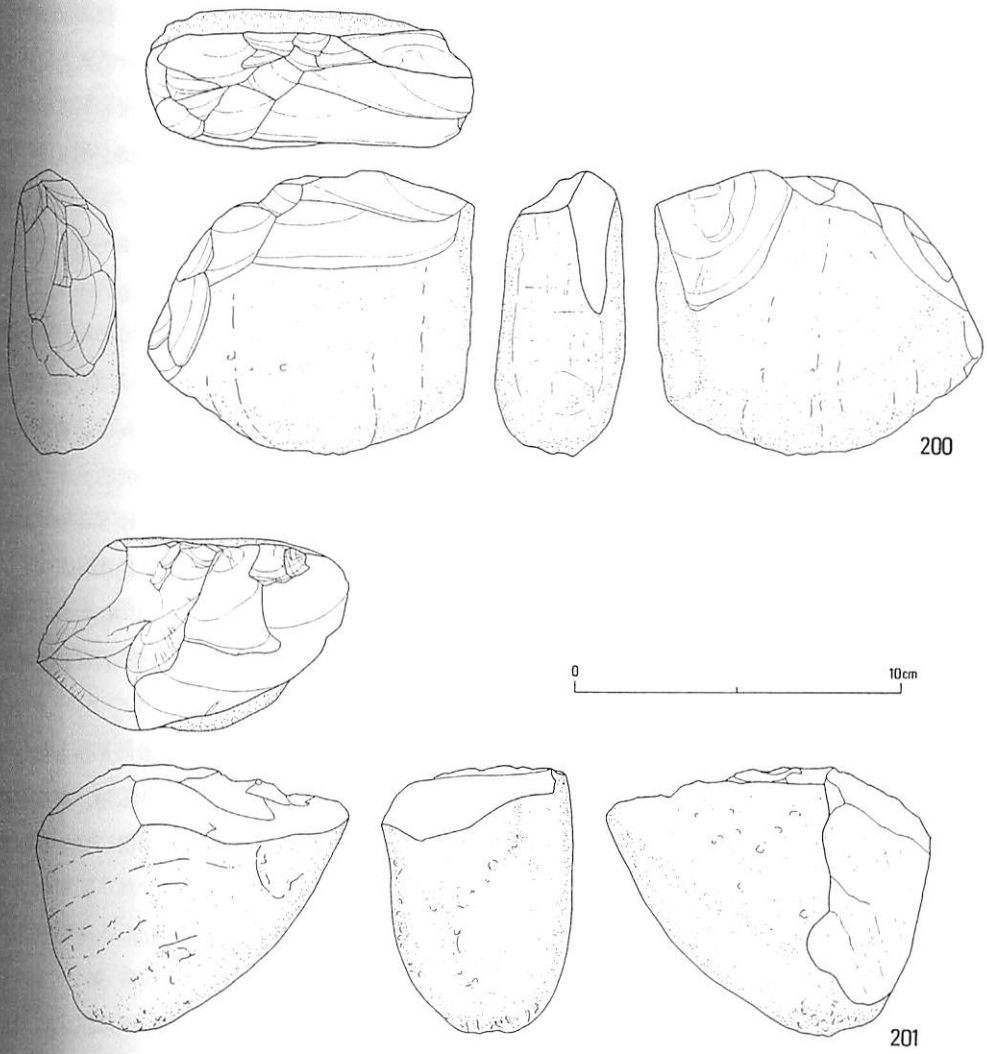
No.200　扁平な円礫の一端を主として片側から打剝した，いわゆる打割器である。流紋岩製で風化が激しい。打剝面の右半分は剝離角が大きく，したがって鋭いエッジを形成する反面，左半分は剝離角がほぼ直角であり，剝離痕の末端がステップしていることもあって，エッジは鋭くない。この点は石核を想起させる。

No.201　分厚い円礫の礫表から数度にわたって打剝が加えられたことを示している。一見して打器状だが，剝離角は全てほぼ直角に近く，石核を思わせる。

（鈴　木）

註

1) 『丹生4次概報』(昭和41年)。

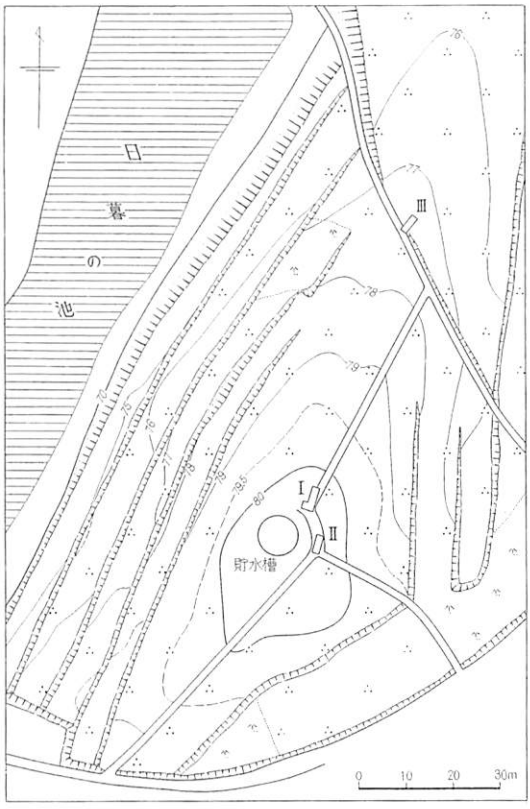


第88図　1—B地点西区石器実測図

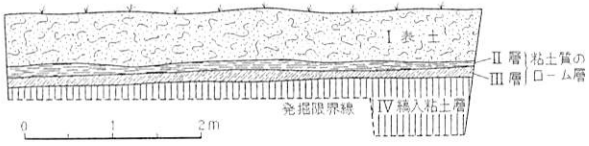
第6節　第1地区A地点

1．発掘の経過

1－A地点は，昭和37年2月中村俊一・富木隆両氏によって，最初に問題の石器が発見され，丹生遺跡発掘調査の契機となった地点である[1]。そこで第5次調査(昭和41年9月27日～10月12日)において，試掘班が調査を実施することとなった[2]。



第89図　1－A地点地形・トレンチ配置図



第90図　1－A地点第1トレンチ東壁土層断面図

2．位置・地形・トレンチ

第1地区は，大字丹生字日暮，辻，長迫に属する。A地点は字辻に属し，南北に伸びた≪日暮の池≫の東に接する細長い丘陵上に位置する(第89図)。トレンチは，標高80mで丘陵の最高所にあたる場所に設けられた。ここには大型の円筒形貯水槽が設置されており，その北側を第1トレンチ，東側を第2トレンチ，丘陵の北端部を第3トレンチとした。第1トレンチは，L字形トレンチである。トレンチの詳細については不明である。

3．土　　層

1－A地点の土層は各トレンチを通じて，基本的に共通で4層に分けられる。第1トレンチ東壁で代表しておく(第90図)。

第1層　褐色の表土層。ブルドーザーによる攪乱層である。約50cm。

第2層　砂混りで粘土が多い褐色ローム層。上部に移行するにつれて褐色度が高まる。約90cm。

第3層　第一次堆積にかかる褐色の粘土質ローム層。腐植を含むロームの薄い縞を挟む。約20cm。

第4層　青灰色粘土層。褐鉄鉱の縞が入っている。丹生泥層に相当する。70cm以上。

4．遺物の出土状況

1－A地点は，先に記述したように，丹生遺跡発掘の契機となる記念すべき地点である。しかし，丘陵の頂部一面がブルドーザーにより破壊されているため，発掘の成果を求めることは，最初から

望めなかった。第５次調査にあたり，地層を確認する目的により，トレンチを設け調査を行った。遺物は，第１層より若干の弥生式土器片が発見された。石器はまったく出土せず，したがって１－A地点の石器８点はすべて表採品である。

５．石　　器

１－A地点では，８点の石器が確認された。その内訳は，斧状石器２点，ＲＦ２点，ＵＦ１点，石核１点，剝片２点である。

A)斧状石器(第91図，図版Ⅶ上段左)

No.202　直方体の分厚い礫を素材にし，その両面に加工を施したものである。重量が1.95kgあり，相当重い石器である。刃部表面は，器幅ほとんどを占める大きなえぐりの深い左方向からの剝離により成る。これは，使用により生じたとも考えられる。右側面は，裏面左側縁全体に施されている浅い貝殻状の剝離を覆うように，表面より裏面方向への細かく立ちあがる加工がなされている。表面上半分には，左右から浅い貝殻状の剝離が加えられ，一見すると，握り状を呈す。裏面側は，右から浅くスライスするような比較的小さな貝殻状の剝離と，左側面全体に施されている浅い貝殻状の剝離によって形成されている。１－Ｂの斧状石器の分類に従えば，Ⅶ類となる。

No.203　直方体の分厚い礫を素材にし，片面にのみ加工されたものである。重量が1.42kgある。加工部位は，下端から右側面に渡る。剝離方向はすべて裏面から表面に向けて行われ，かなり立ちあがりぎみに施されている。剝離痕には，統一感があり，ほぼ同じ大きさの幅広剝片が生じたと考えられる。上部は節理により欠損している。１－Ｂの斧状石器の分類に従えば，Ⅱ類に属す。

B)ＲＦ(第92図)

No.204　背面はほぼ全周から求心的に剝離が入り，中心部が山状を呈すやや厚みのある剝片である。円盤状石核より取られたと考えられる。打面は節理面を使用している。背面左側縁下部に細部調整が見られる。

No.205　幅広で厚い打面を留め，打留が非常に突出した剝片である。打面は，数回の打面調整により形成されている。下端部は欠損している。背面右側に細部調整が認められる。右側縁は，全体に使用痕が見られ，また左側縁にも断続的に見られる。

C)ＵＦ(第92図)

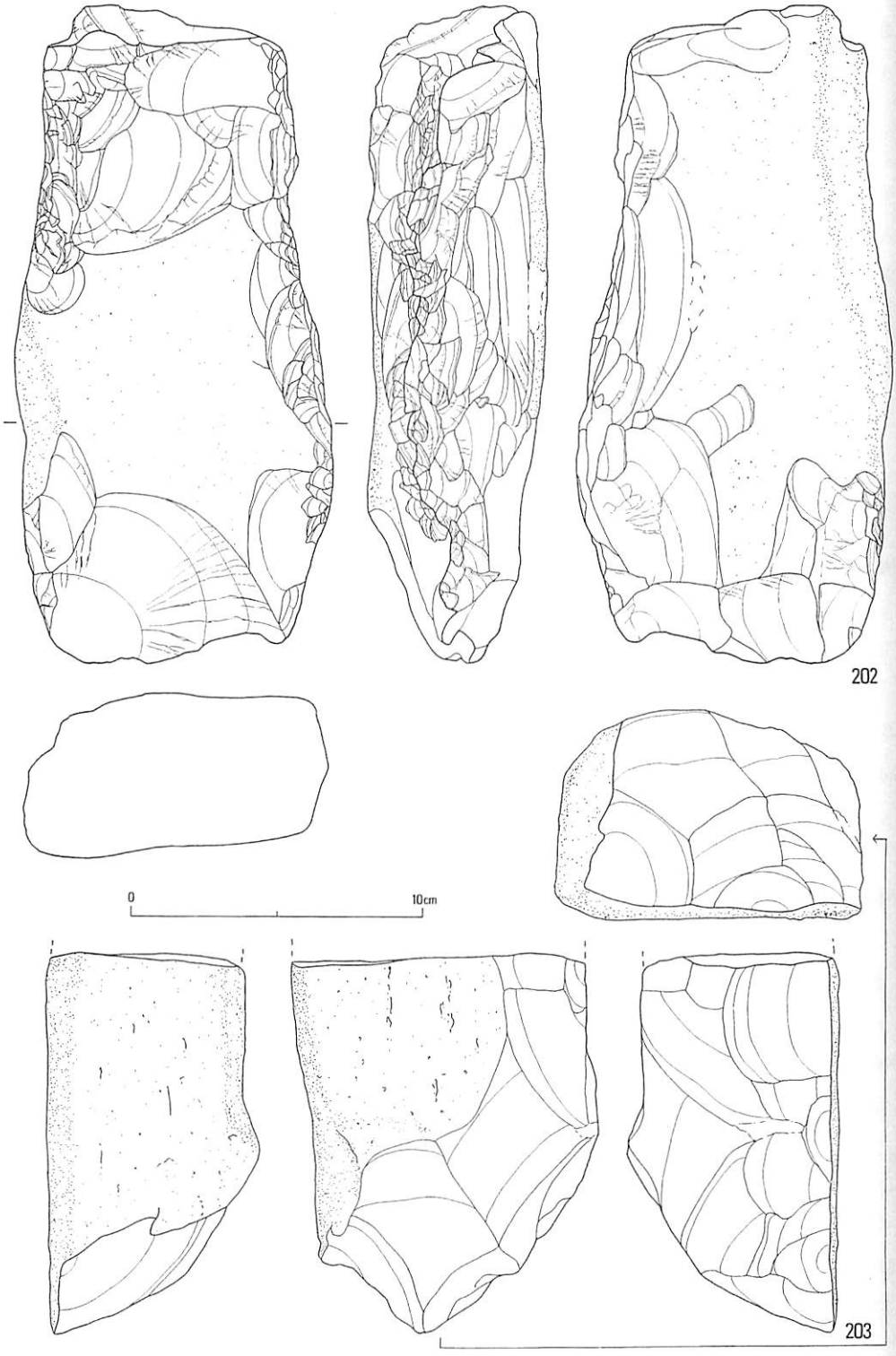
No.206　やや小型で薄い石刃である。上端及び下端は欠損しているため打面は見られない。背面加工はすべて長軸方向に平行する。背面右側の剝離面は石核の素材剝離面と考えられるポジ面が残っている。使用痕は両側縁に断続的に見られる。

D)剝　　片(第92図)

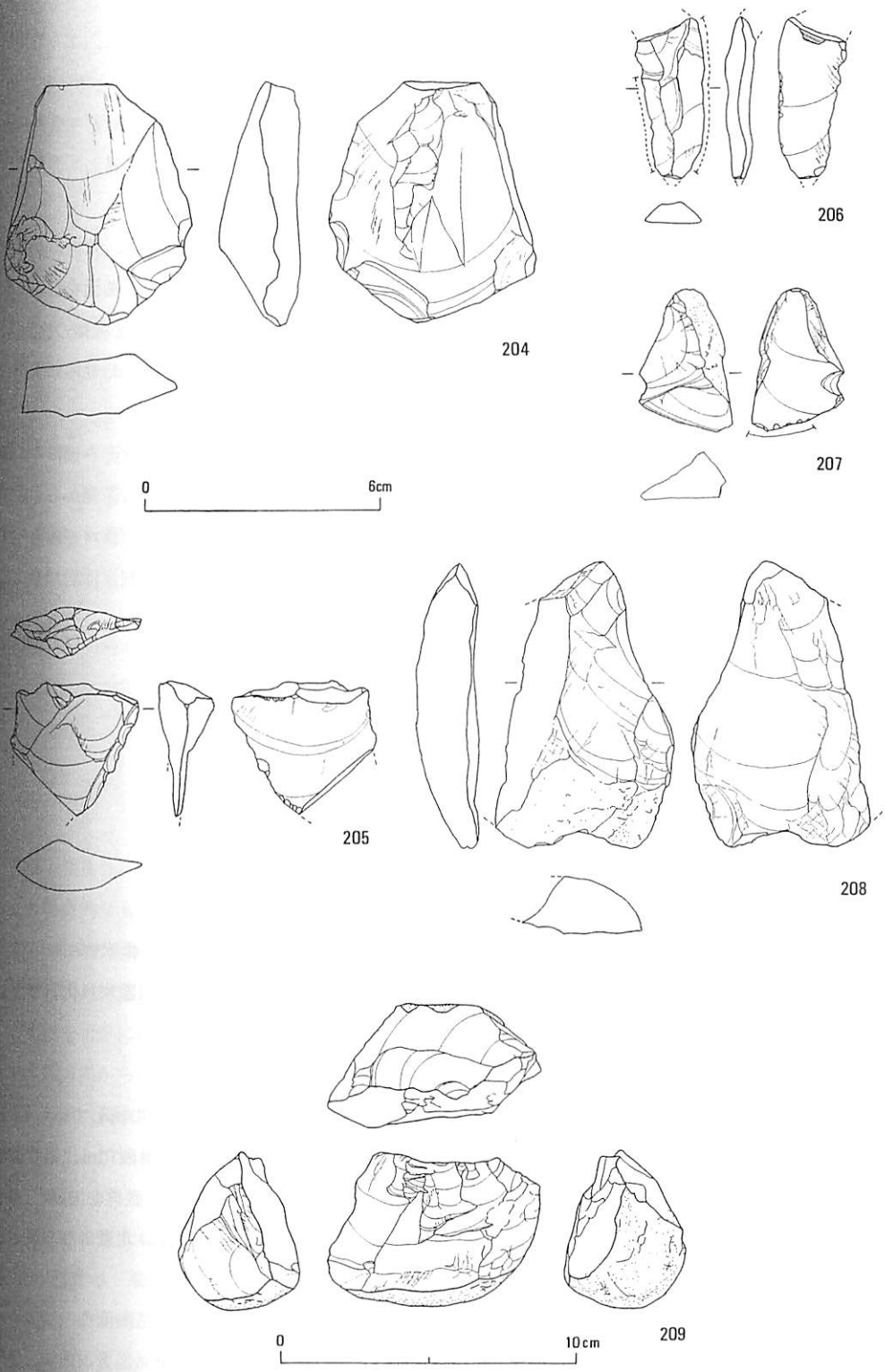
２点確認されているが，共に剝片剝離作業過程の特定な特徴を示すものではなく，いわゆる不定形剝片である(No.207・208)。

E)石　　核(第92図)

円礫を素材にしたもので，細粒の流紋岩が使用されている。正面は上面を打面にして，貝殻状の剝片が数枚とられている。背面側は正面での剝離作業の打面になる面と，旧剝片剝離作業面から成



第91図　1—A地点石器実測図 1)



第92図　1－A地点石器実測図 2)

る。打面と作業面を交互におきかえながら剝片剝離がなされたことが分かる(No.209)。

以上の資料群から，当地点において確認されることを見て行く。大型の石器2点は，1－B地点から大量に出土した斧状石器と類似し，また距離的にも近いところから，同種の石器と考えられる。それぞれの特徴は，No.202が1－B地点での分類のⅦ類に属し，側面が表面裏面に対して直角に近い角度で細かく丁寧な加工がなされている。No.203は1－B地点での分類のⅡ類に属し，刃部から片面側全体に加工が施されている。

剝片・石核より2～3種類の剝片剝離技法が予測される。剝片No.207・208からは，背面に示された剝離痕の特徴から，円盤状石核の剝離技法が考えられる。石核からは，先立つ作業面を打面に転用して剝離作業を行い，打器状の残核を残す技法を読みとるが可能である。これら2種類の技法は，作業工程は異なるが得られる目的剝片は類似しており，逆三角形状の剝片である。時期的にも技法上も近しい関係であると思われる。

石刃が表採されている事から，当然石刃技法の存在が示唆される。この剝片は背面右側にポジ面を残している。この事から，分割礫を素材としその分割面を石核側面に置き，木口面側から連続的に剝離作業を加える技法が考えられる。当地点において確認された石刃は，石核の素材剝離面側で剝がされたと理解できる。同種の技法を岩戸6上[3]に見ることができるため，この剝片は岩戸6上の時期のものと考えられる。

(田鶴谷)

註

1)『丹生1・2次概報』(昭和39年)。

2)『丹生綜括篇』(昭和43年)。

3) 清水宗昭・高橋信武・柳田俊雄『岩戸遺跡』(大分，昭和61年)。

第7節　第1地区D地点

1．発掘の経過

1－D地点は，昭和37年10月の富木班による第1次調査[1]，昭和41年9・10月の鎌木班による第5次調査の2度に亘って調査された[2]。同地点は丘陵の先端(北半)部の開墾の際に石器や貝化石が発見された。このために，未開墾部に調査の手が加えられた。

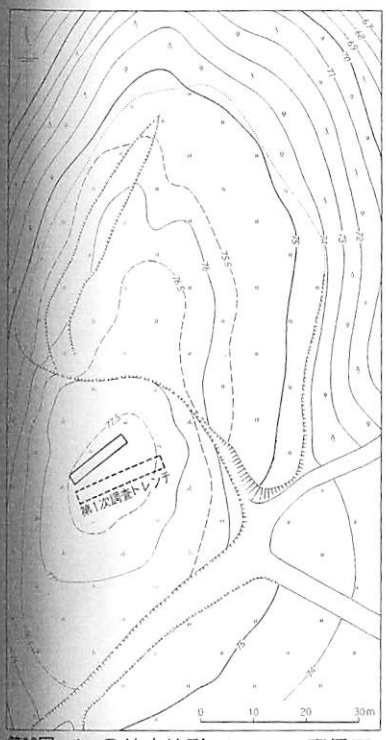
2．位置・地形・トレンチ

1－D地点は深い谷を隔てたA地点の東に並ぶ舌状の丘陵で，地籍上は字辻に属している(第93図)。発掘地は丘陵頂部標高88mの地点に相当する。第1次調査では，ここに東西10m，幅2mの第1トレンチを設け，東より2mごとに1～5区とした。逐次拡張し，第8トレンチまで設定した。第5次調査では，この北西側にこれとほぼ平行して14×2mのトレンチを設け，北東より2mごとにA・B・C…区に区分し調査を実施した。

3．土　　層

土層は第5次調査(第2トレンチ)を基準に述べる(第94図)。

第1層　黒褐色表土層。耕作土で柔らかい。約30cm。



第93図　1—D地点地形・トレンチ配置図

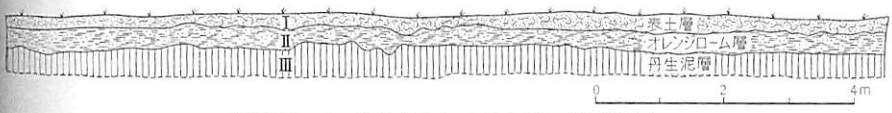
第２層　オレンジ色ローム層。約30㎝。

第３層　灰白色粘土層。上部は暗灰色，下部は明灰色を呈する。丹生泥層。

４．遺物・遺構の出土状況

第１層上半部では弥生時代前～中期の土器片が多数出土した。また同層からは弥生時代中期の居住地が検出された[3]（第３・７・８トレンチ）。石器が主として発見されたのは，第４・５トレンチ第２層中においてであった。また第５トレンチの西寄りでは小円礫20個ほどと大型扁平礫２個からなる配石が同層から検出された。ただし，この性格や年代は明らかにすることができなかった。

第５次調査では第２層最下部から弥生時代前期の土器とは著しく相違する土器小破片２点が出土した。縄文式土器の疑いももたれるが，押型文土器に伴存する無紋土器とは考えられないとされている。この他に剝片数点の出土があった[4]。



第94図　1—D地点トレンチ北壁土層断面図

５．石　　器

発掘・採集合わせて十数点の資料から構成されると推測されるが詳細ははっきりしない。このうちから特徴的なものを記載しておく（第95図）。

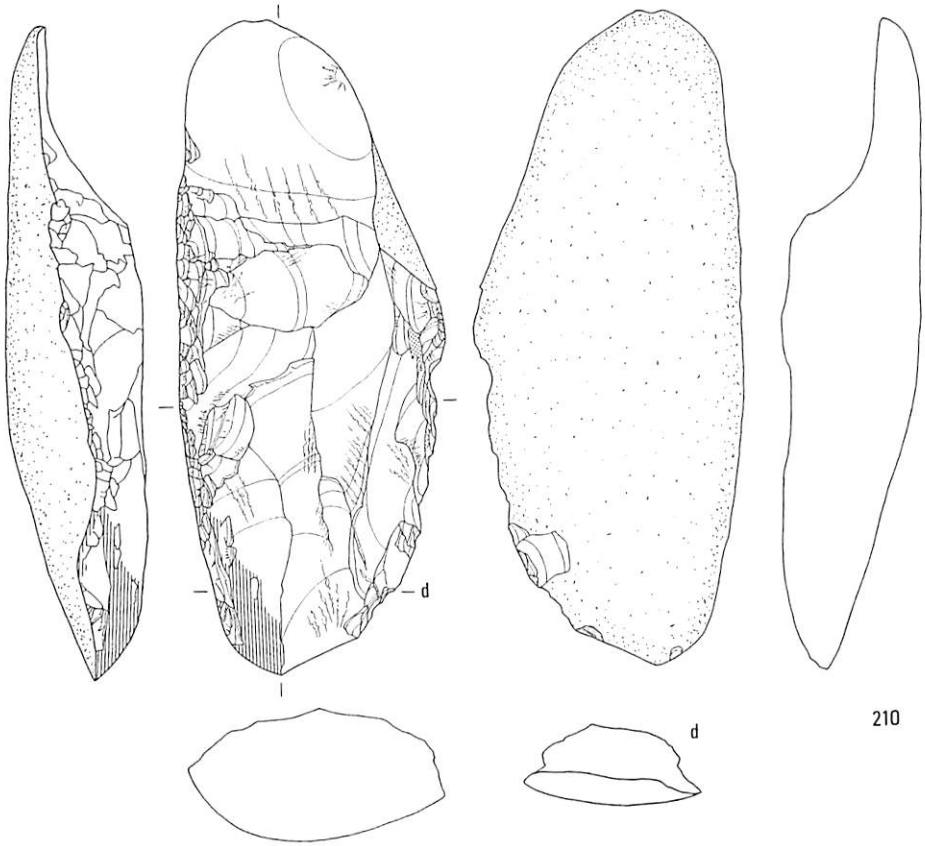
№210　長楕円礫を用いた斧状石器。円礫の片面のほぼ全面を打剝加工している。側面側から特に念入りに，刃部は器体に平行する長い打剝を加え，鋭角の刃部を作り出している。刃部には打剝の痕跡を十分に留めつつも，しっかりした研磨が加えられている。研磨痕の残る部分の右側は刃部先端方向からの打剝によって剝ぎ取られている。使用時の欠損か刃部再生によるものか判断しかねるが，興味深い。自然面からなる裏面側には使用によるダメージを示すとみられる剝離面を認めることができる。流紋岩製。重さ780ｇ。１－Ｂ地点北区斧状石器Ⅴ類相当。

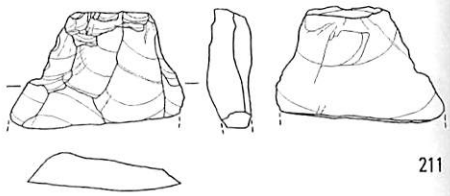
№211　幅広の打面を留めた，縦長剝片であろう。頭部調整が顕著である。流紋岩製。

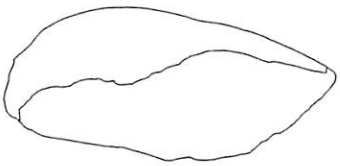
剝片はこの他にも若干の資料が報じられている[4]。

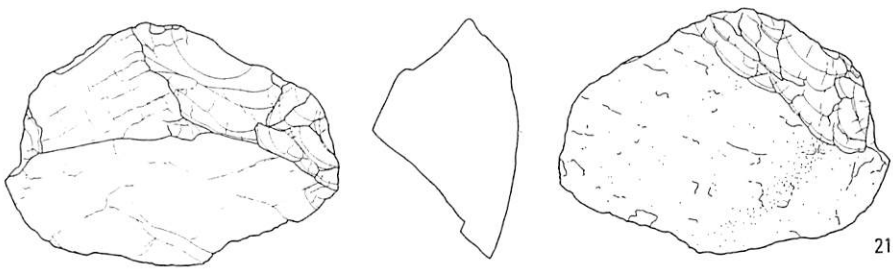
№212　円礫の一端両面に剝離痕を留める一例で，おそらく割器か石核であろう。下半を欠損するうえに，表面側左半分が節理面となっている為に旧状を十分に推測しえないが，自然面側と表面側の両面に数度加撃を行なったもので，いわゆる割器状を呈する。流紋岩製。

１－Ｄ地点の石器群の実態は十分に把握しきれないが，斧状石器・割器？を含む点で，１－Ｂ地









第95図　1－D地点石器実測図

点北区の石器群に共通性があり，丹生石器群を考える際に見逃しえない地点であろう。

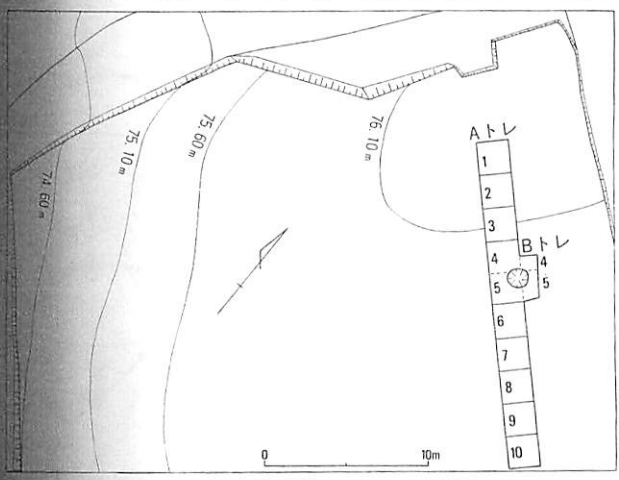
（鈴　木）

註
1) 『丹生１・２次概報』(昭和39年)。
2) 『丹生綜括篇』(昭和43年)。
3) 註1)，第12図。
4) 註2)，第72図。

第８節　第２地区Ｅ地点

１．発掘の経過

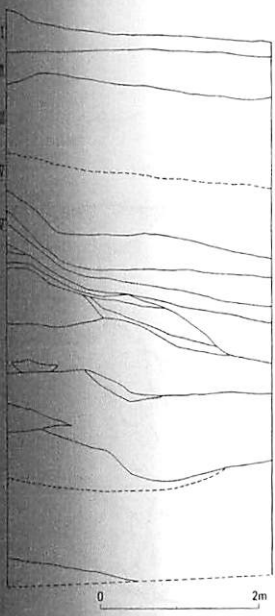
２－Ｅ地点は，昭和37年10月，第１次調査の際，堅田・安井班によって発掘された。[1)]



第96図　２－Ｅ地点地形・トレンチ配置図

２．位置・地形・トレンチ

２－Ｅ地点は字野間に所属する。道路を隔てたＡ地点とともに標高86mの丘陵中央部に位置する。トレンチは東南20m，幅2.1mで，北から２mごとにＡ１～Ａ10区としたＡトレンチと，層位確認のための小規模なＢトレンチが設けられた(第96図)。



第97図　２－Ｅ地点
Ａトレンチ北壁土層断面図

３．土　　層

当地点の土層は以下のとおりである(第97図)。

第１層　腐植表土層。約15cm。

第２層　暗茶褐色砂質土層。

第３・４層　淡黄色風化粘土層。丹生泥層再堆積層。

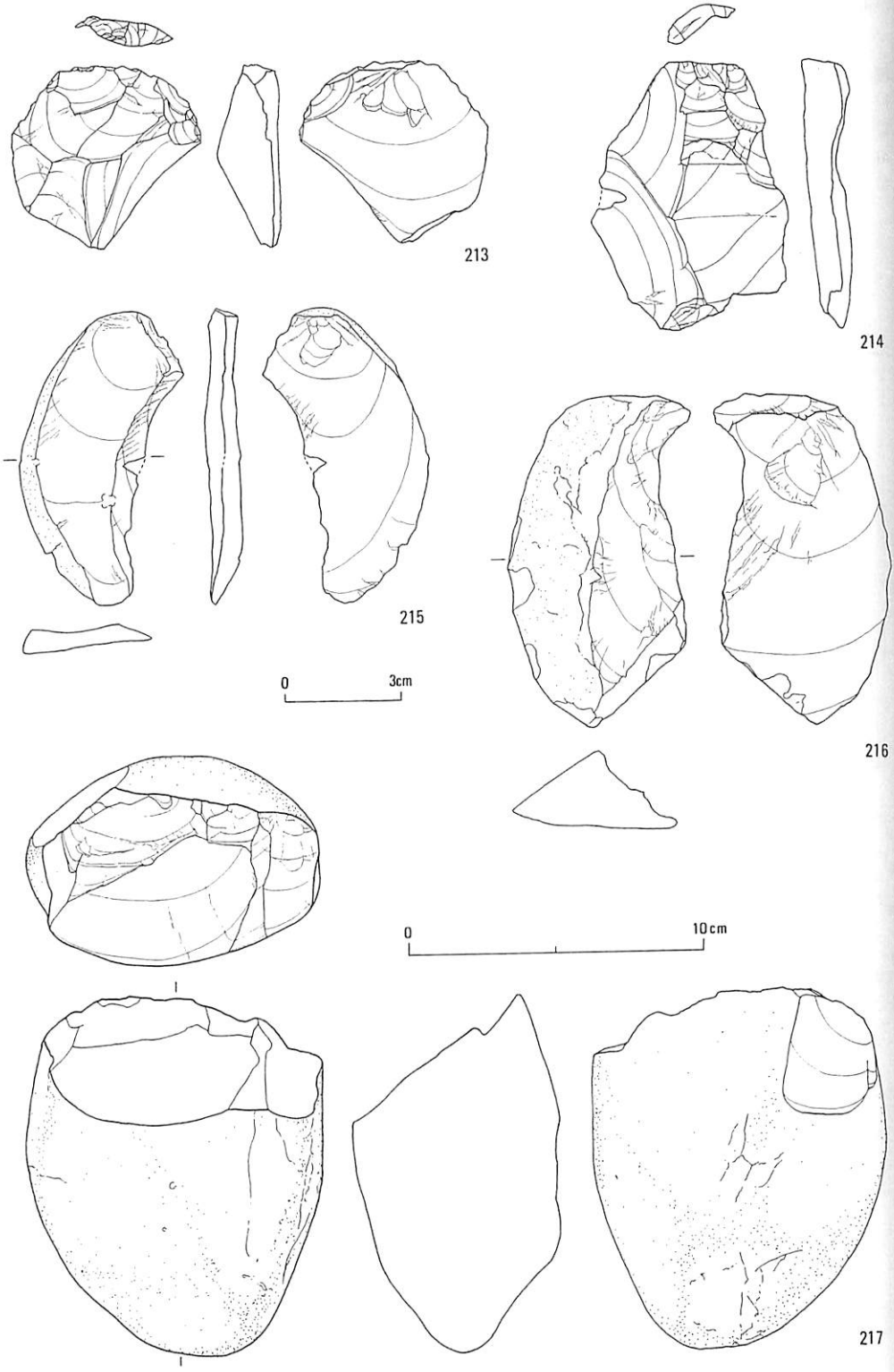
第５層　酸化鉄沈殿層。小礫をレンズ状に含む。

４．遺構・遺物の出土状態

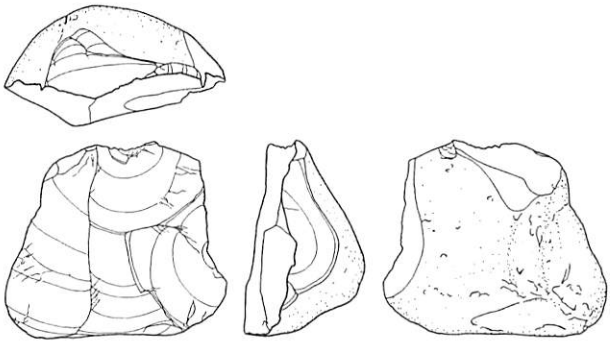
第１層中には土師器片らしい土器片を若干含み，第２層中には黒耀石・ホルンフェルスの剝片を包含する。Ｂトレンチの同層中からは，夜臼式と目される土器片に姫島産黒耀石製石鏃・剝片が出土した。またＡ４・５区第２層では，その上面から掘り込まれた楕円形のピットが検出された(1.3×1.1×0.6m)。[2)] ピット中からは石鏃および剝片数点が出土した。

５．石　　器

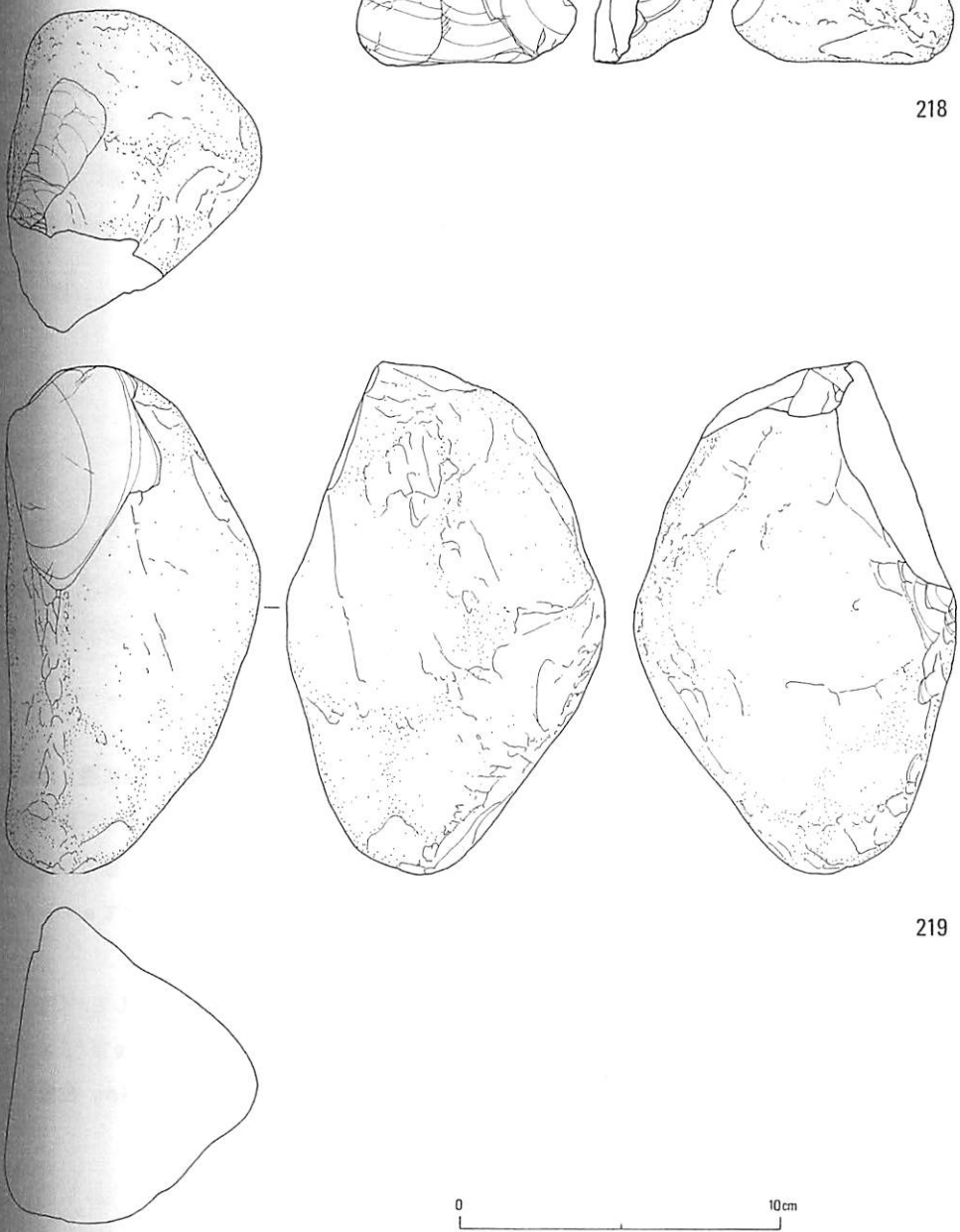
石器は表採品を含めて約60点である。ほとんどが姫島産黒耀石



第98図　2－E地点石器実測図　1)



218



219

0　10cm

第99図　2－E地点石器実測図　2)

片で他に石鏃2点，磨石3点，磨製石斧片1点など縄文時代以降の所産と考えられるもので占められる。この他の主たる石器を以下に記載しておく。

A)剝　　片(第98図)

4点のうち2点は幅広縦長ないしは逆三角形状の剝片で，顕著な打面と求心的な方向での剝片剝離作業を示す2次剝離面に特徴がある(No.213・214)。No.214はピット中出土で，流紋岩製。他の2点は，大きな打面を有する縦長剝片で1側縁に自然面を留める(No.215・216)。

B)石　　核(第98・99図)

上端右側縁に打面を有し，他方向から剝片を剝離した扁平円盤状を呈する石核がまず目をひく(No.218)。求心的方向の2次剝離面を有する剝片2点と対応するものであろう。他の2例は厚手大型の一端両面に打剝の加えられた例であるが，この内1例は両面の位置関係はそれが割器であったというよりも，石核と見るべきことを示唆していよう(No.219)。残りの1例は裏面側に1面の剝離痕を有するものの主とした剝離は正面側であり，いわゆる打器状を呈するとはいえ，剝離面の性状と剝離角等からは，打・割器というよりも石核を想起させる(No.217)。

(鈴　木)

註

1)『丹生1・2次概報』(昭和39年)。

2)　註1)，第20図。

第9節　第2地区F地点

1．発掘の経過

2－F地点は昭和38年10月8日～21日に行われた第2次調査で小江班が調査している[1]。第2地区からは中村・富木両氏によって石器が発見されているが，同地点は，ブルドーザーの被害を免れていたために，調査地点として選ばれた。

2．位置・地点・トレンチ

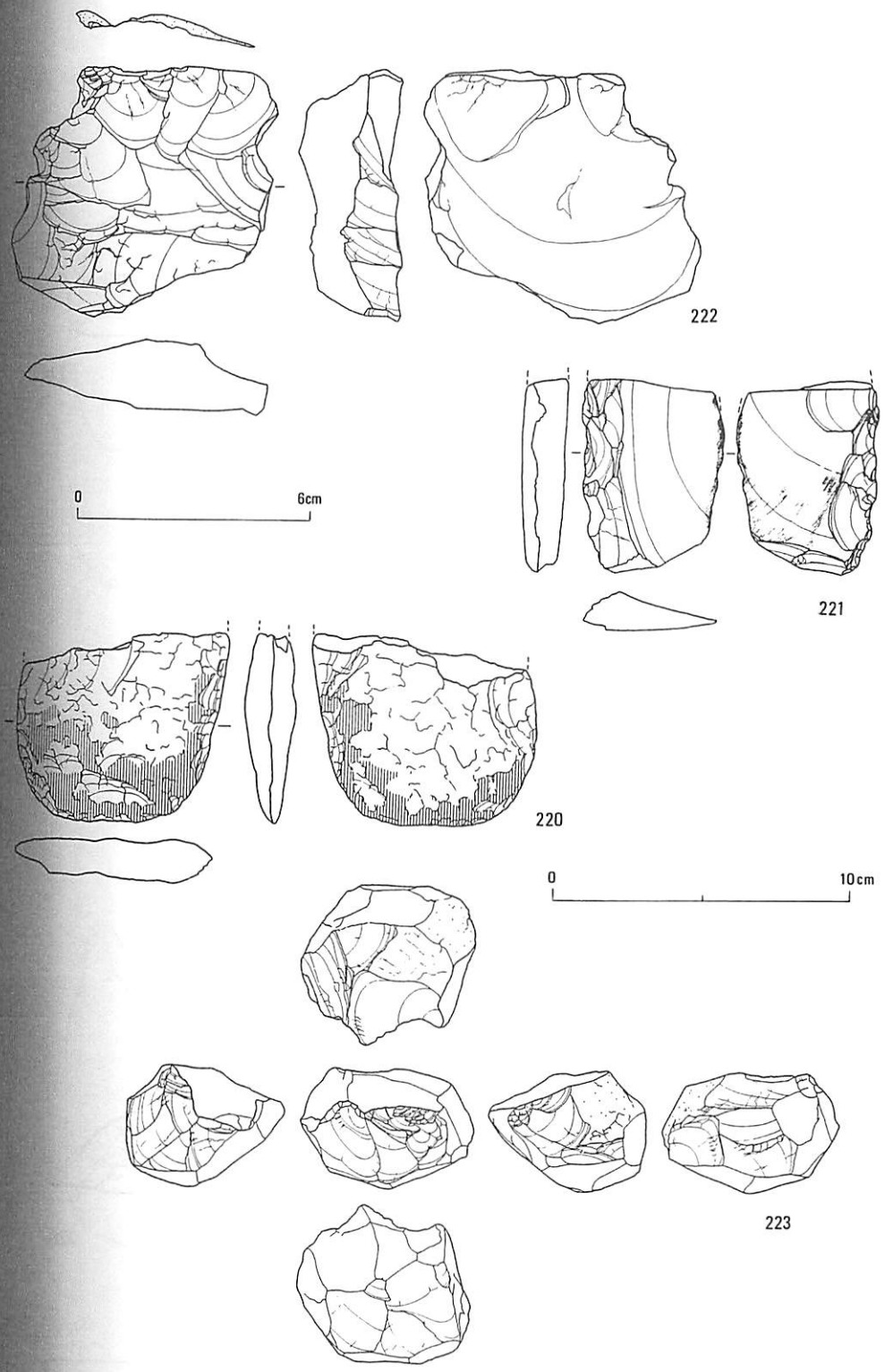
第2地区は大在村方面から台地の西辺を通って南に通ずる主要道路が台地の南縁に達した部分の東側にある地域で，大字丹川字野間に属する。F地点の発掘は，F地点の真中を通って東南の字野間の部落に通ずる未開墾の農道が対象とされ，そこに長さ20m幅2mのトレンチを掘ることによって実施された。このトレンチは5×2mの小区に分けられ，それは西から東へかけてa・b・c・dと名づけられた。

ついでこのトレンチの層位を更に確かめるため，a区に接してこれを西に延長して，O区(5×2m)，ついでP区(長さ，北側5m，南側4m)を，また東へ拡張し，d区に接してe区(5×2m)，f区(8×2m)，g区(8×2m)を設定し，トレンチの全長は51mとなった。レベル，位置等の記録が残されていなかったため，分布図は作成できなかった。

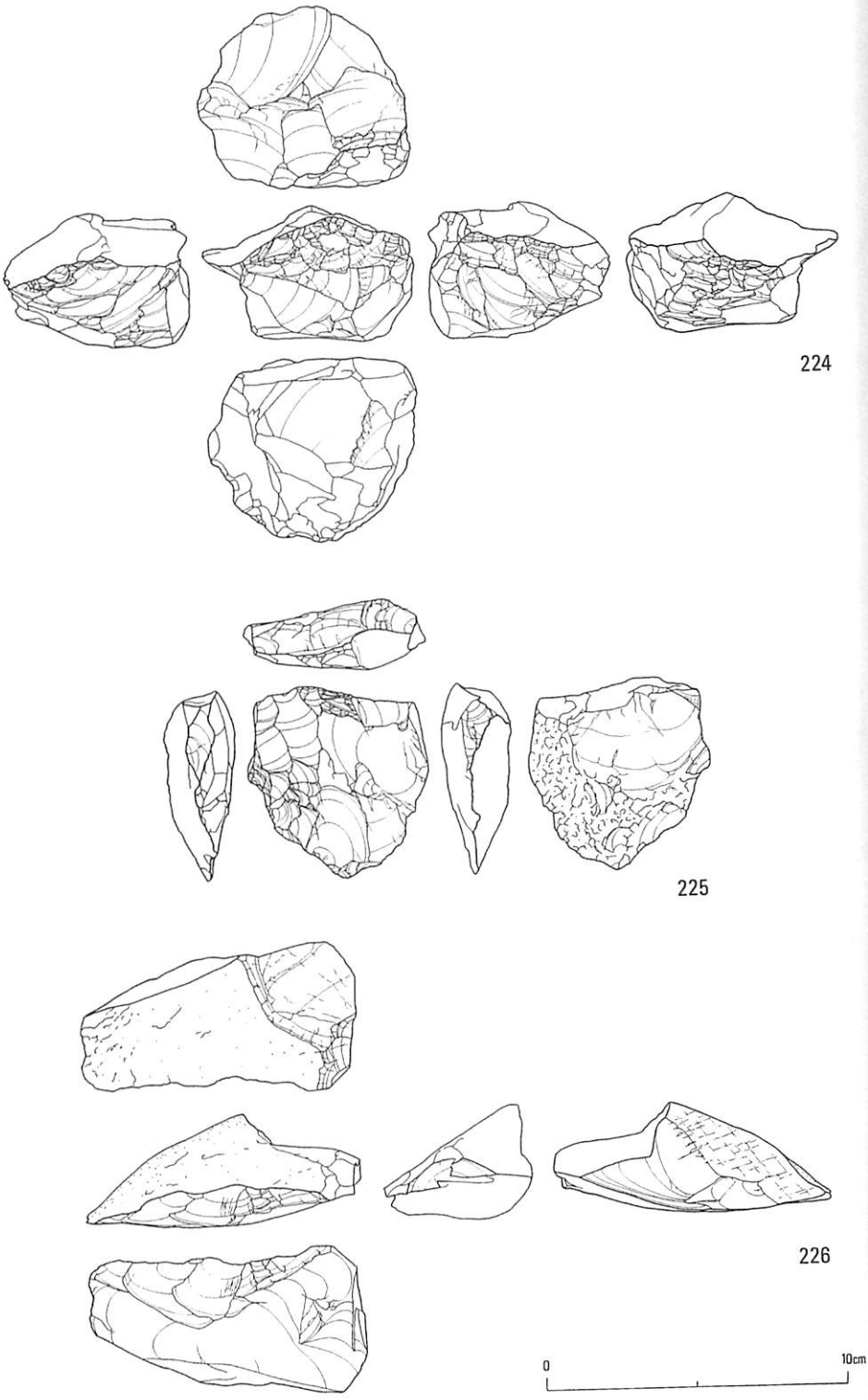
3．土　　層

2－F地点の土層は第1～5層に区分される。

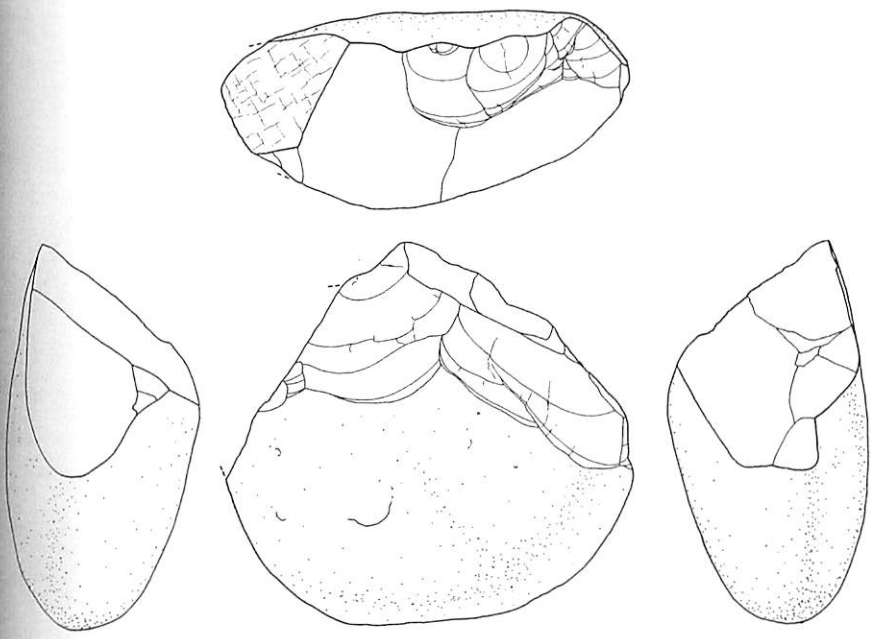
第1層　15～50cmの腐植土からなる表土層。



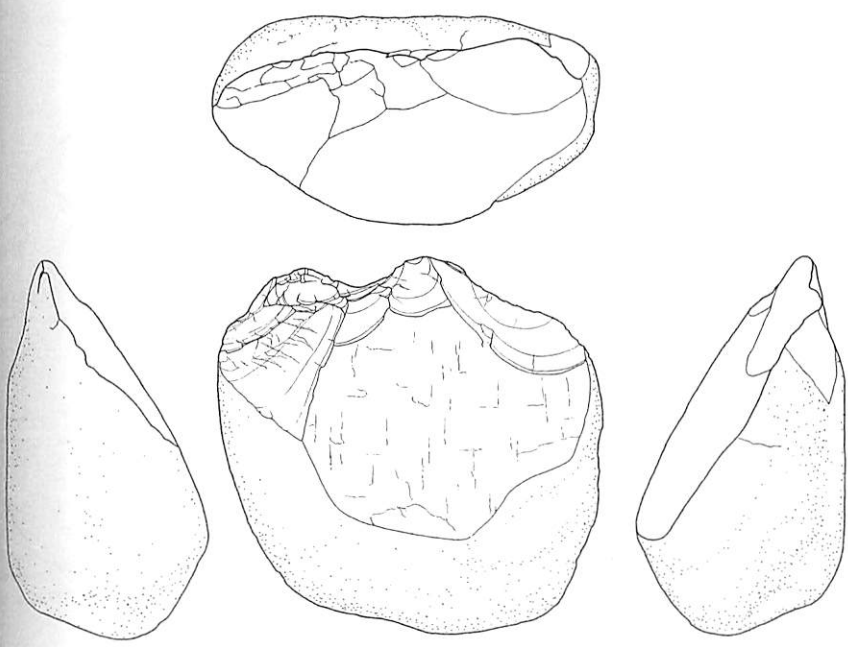
第100図　2－F地点石器実測図　1)



第101図　2－F地点石器実測図　2)



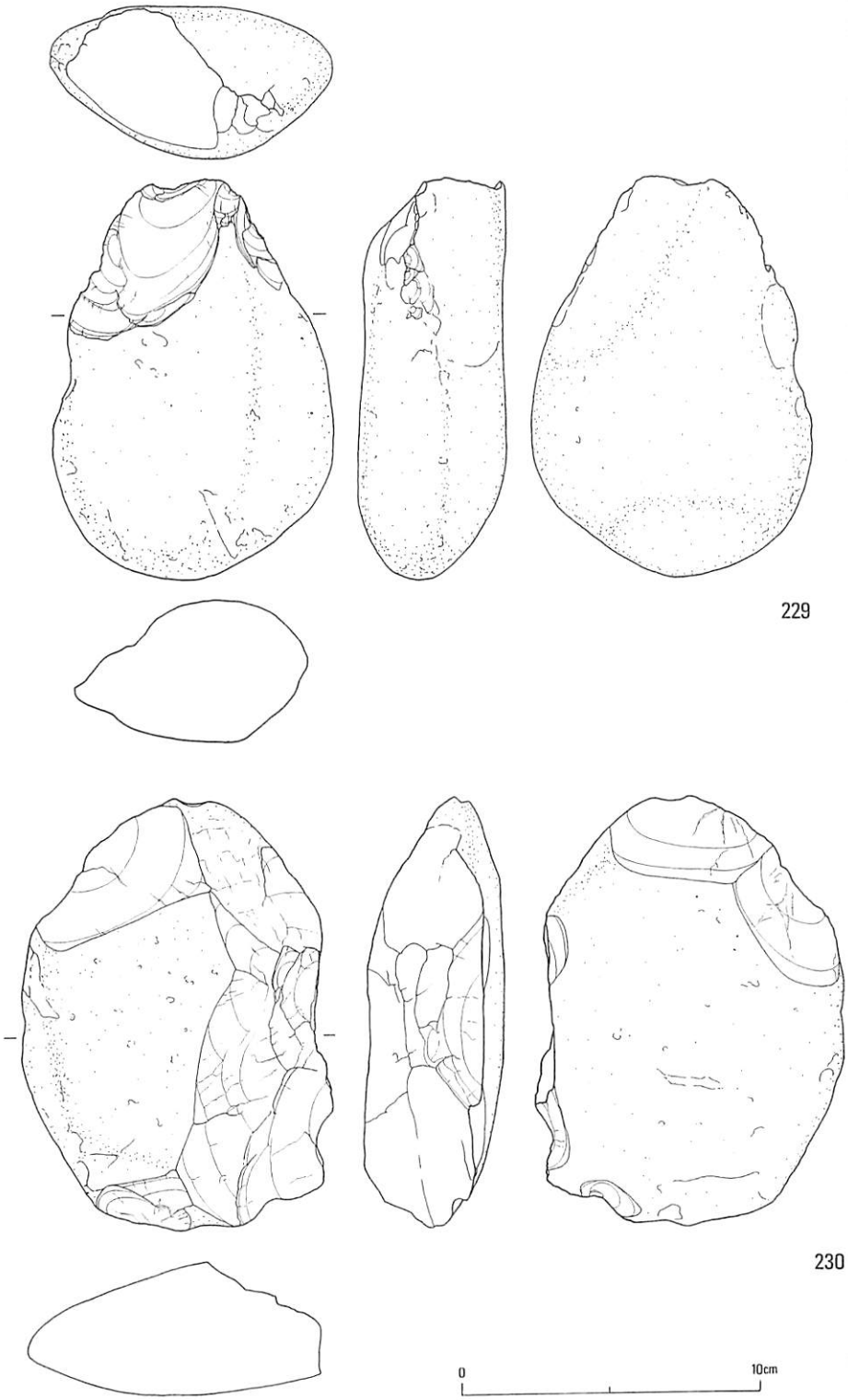
227



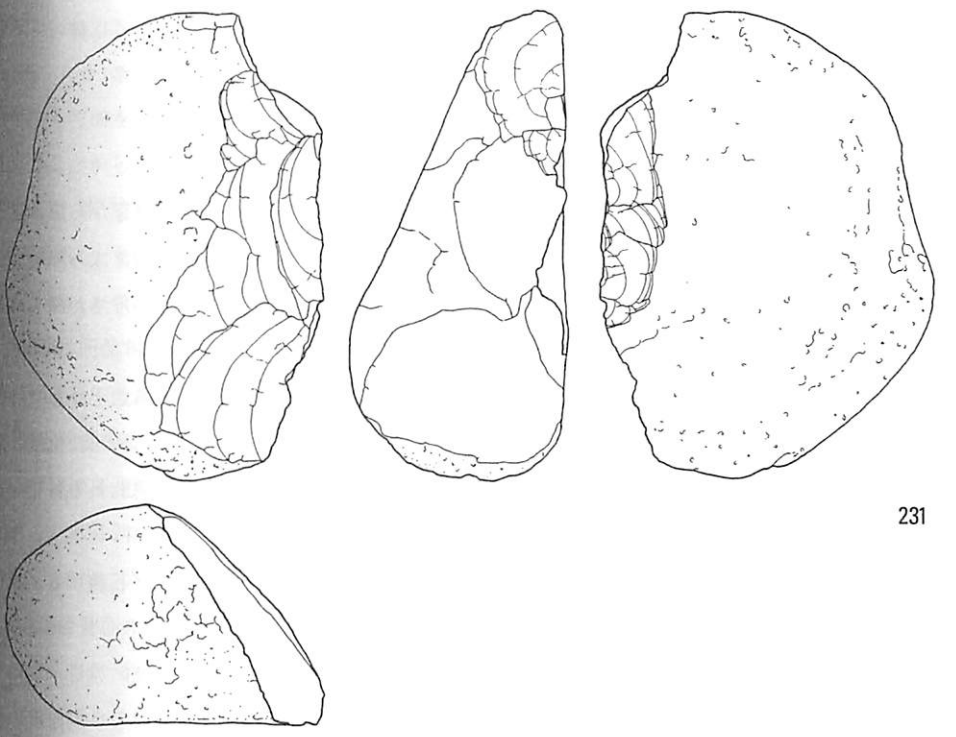
228

0　10cm

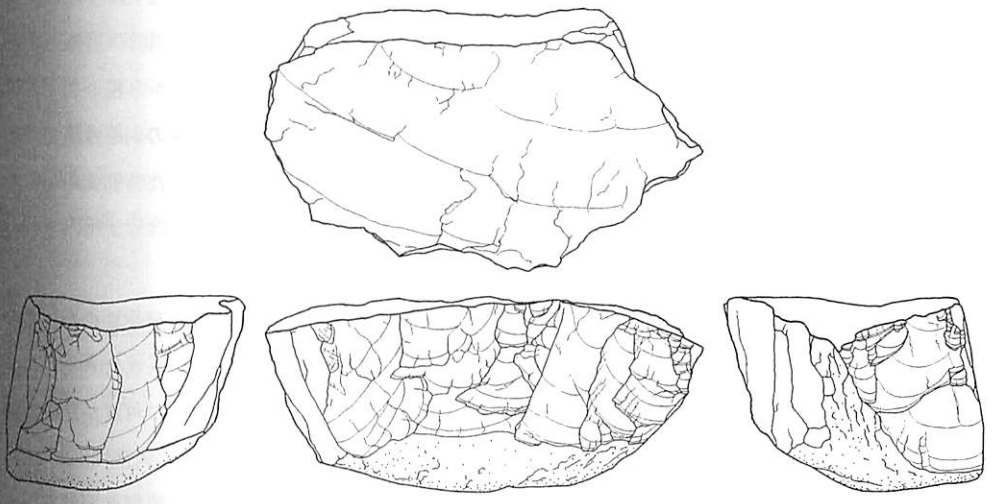
第102図　2－F地点石器実測図　3)



第103図　2－F地点石器実測図　4)



231



232

0　10cm

第104図　2－F地点石器実測図　5）

第2層　第1層の下に局所的にレンズ状をなして存する黄褐色のローム層。

第3層　第1層，処によっては第2層の下に存する褐色の粘土層で細礫を含んでいる。下部は石英の中礫を混えている。a区では厚さ90cmだが普通は20～30cm。東へ行くに従って厚さが減じている。

第4層　結晶片岩を主体とする腐蝕の甚だしい亜角礫層。

4．遺物の出土状況

2－F地点からは，17点の石器が出土している。遺物が出土したのは，第1層直下から第3層までで，第4層からは全く検出されなかった。遺物は概ね第3層から発見され，種類によって層位を異にする事実は認められなかった。もっとも頂面に近いo・a・b区では第3層の厚さが深く大型石器のような比較的重量のあるものが多かった。

また，第3層では打器・局部磨製石斧・弥生式土器が混在状態で発見されていることから，丹生泥層の形成，陸化後相当長期にわたってこの地点は表面に露呈し，その間に上部にあった土壌が流出，削平され生活面に残された遺物が2次堆積層中に包含される結果となったと思われる。

5．石　　器

2－F地点から出土した17点の石器の内訳は，RF1，磨製石斧1，打・割器／石核類6，石核4，剝片等5点となる。

A)磨製石斧(第100図)

幅広で扁平な形を呈し，上部は欠損している(No.220)。両面に研磨が施されており，剝離面の凹凸をとどめながら，軽い研磨が広く行われている。蛇紋岩製。本例については長崎潤一氏の言及がある[2)]。

B)RF(第100図)

縦長の剝片を素材としている(No.221)。打面は残っていない。一方の側縁両面から粗い加工が施されている。また腹面右下方に連続した2～3㎜の調整がみられる。腹面右側縁の剝離は上方から下方へ順番に行われている様である。あるいは，削器とすべきかもしれない。また背面側の加工を打面として腹面側で鱗状の小型の剝片をとった石核とみることも可能であろうか。

C)打・割器／石核類(第102～104図)

打・割器／石核類はA：打器(No.227・228・229)B：割器(No.230・231)C：石核の可能性のあるもの(No.232)と大きく3群に分けられる。

まずA群であるが，No.227は扁平な円礫を素材として，一端に凸形で礫面側との角度が比較的鋭い刃部を作出している。No.228も円礫を素材としており刃部は弧状である。刃部の角度はNo.227の例よりも一層鋭い。No.229は長楕円形の礫を素材とし，一枚の大きな剝離によって鋭利な刃部を作出している。B群のNo.230は扁平な円礫の片面においては周囲3/4程に刃部が作られ，また裏面にも3枚の剝離がみられる。No.231は扁平な円礫を素材とし，側縁両面にゆるやかな弧状の刃部が作出されている。両者とも裏面側の加工は簡単である。刃部は，No.232の例と比較すると顕著なように，比較的鋭角であり，この点を重視して割器としておきたい。

C群のNo.232は円形の礫を半割し，その分割面を打面として周囲に剥離が行われている。打面と作業面の角度がA・B群と比較して鈍角で直角に近く，作出された剥片の形状も縦長でそろったものが多いため石核の可能性が強い。

D)剥　　片(第100図)

幅広く打面を残す厚さ2cm程の大きな剥片である(No.222)。背面には全周から多数の剥離がなされていることから，円盤状石核の作業面全面をはぎとったような剥片と思われる。

E)石　　核(第100・101図)

石核類は大きくA(No.223・224・225)，B(No.226)2群に分けられる。

A群

No.224は円盤状の体形を有する。先に大きな剥離が周辺から求心的に数枚とられており，その面を打面として全周，下方向に横長鱗状の細かい剥片が取られている。No.223は円盤状の体形を有し，No.224と同様先に数枚の打面となる剥離が行われ，その面を打面として剥片がとられているが，剥片の形状は不定形である。No.225は背面に自然面を残した上下両端に打面を留めるハート形の石核である。素材剥片のポジ面を利用して周辺から求心的に剥離が行われている。

B群

No.226は背面に自然面を残す分厚い横長の剥片を素材としている。剥片の打面とは反対の末端のへりで，自然面を打面として剥片のポジ面を剥片剥離作業面として，右方向から順に鱗状の剥片がとられている。

6．まとめ

これらを剥片剥離技法という観点でみると二つのグループに分けられる。1つは円盤状の体形を有し，複数の剥離面で作られた面を打面として剥離作業が行われるもの(No.223・224)。No.222の剥片はこのタイプの石核からとられた剥片と思われる。これらとは少し異なるがNo.225も打面を作出して，剥離を行っているといえる。もう1例は横長剥片を利用し，自然面を打面として一定方向の鱗状の剥離が行われるものである(No.226)。

他に円礫を分割し，その分割面を利用して剥離を行うものがある(No.232)。

(宮　内)

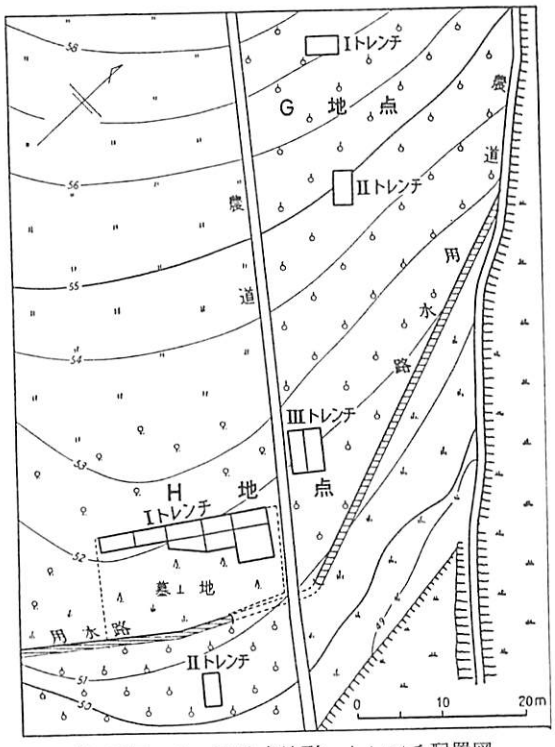
註

1) 『丹生4次概報』(昭和41年)。
2) 長崎潤一「後期旧石器時代前半期の石斧－形態変化論を視点として－」(「先史考古学研究」第3号所収，東京，平成2年)。

第10節　第2地区H地点

1．発掘の経過

2－H地点は，昭和37年頃より石器の散布が知られており，昭和40年10月13日～11月2日に行われた第4次発掘調査で早川班によってG地点とともに調査されることになった[1)]。



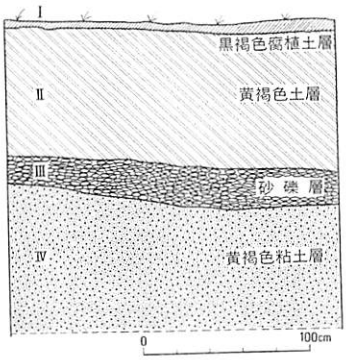
第105図　２－Ｈ地点地形・トレンチ配置図

２．位置・地形・トレンチ

第２地区は大字丹川字野間に属す東南向きの一丘陵である。両側が開析谷によって，断ち切られ，末端部は野間部落をのせる岡面に突き出ている。

そのうちＨ地点は丘陵の先端に近い緩やかな平坦斜面にあり，標高52mから48mの当時墓地と果樹園であったところである(第105図)。トレンチはⅠ，Ⅱトレンチがあり最初果樹園と墓地のある雑木林とにそれぞれ１個処ずつ４×２ｍの試掘トレンチを設定している。

当時の日誌によると，Ⅰトレンチは試掘トレンチから西方に２×４ｍで拡張し，東からａ・ｂとしている。更にｃ・ｄ・ｅ・ｆ・ｇ・ｈ・ｉの７区(４×２ｍ)を設定している。次に農道を距てて東側の雑木林に５×２ｍトレンチｊ・ｋ区を設定となっているが，それ以上のことは不明である。



第106図　２－Ｈ地点第１トレンチ東北壁土層断面図

３．土　　層

Ｈ地点の地層は４層に区分される(第106図)。

第１層　黒褐色腐植土層(４～６cm)。数点の陶片，土師器片，黒耀石の小石片などを含む。

第２層　黄褐色土層(70～90cm)。上部30cmの間に38点の頁岩，粘板岩製の縦長剝片を標識とする石器群を含む。

第３層　褐鉄鉱まじりの風化砂礫層(20～30cm)。

第４層　黄褐色粘土層(90cm以上)。

４．遺物の出土状況

２－Ｈ地点からは43点の石器が出土していて，31点が岩宿時代のものと認められる(第４表)。このうち剝片１点がⅡトレンチから出土した外は，全てⅠトレンチ出土である。

上述したように試掘トレンチを設定して掘ったところ，雑木林の方の茶褐色土層上部から３点の粘板岩製剝片を発見したので，該地点の雑木林全域を発掘するに至った。第３層，第４層からは石器が発見出来なかった。

平面的な分布については出土遺物の厳密な位置がわからないので割愛する。

５．石　　器

２－Ｈ地点より出土した31点の石器の内訳はＵＦ14点，石核２点，剝片類14点，チップ１点であ

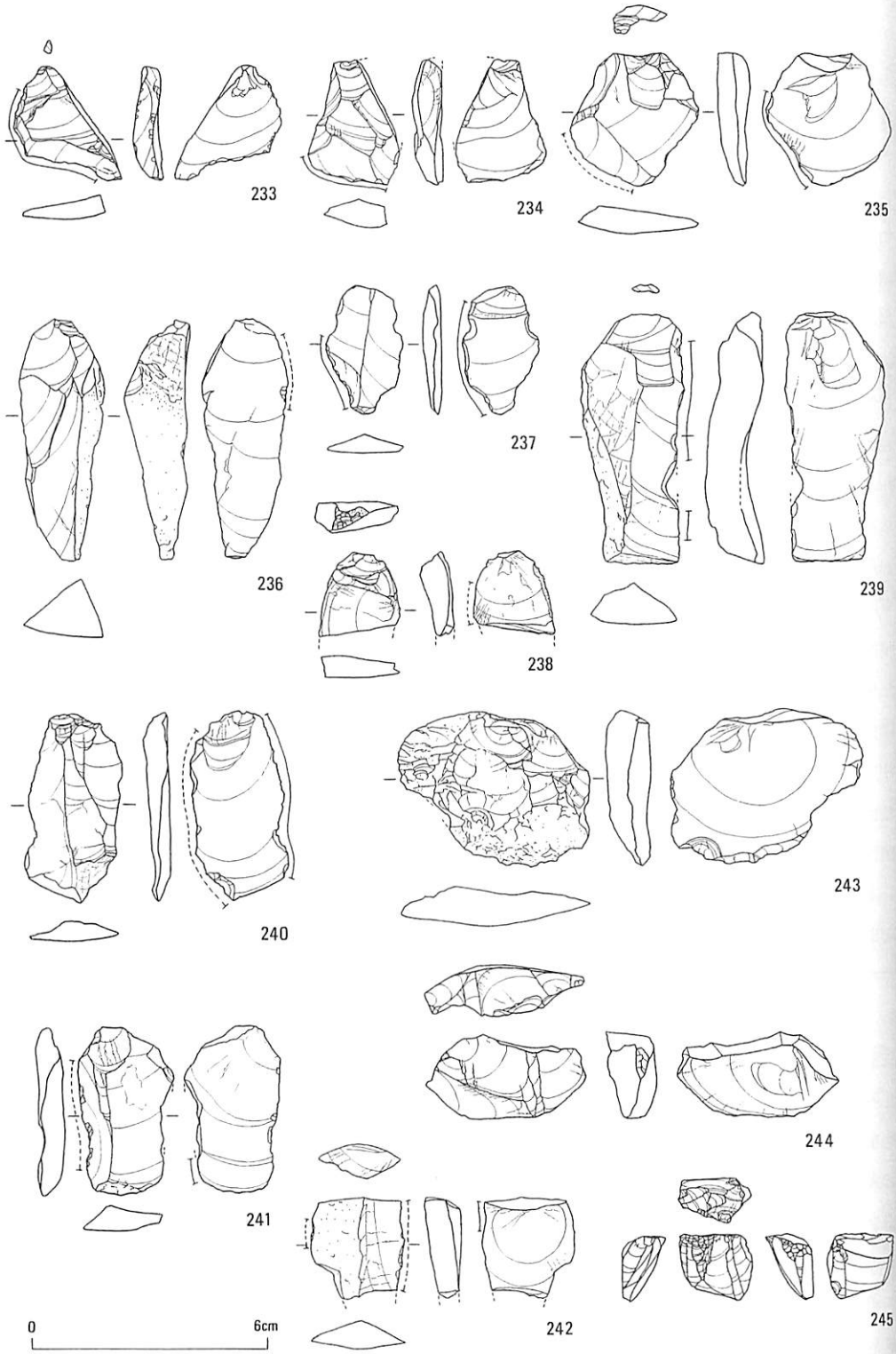
り石材は流紋岩が主で黒耀石が2点・砂岩・チャートが各1点含まれる。

A)ＵＦ類(第107図)

計14点。No.233は打面の小さい縦長剥片で薄く平らな三角形を呈している。背面の左側縁に連続した大きな使用痕がみられる。No.234は三角形状の縦長剥片である。背面の右側面は折れていて，下端に連続した大きな使用痕がみられる。No.235は半月状の大きな打面をもつ，ずんぐりした菱形の縦長剥片である。背面下端に小さい不連続な使用痕，腹面左側縁に大きめの連続した使用痕がみられる。No.236は打面の小さい厚手の縦長剥片である。一部自然面を残し，断面は三角形を呈している。腹面右側縁上半部にごく小さい不連続な使用痕がみられる。No.237は石刃状の薄い縦長剥片である。背面左側縁下半部と，腹面左側縁とに大きな連続した使用痕がみられる。No.238はやや小さめの打面をもつ厚めの縦長剥片である。下部は欠損し，背面は多方向からの剥離で成っている。腹面左側縁に小さな使用痕がみられる。No.239は打面の小さい石刃状の厚い縦長剥片である。背面右側縁に大きな連続した使用痕がみられるが，下半部の一部欠損によりとぎれている。No.240は打面が残存していない石刃状の薄い縦長剥片である。腹面の左側縁には大きな不連続な使用痕，右側縁には小さな連続した使用痕がみられる。No.241は打面の小さい石刃状の薄い縦長剥片である。背面左側縁には小さめの不連続な使用痕，腹面の左側縁下端部に小さな使用痕がみられる。No.242は大きな三角形状の打面をもつ縦長剥片である。下部は欠損している。背面右側縁に小さめの不連続な使用痕，左側縁中央に小さい不連続な使用痕，腹面左側縁上端部に大きな使用痕がみられる。

第４表　第２地区Ｈ地点出土石器一覧表

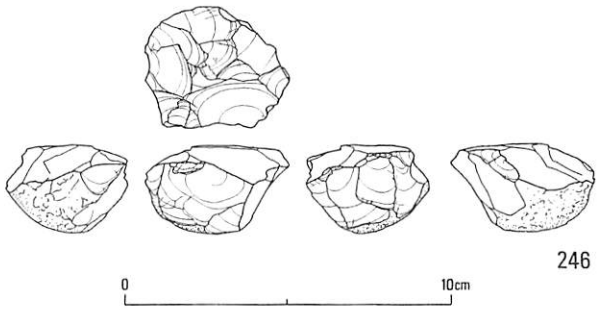
遺物番号	類　別	出土層	発掘区	レベル(cm)	石材	挿図No.
ⅢH－６	A　UF	表土層	Ⅰ－b	——	流	233
7	A　UF	表土層	Ⅰ－b	——	流	234
8	A　UF	表土層	Ⅰ－b	——	流	253
11	A　UF	——	Ⅰ－c	－20	流	236
13	B　——	——	Ⅰ－a	－５	流	——
15	A　UF	——	Ⅰ－a	－16	流	——
17	B　——	——	Ⅰ－g	－３	流	——
18	D　——	——	Ⅰ－g	－30	流	246
20	B　——	——	Ⅰ－f	——	流	——
21	D　MC	——	Ⅰ－g	－30	黒	245
22	B　——	——	Ⅰ－g	－18	流	——
23	C　——	——	Ⅰ－g	－18	流	——
26	A　UF	——	Ⅰ－a	－30	流	——
27	B　——	——	Ⅰ－f	——	流	——
28	A　UF	——	Ⅰ－h	－７	流	242
30	A　UF	——	Ⅰ－h	－30	流	——
31	B　——	——	Ⅰ－i	——	砂	——
32	B　——	——	Ⅰ－i	——	珪	——
33	B　——	——	Ⅰ－d	－15	流	——
35	A　UF	——	Ⅰ－i	－15	流	243
36	A　UF	——	Ⅰ－i	－15	流	237
37	B　——	——	Ⅰ－i	－15	流	——
38	B　——	——	Ⅰ－i (ｉとｈの境)	－30	流	——
39	A　UF	——	Ⅰ－d	－20	黒	238
40	B　——	——	Ⅰ－j	－15	流	——
41	B　——	——	Ⅰ－j	－15	流	——
44	A　UF	——	Ⅰ－j	－10	流	240
47	A　UF	——	Ⅰ－k	——	流	239
48	B　——	——	Ⅰ－k	——	流	244
49	A　UF	——	——	——	流	241
50	B　——	表土層	２トレ	——	流	——



第107図　２－Ｈ地点石器実測図　1）

B)剥片類(第107図)

計14点。幅が広く厚い打面を有し，逆三角形横長の剥片が約半数で注意をひく。No.244は典型的で石核および剥片剥離技法を推測させる好資料である。その他は不定形表皮剥片や小片である(No.243)。



第108図　2－H地点石器実測図 2)

C)石　　核(第107・108図)

計2点。No.245は黒耀石の細石核であり，角錐状の体形を有する。打面は不整形な四角形で，打面形成のための剥離と打面細調整および頭部調整剥離がみられ，正面から背面方向に傾斜している。背面には大きな剥離面を残しており，正面・両側面に細石刃剥離痕がある。野岳型の石核である。

No.246は半錐状の体形の石核である。背面から基部にかけて自然面を残す。打面にも多くの剥離痕があることから，複剥離面打面とみて背面の一部を除いて寸づまりで貝殻状の縦長剥片をとっているという見方と，打面側面が交互にかわって剥離しているという見方が可能である。多分後者であろう。

(山　口)

註

1) 『丹生4次概報』(昭和41年)。

第11節　第2地区Ⅰ地点

1．発掘の経過

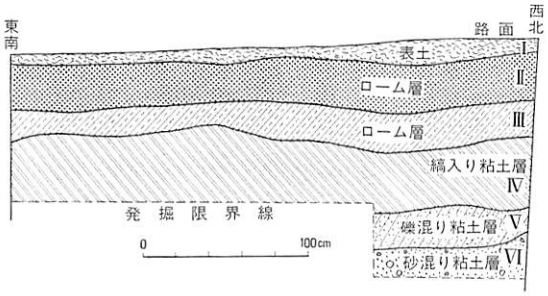
2－Ⅰ地点は，昭和37年頃より石器の散布が知られており，昭和40年10・11月の第4次調査の際に，安井班によって発掘されることになった。[1)]

2．位置・地形・トレンチ

2－Ⅰ地点は，F地点より農道を東南に下がって，二つの農道が交叉する地点を中心とする。標高約62m。西から東にゆるやかに傾斜する平坦な台地上に位置し，周囲は果樹・桑・芋などの畑地をなしている。

トレンチは東西に通る農道上に1.2×10mの第1トレンチ，南北に通る農道上に2×6mの第2トレンチが設けられた。また，第1トレンチの延長上に，F地点との地質上の関連をさぐるために第3トレンチ(1.5×1.5m)を設けた(第109図)。

第109図　2－Ⅰ地点地形・トレンチ配置図



第110図　2－Ⅰ地点第1トレンチ西南壁土層断面図

3．土　　層

遺物包含層に関しては，両トレンチとも土層は同じ堆積状況にあると考えられるので，第1トレンチの土層で第2トレンチも代表させることとする(第110図)。

第1層　表土。約10cm。

第2層　黄色ローム層。約30cm。本層は第3層が一度流失した後堆積したもので，下部には沖積ロームが幾分残っている。

第3層　淡黄色ローム層。約20cm。第2・3層ともに土質はきれいである。

第4層　縞入り粘土層。約50cm。本層以下が大在層に相当。第4層上面～第3層下部に散布する礫は，第4層が地表面であった時期に流れてきたものである。

第5層　礫混じり粘土層。約20cm。

第6層　砂混じり粘土層。

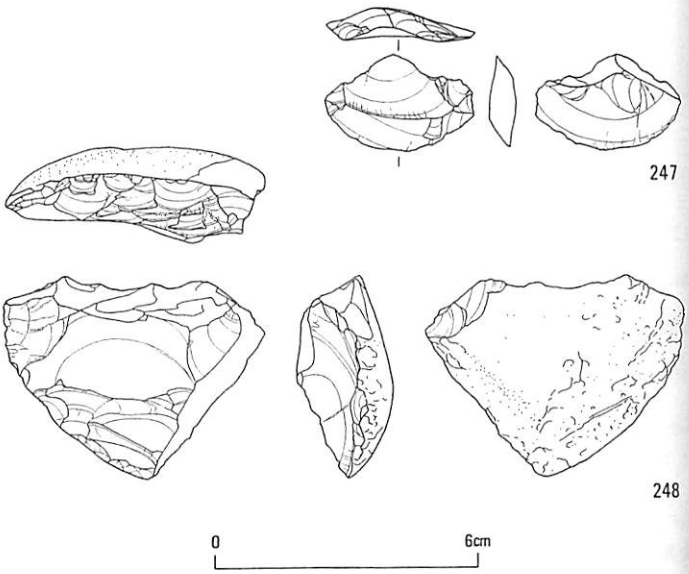
4．遺物の出土状況

第1・2層からは石鏃や剝片が出土する。後述の翼状剝片は第2トレンチ第3層下部出土である。第4層以下に遺物の検出はない。なお，第3トレンチ第2層からは，剝片の外に土器の小片1点が検出された。縄文・弥生の区別は判然としないが，第1・2トレンチにおける石器にもこのような土器が伴っていたと考えられる。おそらく溶解してしまったものであろう。

5．石　　器

2－Ⅰ地点からは，石鏃2点の他表採品を含めて十数点の石器類が知られている(第111図)。[2)] この内，岩宿時代に帰属すると考えられる2点の流紋岩製石器について記載しておく。

1点は翼状剝片の範疇で捉えうる例である(No.247)。大小4面の剝離面からなる山形の打面から打ち剝がされた小型の翼状剝片で，ポジ面からなる底面と，先行する剝離作業においても同様の剝片が取られていたことから瀬戸内技法が用いられていたことを示している。



第111図　2－Ⅰ地点石器実測図

なお，これについては，既に綿貫俊一氏の論攷に言及されている。[3)]

2例目は上端に粗く大きく急峻な剝離が加えられ，鋸歯状を呈する石器である(№248)。下端の大きな剝離面は新しい欠損によるものである。裏面側はほとんど自然面だが左上端に剝離面を留めている。削器とすべきであろうか。正面中央には下方からの打剝によって生じた大きなネガティブな剝離面がある。右側縁や裏面の剝離面の性状を考慮すれば，これは本来石核であったものの転用と考えるべきかもしれない。

（鈴　木）

註

1) 『丹生4次概報』(昭和41年)。
2) 註1)，第17図。
3) 綿貫俊一「東九州における瀬戸内系人類遺物」(「旧石器考古学」25所収，京都，昭和57年)。

第12節　第3地区B地点

1．発掘の経過

3－B地点は，昭和37年10月の第1次調査，昭和38年10月の第2次調査において，藤原班によって実施された。本地点は，丹生遺跡群中，丹生論争に係わる地点という意味で，最重要地点の一つである。[1)]

昭和37年3・6月および10月の地質調査の結果，問題の石器の多くが丹生泥層上部の礫層に含まれていた疑いが濃くなってきた。ところが第1・第2地区などの所謂「丹生面」(78～85m)では，この礫層は浸食流失しているため，この礫層が残存し，石器の一次包含の可能性が高いと考えられる「大在面」(90～100cm)に注目し，これに調査の手を加える必要が痛感された。この為に丹生台地でもっとも標高の高い第3地区の発掘が計画された。先に実施された3－A地点では礫層は極めて薄いことが判明したために，本地点の調査が期待を込めて実施されることとなった。

2．位置・地形・トレンチ

3－B地点は，丹生台地西縁の小高い丘で，台地内の最高標高地点(約100m)，3－A地点の北，長迫の池の西に位置し，丘の西側は大野川に面する急崖に連なっている。地籍上は，旧鶴崎市種具字西受に属している。

トレンチは，第1次調査で，標高99mの頂部にAトレンチ(5×5m)，南麓の稜線上にBトレンチ(Aトレンチより南へ40m，標高約92m)，Cトレンチ(Aトレンチより南へ30m，標高約94m)，Dトレンチ(Aトレンチより南へ20m，2×3m)が設けられた。第2次調査では，Cトレンチの北側に近接した稜線上にEトレンチが設定された(東西10×南北5m)。

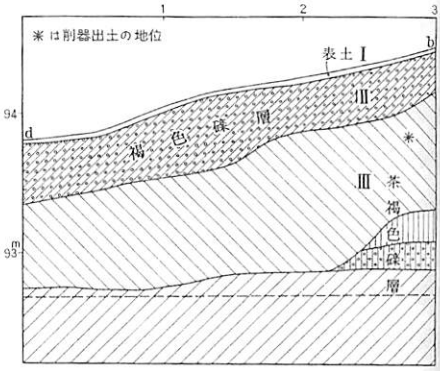
3．土　　層

上記のように3－B地点では各所にA～Eまでのトレンチが設けられたが，この中で石器が出土したトレンチはCトレンチであるので，Cトレンチの土層を記しておく(第112図)。

第1層　表土。約10cm。

第2層　褐色礫層(漂礫層)。20～50cm。

第3層　茶褐色礫層。約1m。以下シルト層に続く。



第112図　3－B地点Cトレンチ土層断面図

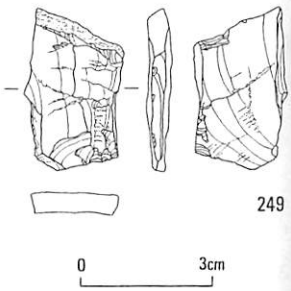
4．遺物の出土状況

地表下20cm，第2層褐色礫層中からチャート製稜角式彫器と呼ばれた石器が発見された。第3層茶褐色礫層からは，Cトレンチの北縁中央部付近，地表下60～80cm(第3層上面より15～35cm)の間の排土中から削器が発見された。茶褐色礫層は元来模式地では5m以上の厚さを有しており，Cトレンチではそれが4m近くも削り取られている事実から，この削器は茶褐色礫層(丹生泥層の上部礫層)の底部近くに含まれていたと認められた。丹生遺跡群中の数少ない原位置出土例であると同時に石器の帰属年代にとって重要な所見である。

5．石　　器

稜角式彫器とされるものは，チャート製で薄い不定型剝片を素材としている(第113図No.249)。表面側下端には平坦で器面を削ぐような剝離痕が認められる。左右両面から裏面方向への加圧で折れている。いわゆる楔形石器の範疇で捉えられるであろう。出土層の第2層は大在層の上部礫層が洗い出され，再堆積した漂礫層とされているが，石器はシャープで転磨の痕跡は認められない。

削器とされるものは，刃部加工に相当する剝離面の判断にかかっている。刃部相当部は，節理面から剝落面上にあり，縁辺からの加圧によって生じた貝殻状の剝離痕も若干認められる。しかし，これらは人為的な加工痕とは認め難く，したがって本例は自然礫と判断するのが妥当であろう[2)]。



第113図　3－B地点石器実測図

上記のように，原位置出土とされる2例のうち1例は自然礫であり，漂礫層中出土とされる楔形石器は，大在層の再堆積期に包含されたとしても，その再堆積の時期の決定が行われないかぎり，この1点の石器からは年代を推し測ることは困難であると言わざるをえない。石器に全くローリングの痕跡を留めていない点も気懸りなところである。

(鈴　木)

註

1)　『丹生1・2次概報』(昭和39年)。

2)　a)同上，第29図；b)『丹生綜括篇』(昭和43年)，第21図。

第13節　第４地区Ａ地点

１．発掘の経過

４－Ａ地点は，昭和39年10月４日～10月22日まで行われた第３次発掘調査として藤原班が調査している。[1)]

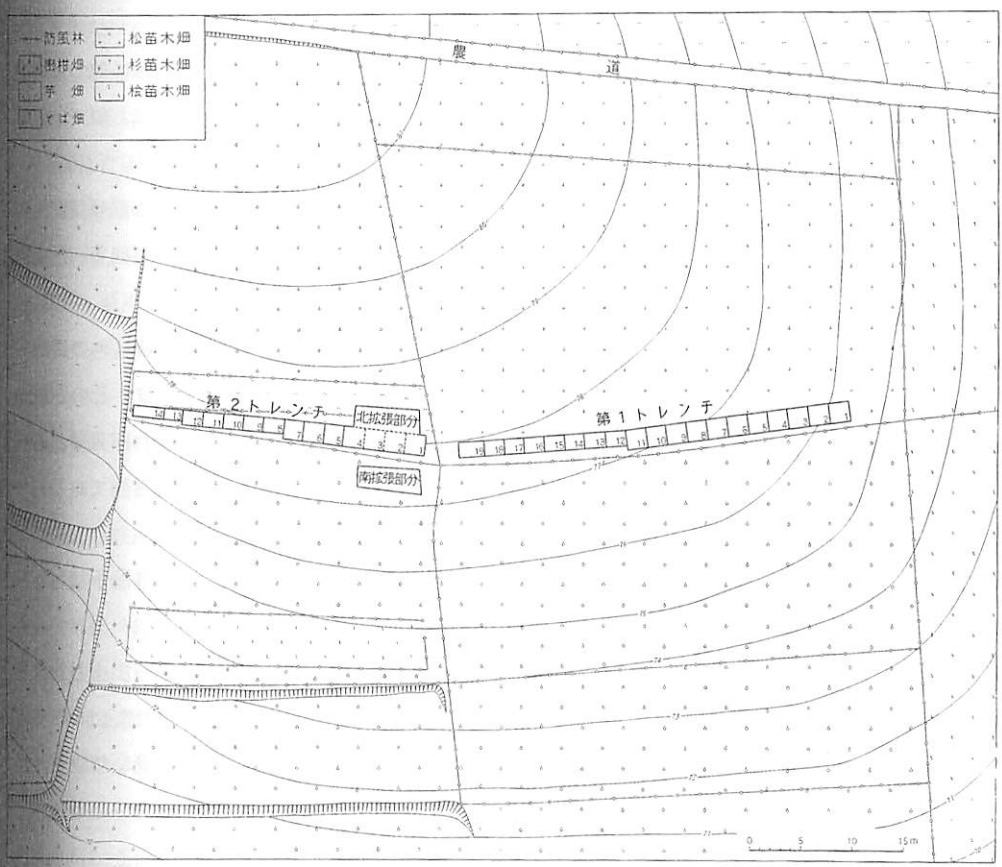
２．位置・地形・トレンチの設定

第４区は丹川台地の南端部に設定された地区で大字丹川の字池久保辻山を含み，字原山西南部の83m高地をも包含している。その西部は丹川台地の最高処(標高83m)をなし，そこから東に向って三つの舌状段丘が伸びている。Ａ地点は原山の83m高地の頂部とその南斜面(いずれも畑地)に当たっている。そしてそこには70m余に亘る農道が存する。この農道を中心とした幅３ｍ余りの細長い地はまだブルドーザーによる攪乱を受けていないことを知ったので，ここに長さ67mに及ぶ東西方向のトレンチと拡張部２ヶ所を掘って調査を実施した(第114図)。

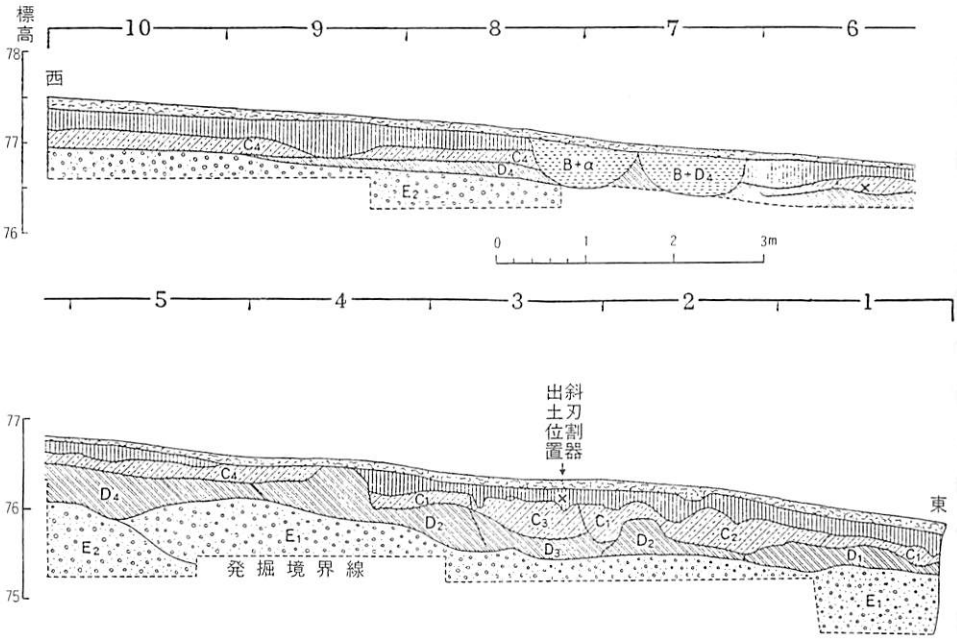
３．土　　層

４－Ａ地点の土層は大きく５層に区分される(第115図)。

第１層(Ａ)　暗褐色の表土で砂と腐植土とからなる。



第114図　４－Ａ地点地形・トレンチ配置図



第115図　４－Ａ地点第１トレンチ北壁土層断面図

第２層（Ｂ）　礫を混えた褐色砂質土層。

第３層（Ｃ）　粘土質の薄い褐色粘土層で結晶片岩，石英等の礫を混える鶴崎層，その他の移動堆積した層。うちC_1は小礫の少ない部分，C_2は小礫の多い部分，C_3はC_1と似ているが褐鉄鉱を含み黒色を帯びている。C_4は礫のない粘土質層でC_1より固い。

第４層（Ｄ）　鶴崎層の風化して堆積した層。うちD_1は風化した黄褐色の砂層であるが一見粘土のように見える。D_2は黄褐色の堅緻な細礫層。D_3は黄褐色の軟らかい細礫層。D_4は黄褐色粘土層で，風化したシルトである。

第５層（Ｅ）　鶴崎層でうちE_1は風化した結晶片岩，石英の中形亜角礫からなる黄褐色の礫層。E_2は灰色のシルト層で黄褐色の汚斑あり図のようにＡ，Ｂ，Ｃ，Ｄ，Ｅの５層がかなり複雑に重なった形で存していたことが知られた。地質班によればＥ層は鶴崎層やそれ以降の堆積諸層が移動・混淆したものの再堆積であるとみられている。

４．遺物・遺構の出土状況

出土した石器の数は少なかった。打器（No.252：第115図中斜刃割器）は１－３区のＢ層下部から発見された。

さらに削器（No.250）石核（No.253）および剝片若干が第２トレンチ３区の攪乱層中から出土した。同区では，土師器を伴う竪穴（方形に近い隅丸様式）の北半部がＣ層にくい込んで営まれているのが発見された。発掘地を南に拡張してみたところ竪穴の南半部はブルドーザーによって既に破壊されていることが判明した。

５．石　　器

４－Ａ地点より出土した遺物37点のうち縄文時代のものとして扱ったもの６点等を除く25点が岩

宿時代のものと認められる(第5表)。その内訳は打・割器／石核2点，削器1点，ＵＦ5点，剝片類2点，石核3点，その他12点である。その他とは礫器の素材になるような大きめの円礫の破片3点，石核の素材になりうるような石材である石核の塊状の破片と考えられるもの4点，剝片ではあるが性格が不確定なもの5点に分類できる。今回はその他についての記載はしないこととする。

第5表　第4地区Ａ地点出土石器一覧表

遺物番号	類　別	出土層	発掘区	レベル(cm)	石材	挿図No.
ⅣA－1	A　PB	B層下部	1－3	——	流	252
4	A　UF	表土	1－13	－15	流	257
8	A　UF	——	1	——	流	256
9	B　——	——	1	——	流	258
12	A　UF	——	1	——	流	260
15	D　——	攪乱層	2－3	－50	流	253
16	A　PB	——	2－3	——	流	250
23	D　——	——	2	——	流	254
26	D　——	表採	——	——	流	255
27	B　——	表採	——	——	流	259
29	A　UF	表採	——	——	流	261
32	A　PB	表採	——	——	流	251
34	A　UF	——	——	——	流	262

A)打・割器／石核(第116図)

計2点。No.251はやや小さめで厚めの礫片を素材とした割器である。背面左側は節理によって欠損している。刃部は表裏両面から交互に剝離されている。No.252は中型で厚手の円礫を素材として上部片面だけに斜めに深く刃を作りだしている。打器と考えておく。刃部は山形を呈す。器面には全体に亘って著しい風化が認められる。

B)削　　器(第116図)

No.250はだ円形で扁平な流紋岩製の礫を素材とし，節理に従って片面の一部を縦に削ぎ，そして出来た剝離面の一縁辺に刃部を作りだした礫器状の削器である。裏面には原礫面がそのまま取り残されている。

C)ＵＦ・剝片(第117図)

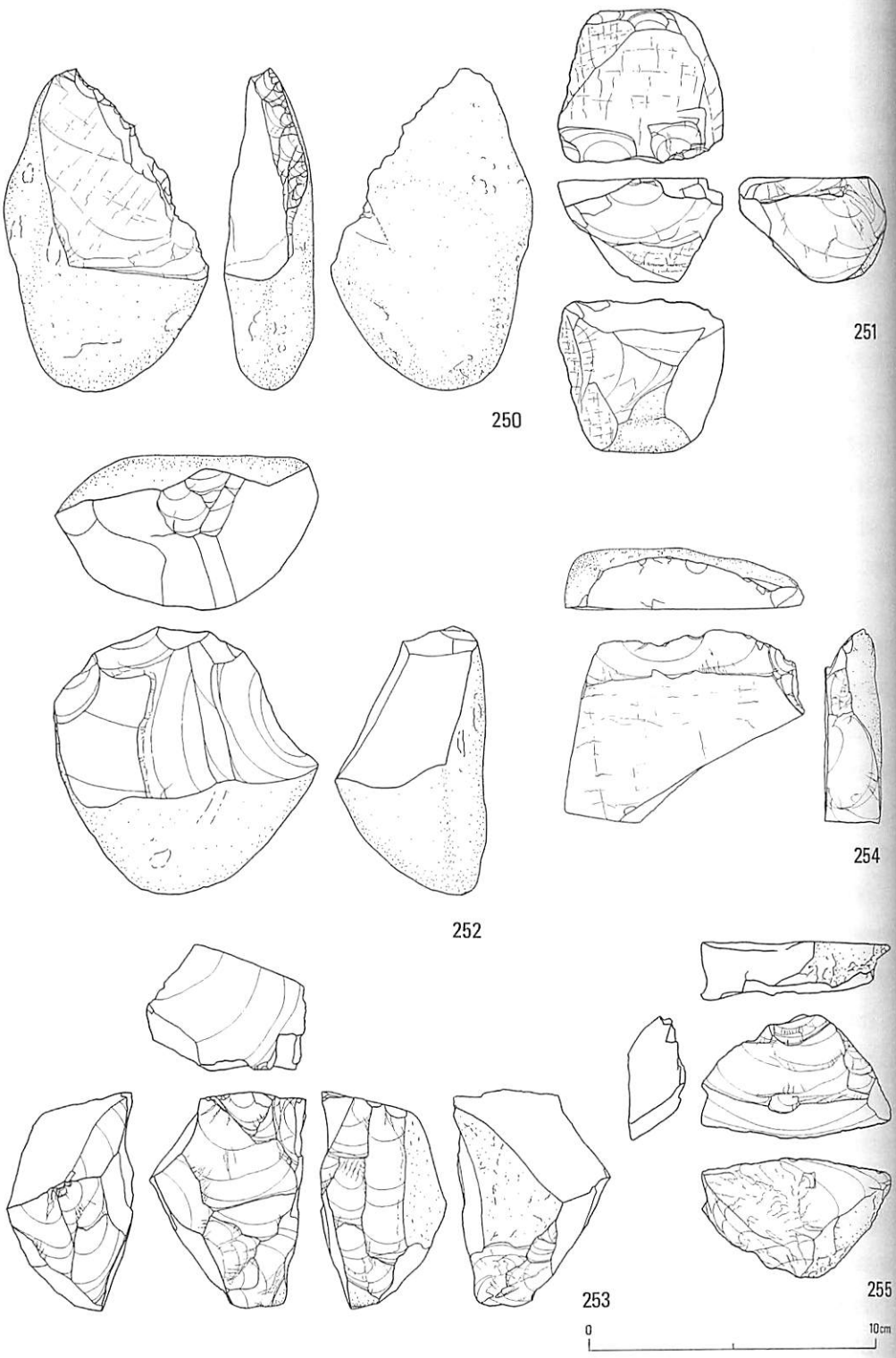
計7点。剝片は幅広く厚い打面を留める横長ないし幅広の剝片で，大きさは大小さまざまである。No.256を除いて使用痕をどこかに留めている。

D)石核類(第116図)

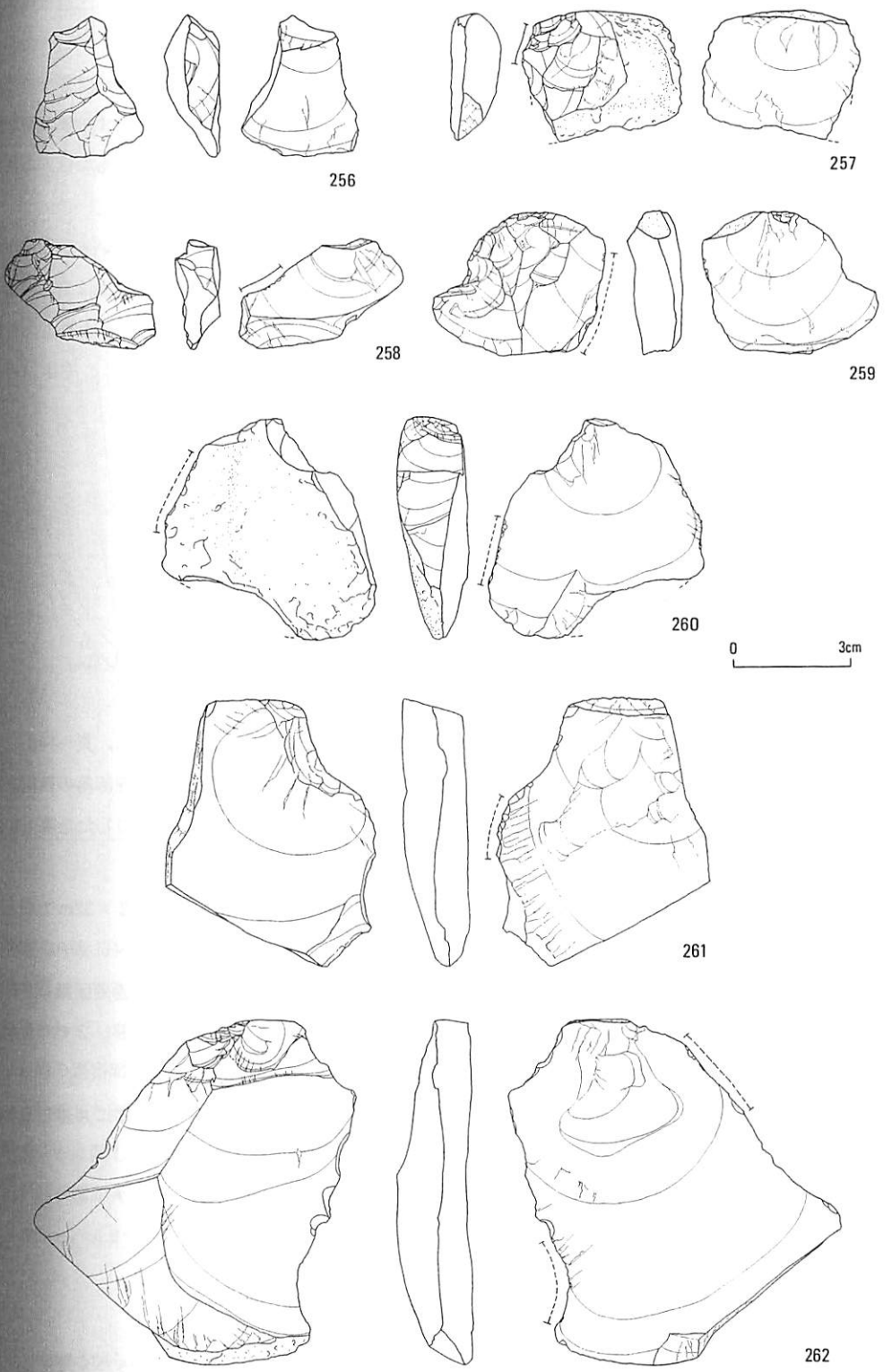
計3点。縦長剝片石核(No.253)と横長剝片を取る剝片素材の石核(No.254・255)に分類される。No.253は石刃状の縦長剝片を連続的に剝離した単剝離打面石核である。正面は細長い台形状を呈しており，下方が細くなっている。右側面に平らな自然面を残す。側面観は正三角形に近い形状を成しており，全体的には角錐に近い形をしている。正背両面で剝片剝離作業が行われている。打面は裏面方向にかなり傾いている。

No.254は上面(打面)および左側面は自然面，下面は節理面で成っている石核である。背面側は左3/4ほどななめに剝離されている。正面はネガティブバルブがはっきりと残っており，正面からみると上縁部は弧を描いている。

No.255は 正面観が半円状を呈する剝片素材の石核である。右端は折れている。側面観は正面(作業面)と背面がほぼ平行で厚さがほぼ一定の板状を呈している。打面右側に自然面を残す。素材は



第116図　４－Ａ地点石器実測図　1）



第117図　4－A地点石器実測図　2)

円礫で，それを板状にとって利用している。底面はポジ面である。正面からみると，上縁部は弧を描いている。

４－Ａ地点では石刃を剥離する技法と横長剥片を剥離する技法との２種類の石核に分類できる。また，それらの石核に対応する剥片としては石刃状の縦長剥片と瀬戸内技法に共通する要素をもった横長剥片が挙げられる。しかし出土遺物中の縦長剥片はどれも不定形で石刃状のものはみられない。

先にも述べたように横長剥片の剥離技法は，瀬戸内技法と共通要素を多くもっている。円礫から扁平もしくはカマボコ状の厚い剥片をとり，それを利用して石核の素材とする。打面は自然のままか，一部にだけ剥離を加えているにすぎない。瀬戸内技法の範疇で捉えておきたい。ただし，このような石核に対応する剥片は検出されてない。（山　口）

註

1）『丹生３次概報』(昭和40年)。

第14節　第４地区Ｂ地点

１．発掘の経過

４－Ｂ地点は，第３次発掘調査(昭和39年10月4日～22日)において坂詰班が調査した[1)]。

２．位置・地形・トレンチ

第４地区は，丹川台地の南部に位置する地区で，最西部が台地の最高標高をなし，東へ向かって三つの舌状段丘が伸びている。Ｂ地点は，字池久保の北部と字辻山に所在し延命寺部落の西南方数100ｍほどに位置している。標高約50～70ｍで，緩やかに傾斜しつつ東北に張り出した丘陵上にある(第118図)。発掘地は，この丘陵の中ほどにある蜜柑畑で，標高は61ｍである。

発掘はＡ～Ｃの３本のトレンチを設けて行われた。Ａトレンチは，東西方向に２×32ｍで東より２ｍ毎に１～16区とした。さらに13区より南へＡトレンチに直交する２×８ｍのトレンチを設け，北より13_1～13_4に区切った。その後，西へ２×４ｍ拡張し，東より２ｍ毎に14_4，15_5と地区割りを行った。形状はＪ字状となる。Ｂトレンチは２×４ｍ，Ｃトレンチは２×２ｍの試掘トレンチである。

３．土　　層

遺物が出土したＡトレンチの土層を見ておく。若干の差はあるが，土層は，全体に共通し４層に分けられる(第119図)。

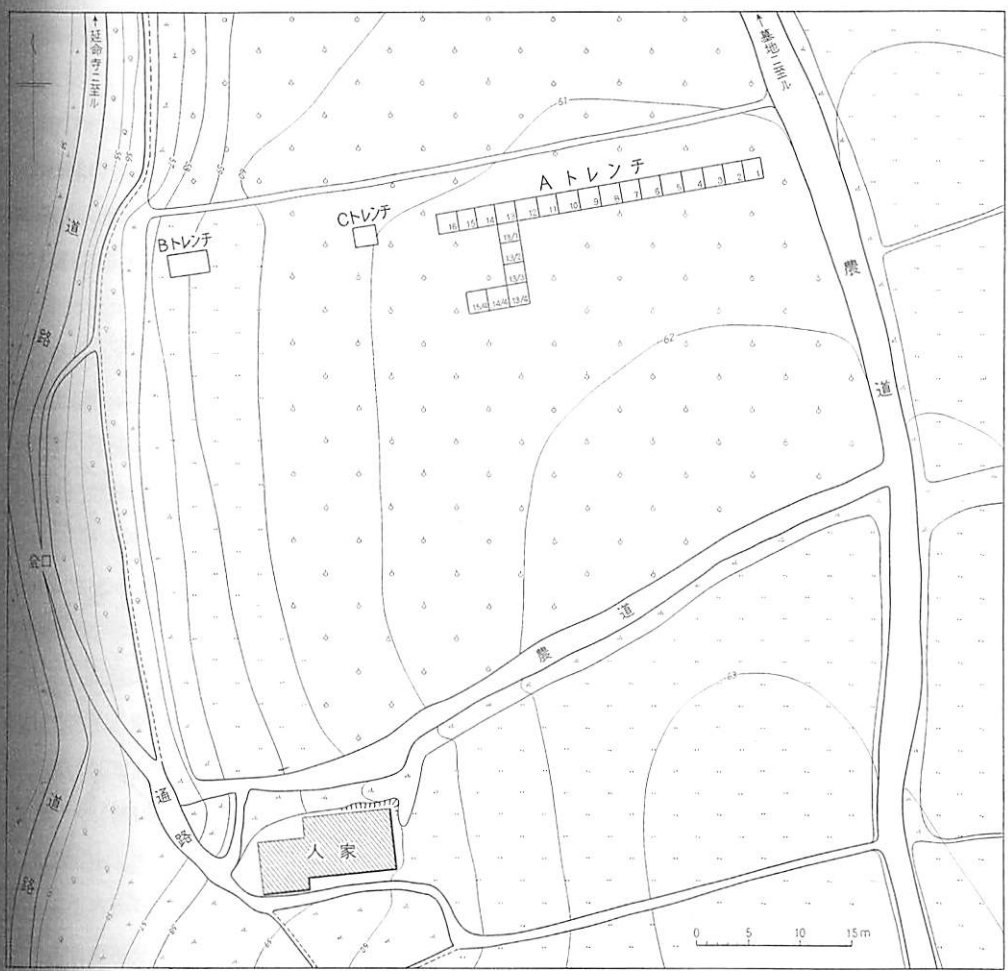
第１層　表土。10㎝。

第２層　赤褐色土層。黄色味を帯び比較的上部は軟らかい。約20㎝。

第３層　黄褐色粘質土。渇鉄鉱の沈着あり。

第４層　黄色粘土層。

なお，部分的に深掘りを行い第４層以下を確認したが粘土層が続き，遺物はまったく発見できなかった。

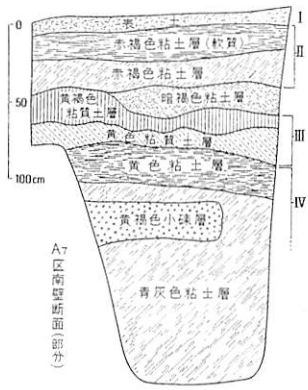


第118図　4－B地点地形・トレンチ配置図

4．遺物の出土状況

遺物は，Aトレンチからに限定されており，包含層は第1～2層で両層とも岩宿時代の石器，土器片などが混在し，層位的秩序は認められず，岩宿文化層はまったく確認できなかった。また第3～6層の岩宿時代文化層の有無を再確認するため，B・Cトレンチを試掘したが目的は達せられなかった。

平面分布に関しては，出土地点はおさえられていないが，石核・ナイフ形石器がA9区で出土した。比較的近い位置で発見されている事から，A9～10付近に分布の中心地があったとも考えられる。



第119図　4－B地点
Aトレンチ土層断面図

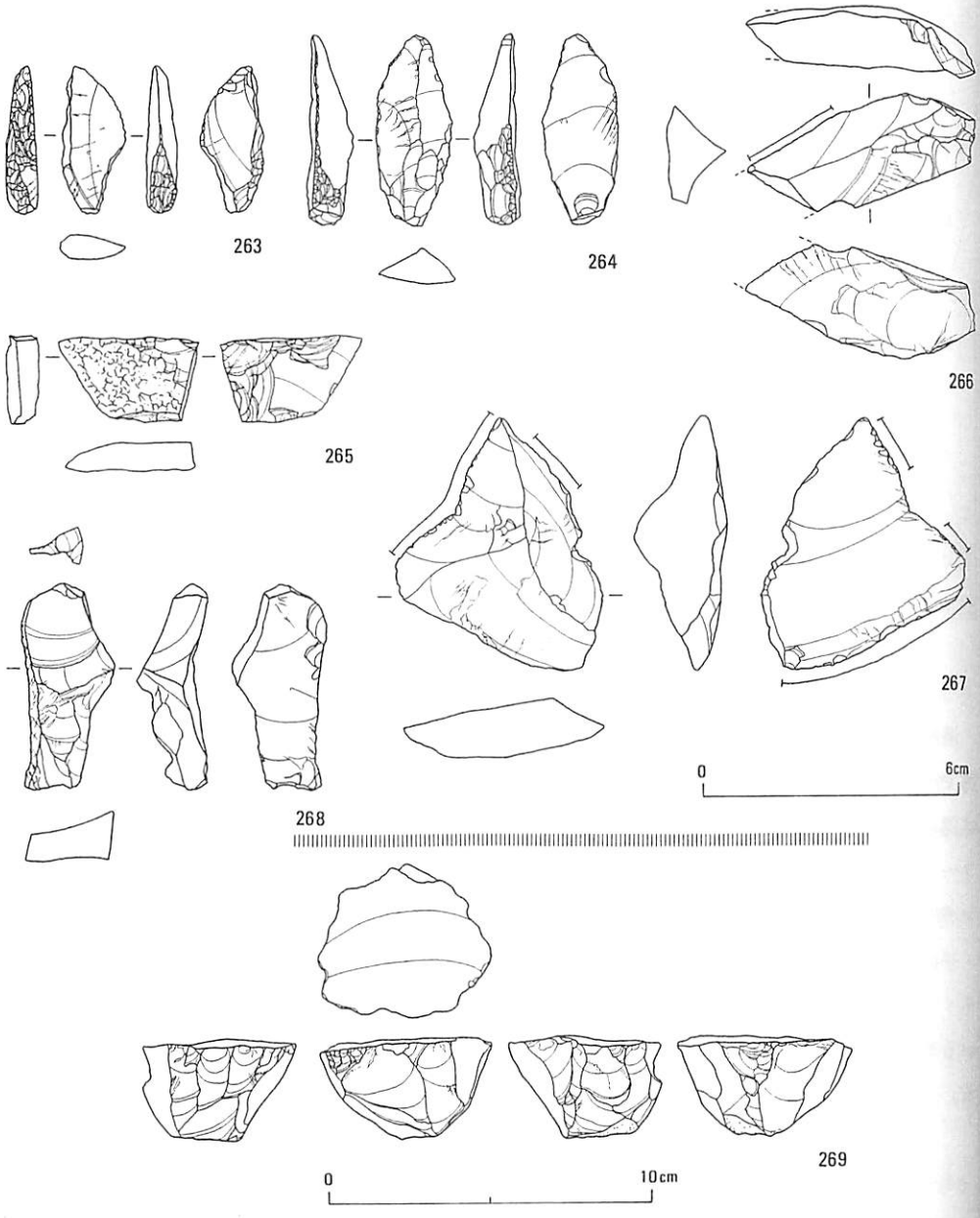
5．石　　器

4－B地点からは，総数16点の石器が出土した。その内1点は姫島産の黒耀石製で，縄文時代のものと考えられるので，ここでは報告対象にしない。岩宿時代の遺物内訳は合計15点でナイフ形石

器２点，楔形石器１点，ＵＦ３点，剥片８点，石核１点である。

Ａ）ナイフ形石器（第120図）

№263は横剥ぎの剥片を素材にしている。先端部が尖鋭で刃部が短く外湾しており，切り出し状を呈する二側縁加工のナイフ形石器である。刃潰しは全体的に細かく丁寧で，左側縁では背面から腹面に対して約90°の角度で行われ，その後若干逆方向から調整加工されている。打面は完全に除去されている。右側縁は，基部付近にのみ見られ，調整方向は背面，腹面から行われているが，やや背面方向からの調整割合が高い。刃部全体に連続的に使用痕が見られる。



第120図　４－Ｂ地点石器実測図

№264は，先が尖る石刃状剥片を素材にしている。剥片は厚手で三角形の打面，バルバスカーを顕著に残し，素材の形状をよく留めている。背面打面付近には長軸に平行する細長い剥離痕が見られるが，これは二次加工ではなく先行する剥離作業面と考えられる。刃潰し加工は剥片両側縁の下半分に見られ，素材の形状に沿うように細かく施されている基部加工ナイフである。使用痕は，右側縁にわずかと左側縁上半分に連続的に見ることができる。

B)楔形石器(第120図)

平面形は台形で，また縦断面形がほぼ長方形を呈する厚みが均一な剥片を利用している(№265)。背面側はほとんど自然面から成る。上端は，背面側が中央から右端にかけて稜を潰す程度の細かい階段状剥離が見られ，腹面側は中央よりやや右に細かい剥離が集中して見られる。下端は腹面側に，わずかに確認される。いずれにしても素材の形状を大きく変化させるには至っていない。また腹面側には，剥離の横幅1/3を占める左方向からの階段状の剥離が見られる。

C)ＵＦ類(第120図)

計３点出土しているが，すべて不定形剥片でその鋭い縁辺を使用したものである。№266は，横長の断面が厚く三角形の剥片で，上縁全体が薄いエッジ状を呈している。使用痕はその左半分に見られる。№267は，打面が残らず下端部がヒンジフラクチャーの剥片である。形状はほぼ等辺の三角形である。背面は三面から成り，その接点部分が最も厚く，縦断面はほぼ二等辺三角形である。使用痕は三辺ともに見られる。

D)剥片類(第120図)

８点出土している。このうち打面再生剥片１点(№268)は縦に長い剥片で，背面は剥片の半分を占める上方からの打点が残る打面形成のための剥離が見られる。礫を板状に分割しその石核素材剥片の木口の部分で連続的に縦長剥片を製作して行く石核の打面再生時に生じたと考えられる。

残る７点は横長の剥片や表皮剥片などを主とした不定形な剥片で，特別な作業過程を窺うことはできない。

E)石　　核(第120図)

下端にわずかながら自然面を残している所から，円礫を分割し素材にしていると考えられる(№269)。打面は礫分割面をそのまま使用した非調整打面で，全周にわたり連続的に効率よく剥片剥離作業を行っている。最終的な形状は寸づまりの円錐形を呈す。この石核から得られた剥片は小型のやや幅広の縦長剥片であったと考えられる。

以上の資料から４－Ｂ地点においては２種類の剥片剥離技法の存在が明らかである。１つは，打面再生剥片から予測される，礫を分割し板状の素材の木口を作業面にして剥離製作する技法である。他方は，円礫を分割し，分割面を打面にして周辺において剥離作業を行うものである。また，縦長剥片素材のナイフ形石器は，先述の前者の石核から作られた剥片を素材にしていると考えられる。

(田鶴谷)

註

1) 『丹生３次概報』(昭和40年)。

第15節　第４地区Ｄ地点

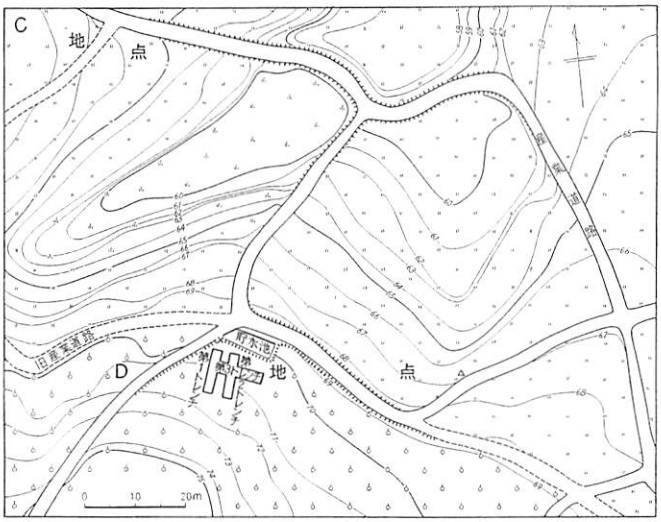
１．発掘の経過

４－Ｄ地点は昭和39年12月，４－Ｃ地点内に属する道路脇の崖面において中村俊一氏が鰈形握槌を発見した事に端を発し，第４次発掘調査(昭和40年10月13日～11月２日)で，江坂班が担当し調査が行われた。[1)]

２．位置・地形・トレンチ

第４地区は，大字丹川，字池久保・辻山の地域に所在する。Ｄ地点は１で記述のとおり，鰈形握槌を発見した場所の付近を選び，設定した。調査地点は，舌状段丘の南側で，一段高い標高71mの位置にある。

調査は南北方向に２×９ｍのトレンチを２本設け，西から第１，第２トレンチとした。地区割りは，それぞれ北より２ｍごとにａ～ｅ区と区切った。なおｅ区は１ｍである。さらに，第１，第２トレンチに直交する２×９ｍの第３トレンチを設け，西側より２ｍ毎にａ～ｅ区に区切った。ただし３ｂ区は，第２トレンチと重複するため存在せず３ｅ区は，１ｍである(第121図)。



第121図　４－Ｄ地点地形・トレンチ配置図

３．土　　層

各トレンチとも層位はほぼ共通で４層に分けることができる(第122図)。

第１層　黒褐色の表土で，ブルドーザーによる攪乱層。厚さは10cm～60cm。

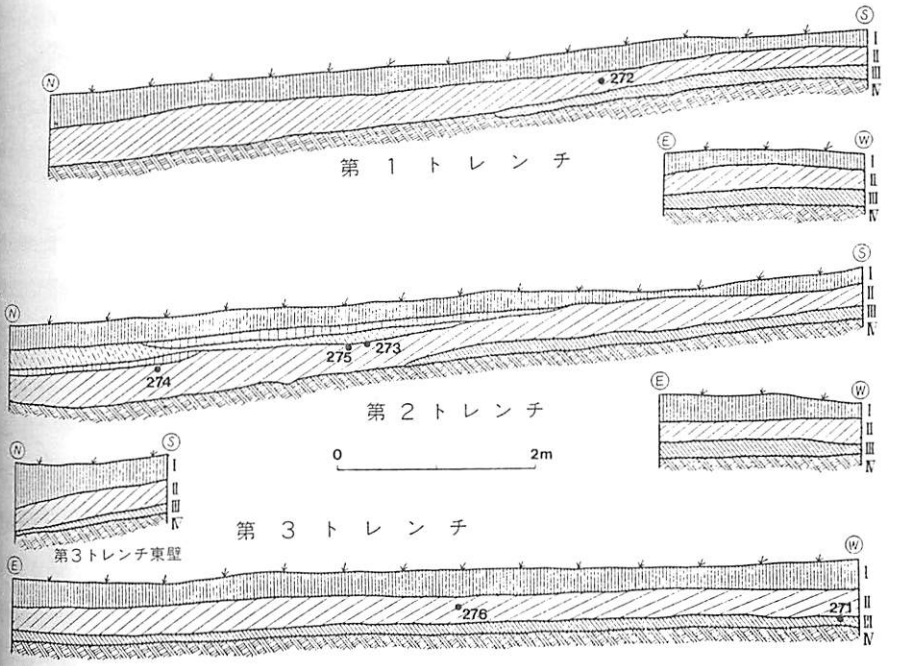
第２層　黄褐色ローム層で，相当堅く粘質性のある層で，石英の細礫を含む沖積ロームである。

第３層　赤味を帯びた褐色ローム層で，石英の細粒を僅かに含み，鉄分，岩石の腐蝕による黒色，赤色の斑点が見られる。なお本層は，トレンチ南側のみに見られ，第４層の上面が風化したものと考えられる。

第４層　卵黄色粘土層を主体にし，赤褐色粘土，灰白色粘土，青灰色粘土が混り，礫や石英片を含む堅緻な層。丹生泥層との見解もある。

４．遺物の出土状況

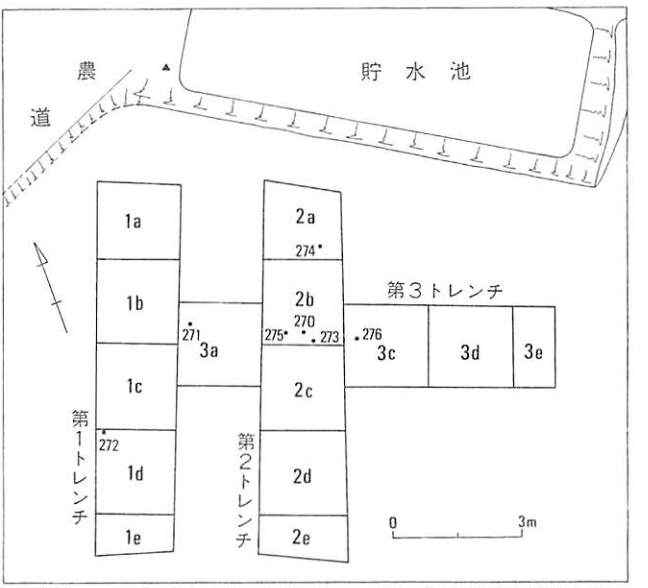
石器は，大部分が第２層の沖積ローム層から出土しており，ここからは，磨滅著しい土器片も共に出土している。第３層からは，１点出土した。第４層は，発掘契機となった鰈形握槌の出土層で



第122図　４―Ｄ地点第１・２・３トレンチ土層断面図

あるが，調査において遺物は確認されなかった。なお本地点について，「なだらかな斜面上に位置するため，第２層出土の石器は流動した可能性が大きく，かなりの攪乱が予想される。第３層が上述の通り風化面ならば，第３層出土の石器は，丹生泥層中と考えられ，年代を確定する際の１つの指針とも考慮できる。」と原報告者は記している。

平面的な分布については，出土位置を正確に把握しており，現状を見る限り，２ｂ区付近に集中の跡が見られるが，大部分の石器が，かなり後世の堆積中に含まれているため，詳細には触れない(第123図)。



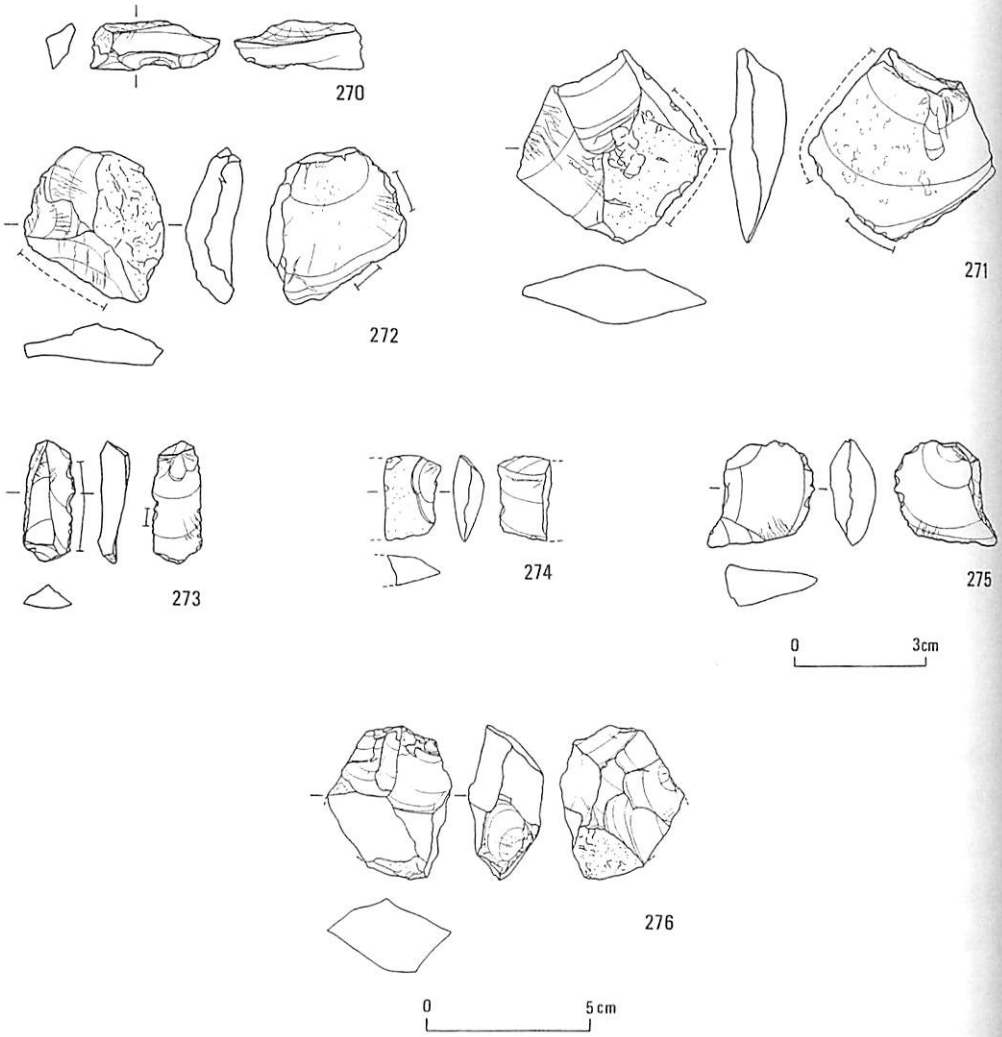
第123図　４－Ｄ地点石器平面分布図，黒三角は鰈形握槌出土地。

５．石　　器

４－Ｄ地点からは，総数８点の石器が出土した。その内７点が岩宿時代の遺物と考えられる。その内訳は，ＲＦ１点，ＵＦ３点，剥片２点，石核１点である。

A)加工痕ある剥片(第124図)

上部が欠損した不定形な小片である(№270)。下縁部中央に腹面から背面方向への二次加工状の



第124図　４－Ｄ地点石器実測図

剥離痕が見られるため，一応ＲＦとして扱った。

Ｂ)使用痕ある剥片(第124図)

３点出土している。長幅比がほぼ等しい貝殻状剥片２点と縦長剥片１点である。１例目は長幅比のほぼ等しい剥片で，打面が大きく打瘤が突出して厚みがある。背面は求心的な剥離から成り，右側下面には自然面が残っている。使用痕は，右側縁全体に見られる(No.271)。

２例目も１例目と同じ特徴を持ち，打面が大きく厚手幅広の剥片である。また背面も求心的な剥離と自然面から成る。使用痕は，左側縁と下縁に見られる(No.272)。残る１点は，小型の縦長剥片である(No.273)。左側は，節理により欠損している。やや厚めで三角形の打面を持つ。右側縁全体に連続的な使用痕が見られる。

Ｃ)剥片類(第124図)

２点出土している。１例目は小型の表皮剥片(No.274)。２例目は広くて厚い打面を留めた幅広の

剝片である(No.275)。

D)石　核(第124図)

背面下部に残る自然面の性状から円礫を分割し，素材にしたと考えられる(No.276)。残核の平面形は五角形で，横断面は菱形である。さらに詳しく観察すると，正面側は上方向からの幾枚かの剝離面と右下に素材分割面を留め，左下部には節理による新しい剝落が見られる。また背面は，帯状に古い剝離面が残っており，それを境にして左側で3枚と右側で2枚の剝離痕が見られる。これら剝離痕の正面側との前後関係は，左側が正面側より古く，右側が正面側より新しい。なお一層細かい所を見て行くと，背面上部にある剝離面には，正面側と接する場所に非常に細かい剝離痕が見られるが，これは正面側を剝離するための打面調整痕と考えられる。

次に剝離作業を見て行くと，まず背面左側において3枚の剝離を連続的に行い，その後これを打面にして円礫分割面，すなわち正面上方向から剝離作業を行う。次にまた正面を打面にして背面右側で2枚の剝片を取るという作業手順が窺える。つまりこの石核は，作業面を打面に転用しながら90°に作業を繰り返す剝片剝離技法であることがわかる。

一方剝片(No.271・272・275)に注目すると，その主要なものはこの石核と同一の技法によって作られていると言える。　(田鶴谷)

註

1) a)『丹生4次概報』(昭和41年)；b)『丹生綜括編』(昭和43年)。

第16節　第7地区A地点

1．発掘の経過

7－A地点は第一次調査(昭和37年10月5日～31日)，第二次調査(昭和38年10月8日～31日)の二度にわたり，小林班が担当し発掘調査を行っている[1)]。当地点は，西側に隣接した道路で，当時ムスティエ文化風の尖頭器ではないかと考えられていた石器などが，中村俊一氏によって採集されていたこと，またこの地が畑地開墾のためのブルドーザーによる削平を免れていたことなどによって，調査地として選定された。

2．位置・地形・トレンチ

第7地区は大字丹川，字池久保を中心とする地域に所在し，南東にのびる丘陵上にある。A地点はその中でも標高50m前後の緩斜面上に位置している。

第一次調査においては，まず北西より南東に8×2mのトレンチが設けられ，北西より2mごとに1～4区に区切られ調査された。さらに，このトレンチの両側に同様のトレンチが設けられ，南西側は5～8区，北東側は9～12区に区切られている。ただし5区のみは道にかかるため，一辺が1mとなっている。第二次調査においては9区～12区に平行して13～15区に区切られる7×2mのトレンチと13区に北接して東西に16～20区に区切られるトレンチが設けられ，調査が行われた。計5本のトレンチが設けられ，調査面積は約80m²になっている。

3．土　層

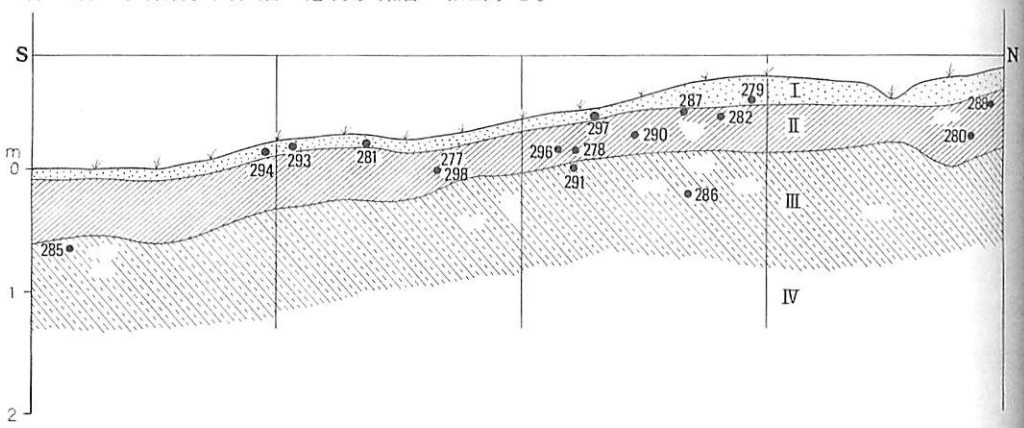
7－A地点の土層は基本的に以下の4層に分けられる(第125図)[2)]。

第1層　黒褐色表土。若干の円礫を含む。厚さ15cmほど。

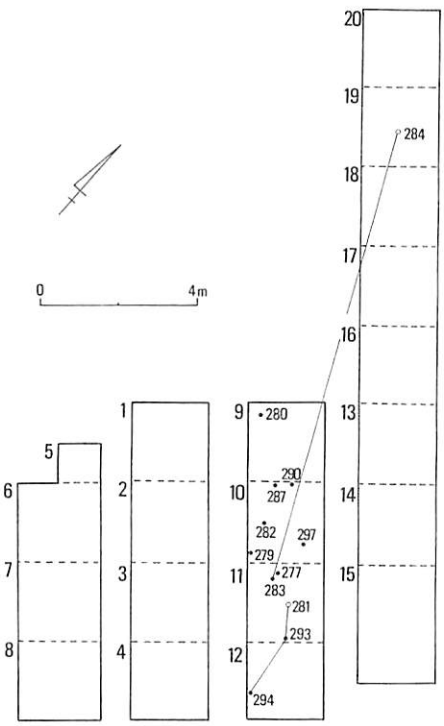
第2層　茶褐色土層。厚さ35～45cmほどで，南西に行くほど漸増。

第3層　黄褐色礫層。大型円礫を主体とし，野間砂礫層にあたる。なお19・20区では南東隅にのみ見られる。

第4層　砂礫層。大在層の志村砂礫層に相当する。



第125図　7－A地点1～4区西南壁土層断面図。図中の数字は挿図No.



第126図　7－A地点石器平面分布図
発掘区内の数字は挿図No.。白丸は正確な出土位置不明。

4．遺物の出土状況

石器類の出土は上述の第3層までに限られており，それも第3層上面より60cmほどの深度までに限られている。しかし層位的な検討は記録の事情などにより不可能である。平面的な分布については，平面図に出土位置を落とすことのできるものが検討の対象とする20点のうち半数の10点と限られるが，全てのものについてどのトレンチからの出土かは判明しているので，一応の状況は把握できる(第126図)。層位的な所見等を欠くため，分布の詳細な検討はできないが，可能なかぎり指摘を行っておこう。各区の出土点数を見ていくと，10区から5点，11区から4点の出土が見られ，ここを中心として一つのブロックがあることが指摘できる。また19区に3点，6区に3点の出土があり，10・11区を中心とするものから数m離れた区にも小さなまとまりが認められることがわかる。接合，同一個体関係から見ていくと，全体を一つのブロックと考えることもできるが，19区，6区の一群を別のブロックとも

捉え得ることを指摘しておこう。

5．石　　器

7－A地点からは総数40点の石器が出土しており，その内21点が岩宿時代のものと考えられる。その内訳は削器1点，UF5点，剥片類9点，石核6点である(第6表)[3]。石材は流紋岩が主体で，一部が安山岩，チャートである。本項においては出土石器の概略について記し，次項においてそこに見られる剥片剥離技法について検討することにする。

第6表　第7地区A地点出土石器一覧表

遺物番号	類　別	発掘区	レベル(cm)	石材	挿図No.
ⅦA－1	B ——	1	－27	珪	288
2	D ——	2	－32	流	296
4	B ——	4	－65	流	285
6	B ——	6	－90	流	286
7	A　UF	6	－36	流	278
8	D ——	6	－49	流	291
10	A　UF	9	－50	流	280
13	D ——	10	－10	流	297
14	A　UF	10	－19	流	279
15	B ——	10	－20	流	287
16	B ——	10	－30	流	290
17	A　UF	10	－30	流	282
21	A　UF	11	－10	流	281
22	A　Sc	11	－25	流	277
23	D　母岩	11	－25	流	298
24	D ——	11	－30	流	293
25	B ——	11	－6	流	283
29	D ——	12	－5	流	294
35	B ——	19	－45	砂	——
36	B ——	19	－70	砂	289
42	B ——	19	——	流	284

※21と24は接合(個体別資料No.1)。29はそれと同一母岩。
25と42は同一母岩(個体別資料No.2)。

A)削　　器(第127図)

No.277の1点のみである。大変厚みのある縦長剥片を使用しており，断面が三角形状を呈する。下端部は欠損している。背面右側縁全体にわたり粗く大きめの二次調整をしており，鋸歯縁状の刃部を作り出している。背面左側縁，その裏面にあたる腹面の右側縁には，不連続ではあるが小さな剥離痕が認められ，使用痕と考えられる。

B)UF類(第127図)

5点出土しており，縦長，横長の剥片を利用したものの2種に大別できる。前者は4点(No.278～281)，後者が1点(No.282)である。

No.278　打面付近から末端までほぼ同じ幅を持つ縦長の剥片を利用している。打面は平坦で，背面左側縁に連続しているが，やや不規則な小さめの使用痕が見られる。先行する剥離面の剥離方向はこの剥片の主剥離面と同様で，定型的な縦長剥片を得る技法の存在が窺われる。

No.279　小型のものである。小型の縦長剥片を利用しており，打面付近は欠失する。背面下端に大きめの使用痕が見られる。

No.280　やや幅広で短い。打面は2面の剥離痕からなっており，同じ面から先行する剥離も行われている。背面右側縁の上三分の二程と，腹面左側縁の下三分の一程に連続的でやや大きめの使用痕が観察できる。

No.281　打面から末広がりの形状の縦長の剥片を利用したもので，厚手のへら状を呈している。頭部調整らしき剥離も見ることができる。打面は平坦で，下端には自然面を残す。
腹面の左側縁に連続的ではあるが，大小不揃いの使用痕が見られる。なお，これはNo.293と接合するもので，後に別個に検討する。

No.282　横長の剥片を利用しており，平面形はつぶれた三角形状である。剥片の中央は厚みを持

ち，打面は平坦である。背面は単一方向ではなく，多方向の剥離からなっている。
下縁部に不連続な，細かい使用痕が見られる。

Ｃ）剥片類（第128図）

計９点出土している。ほとんどが不定形なものである（No.283～290）。

No.283～285　No.283・284は，同一個体と思われるので一括して記述する。ともに長さ３～４cmをはかり，やや厚みを持つ小型の縦長の剥片で，凹凸の多い剥離面の状況も酷似する。側面は多数の剥離からなっている。No.285は，やや縦長を呈するもので，No.283・284よりもやや大きめである。打面付近を欠失している。色調が若干異なるが剥離面の性状は類似し，これらと一まとめにしておきたい。

No.286　流紋岩質のもので，打面部分が幅が大きく，そこからやや先細りに伸びる形状を呈する。打面は平坦で，先行する剥離面は水平方向にはいる。

No.287　やや縦長で中央部が厚みを持ち，横断面が山形を呈する。先行する剥離面は大半が上方からのもので，その剥離の中で形成された面を打面としても利用しており，立方体状の石核が想定でき，打面転位を頻繁に行うことが考えられる。

No.288　唯一石材がチャート質である。節理に沿って弾けたような裂片状の剥片である。

No.289　全体的に厚みを持ち，ごろりとした剥片である。

No.290　縦長の，厚みを持つ表皮剥片。水平状に先行する剥離が見られるが，その他は礫面を残している。

Ｄ）石　　核（第129・130図）

６点ある（No.291～298）。

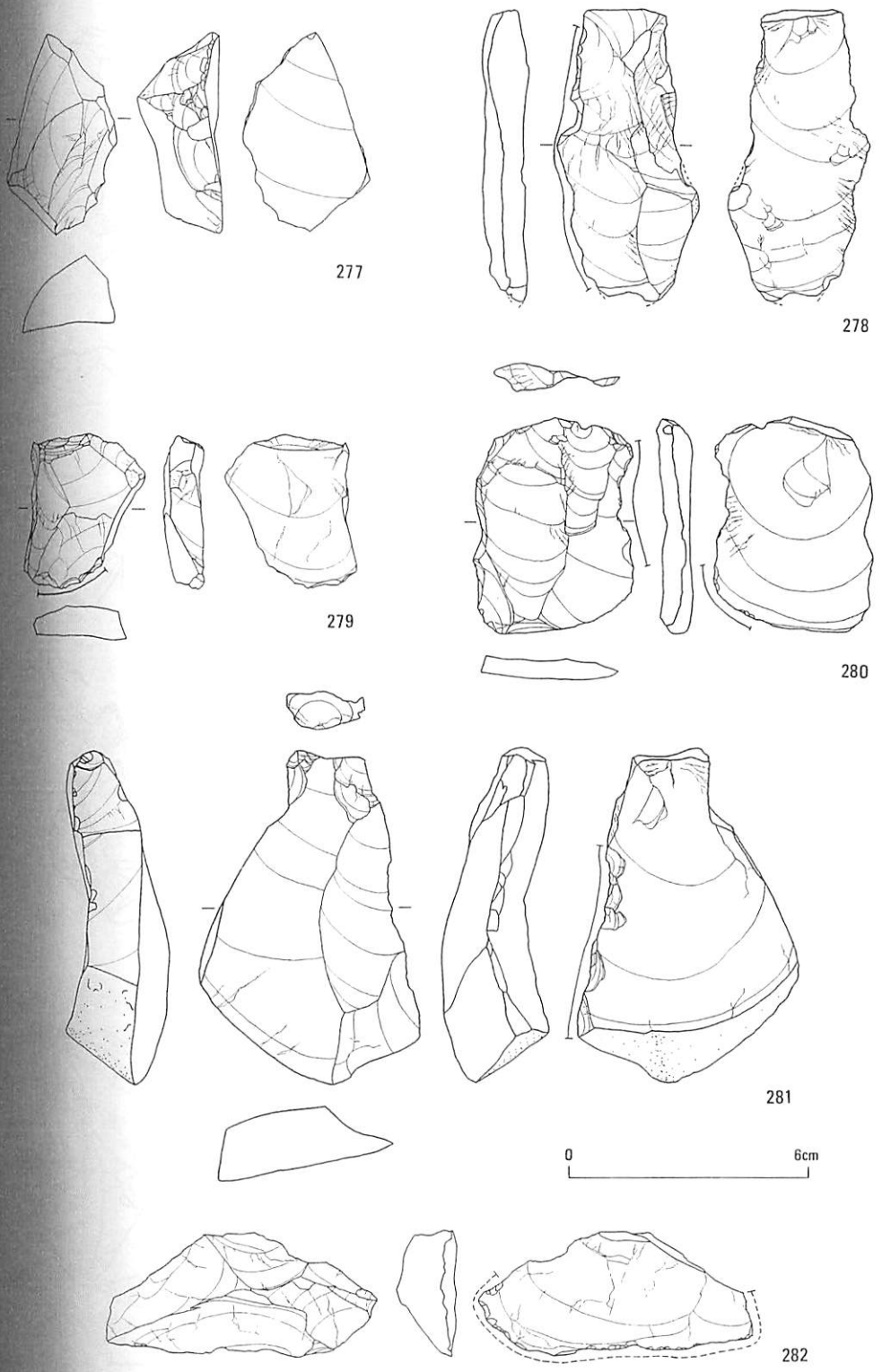
No.291　青灰色を呈する緻密な流紋岩を利用したもので剥片素材の石核である。石核の表裏，上下の全ての側縁において作業が行われており，やや横長の，幅３cm前後の貝殻状の剥片を得ていたものと思われる。打面調整等の調整技術は見いだしがたく，ほとんどが作業のための剥離であると考えられる。

No.293　礫を分割したものを石核として利用している。正面から見て右側面にポジティヴな面，左側面にはネガティヴな剥離面を持つ。上端には平坦な打面が残され，作業面は先程の剥離面に挟まれた木口面を縦に切るように設定されており，定型的な縦長剥片を得ていた。

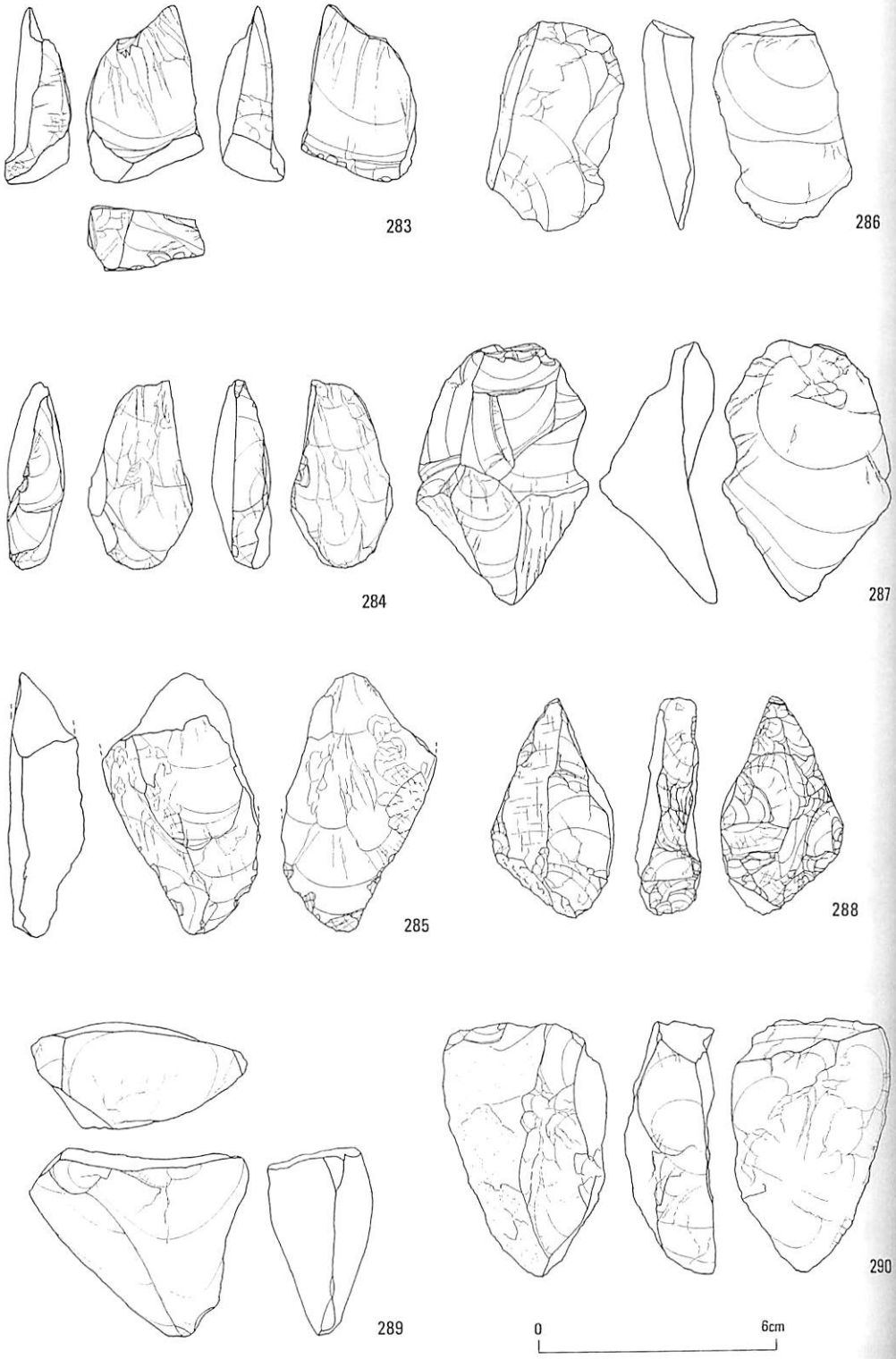
No.294　No.293と同一母岩と考えられるが，これも礫を分割したものを石核として利用しており，作業面から見て右側面には自然面を残している。打面は平坦で，No.293と同様に木口面に作業面が設定されている。２面の作業面が残るが，ある程度定型的な縦長の剥片が取られていた。

No.296　礫を半割し，その分割面を打面として作業を行っている。表皮を含む幅広の剥片を得ていたようである。現在の状態では２面の作業面が観察できるが，それほど多くの作業がされたとは思えない。

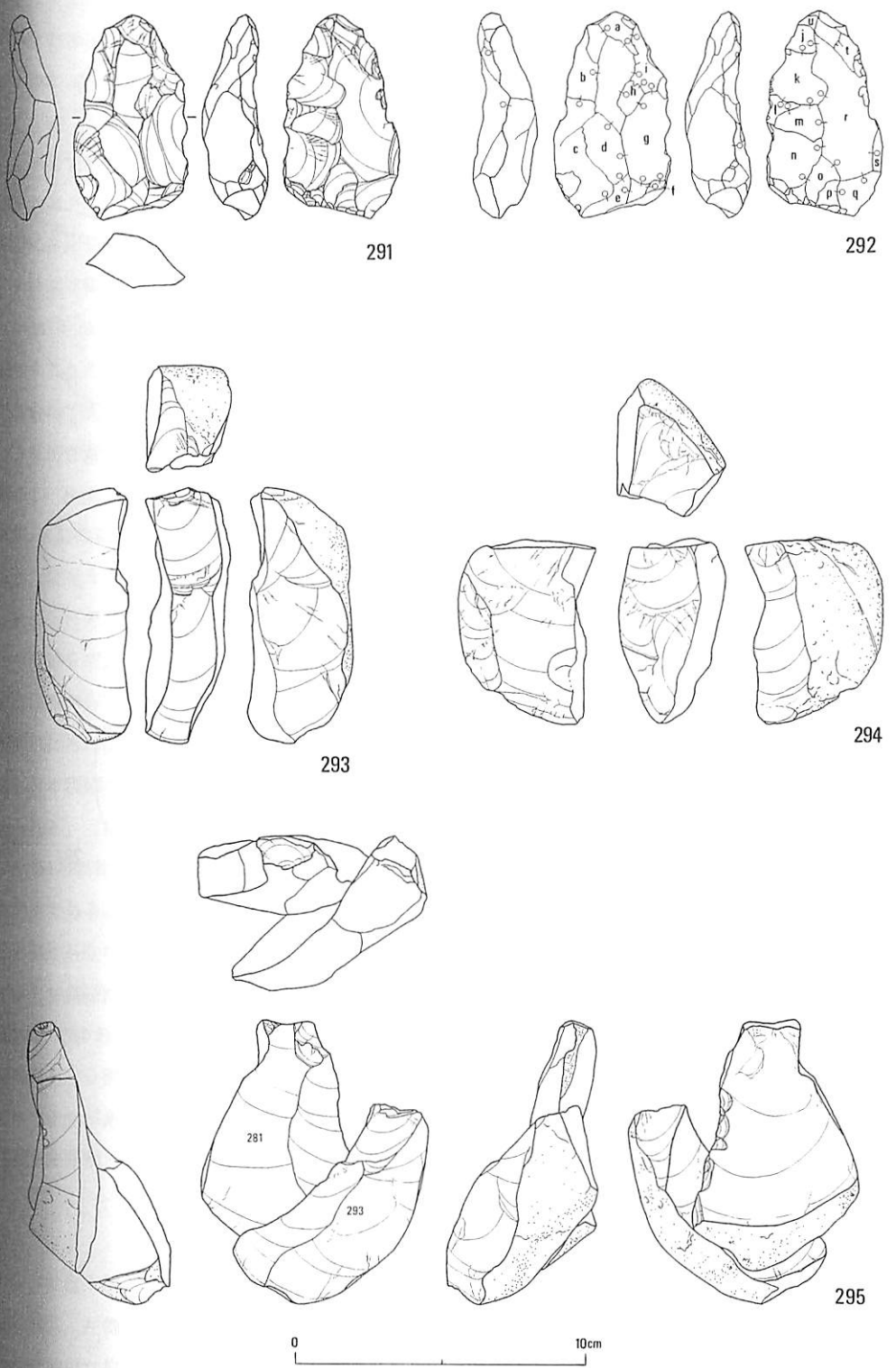
No.297　礫面を残したまま石核として利用する。礫の形状を大きく変えないような薄手の剥離が多く見られ，礫面を取り込んだ薄めの剥片が取られたと思われる。幾度か打面を転位し，同様の剥



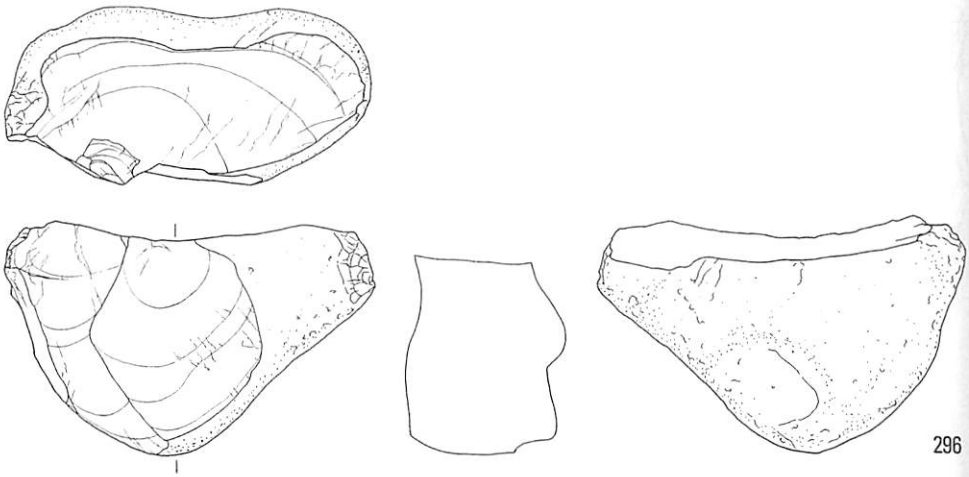
第127図　7－A地点石器実測図　1)

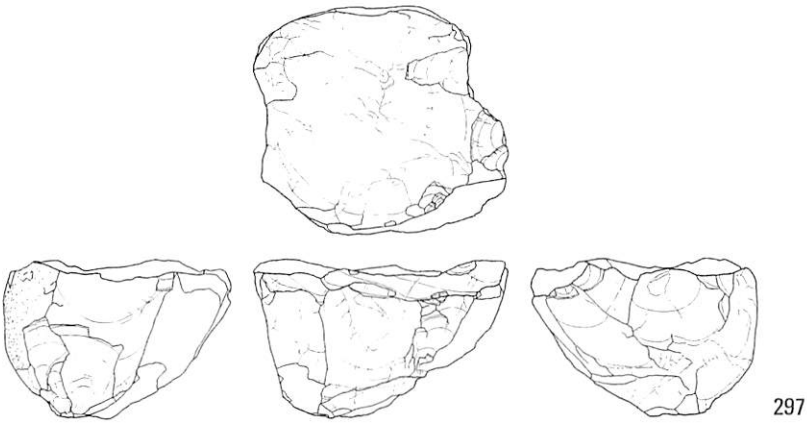


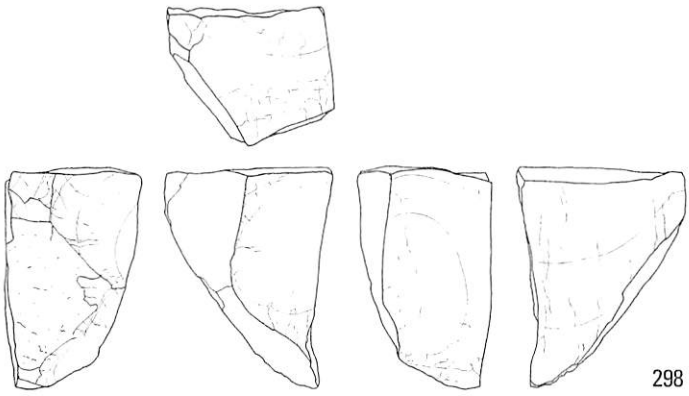
第128図　７－Ａ地点石器実測図　2)

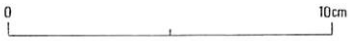


第129図　7－A地点石器実測図　3)









第130図　７－Ａ地点石器実測図　4）

離を行ったようである。その後に礫を分割するかのごとく大きく剥離をしており，全体の形状を大きく変化させている。

No.298　直方体状を呈する母岩状のものである。

6．剥片剥離技法の検討

これまでの各個別の石器の記述からも７－Ａ地点における剥片剥離技法についてはそのあらましが窺えよう。本項では接合資料・石核・剥片の検討から７－Ａ地点に見られる技法について考え，４種の技法を類型化した。以下それらについて実例に即して見ていこう。

＜技法ａ類＞(No.295)

No.281＋293，294の一群から考えられるものである。礫を分割し，縦長の剥片を得て，それを石核とするもの。その得られた素材剥片の主に木口部分を作業面として利用し，定型的な縦長剥片を得るものである。なおこれらの技法から作出された目的剥片は見いだされていない。

まず接合資料であるNo.281＋293の側から検討しよう。接合関係図に見られるように２片の石器が接合し，No.281の側が剥片，No.293の側が石核である。まず２個体と考えることができる。しかしNo.293の石核の正面からみて右側面にはポジティヴな面が残され，更にもう一個体あったことが推測され，礫を３分割したものと考えることができる。

次にそれぞれの石器の検討をする。No.293の石核から見ていこう。No.293は３分割されたものの真ん中の部分である。作業面から見て右側面にはポジティヴな面，左側面にはネガティヴな面が見られ，裏面から下端にかけては礫面が残される。上端部には平坦な打面が設けられ，両側の剥離面に挟まれた木口面を作業面として利用している。下端の礫面のカーヴ等から窺うと，この石核は現在見られる状態の２倍前後の大きさを持っていたと推測でき，前後方向にかなり作業が進行したと考えられる。＜技法ａ類＞としたものの中でも作業面の設定など典型的な例といえる。

No.281の剥片の側を見よう。これは３分割されたもののうち，一方の端にあたるものから取られた剥片である。背面に先行する剥離面が２面見られ，この剥片に類似する礫面を一部持つような縦長の剥片が取られたようであり，ａ類の中にこのような剥片を得る技術が見られるとも捉えられる。しかし左側縁に上方からの剥離が見られ，先行する剥離面との関係はわからないものの，先に見たNo.293の石核のように木口面を利用した作業面と考えることもできる。その場合，先行する２枚の剥離面を，分割された礫を石核とするための調整の剥離と考えることもできる。一応ここでは２種類の可能性があることを指摘しておく。ここで，これまでの検討を模式的に示しておく。

①礫を三分割　→(No.293の側)②剥片の上端に打面の設定→③木口面を利用して剥離作業

→(N0.281の側)②打面の設定→③２回以上の剥片の調整剥離→④側縁での剥離(木口部分での目的剥片剥離)→⑤No.281の剥片自体の剥離→⑥残核→(残り)

ａ類には上記の接合資料の他にNo.294の石核も含まれる。No.294の石核は正面から見て右側面に礫面を残し，左側面にはポジティヴな面が見られる。礫を二分割したものの一方のものであろう。上端には平坦な打面が見られ，やはり木口面を切り取るように作業面が設定される。現在の状態で作業による剥離面が２面見られるが，平行してではなく角度を持って剥離されており，左右に打点を

振るようにして作業したと思われる。No.293での作業面の設定とやや異なるが，恐らく厚みの違いによるものであろう。

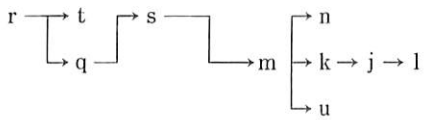
＜技法b類＞(No.292)

No.291の石核から考えられるものである。剥片を素材とし，石核の表裏，上下，全ての縁辺において作業を行ない，やや横長の貝殻状の剥片を作出するものである。本技法に関しても関連する剥片は確認していない。

本例に関しては，各剥離面に記号を振り，切り合い関係を検討し，剥離の工程を考えた。なお，便宜上，左に図示した面をA，その裏をBとして話を進める。

まずB面での剥離の順序は以下の通りである。

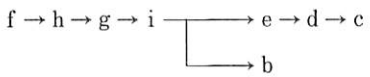
B面右側縁　　B面左側縁



B面のなかでも右の側縁から左の側縁へ剥離が進んだことが見て取れる。

次にA面での順序を見ることにする。

A面右側縁　　A面左側縁



といったようになり，B面と同様に一方の側縁(この場合は右)からもう一方の側縁に剥離が進行している。A面とB面，すなわち表と裏の関係について見てみると，cの剥離面の打点部分をr・sの剥離が取り去っていることから，A面がB面に先行して剥離されたことがわかる。なお，o・pは素材面と考えられる。まとめてみると，A面の右側縁，左側縁と進む。そしてA面左側縁の裏側にあたるB面の右側縁に移り，左側縁で終了するものといえる。

次にこれらの剥離の性格について。これらの主な剥離は，大きさは割にまちまちであるが，縁辺によって剥離される剥片の大きさなどに顕著な差があるわけではなく，また剥離の順序がこれまでの検討で明らかなように，各側縁を順繰りに行っていくものであるからして，一つの縁辺を打面調整剥離，剥離作業の組み合わせと考えることはあまり妥当ではないだろう。剥離の順序の検討から，交互剥離という考えも退けられる。以上のことから概ねこれらの剥離を全て目的剥片の剥離のための作業と考えてよいであろう。その場合，得られる剥片はやや横長の幅2～3cm前後の剥片である。そして打面調整，作業面調整等の調整技術は見られない。また各側縁での剥離を一まとまりの群として把握することができる。

最後に工程としてどのように考えられるかであるが，正面図中央部分に先行する平坦な剥離面が残っていることから，剥片を素材としたことが窺われる。まず得られた剥片を石核として利用できるように若干の調整の剥離を加え，先に述べたような作業に入ったのであろう。o・p等の剥離は石核とするための調整の剥離と考えることもできる。以上の検討結果を模式的に示しておく。

①素材剥片を得る→②石核とするための調整→③目的となる剥片剥離作業の開始（Ｂ面右側縁）→④剥片剥離作業（Ｂ面右側縁）→⑤④の裏にあたる側縁で剥片剥離作業（Ａ面右側縁）→⑥剥片剥離作業（Ａ面左側縁）→⑦終了か

＜技法ｃ類＞

No.296の石核から考えられるもの。礫を分割して形成された面を打面として，表皮を含む幅広の剥片を得るものである。No.296では２面の作業面が残り，正面から見て左から剥離が進んでいる。ともに礫面を大きく取り込む薄手の幅広の剥片である。

＜技法ｄ類＞

No.297の剥片から考えられるものである。立方体状の石核を用意し，打面を頻繁に移動しながら作業を行っていくものである。

No.297では背面はほとんどが上方からの剥離からなっており，その剥離のなかで形成された，肥厚する中央部にある面を打面としての剥離も見られる。以上のことから打面を転位することが窺え，その剥離面のなす角度から立方体状の石核を想定することができる。この剥片の場合，恐らく立方体状の石核の角の部分を取り込むようにして剥離されたものと考えられる。

以上のように技法としてａ～ｄの４種の類型を考えた。そこで４つの類型以外の技術についても，技法として成立させることはできないが，７－Ａ地点の性格を考える上で重要なものとして若干の指摘をしておこう。まず第１は剥片と石核の関係であり，No.297の石核とNo.290の剥片があげられる。No.297は礫面を除去するように剥離を行い，最後に大きく石核を分割してしまうが，No.290も礫面を背面に大きく取り込んだ表皮剥片で，両者を関係づけて考えることができよう。また，No.278・280の剥片については定型的な縦長剥片であり，一般的な石刃技法を想定することができる。

７．小　結

以上，個別の石器や技法などに関して検討を加えたが，ここでは他の技法や石器群との関連や編年的な位置付けに関して考えることにしたい。まず，技法として考えることのできるものの中でもａ・ｂ類に関して比較，検討していきたい。

＜技法ａ類＞に関しては，ひとまず定型的な縦長の剥片を得る石刃技法として捉えることができる。東九州の石刃技法に関しては柳田俊雄氏が類型化，編年を行っている[4]。７－Ａ地点の技法ａ類は礫を分割し，石核として利用するものであるが，それと関連を持つと考えられるのが氏の言う３ｂの技法の様相である。これは岩戸遺跡第３次調査において第６層上部から出土した石器群に見られる技法をもとにするもので，剥片素材の石核で，その側面を利用して縦長の剥片を作出するものである[5]。ａ類ではNo.293・294の石核が作業面の設定などもよく類似する。３ｂの様相では，その技法から作出された剥片は先細りで，ナイフ型石器に利用されるものが多いようであるが，７－Ａ地点からはそのような剥片は出土しておらず，ａ類から作出される剥片が必ずしも先細りでないようであることなど，異なる点もあるが，剥片剥離技術の類似は指摘できよう。

＜技法ｂ類＞は小型の横長の剥片を得るものである。そしてその作業面はどこか一端に限定されることなく，前・後端，裏・表のすべての側面に設定される。このような技法を含む横剥ぎの技法

については，その概念規定などが混乱しているというのが実情であるが，最近平口哲夫氏が整理を行っている[6]。ここではそれに沿う形で話を進める。平口氏は分類にあたり，作出される剝片が有底か否か，作業面が単設か否か，ということをあげている。そして第一から第三類(二，三類は更にＡ・Ｂへ細分)に分類している。ｂ類に相当すると考えられるのが第三類Ｂである。平口氏は第三類Ｂを櫃石島技法とよんでいるが，ｂ類をひとまず，櫃石島技法と考えることができる。しかし，瀬戸内地域に見られるような典型的な櫃石島技法の石核とは形態的な差異があり，製作工程上の類似を指摘するに止めなければならない。これらの他の石器に関しても検討を行いたいところであるが材料不足であり，ここでは措くことにする。

以上の比較作業から指摘できることを若干あげておこう。まず，柳田氏の３ｂの時期では，剝片剝離の技法としては，岩戸３ｂに見られるような剝片素材の石核の技法が主体となっているが，７－Ａ地点では３ｂに相当するような技法と多様な剝片剝離技術が伴っていることが指摘できる。

また７－Ａ地点の＜技法ａ類＞の位置付けに関しては，柳田氏の３ｂと同時期かあるいはこれに前後するものと考えることもできる。後者の可能性を考える場合は，３ｂに見られる技法の祖形的なものとも，その崩れたものとも捉えることができる。いずれにしろ，岩戸３ｂの技法上の地方的，時期的変異の問題を考えておく必要がある。

次に編年的な位置に関してである。まず先に検討した技法の類似等から考えることにする。柳田氏の３ｂ期は氏の言う石刃技法の見られる時期の最末期である。ａ類もその時期から大きく外れない時期と考えられる。平口氏の第三類Ｂつまり櫃石島技法についてはその技法自体の位置付けが不安定であるが，瀬戸内技法に後出する考えを採用しておくと，柳田氏の３ｂへの比定と大きな矛盾はきたさないといえる[7]。柳田氏の３ａ期に瀬戸内技法が見られることもその場合裏付けになろうか。

ところで最後に７－Ａ地点全体としてどう考えられるかであるが，出土状況の中で指摘した通り，ブロック関係は明らかでなく，可能性のある幾つかの指摘を行っておく。まず全体を一まとまりのブロックと捉えた場合から考えていこう。No.283とNo.284の同一個体関係や先程の編年的位置付けもそれに沿ったものといえるが，その場合，ａ類，つまり東九州に見られる石刃技法の１類型である柳田氏の３ｂに相当するようなものと，ｂ類，すなわち櫃石島技法に相当するような技法が伴っており，その外にも多様な剝片剝離技術が見られる地点として捉えることができよう。２もしくは３つのブロックに分かれる場合を考えていく。まず19区の一群が分かれる場合，それらの一群に何らかの技法的な特色等が見られるわけではなく，とりあえず７－Ａ地点全体の位置付けに大きな影響はないであろう。６区の一群が分かれる場合では，技法ｂ類がａ類に共伴しない可能性も考えられるようになり，ｂ類の時期的な位置付けが変化することも考えられ，技術的な系統関係を考えるうえでも違いが出てこよう。

以上の諸点についてのさらに進んだ検討が望まれるが，資料数・層位・分布などのデータ不足は否めず，いくつかの可能性を指摘するに止めざるを得なかったというのが実情である。

（宮　本）